

泉坂下遺跡の研究

—人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について—



井上実行撮影 2011



人面付土器（第1号墓埴土器1）



冠雪した泉坂下遺跡（2006年1月23日）

II



調査区の設定



第1 トレンチの調査



第1号墓壙の調査



第4号墓壙の調査



第2号墓壙の調査



第1号墓壙土器群の出土状況(1)



人面付土器の検出状況(1)



人面付土器の検出状況(2)



第1号墓壙土器群の出土状況(2)



第1号墓壙土器群の出土状況(3)



第2号墓壙土器群の出土状況(1)



第2号墓壙土器群の出土状況(2)



第2号墓壙土器群の出土状況(3)



第2号墓壙土器4の出土状況



第3号墓壙土器群及びPB4の出土状況



第3号墓壙土器7の出土状況



第6号墓壙土器群の出土状況(1)



第6号墓壙土器群の出土状況(2)



第4・5号墓埴器群の出土状況



第4号墓埴器群の出土状況(1)



第4号墓埴器群の出土状況(2)



第4号墓埴器7の出土状況



第5号墓埴器群の出土状況



第1号遺構土器群の出土状況(1)



第1号遺構土器群の出土状況(2)



第7号土壤の完掘状況



第8号土壤の完掘状況



第9号土壤の土層堆積状況



第1号住居跡の遺物出土状況



第1号墓埴土器 1 人面部の展開



第1号墓埴土器群

(縮尺約1/6)



第2号墓壙の土器群(1)

(縮尺約1/8)



第2号墓壙の土器群(2)

(縮尺約1/8)



第2号墓壙土器 10 線描部



第2号墓壙土器 2 器内面



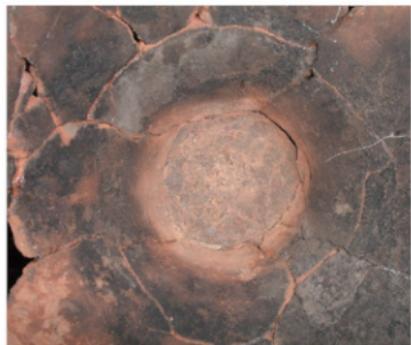
第3号墓壙の土器群

(縮尺約1/8)



菊池栄一氏採取土器 (標本K)

(縮尺1/8)



第3号墓壙土器4 器内面



第4号墓壙の土器群(1)

(縮尺約1/6)



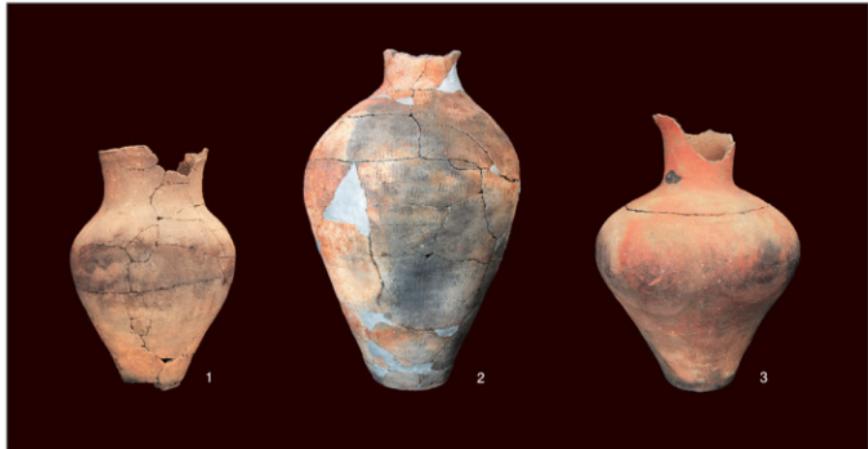
第4号墓壙の土器群(2)

(縮尺約1/6)



第5号墓壙の土器群

(縮尺約1/8)



第6号墓壙の土器群

(縮尺約1/8)



第6号墓壙土器2底部



第6号墓壙土器1内出土の玉類



第1号遺構の土器群

(縮尺約1/8)



第1号遺構土器4 線描部

第2号遺構土器
(縮尺約1/6)P87
(縮尺約1/6)

第9号土壤土器1

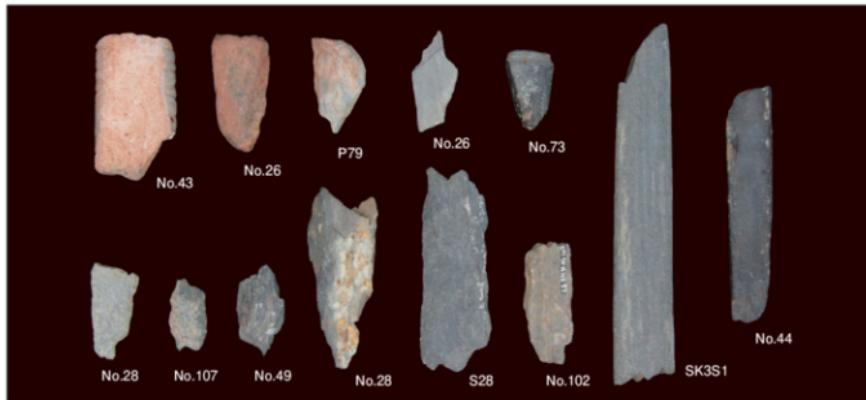


P10

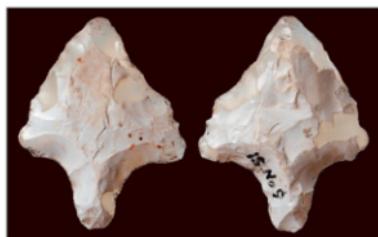
(縮尺約1/2)



縄文時代晩期の土器



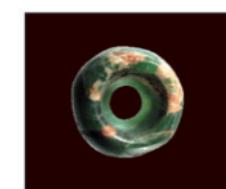
石棒と石棒未成品



再生された石鎌 (No.9)



削器 (No.5)



ヒスイの玉 (S35)



砥石 (S4)



垂飾り (No.216)

泉坂下遺跡の研究

—人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について—

序にかえて

2005年7月に、『本覚遺跡の研究』刊行の報告会を催した。本覚遺跡の発掘調査に参加した者たちが久しぶりに集い、開放感を酔いが助長する。記憶は定かでないものの、泉坂下遺跡の発掘調査は、この時に決意らしきものが表明されたという。調査が現実のものとなるには、石井聖子さんの奔走があった。10日も経たないうちに、地権者の菊池栄一さんへの仲介があり、菊池さんには、遺物を採取した経緯を現地で説明していただく。弥生時代の壺形土器を掘り出した地点について、菊池さんの記憶は鮮明であった。この時から、発掘調査は、再葬墓の確認へと大きく傾き始めることになる。

2006年1月15日。菊池さんが土器を掘り出したという地点に掛かるようトレーナーを設定し、調査を開始した。昼食の休憩を挟んで、それは午後2時頃であったと記憶する。トレーナーの南端部を担当していた小松崎博一さんが近付いてきて、「人面が出ました」と耳打ちされる。足早に向うと、トレーナーの壁から人面付土器が、文字通りに顔をのぞかせていた。調査区の全員に声を掛ける。現実感に乏しく浮ついた時間に、人は一生のうち幾度出会うことができるのだろう。カメラを手にして戻れば、立ち尽くし、あるいはしゃがみ込み、人面付土器を眺める姿があった。稀有な感覚の時間を共有していたと、いま確かに思う。



発掘調査から本書の刊行に至るまでには、多くの方々にお世話をいたしました。幸い今回も、大久保忠和考古学振興基金公募研究Bに採択いただき、同成果報告書等刊行促進費により、泉坂下遺跡発掘調査報告書に相当する本書の刊行が実現した。新たな縁を生み出す人面付土器には、畏れ入るばかりである。

2011年8月25日

鈴木 素行

例　　言

- 1 本書は、茨城県常陸大宮市泉字坂下 918 に所在する泉坂下遺跡について実施した発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、泉坂下遺跡における石棒製作と再葬墓の確認を目的として開始したが、遺跡の状況から再葬墓の確認を主な目的とすることになった。
- 3 発掘調査の企画にあたっては、川崎純徳氏にご指導をいただいた。
- 4 発掘調査の実施にあたって地権者の菊池栄一氏には、発掘調査をご快諾いただくとともに、ご家族の方々には全般にわたりご高配を賜った。
- 5 発掘調査の期間は、2006 年 1 月 15 日から 2 月 19 日までである。
- 6 発掘調査の主体者及び担当者は、鈴木素行である。
- 7 発掘調査の参加者は、次のとおりである。
会澤 聰、相田美樹男、飯島一生、石井聖子、稻田健一、色川順子、海老原四郎、荻沼隆一、桑原佐都子、小松崎恵子、小松崎博一、篠原とよ子、清水 哲、鈴木素行、高村恵美、廣水一真、矢部素子、横倉要次、和田喜昭
- 8 整理作業の参加者は、次のとおりである。
会澤 聰、飯島一生、石井聖子、色川順子、海老原四郎、篠原とよ子、清水 哲、鈴木素行、廣水一真、横倉要次
- 9 本書は、大久保忠和考古学振興基金 2007 年度公募研究 B-2 及び同成果報告書等刊行促進費の助成を得て刊行するものである。
- 10 本書は、鈴木素行が編集した。
- 11 本書は、鈴木素行、飯島一生、横倉要次、色川順子、清水 哲による共同研究の成果であり、寄稿を除いて、II-4 を横倉要次、III-1-土器 1 を色川順子が執筆し、その他のを鈴木素行が執筆した。
- 12 動物遺存体の同定は、小宮 孟氏（慶應義塾大学）に依頼し、報告（VI-1）をご寄稿いただいた。
- 13 植物遺存体の同定は、細谷 茂氏（総合地球環境学研究所）に依頼し、報告（VI-2）をご寄稿いただいた。
- 14 赤色物質の分析は、渡辺美登里氏（九州大学中央分析センター）に依頼し、谷口陽子氏（筑波大学大学院人文社会科学研究科）とともに報告（VI-3）をご寄稿いただいた。
- 15 炭化物の放射性炭素年代測定及び同位体分析は、吉田邦夫氏（東京大学放射性炭素年代測定室）に依頼し、報告（VI-4・5）をご寄稿いただいた。
- 16 石材の同定は、柴田 徹氏（考古石材研究所）に依頼した。
- 17 発掘調査及び整理報告にあたり、次の方々及び機関にご協力、ご援助、ご教示を賜った。記して感謝申し上げる。
(敬称略・50 音順)
青山俊明、阿久津久、阿部健太郎、飯島大貴、五十嵐純一、池田晃一、井坂こずえ、井坂義博、石川日出志、石坂 茂、宇留野美雪、海老沢稔、大賀幸恵、大竹憲昭、大貫孝夫、蛭井宜行、片西登美江、金子睦美、川又清明、瓦吹 堅、栗田昌幸、黒澤彰哉、小玉秀成、近藤綾子、後藤孝行、齊藤弘道、佐藤次男（故人）、品川欣也、鈴木 功、鈴木正博、諫訪 元、角田 学、鵜見貞雄、中村哲也、永井茂文、永井ゆわえ、西山克己、野口和己子、芳賀英一、長谷川聰、原 雅信、古谷 究、宮内良隆、森 幸彦、矢野広子、横倉孝悠、横倉尚嗣、横山 仁、綿引逸雄
会津若松市教育委員会、茨城県立歴史館、白河市教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、東京国立博物館、東京大学総合研究博物館、常陸大宮市教育委員会、常陸大宮市歴史民俗資料館、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター、福島県文化財センター白河館
- 18 発掘調査で出土した遺物は、2009 年 11 月 30 日付で常陸大宮市教育委員会へ移管した。

目 次

| | | |
|-----|-----------------------------|-----|
| I | 調査に至る経緯 | 1 |
| II | 調査の概要 | 5 |
| 1 | 発掘調査の目的と方法 | 5 |
| 2 | 発掘調査の進行 | 6 |
| 3 | 遺構の分布状況 | 7 |
| 4 | 第1号住居跡の調査 | 9 |
| III | 検出された遺構とその遺物 | 11 |
| 1 | 第1号墓壙(SK1) | 11 |
| 2 | 第2号墓壙(SK2) | 17 |
| 3 | 第3号墓壙(SK3) | 32 |
| 4 | 第4号墓壙(SK4) | 38 |
| 5 | 第5号墓壙(SK5) | 47 |
| 6 | 第6号墓壙(SK6) | 54 |
| 7 | 第1号遺構(SX1) | 59 |
| 8 | 第2号遺壙(SX2) | 63 |
| 9 | 第3号遺壙(SX3) | 63 |
| 10 | 第7号土壙(SK7) | 64 |
| 11 | 第8号土壙(SK8) | 64 |
| 12 | 第9号土壙(SK9) | 66 |
| IV | 調査区出土の土器 | 67 |
| 1 | P84・10について | 67 |
| 2 | 縄文前期の土器 | 68 |
| 3 | 縄文後期の土器 | 68 |
| 4 | 縄文晩期の土器 | 68 |
| 5 | 縄文後・晩期の粗製土器 | 74 |
| 6 | 弥生中期の土器 | 76 |
| 7 | 土製品 | 80 |
| V | 調査区出土の石器 | 83 |
| 1 | 石棒 | 83 |
| 2 | 石錐 | 85 |
| 3 | 搔器・削器 | 86 |
| 4 | 石鍤 | 87 |
| 5 | 磨製石斧 | 87 |
| 6 | 打製石斧・蹠器 | 88 |
| 7 | 敲石 | 88 |
| 8 | 磨石 | 89 |
| 9 | 凹石・石皿 | 90 |
| 10 | 砥石・加工された軟質砂岩 | 90 |
| 11 | 玉類 | 92 |
| VI | 動植物遺存体の同定と試料の分析 | 94 |
| 1 | 泉坂下遺跡から検出された動物遺存体の同定 | 95 |
| 2 | 泉坂下遺跡出土土器内より抽出した炭化物に関する分析結果 | 96 |
| 3 | 泉坂下遺跡第5号墓壙土器1に伴う赤色物質の分析 | 98 |
| 4 | 土器付着炭化物の放射性炭素年代 | 100 |
| 5 | 土器付着炭化物の同位体分析 | 104 |
| VII | 泉坂下遺跡における再葬墓群の形成 | 109 |

挿 図 目 次

| | | |
|------|------------------------------|----|
| 第1図 | 茨城県北部における本覚遺跡の位置 | 1 |
| 第1図 | 茨城県北部における泉坂下遺跡の位置 | 1 |
| 第2図 | 泉坂下遺跡付近の地形 | 1 |
| 第3図 | 泉坂下遺跡から採集されていた縄文時代の石棒 | 3 |
| 第4図 | 泉坂下遺跡から採集されていた弥生時代の土器 | 4 |
| 第5図 | 調査区の区画と表記 | 5 |
| 第6図 | 調査区の位置 | 6 |
| 第7図 | 基本層序 | 7 |
| 第8図 | 調査区における遺構の分布 | 8 |
| 第9図 | 遺構底面の垂直位置 | 8 |
| 第10図 | 第1号住居跡(SI1)実測図 | 9 |
| 第11図 | 第1号住居跡(SI1)出土遺物 | 10 |
| 第12図 | 第1号墓壙(SK1)実測図(1) | 11 |
| 第13図 | 第1号墓壙(SK1)実測図(2) | 12 |
| 第14図 | 第1号墓壙(SK1)出土遺物(1) - 土器1 | 13 |
| 第15図 | 第1号墓壙(SK1)出土遺物(2) - 土器1 | 14 |
| 第16図 | 第1号墓壙(SK1)出土遺物(3) - 土器2 | 15 |
| 第17図 | 第1号墓壙(SK1)出土遺物(4) - 土器3・4 | 16 |
| 第18図 | 第2号墓壙(SK2)実測図(1) | 17 |
| 第19図 | 第2号墓壙(SK2)実測図(2) | 18 |
| 第20図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(1) - 土器1 | 19 |
| 第21図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(2) - 土器2 | 20 |
| 第22図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(3) - 土器3 | 21 |
| 第23図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(4) - 土器4 | 22 |
| 第24図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(5) - 土器5 | 23 |
| 第25図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(6) - 土器6 | 24 |
| 第26図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(7) - 土器7 | 25 |
| 第27図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(8) - 土器8 | 26 |
| 第28図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(9) - 土器9 | 27 |
| 第29図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(10) - 土器10 | 28 |
| 第30図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(11) - 土器11-12 | 29 |
| 第31図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(12) - 土器13 | 30 |
| 第32図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(13) | 30 |
| 第33図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(14) - 土器14 | 31 |
| 第34図 | 第2号墓壙(SK2)出土遺物(15) - 土器15 | 31 |
| 第35図 | 第3号墓壙(SK3)実測図(1) | 32 |
| 第36図 | 第3号墓壙(SK3)実測図(2) | 33 |
| 第37図 | 第3号墓壙(SK3)出土遺物(1) - 土器1・2 | 34 |
| 第38図 | 第3号墓壙(SK3)出土遺物(2) - 土器3・4 | 35 |
| 第39図 | 第3号墓壙(SK3)出土遺物(3) - 土器5・6 | 36 |
| 第40図 | 第3号墓壙(SK3)出土遺物(4) - 土器7 | 37 |
| 第41図 | 第4号墓壙(SK4)実測図(1) | 38 |
| 第42図 | 第4号墓壙(SK4)実測図(2) | 39 |
| 第43図 | 第4号墓壙(SK4)出土遺物(1) - 土器1 | 40 |
| 第44図 | 第4号墓壙(SK4)出土遺物(2) - 土器1・2 | 41 |
| 第45図 | 第4号墓壙(SK4)出土遺物(3) - 土器3 | 42 |
| 第46図 | 第4号墓壙(SK4)出土遺物(4) - 土器4 | 43 |
| 第47図 | 第4号墓壙(SK4)出土遺物(5) - 土器5 | 44 |
| 第48図 | 第4号墓壙(SK4)出土遺物(6) - 土器6 | 45 |

| | | |
|-------|------------------------------|-----|
| 第49回 | 第4号墓塚(SK 4)出土遺物(7) - 土器7・8 - | 46 |
| 第50回 | 第5号墓塚(SK 5)実測図(1) | 47 |
| 第51回 | 第5号墓塚(SK 5)実測図(2) | 48 |
| 第52回 | 第5号墓塚(SK 5)出土遺物(1) - 土器1 - | 49 |
| 第53回 | 第5号墓塚(SK 5)出土遺物(2) - 土器2 - | 50 |
| 第54回 | 第5号墓塚(SK 5)出土遺物(3) - 土器3 - | 51 |
| 第55回 | 第5号墓塚(SK 5)出土遺物(4) - 土器4 - | 52 |
| 第56回 | 第5号墓塚(SK 5)出土遺物(5) - 土器5・6 - | 53 |
| 第57回 | 第6号墓塚(SK 6)実測図(1) | 54 |
| 第58回 | 第6号墓塚(SK 6)実測図(2) | 55 |
| 第59回 | 第6号墓塚(SK 6)出土遺物(1) - 土器1 - | 56 |
| 第60回 | 第6号墓塚(SK 6)土器1 内遺物 | 56 |
| 第61回 | 第6号墓塚(SK 6)出土遺物(2) - 土器2 - | 57 |
| 第62回 | 第6号墓塚(SK 6)出土遺物(3) - 土器3 - | 58 |
| 第63回 | 第1号遺構(SX 1)実測図 | 59 |
| 第64回 | 第1号遺構(SX 1)出土遺物(1) - 土器1 - | 60 |
| 第65回 | 第1号遺構(SX 1)出土遺物(2) - 土器2 - | 61 |
| 第66回 | 第1号遺構(SX 1)出土遺物(3) - 土器3 - | 62 |
| 第67回 | 第1号遺構(SX 1)出土遺物(4) - 土器4 - | 63 |
| 第68回 | 第2・3号遺構(SX 2・3)出土遺物 | 64 |
| 第69回 | 第7号土壤(SK 7)実測図 | 65 |
| 第70回 | 第8号土壤(SK 8)実測図 | 65 |
| 第71回 | 第9号土壤(SK 9)実測図 | 65 |
| 第72回 | 第9号土壤(SK 9)出土遺物 | 65 |
| 第73回 | 調査区の土器1 | 67 |
| 第74回 | 調査区の土器2 繩文式土器(1) | 69 |
| 第75回 | 調査区の土器3 繩文式土器(2) | 69 |
| 第76回 | 調査区の土器4 繩文式土器(3) | 70 |
| 第77回 | 調査区の土器5 繩文式土器(4) | 71 |
| 第78回 | 調査区の土器6 繩文式土器(5) | 72 |
| 第79回 | 調査区の土器7 弘生式土器(1) | 74 |
| 第80回 | 調査区の土器8 弘生式土器(2) | 75 |
| 第81回 | 調査区の土器9 弘生式土器(3) | 76 |
| 第82回 | 調査区の土器10 弘生式土器(4)・胸部 | 77 |
| 第83回 | 調査区の土器11 底部(1) | 78 |
| 第84回 | 調査区の土器12 底部(2) | 79 |
| 第85回 | 調査区の土製品 | 80 |
| 第86回 | 調査区の石器1 石棒(1) | 84 |
| 第87回 | 調査区の石器2 石棒(2) | 85 |
| 第88回 | 調査区の石器3 石鑿・搔器・削器(1) | 87 |
| 第89回 | 調査区の石器4 削器(2)・石鍤 | 88 |
| 第90回 | 調査区の石器5 打製石斧・螺旋 | 9 |
| 第91回 | 敲石II類の使用痕位置の分類 | 89 |
| 第92回 | 調査区の石器6 敲石・磨石・石鑿 | 90 |
| 第93回 | 調査区の石器7 砥石・加工された軟質砂岩 | 91 |
| 第94回 | 調査区の石器8 玉類 | 92 |
| 第95回 | 赤色物質のX線回折パターン | 99 |
| 第96回 | 各資料の曆年較正結果 | 102 |
| 第97回 | 曆年較正結果の比較 | 102 |
| 第98回 | 曆年較正曲線上での年代測定値と曆年較正結果 | 102 |
| 第99回 | 食糧資源の炭素・窒素同位体比 | 105 |
| 第100回 | 土器付着炭化物の炭素・窒素同位体比 | 107 |
| 第101回 | 炭化物の炭素同位体比とC/N比 | 107 |
| 第102回 | 壺形土器の器高の分布 | 109 |
| 第103回 | 壺形土器の部位直径の分布 | 110 |
| 第104回 | 壺形土器の胴部形態 | 111 |
| 第105回 | 条纹土器の分類と泉坂下類型 | 112 |
| 第106回 | 泉坂下I期と泉坂下II期 | 112 |
| 第107回 | 小野天神前遺跡の人面付土器 | 113 |
| 第108回 | 海後遺跡の人面付土器 | 113 |
| 第109回 | 猪IIIa道路の土器群 | 114 |
| 第110回 | 土器の補修と擬口縁の形成 | 115 |
| 第111回 | 土器の煮沸痕 | 116 |
| 第112回 | 再葬墓の土器内から検出された遺物 | 117 |
| 第113回 | 第4号墓塚の漬れた土器の位置 | 118 |
| 第114回 | 第2号墓塚に土器が直立していた場合の位置 | 118 |
| 第115回 | 第2・5号墓塚における土器の理設順序 | 119 |
| 第116回 | 第1・3号墓塚における土器が理設されない空間 | 119 |
| 第117回 | 一次葬の土壙墓と再葬のための遺骨の抜去 | 120 |
| 第118回 | 牡丹平道路で検出された人骨の部位 | 120 |
| 第119回 | 第1号墓塚土器1内のローム土 | 121 |
| 第120回 | 泉坂下遺跡における土壙墓群、再葬墓群の分布 | 122 |
| 第121回 | 小野天神前遺跡における再葬墓群の分布 | 122 |
| 第122回 | 茨城県北部における弥生時代中期前半の遺跡 | 123 |
| 第123回 | 那珂川下流域における弥生時代中期後半の遺跡 | 123 |

表 目 次

| | | |
|------|----------------------|-----|
| 第1表 | 遺構出土土器計測表 | 66 |
| 第2表 | 土製品一覧表 | 80 |
| 第3表 | 調査区出土土器計測表 | 82 |
| 第4表 | 調査区出土土器観察表 | 82 |
| 第5表 | 発掘調査で出土した石器と繩 | 83 |
| 第6表 | 石棒一覧表 | 86 |
| 第7表 | 石器計測表 | 92 |
| 第8表 | 泉坂下遺跡出土繩の点数による石材組成 | 93 |
| 第9表 | 泉坂下遺跡出土繩の重量による石材組成 | 93 |
| 第10表 | 泉坂下遺跡出土剥片類の点数による石材組成 | 93 |
| 第11表 | 泉坂下遺跡出土剥片類の重量による石材組成 | 93 |
| 第12表 | 骨片一覧表 | 94 |
| 第13表 | 同定できた動物遺存体 | 95 |
| 第14表 | 泉坂下遺跡出土の主な炭化物 | 97 |
| 第15表 | 資料の質量、化学処理 | 100 |
| 第16表 | 年代測定結果、曆年較正範囲 | 101 |
| 第17表 | 炭素／窒素原子数比、同位体比 | 107 |



I 調査に至る経緯

遺跡の所在 泉坂下遺跡は、茨城県北部の常陸大宮市泉字坂下918に所在する。地番が限定されるのは、偶然に掘り出された遺物で遺跡の存在が明らかになったことによる。

遺跡の立地 茨城県北部には、久慈川を境界として西側に八溝山地、東側に阿武隈山地と呼称される山地形が展開する。久慈川と那珂川に挟まれた八溝山地の南端は鷺子山地と呼称され、久慈川と玉川の合流点より下流域には、那珂台地と呼称される平坦な台地形が展開するようになる。山地形から台地形へと変換する、久慈川と玉川の合流点付近に泉坂下遺跡はある(第1図)。

久慈川と玉川に挟まれた丘陵の先端付近には、繩文時代中・後期の坪井上遺跡[千種1999]、弥生時代後期の富士山遺跡[井上他1979、渡邊2006]、古墳時代には前方後方墳の富士山4号墳[井上他1979]を含む富士山古墳群が知られている。これらは、標高45~50mの丘陵上に形成された遺跡である。一方、富士山古墳群の南側、標高27mほどの中位の段丘上には、前方後円墳の五所皇神社古墳[井上他1979]があり、坪井上遺跡の南側、標高21~22mの低位の段丘上には、古墳・奈良・平安時代の下村田遺跡[荒井1996]が形成されている。泉坂下遺跡も、丘陵突端からは1.5kmほど北上した位置で、小字名の由来の通り、低位の段丘上に立地する遺跡である(第2図)。

泉坂下遺跡をのせる低位の段丘は、標高20~21mで、低地との比高差が1mほどである。ここは久慈川の右岸に相当し、現在の流路からは700mほど離れている。遺跡から望む現在の堤防の手前には自然堤防があり、宇留野字坏に形成された自然堤防の西側に久慈川の旧流路があったことが推定されるが、久慈川流路の変遷について未だ詳細な研究を見ない。

低位の段丘は小さな谷津により、いくつかに分断されており、泉坂下遺跡の北と南にも谷津が入り込む。これらの谷津により区画されて幅50mほどの舌状に張り出した段丘を遺跡の旧地形として想定している。

現況は、大部分が水田として利用されている。遺物は冬季でないとほとんど採取できず、地表面の観察から遺跡の範囲を見極めることは難しい。



第1図 茨城県北部における泉坂下遺跡の位置



第2図 泉坂下遺跡付近の地形



発掘前の泉坂下遺跡(2002年5月3日撮影)

遺跡の周知 泉坂下遺跡は、以前は地権者である菊池栄一氏の自宅敷地内であったが、転居後、水田として整地する際に出土した遺物を、菊池氏が当時の大宮町歴史民俗資料館及び上野小学校に寄贈されていた。1995年に、大宮町歴史民俗資料館が「大宮の考古遺物」という展示を開催して遺物を展示するとともに、同名の図録を発行したことにより、泉坂下遺跡の存在が広く知られることになった。寄贈されていた遺物は、縄文時代の石器7点、弥生時代の土器2点である。

縄文時代の石器は全て破片で、7点(第3図1~7)とも石棒・石剣の成品または未完成である。頭部の断面形状からは、5点が石剣(1~5)、2点が石棒(6・7)と推定される。部位は、頭部が1点(1)、胴部が4点(2・3・6・7)、基部が2点(4・5)。製作工程の段階は、敲打段階の初期が2点(1・2)、敲打段階が1点(6)、研磨段階が4点(3~5・7)である。石材は全て粘板岩。

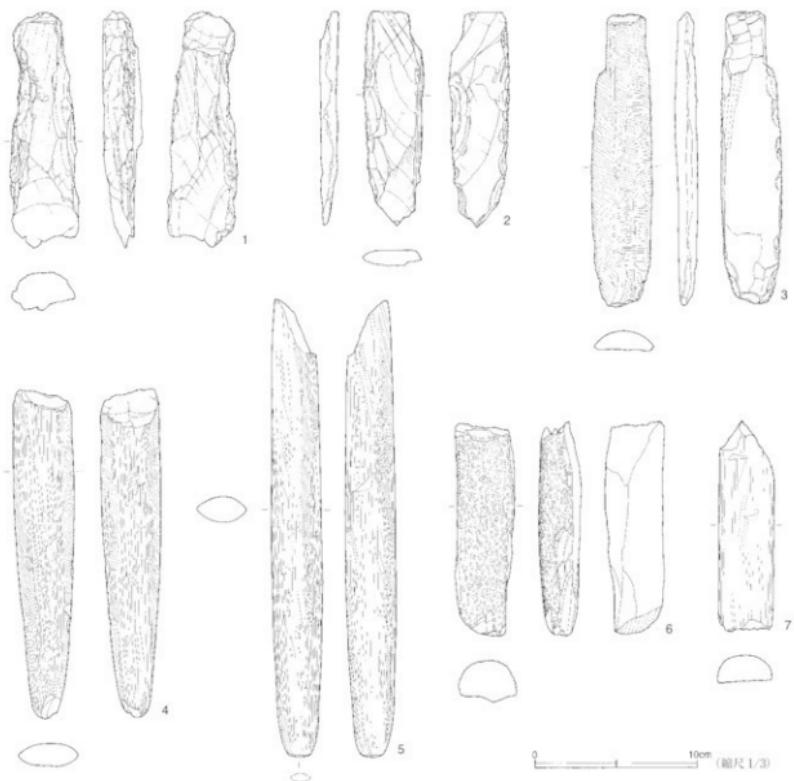
弥生時代の土器のうち1点(第4図)は図録に、「高さ42センチメートルほどで頭部が大きく張り、縄文が施文された複合口縁は頭部からやや開きながら立ち上がりっています。頭部全体には斜位の条線が施文され、煤の付着もみられます。大宮町内としては2か所目の再葬墓遺跡として注目される遺跡です」[瓦吹山1995]と解説されている。

本覚遺跡から泉坂下遺跡へ 泉坂下遺跡を初めて訪れたのは、2002年5月3日である。2001年12月から2002年1月に当時は金砂郷町、現在では常陸太田市に所在する本覚遺跡の発掘調査を実施しており、縄文時代晩期の石棒製作を考察するために参考とすべき遺跡の1つであった。当日、「現地では、土器の小破片、敲石、メノウ

の剥片を見たが、時期を推定する資料は得られていない。周囲もほとんどが水田であり、訪れた日は田植えの真最中であった」[鈴木2002]と記録している。2005年に、『本覚遺跡の研究』を発行し、本覚遺跡においては、縄文時代晩期中葉に「小野型石棒」[鈴木2002]の石剣及び石刀が製作されていたことを推定した。茨城県北部における石棒製作の一端が明らかとなつたが、泉坂下遺跡から採集されていた断面円形の未完成品(第3図6)については未明のまま残された。泉坂下遺跡の発掘調査を企画した動機は、本覚遺跡から継続すべき研究にあった。

2005年7月25日、石井聖子氏の案内で、菊池栄一氏にも同行していただき、再び現地を踏査する。やはり、地表面には遺物の散布がほとんど見られない。菊池氏の話によると、縄文時代の石剣・石棒はまとまって出土したのではなく、広い範囲から拾い集めたものであるという。一方、弥生時代の壺形土器は、「植木の移植の際に出土した」もので、3個体ほどの土器がまとまって出土し、残りの良い1点のみを寄贈したという。他の土器は、完全には復元できない破片であったため廃棄されたらしい。縄文時代の石棒製作場を確認するための地点は判然とせず、一方で、壺形土器の出土地点については指示が得られたことから、まずは弥生時代の再葬墓を確認するための調査区を設定し、縄文時代の石棒製作場についても手掛かりを得ようと考えることになった。

調査の準備 以下には、日付を追いつめながら調査の手続き等の準備を記録しておく。2005年10月7日、菊池栄一氏より発掘調査の承諾書をいただく。11月10日、茨城県教育庁文化課を訪れ、学術調査の手続きについて必要な書類とその様式を確認する。11月21日、常陸大宮市教育委員会に発掘届を提出する。その後、原点から調査地点まで標高移動の作業をした。規準とした原点は、久慈川の堤防上にある。この標高は21.901m。往復して計測の誤差が小さいことを確認し、調査で使用する仮原点の標高を20.693mに設定した。同日、「泉坂下遺跡発掘調査の手引き - 再葬墓、石棒製作場の確認調査 -」を発行する。12月9日、常陸大宮市教育委員会より11月21日付けで茨城県教育委員会の発掘許可があった由の通知が届く。12月25日午前10時から、常陸大宮市歴史民俗資料館で泉坂下遺跡発掘調査事前説明会を催す。「泉坂下遺跡発掘調査の手引き・II - 再葬墓、石棒製作場の確認



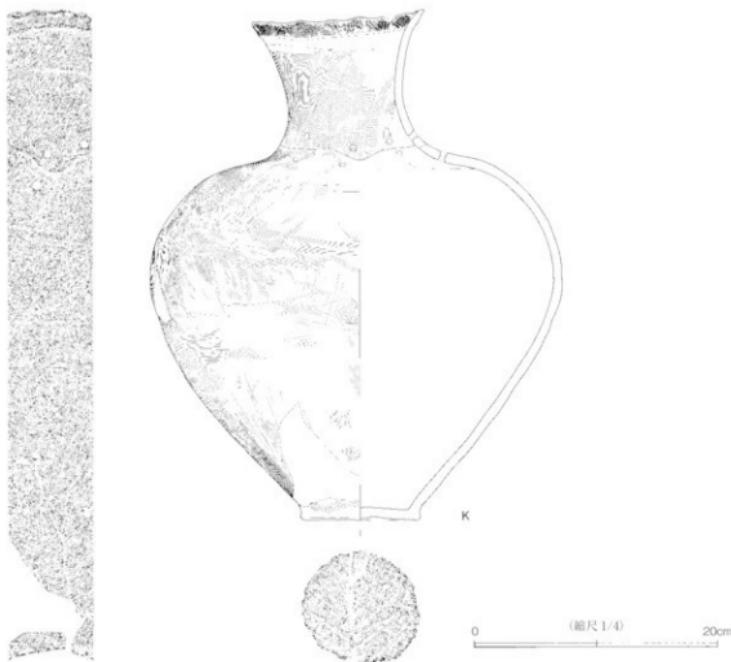
第3図 泉坂下遺跡から採集されていた縄文時代の石棒（〔鈴木2002〕より引用）

調査一」を参加者に配布し、最後に、「人面付土器を掘ろう」と呼びかける。景気付けのための発言であったが、反応は無い。説明会後、全員で現地を訪れ、調査地点と駐車場所等を確認する。2006年1月8日、泉坂下遺跡へ機材を搬入する。養豚小屋であったと思われる建物の一部を機材の倉庫として使わせていただくことにした。西側の地境に埋め込まれたコンクリートの畦畔板を規準として、これから1mの距離を置き、南北方向に幅1m長さ20mのトレンチを設定した。これが空振りに終わっても、次のトレンチが直ぐに設定できるよう一寸10mグリッド2つの規準杭を打つておく。グリッドの規準杭を地図上に落とし込むための測量も済ませた。発掘調査の開始は1月14日を予定していたが、雨天のため翌15日に

順延。午前9時、トレンチを掘り始める。

参考文献

- 阿久津久 1977 「大宮町の遺跡」「大宮町史」107-184頁 大宮町役場
- 阿久津久・鶴志田鶴吉 1977 「自然環境」「大宮町史」15-43頁 大宮町役場
- 荒井保雄 1996 「一級河川玉川改修工事地内埋蔵文化財調査報告書 下田村遺跡」茨城県教育財團文化財調査報告第110集 財團法人茨城県教育財團
- 井上義安他 1979 「茨城県富士山遺跡1」
- 瓦吹 堅雄 1995 「大宮の考古遺物」大宮町教育委員会
- 鈴木素行 2002 「ケンタウロスの落とし物－関東地方東部における縄文時代晩期の石棒について－」『婆良岐考古』第24号 15-38頁
- 鈴木素行 2002 「本覚遺跡への道－関東地方東部における



土器K(採集者である菊池栄一氏の頭文字から記号化) 壺形土器。計測値は器高417mm、口径142mm(残存率85%)、頸径94mm(残存率100%)、胴径336mm(残存率99%)、底径98mm(残存率100%)。口縁の一部を欠損し、胴部にも破片の欠落がある。波形の小さな波状口縁を呈し、全部で16箇所と推定される波頂部のうち15箇所が残存する。複合口縁には単節繩文L.R.、頸部から底部付近まで条痕文が施されている。口縁部の下位は、横位の撫で調整により条痕文が消される。条痕文の原体は刷毛状、頸部には、全周する破断を挟んで2孔一对の穿孔が7対ある。焼成後の穿孔であり、補修孔と推定される。器外側の胴部最大径部分に炭化物が付着しており、器内面の胴下部にも炭化物の付着が部分的に見られる。胎土に軟質泥岩片を多量に含む。焼成は良。色調は、器外側が淡褐色～黒褐色、器内側が淡灰褐色を呈する。

第4図 泉坂下遺跡から採集されていた弥生時代の土器

「繩文時代晚期の石棒製作遺跡について」『茨城県考古学協会誌』第14号 89-118頁

鈴木素行・柴田 健 2005 「本覚遺跡の研究 -関東地方東部における繩文時代晚期の石棒製作について-」(私家版)
鈴木素行 2006 「泉坂下遺跡 -発掘調査までの日々-」[第28回研究発表会資料]1-6頁 茨城県考古学協会

千種重樹 1999 「坪井上遺跡 大宮ショッピングセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」坪井上遺跡発掘調査会・大宮町教育委員会
渡邊浩実 2006 「上岩瀬富士山遺跡 17国捕道改第17-03-068-0-053号埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財團文化財調査報告第260集 財團法人茨城県教育財團

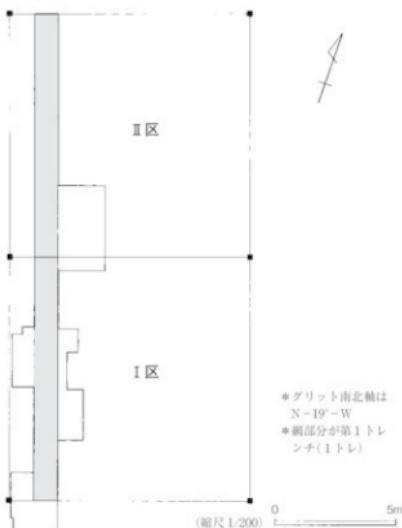
II 調査の概要

1 発掘調査の目的と方法

調査の目的 泉坂下遺跡から採集された縄文時代の石器には、石棒の未成品が含まれており、石棒製作の痕跡を残す遺跡の可能性が考えられた。また、弥生時代の壺形土器は、ほぼ完形の状態であり、他にも複数個体の土器がまとまって埋没していたということからも、当該時期に特徴的な再葬墓の可能性がある。これらが包含されていた遺跡の実態を調査し、泉坂下遺跡における石棒製作と再葬墓の確認を目的に発掘調査を企画した。

調査の方法 一般的な発掘調査の方法に加えて、一部に水洗選別法を採用する。これは、少なくとも再葬墓を構成する壺形土器の内部の土壤について必要不可欠な調査方法である。また、本覚遺跡における実践で明らかになったように、石棒製作の作業痕跡として残される微細な碎片を検出するために必要である。水洗の作業は、調査後に耕作地として復旧するため、多量の土壤を搬出することも流失させることもできないことから、現地内で完了させなければならない。調査が終了した部分を排水坑として利用し、沈殿させることで土壤の流出を防ぐことにした。現地には水道設備がなく、再葬墓の数量と規模が予想を越えたことからも、再葬墓の覆土の全てを水洗することはできなかった。また、作業の効率上、同時に有効な骨片と副葬品の玉類が回収できる精度を考え、篩の方眼は3mmを使用することにした。

調査区の設定 調査では、弥生時代の壺形土器が掘り出された地点を中心に試掘坑を設定することにした。土器の出土地点が位置する水田は、西側がコンクリート製の畦畔板で区画されており、これを規準軸として、一辺10mのグリッドを2つ設定できる広さがある。現状を利用して、2つのグリッドを設定するための規準杭を打った。目的の達成のために当初の調査区を順次拡大するにしても、調査の範囲は、2つのグリッドの区画内には限ることにしたのである。グリッドの南北軸は、真北より19度ほど西に傾いている(N-19°W)。土器が掘り出された地点は南側のグリッドにあり、これをI区、北側のグリッドをII区と呼称する。畦畔板から1mの間隔をあけて、I・II区を貫く第1トレンチを設定し

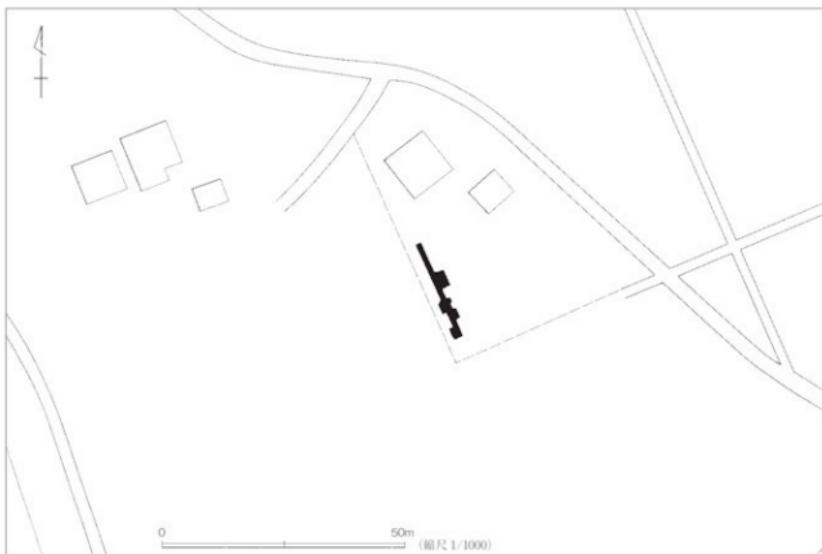


第5図 調査区の区画と表記

た(第5図)。トレンチの幅は1m、長さは20mである。結果として調査は第1トレンチを中心と展開し、遺構の全体を検出するためにトレンチを拡張した部分については、それぞれの遺構の拡張区として扱い、例えば「第2号墓壇東側拡張区」のように表記した。

調査の限界 調査の結果、泉坂下遺跡には再葬墓が確認されることになった。検出された再葬墓の土器群は、そのまま埋め戻すと軟弱になった土層に耕作機械が貫入して破壊される恐れがあることから、全てを記録して取り上げることにした。再葬墓については調査を完了せたが、黒褐色土層中に形成された再葬墓等の遺構の輪郭を保存するために、黒褐色土層そのものについては調査を断念せざるを得なかった。再葬墓の調査に付随して、石棒製作の痕跡もいくつか検出されたが、縄文時代の遺物包含層と推定される黒褐色土層については、調査を完全には実施できなかった。

水洗により篩上に残留した遺物には、回収すべき主な対象とした骨片及び副葬品以外にも、微細な遺物が検出



第6図 調査区の位置

された。その一部について分析を依頼したが、調査の精度はあくまで主目的のために設定されたものであることと強調しておかなければならぬ。植物遺存体についても、3mm以下のものは充分に回収できていない。赤色顔料は、含有されていたとしても、そのほとんどが流失してしまっていると考えざるを得ないのである。

2 発掘調査の進行

発掘調査は、2006年1月15日から開始し、2月19日に終了した。土・日・月曜日の3日間を調査予定日として、これを6週間続けたことになる。調査の日数は、実質15日間であった。

1月15日(日) 晴。昨日の雨で、調査の開始が本日に順延となる。第Iトレンチを設定し、I・II区とも掘り始める。第II層上部から弥生式土器が出土し、II区南部に完形土器の集中が見られたので、この部分を東側に拡張する。初めは幅1m長さ3mで設定し、後に幅1mを追加する。I区南端部に基本土層観察のための試掘坑を設定し、深掘りを先行させる。ローム層上までは60cmほど。午後、試掘坑の周囲を精査中に西壁から、まず壺形

土器の胴部が現れ、これを追跡したところ人面付土器であることが判明した。全員が集まり、しばらくは沈黙して人面を露出させる作業を見詰めることになる(表紙写真)。これを第1号墓塚として、南側と西側に拡張区を設定した。

1月16日(月) 曇。第1～4号墓塚の名称を各遺構に付与し、土器を露出させる作業を続ける。第1号墓塚では、西側拡張区から3個体の土器が出土した。第2号墓塚では既に、土器が13個体まで数えられる。第3号墓塚は、東側に拡張区を設定した。次の土曜日まで現場が無人となるので、関係者には鍵口を、常陸大宮市歴史民俗資料館には巡回を依頼する。

1月21日(土) 雪。第1号墓塚の上にテントを設営し、人面付土器にかかる部分のセクション図を作成する。土層観察ベルト部分を掘り進め、人面付土器を完全に露出させた。人面部は耳の表現まで完全に残る。

1月22日(日) 晴。朝は路面の凍結がひどく、現場に通り着けずに調査の始まりが遅れる。第1号墓塚は、セクション図の続き。4個体の土器を露出させて撮影する。第2号墓塚は、土層の堆積が單一層であることから、セ

クション図の作成を省略し、土層観察ベルト部分も掘り始める。土器は14個体まで確認できた。第4号墓壙の西側に拡張区を設定する。菊池栄一氏とご家族を現場に案内し、人面付土器を見ていただく。また、調査関係者の家族を対象とした内覧会を開いた。

1月23日(月) 雪のち晴。第1号墓壙の土器出土状況を再び撮影しようとしたが、霜柱が立ち始め、日陰とのコントラストも強すぎるので断念する。図化を完了し、人面付土器を取り上げながら、土器内部の堆積土を観察した。暗くなるまでの作業で取り上げた人面付土器など第1号墓壙の土器を、常陸大宮市歴史民俗資料館に搬入する。

1月28日(土) 晴、強風。第1号墓壙は、完掘状態を撮影し、埋め戻す。第2号墓壙は、土器出土状況を撮影し、図化を始める。土器も一部を取り上げた。第1号住居跡にも調査の手を付ける。

1月29日(日) 晴。第2号墓壙は、土器出土状況の図化と土器の取り上げを続行する。第3号墓壙は、土器出土状況の撮影。第4号墓壙の西側拡張区から再葬墓を検出し、これを第5号墓壙とする。一部が第4号墓壙に重複している。第1号造構についても調査の手を付けた。川崎純徳氏ほか多数の視察者が現場を訪れる。

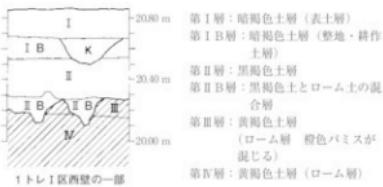
1月30日(月) 晴ときどき曇。第3号墓壙は、土器群の平面図及びエレベーション図、土器の取り上げが完了した。

2月5日(日) 晴。第2号墓壙は、完掘状態の撮影と図化が完了し、搅乱部分を掘り下げて遺物を回収する。第3号墓壙は、土器出土状況の図化と土器の取り上げ。第4・5号墓壙は、土器出土状況を撮影した。第2号造構とした土器の出土状況を撮影し、これを取り上げた。

2月6日(月) 曇のち雪。第3号墓壙は、完掘状態の撮影と図化が完了し、搅乱部分を掘り下げて遺物を回収する。第3号造構については、調査区内に露出した土器を取り上げたが、東・南方向へとさらに破片が続く。

2月11日(土) 晴。第5号墓壙は、土器出土状況の図化と土器の取り上げ。第6号墓壙は、輪郭の確認のために、西側部分にサブトレレンチを入れる。第7・8号土壙を調査した。

2月12日(日) 晴、強風。第4・5号墓壙は、土器出土状況の図化と土器の取り上げを続行する。第6号墓壙



第7図 基本層序

は、風倒木痕を掘り下げる。第7・8号土壙は、完掘状態の撮影と図化。第1号造構を調査し、土器を取り上げる。

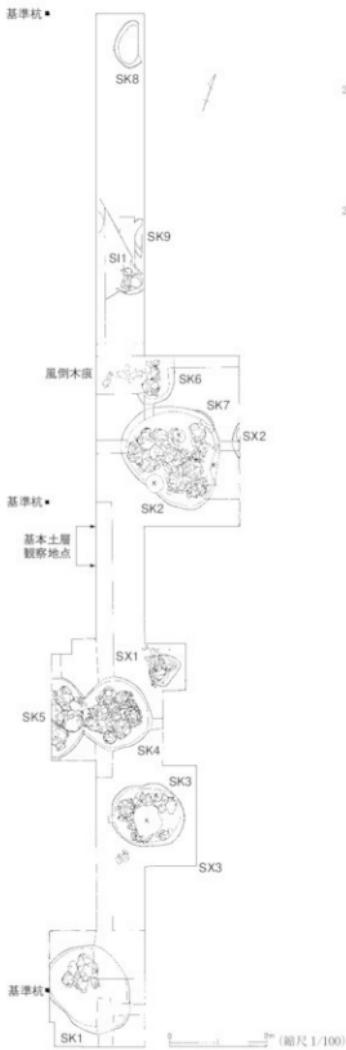
2月13日(月) 晴。第4・5・6号墓壙は、土器出土状況の図化と土器の取り上げ。第4号墓壙については土器の取り上げが完了した。

2月18日(土) 晴。第4号墓壙は完掘状態の撮影と図化。第5・6号墓壙は土器出土状況の図化と土器の取り上げが完了した。第9号土壙を調査する。土壤の水洗作業を始めた。佐藤次男氏が視察に訪れる。

2月19日(日) 曇。第6号墓壙について、風倒木痕との関係を調査区壁の断面で観察し図化する。第9号土壙及び第1号住居跡の調査と図化も完了した。土壤の水洗作業を並行させながら、調査区を埋め戻す。機材撤去と挨拶回りは明日として、現場を後にした。

3 造構の分布状況

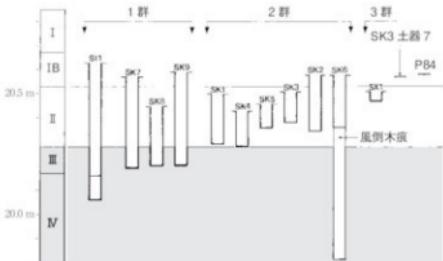
基本土層 調査区における土層の堆積は、第1トレレンチのほぼ中央に相当するI区の西壁で観察し、大きく6つに分層された(第7図)。第I層は現耕作土の表土層であり、15cmほどの厚さで堆積する。第IB層は整地及び耕作により形成された土層であり、10cmほどの厚さで堆積する。ともに搅乱された土層である。暗褐色の色調を呈し、第I層には縮まりが無く、第IB層は極めて固く縮まっている。第II層は、縄文時代の遺物包含層でもあり、最も厚い部分で25cmほどに堆積する。黒褐色の色調を呈し、縮まりがある。I区西壁沿いに掘り下げたサブトレレンチの所見によれば、遺物は層上部に包含され、層下部からはほとんど検出されない。第II B層は、黒褐色土とローム土の混合層であり、部分的に見られる。ローム土はブロック状あるいはシミ状に混じる。縮まりがあり。第III層は、黄褐色ローム層であり、橙色バミスが混



第8図 調査区における遺構の分布

じる。締まり有り。橙色バミスは今市スコリア(Nt-1)と推定される。第IV層は黄褐色ローム層である。締まり有り。

遺構の確認 第II層の上面まで調査が及ぶと、複数の土器がまとめて埋没している状況が現れ。いくつか

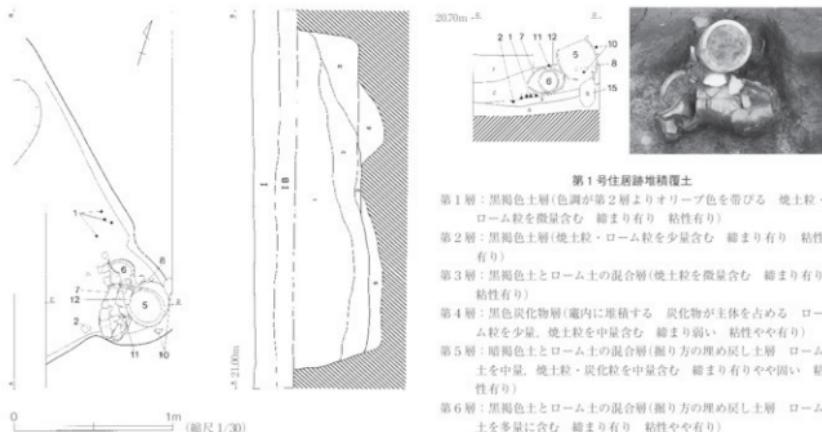


第9図 遺構底面の垂直位置

の再葬墓の分布が推定されるようになった。しかしながら、第II層が黒褐色土層であり、そこに掘り込まれた遺構に埋没した覆土も黒褐色の色調を呈することから、直ぐには遺構の輪郭を捉えることができなかった。基本土層の確認のために掘り下げを先行させた第1トレンチの南端部が、遺構の内部であると明らかとなったことから、この覆土と第II層の境界をトレンチ西壁の断面で観察することにした。土層断面を幾度も削りながら、手応えとして伝わる土層堆積の硬軟、黒褐色土層中に含まれる粒子の状態、わずかな色調の異なりなど、土層を区別する指標を見出した。再葬墓については、土器が出土した地点を中心として、その周辺を精査することにより、遺構の輪郭が確定できるようになった。

遺構の名称 1基が検出された住居跡は、これを「1号住居跡」と呼称し、「S I」の略号の表記を使用している。その他の遺構については、壁が確認された掘り込みを土坑と捉えて「SK」の略号で表記する。そのうち、複数個体の土器が検出されて再葬墓と推定される土坑を「墓壙」、これが見られず一次葬墓を想定した土坑を「土壙」と呼称した。一方、完形に近い状態の土器が検出された地点の底面に窪みを認めて土坑とは確定できない遺構については、性格を特定しない「遺構」の呼称のままとする。この「遺構」には、壁が削平された再葬墓と推定される第1号遺構、調査区外に分布する一端が露出した再葬墓と想定される第2・3号遺構がある。浅い掘り込みが削平されているとすれば、他にも遺構の可能性が考えられる箇所もあるが、これについては遺物番号のまま報告することにした。

遺構の平面分布 再葬墓は、調査区の北側7mまでには検出されず、これより南側に分布する。再葬墓間の

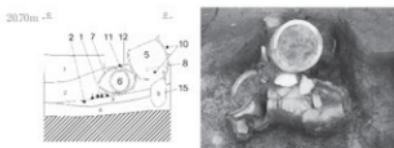


第10図 第1号住居跡(S11)実測図(遺物番号は第11図に対応)

距離は、第6号墓壙と第2号墓壙、重複する第4・5号墓壙と第3号墓壙がそれぞれ1m未満で接している。第2・6号墓壙を北群、第3・4・5号墓壙を中心群、第1号墓壙を南群と呼んでおくならば、北群と中群は3m、中群と南群は2mを隔てる。再葬墓が推定あるいは想定される第2号遺構は北群に、第1・3号遺構は中群に位置している。南群が第1号墓壙の単独で構成されるのかは明らかでない。調査区の東方向には第2・3号遺構が、西方向には第5号墓壙の半分ほどが埋没しており、調査区外に再葬墓の分布が延びることは確実である。

土壙墓と推定される第7～9号土壙は、調査区の北側8mまでに分布する。但し、土器をほとんど伴わない土坑を第II層上面で検出することは難しく、これより南側に土壙墓が分布しないとは断定できない。(第8図)

遺構の垂直分布 遺構の垂直分布を底面の位置で比較すると、3つに群別することができる(第9図)。1群は、底面が第III層中に到達する遺構。第1号住居跡及び第7～9号土壙が相当する。遺構の構築にあたりローム土も掘削されており、遺構の埋没土にもローム土が混在する。2群は、底面が第II層の下部に形成される遺構。第1～6号墓壙が相当する。遺構の構築にあたりローム土は掘削されておらず、遺構の埋没土にもローム土は混在していない。3群は、底面が第II層の上部に形成される遺構。第1号遺構が相当する。遺構の底面のみが残存



第1号住居跡堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(色調が第2層よりオーブ色を帯びる 燐土粒・ローム粒を微量含む 繊まり有り 粘性有り)
- 第2層：黒褐色土層(燐土粒・ローム粒を少量含む 繊まり有り 粘性有り)
- 第3層：黒褐色土とローム土の混合層(燐土粒を微量含む 繊まり有り 粘性有り)
- 第4層：黒色炭化物層(窓内に堆積する 炭化物が主体を占める ローム粒を少量 燐土粒を中量含む 繊まり弱い 粘性やや有り)
- 第5層：暗褐色土とローム土の混合層(振り方の埋め戻し土層 ローム土を中量 燐土粒・炭化粒を中量含む 繊まり有りやや固い 粘性有り)
- 第6層：黒褐色土とローム土の混合層(振り方の埋め戻し土層 ローム土を多量に含む 繊まり有り 粘性やや有り)

し、壁は検出されない。第3号墓壙の土器7、第3号墓壙の南方で検出されたP84なども、土器の下端部が第II層の上部に位置していることには注意が必要である。

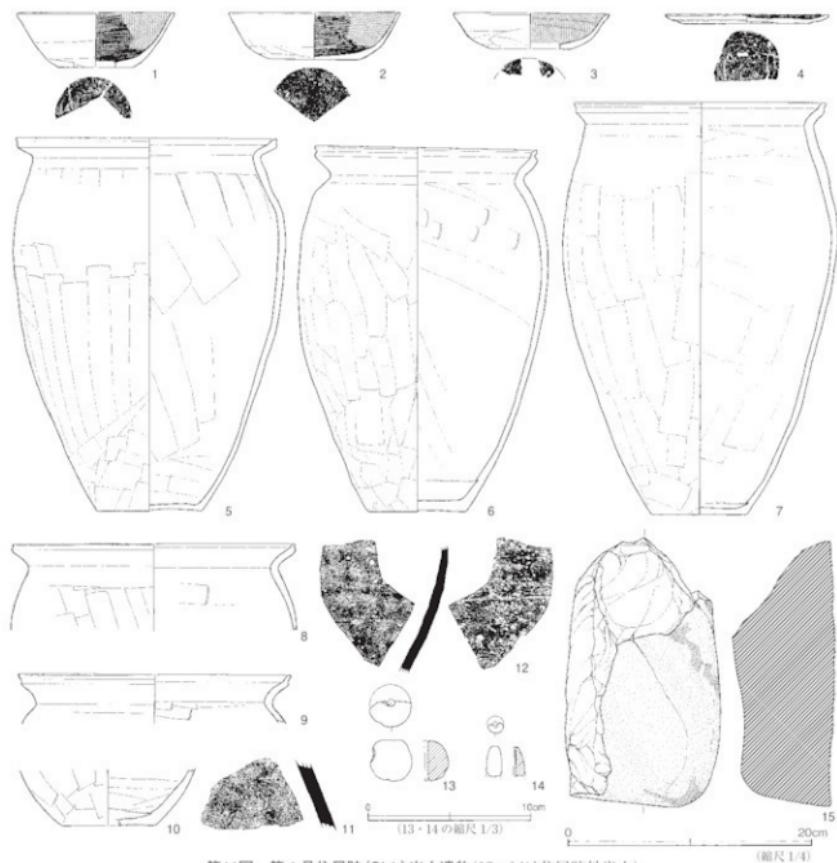
4 第1号住居跡の調査

調査では、目的とは全く異なる時代の遺構と遺物も検出された。第1号住居跡と、その時代の遺物である。第1号住居跡についても、現代の水田直下に位置し、埋め戻し後に破壊の恐れがあることから調査を実施した。

遺構 II区の中央部に位置する。トレンチ東壁付近の第II層上面において甕(第11図5)の口縁部が露出したことから、遺構の存在が予想された。調査の結果、この部分は甕であり、これが付属する住居跡が検出された。北東壁と南東壁の推定からは、甕が住居跡の東方向の隅に位置している。これを奥壁の右と見れば、住居跡の主軸方向は、真北から45°ほど東に傾く(N-45°-E)。方形あるいは長方形の形態が推定されるが、規模は不明である。床面は南側にやや傾斜し、硬化は見られない。

遺物の出土状況 遺物は、主に窓内とその周辺から、土師器壺と甕、須恵器甕の破片等が出土している。他に住居跡の覆土中から、土師器と須恵器甕の小破片が少量検出された。

第11図中の土師器壺と甕は、大部分が南東隅に設置された甕を中心として出土したものである。1・2の壺は、



第11図 第1号住居跡(SI 1)出土遺物(13・14は住居跡外出土)

竈の前方部付近から、5の壺は、竈内部の石製支脚に載り、やや前傾した状態で出土している。また、6・7の壺は、焚口上部から2点が横位の入れ子状態で出土しており、竈前面の掛け口部の補強材として架設されていたものと推定される。8~10は土師器壺、11・12は須恵器壺の破片で、9を除くすべてが竈上面において、5の壺を開むような位置で確認されている。竈の構築材とともに、補強材として利用されたものであろうか。15は砂岩の自然縫を利用した石製支脚で、先端部は鋭角的に調整されている。支脚の下端部は、火床部中央に埋設されている。支脚の下端部は、火床部中央に埋設され、5の壺を支え直立状態で確認された。3の土師器壺、4

の土師器皿、9の土師器壺片は、いずれも覆土中から出土したものである。

小 括 調査範囲が限られたものの、竈の構築方法に特異性を有する住居跡であることが判明した。竈の掛け口の補強材として、2点の壺を横位に据えた類例は、八千代町菱毛道西遺跡の古墳時代第2号住居跡[齋藤=2009]、つくば市東岡中原遺跡の平安時代第352号住居跡[高野=2001]、同市島名熊の山遺跡の平安時代第2454号住居跡[齋藤=2008]等に見られる。

第1号住居跡の廃絶時期は、器種構成及び壺・壺の成形技法と形態の特徴から、10世紀前葉と考えられる。

(参考文献は81頁に掲載)

III 検出された遺構とその遺物

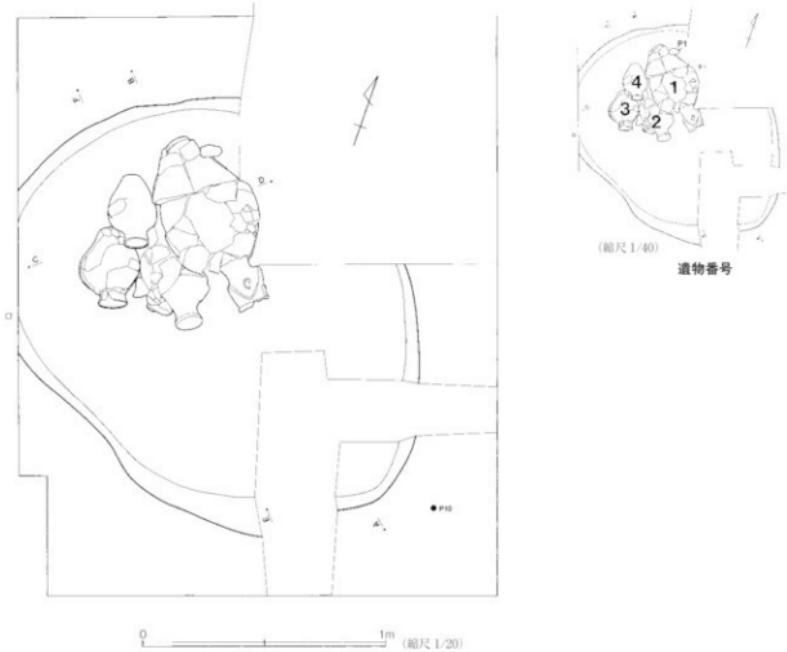
泉坂下遺跡の調査で検出された遺構と、その遺構から出土した遺物について報告する。番号を付与した墓壙、遺構、土壙の順序で記載した。墓壙は第1～6号の6基、遺構は第1～3号の3基。土壙は第7～9号の3基である。遺物は、確実に伴うもの、あるいは伴うと推定されるものを遺構ごとに記載し、出土位置は遺構の範囲内であっても、混入と推定した遺物については、調査区内出土の土器・石器(IV・V章)に一括して報告する。

1 第1号墓壙(SK 1)

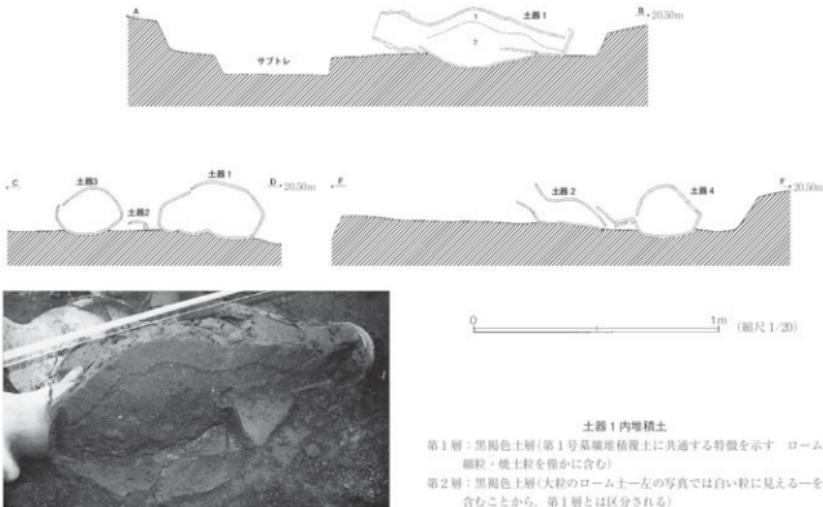
遺構 第1号墓壙は、第1トレンチ南端で検出され、調査区を拡張することにより、ほぼ全体を調査することができた。但し、遺構の確認に至るまでに調査の掘削が進行し、北東の一部は、輪郭を捉えられていない。

遺構の規模は、長軸1.95m、短軸1.45m。平面形態は、梢円形あるいは倒卵形を呈する。底面は、第II層の下部にあり、ほぼ平坦に形成されている。壁の高さは、最も残りの良い部分で24cmを測る。第1トレンチの西壁及び南壁で観察された遺構の壁の立ち上がりは、70～90°の角度である。同じ部分で観察した覆土は、黒褐色土の單一層であった。この土層は、第II層と比較して黒色がやや強く、繕まりがやや劣る。ローム細粒を僅かに含み、焼土粒と思われる赤色細粒も僅かに含む。骨片が含まれることも確認している。

土器の出土状況 第1号墓壙には、4個体の土器が伴う。4個体の土器は全てが、底部と胴部最大径位置の一部が接地する横位の状態で、近接して出土した。この位置は、墓壙の北側に偏り、南側の略半分の空間には土



第12図 第1号墓壙(SK 1)実測図(1)



第13図 第1号墓壙(SK1)実測図(2)

器が検出されなかった。

横位で検出された土器の、底部から口縁部に至る方向を主軸と呼び、各土器の主軸を計測すると、土器1はN-135°-E、土器2はN-143°-E、土器3はN-159°-E、土器4はN-158°-Eである。土器3と土器4は主軸がほぼ等しく、4個体の土器についても南東～南東方向、大まかには南に向く。人面が付属する土器1は、人面部を北東方向、大まかには東に向けていたことになる。

土器2・3の胴下部には土器4の口頭部が重なって出土しており、これは、土器2・3の後に土器4が据えられたという順序を示している。また、土器3には土器1の一部が重なる。土器3の後に土器1という順序が考えられるが、これは、並列していた土器の潰れた順序が示されている可能性もある。

土器4は、亀裂があっても胴部が潰れずに残存していた。土器1～3は、潰れて胴部がやや扁平になった状態で検出された。いずれも土器内には土壤が充满しており、土器1～3についても、胴部が潰れた時点で既に、内部には土壤が入り込んでいたと考えられる。土器1については、取り上げの際に、内部の土壤を観察することがで

きた。土器1の胴部内に堆積した土壤は2つに分層され、第2層とした下層には、大粒のローム土が混在する。これは墓壙の覆土とは異なる特徴として注意された。口頭部は全周して遺存するため、第2層の堆積の南端を追跡することはできなかった。

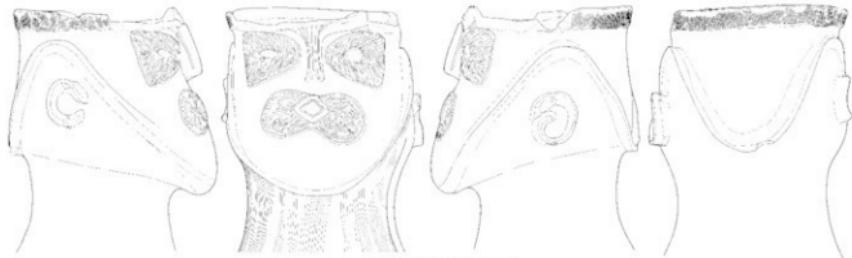
土器1～4の土器内土壤は全て採取し、水洗選別を実施した。その結果、人骨と推定される骨片及び副葬品と考えられる遺物は検出されなかった。

遺物　ここに報告する遺物は、4個体の土器である。土器1の胴下部に接して出土した土器片(P1、第74図2)は、縄文時代晩期のものであり、調査区出土の土器に一括してある。

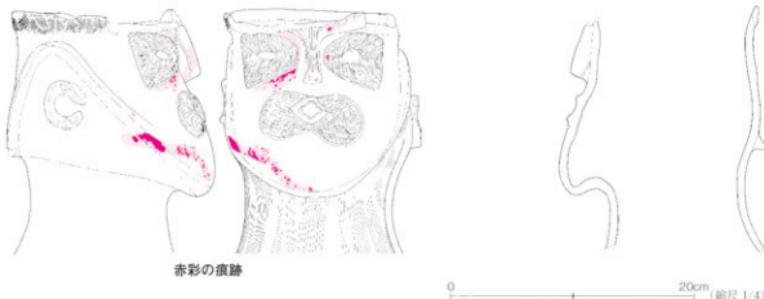
土器1　壺形土器(第14・15図)。口縁部から底部まで残存する。計測値は器高777mm、口径140mm(残存率41%)、頭径120mm(残存率100%)、胴径380mm(残存率100%)、底径125mm(残存率100%)。口縁部から頭部にかけて人面表現がある。平口縁の複合口縁で、口縁部内面に成形の積上痕が残る。口唇部は無文、口縁部には縄文が施されている。縄文は単節L R。口縁部前半分の大部分が欠損しているが、左眼上の僅かに残された部分を観察すると、縄文は施文されず、棒状工具による沈線文が斜



第14図 第1号墓塚(SK 1)出土遺物(1)-土器1-



口頸部(人面部)展開図

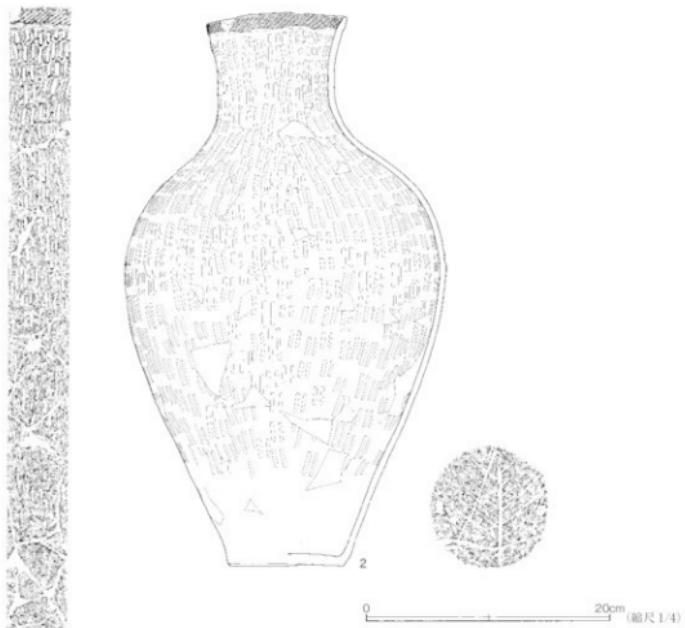


第15図 第1号墓塚(SK 1)出土遺物(2)-土器1-

位に施されている。眉の表現の可能性あり。眼の周囲には、三角形の頂点に丸みを持たせ、それを横に向かい合わせた形に粘土が貼り付けられている。その輪郭を棒状工具による沈線文で区画。その区画内に、細く鋭利な工具による短線を羽状に充填する。眼の隈取りの表現か。眼は棒状工具、またはヘラ状工具により施文。左眼には小さく施文し直したような痕跡がある。鼻は、粘土紐を貼り付けて描出。鼻筋と鼻の両側面に沿って棒状工具による沈線文が施されている。鼻の穴は、先の尖った棒状工具により2箇所、かなり深く刺突されている。口の両側に円形に粘土を貼り付け、その輪郭を棒状工具による沈線文で区画。その区画内に、細く鋭利な工具による短線を羽状に充填する。口周りの隈取りの表現か。口は、粘土紐を菱形に貼り付け、その輪郭を棒状工具による沈線文で区画。耳は、粘土紐を貼り付けて描出。右耳はC字状、左耳は渦巻き状である。両耳ともに棒状工具による焼成前の穿孔が2箇所あり、施文は上から下。左耳には貫通していない穿孔が1箇所ある。頸は突出し、立体

的に表現されている。貼り付けではなく、成形段階で作り出されたものである。頸のラインの延長線から、耳の上を通って後頭部にかけて粘土紐が貼り付けられている。赤色顔料が右眼下や右頬等に部分的に見られることから、人面部は赤彩されていたと考えられる。頸部から底部付近にかけては、条痕文が施されている。条痕文は、8本以上が同時に施文され、概ね斜位である。施文順序は上から下。底部は上げ底で、底面は木葉痕。胎土に骨針を多量、金雲母を少量含み、焼成は良好。色調は、器内外面ともに淡褐色～黒褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着し、雨垂れ状の付着状態が見られる。器内面の一部にも炭化物が付着し、その周辺に変色が認められる。

土器2 畫形土器(第16図)。口縁部から底部まで残存する。計測値は器高454mm、口径115mm(残存率100%)、頸径96mm(残存率100%)、胴径264mm(残存率100%)、底径94mm(残存率100%)。平口縁の複合口縁。口縁部には繩文が施されている。繩文は単節L.R。頸部から底部付



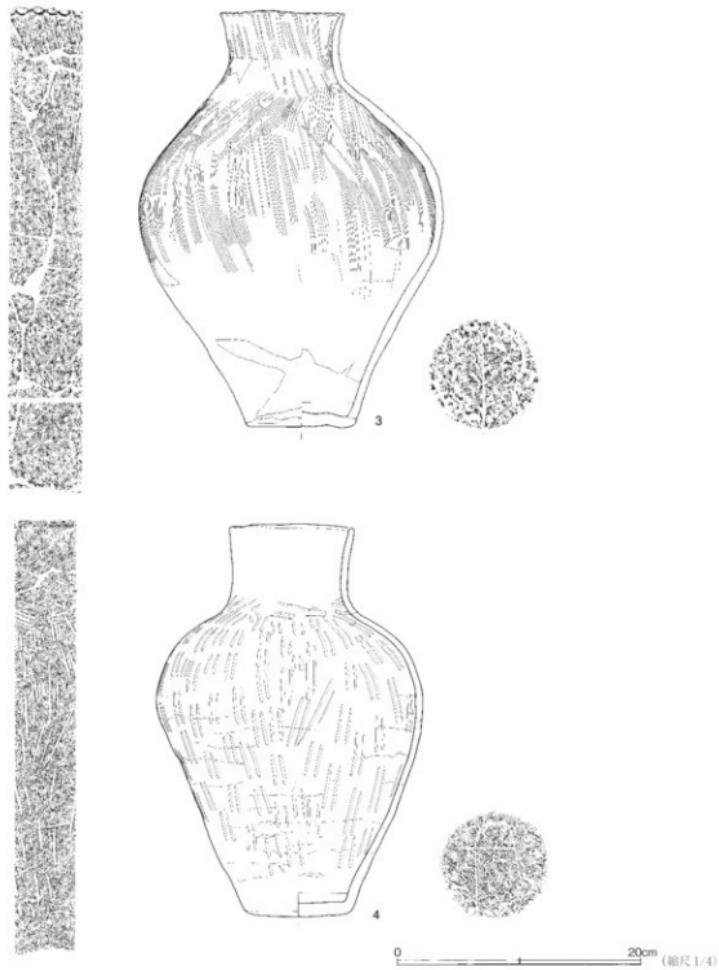
第16図 第1号墓塚(SK 1)出土遺物(3)-土器2-

近にかけては、縦位の短い条痕文(「縦位短条痕文」)が施される。条痕文は2本が同時に施文されており、施文具の一方が先割れしていく細い半截竹管のように見える部分もある。西瓜の筋のように縦列を施文した後、その列間が充填されている。施文は上から下。底部付近は撫で調整されている。底部は平底であり、中央がやや肥厚する。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、焼成は普通。色調は、器外面の上部が褐色、下部が淡褐色～黄褐色、暗褐色。器内面が淡褐色、灰褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着する。器内面の一部にも炭化物が付着し、その周間に変色が認められる。

土器3 壺形土器(第17図)。口縁部から底部まで残存する。計測値は器高339mm、口径102mm(残存率88%)、頭径90mm(残存率100%)、胴径250mm(残存率100%)、底径90mm(残存率100%)。口縁は、口唇部が小刻みに押圧されて微波状を呈する。単純口縁。口縁部から胴部には条痕文が施される。条痕文は、口頭部が縦位からやや右下がりの斜位。胴上部が左下がりの斜位。胴下部にかけ

てが縦位からやや右下がりの斜位である。このうち頭部は施文後に撫でられて、条痕文のはとんどが消えている。条痕文は5本ほどが同時に施文されており、施文具の一部が先割れしていく細い半截竹管のように見える部分や沈線のような太さで施文された部分もある。胴下部から底部付近は縦位に撫で調整されているが、一部に成形の積上痕を残す。底部は平底であり、中央が肥厚する。底面は木葉痕。器内面は、口縁～胴部が横位に、底部付近が斜位に撫で調整されており、胴上部には積上痕が残る。胎土に金雲母を極少量含み、大粒の赤色粒子が目立つ。焼成は普通～やや不良。色調は、器外面の胴部が淡暗褐色、他が淡褐色、器内面が淡褐色を呈する。器外面上に炭化物が付着する。

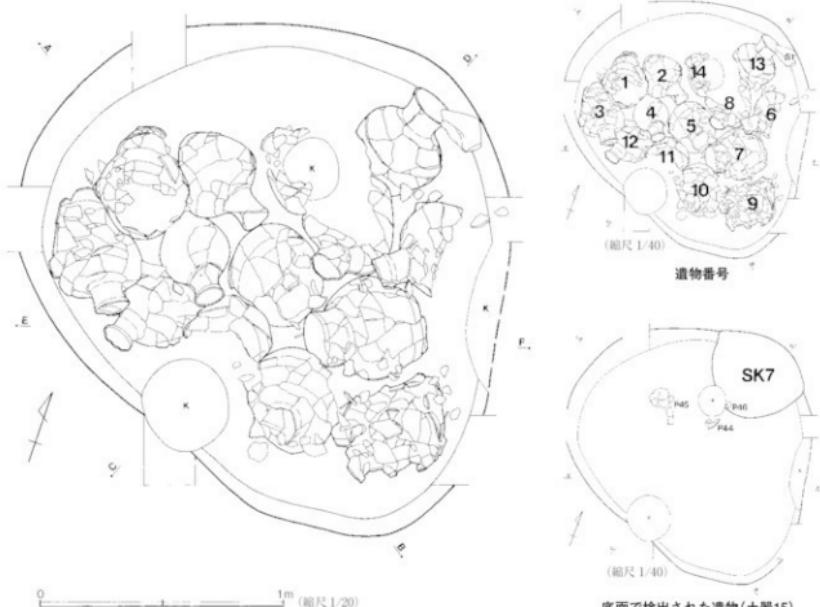
土器4 壺形土器(第17図)。口縁部から底部まで残存する。計測値は器高325mm、口径102mm(残存率90%)、頭径94mm(残存率100%)、胴径217mm(残存率100%)、底径86mm(残存率100%)。平口縁の単純口縁。口頭部は無文であり、撫で調整されている。胴部には、縦位短条痕



第17図 第1号墓壙(SK 1)出土遺物(4)－土器3・4－

文が施され、頸部との境界では横位に施文された部分もある。条痕文は2本が同時に施文されている。縦位短条痕文は、綴列を施文した後、列間が充填された部分もある。施文は上から下。胴下部には成形の積上痕が残る。底部は凸面を形成し、底面は木葉痕。器内面は撫で調整されており、胴上部には指頭圧痕が見られる。胎土に金

雲母は認められず、焼成は良い。色調は、器外面が淡褐色～黒褐色、器内面が淡褐色を呈する。器外面に炭化物が付着する。



第18図 第2号墓壙(SK2)実測図(1)

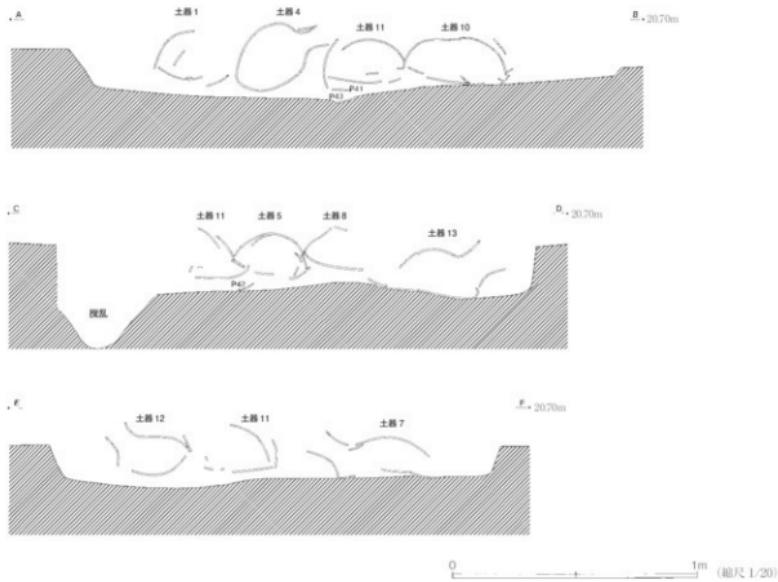
2 第2号墓壙(SK2)

遺構 第2号墓壙は、第1トレンチII区の南端で検出され、調査区を東側に拡張することにより、全体を調査することができた。遺構の範囲は、第II層上部で検出するとともに、東西南北にサブトレンチを設定して、土層の断面による観察で決定した。遺構にかかる大きな搅乱が3箇所あり、東側の搅乱は1mほどの範囲の壁を消失させている。平面図に記入した搅乱の範囲は、底面で捉えたものであり、これが斜めに掘り込まれたことにより土器の破壊は一回り広い範囲に及ぶ。但し、大型の土器を完全に掘り上げてしまうような位置と大きさの掘り込みではない。遺構の規模は、長軸2.27m、短軸1.87m。平面形態は、橢円形あるいは大きく丸みを帯びた三角形を呈する。底面は、第II層の下部にあり、ほぼ平坦に形成されている。壁の高さは、最も残りの良い部分で20cmを測る。遺構の壁の立ち上がりは、60~90°の角度である。観察した覆土は、黒褐色土の單一層であった。これは特徴が第1号墓壙に共通する。土器13を取り上げた後

に、北東部に略円形の土坑が重複することが明らかとなつた。これが第7号土壙であり、新旧関係は、第7号土壙が古く、第2号墓壙が新しい。

土器の出土状況 第2号墓壙には、14個体の土器が伴う(第18・19図)。14個体の土器はほとんど全てが、底部と胴部最大径位置の一部が接地する横位の状態で、近接して出土した。その範囲は、遺構の全体に及ぶ。

各土器の主軸を計測すると、土器1はN-170°-E(推定)、土器2はN-121°-E、土器3はN-145°-E、土器4はN-143°-E、土器5はN-128°-E、土器6はN-129°-W(推定)、土器7はN-120°-W(推定)、土器8はN-167°-W、土器9はN-160°-W、土器10はN-166°-W、土器11はN-165°-E、土器12はN-149°-W、土器13はN-27°-E、土器14はN-117°-E(推定)である。このうち土器13のみが主軸を著しく異にする。これは北北東方向、大まかには北を向いている。他の土器は、土器1~5・11・14が東南東~南南東方向、土器6~10・12が西南西~南南西方向となるが、真南



第19図 第2号墓塚(SK2)実測図(2)

を境界とするような方向分布の断絶は見られず、大まかには南を向く。但し、遺構の西側に位置する土器の多くは東南東～南南東方向、東側に位置する土器は西南西～南南西方向という傾向は認められる。

土器9を除き、土器は、その一部が別の土器と重なり合った状態で検出されている。土器1は土器2・3・4、土器2は土器4・5、土器3は土器12、土器4は土器11・12、土器5は土器11、土器6は土器7・8、土器7は土器10、土器8は土器5・13、土器14は土器8の上にそれぞれ一部を載せた状態にある。これらは、土器が掘えられた順序を示しており、全ての順序は特定できないが、全体の傾向としては、南側から北側に向かう順序が窺える。

土器4は、亀裂があっても胴部が潰れずに残存していた。他の土器は、潰れて胴部がやや扁平になった状態で検出されている。いずれも土器内には土壤が充満しており、胴部が潰れた時点では既に、内部には土壤が入り込んでいたと考えられる。土器3内部の底部付近の土壤には大粒のローム土が含まれていた。

土器13に一部がかかるような状態で石器1が検出されている。土器1～14を取り上げた後の遺構底面の精査中には、これらの土器群と別個体の土器15の破片が出土した。特にP45は、土器2の下位から、大破片が潰れた状態で検出されている。

土器内土壤は全て採取し、水洗選別を実施した。土器11の土壤からは、穿孔された石製品(第94図2)が検出されたが、土器11が搅乱により半壊状態であること、石製品の法量が小さく数量が1点のみであること、さらに当該時期の副葬品として類例を見ないことなどから、縄文時代の遺物の流入と推定した。その他の土器からも、人骨と推定される骨片及び副葬品と考えられる遺物は検出されなかった。

遺物　ここに報告する第2号墓塚の遺物は、15個体の土器と1点の石器である。石器は、墓塚に伴うものと推定している。

土器1　彫形土器(第20図)。口頭部を欠損し、胴部から底部までが残存する。欠損は、第I B層を形成した整地・耕作に伴うものと推定される。計測値は残存高470

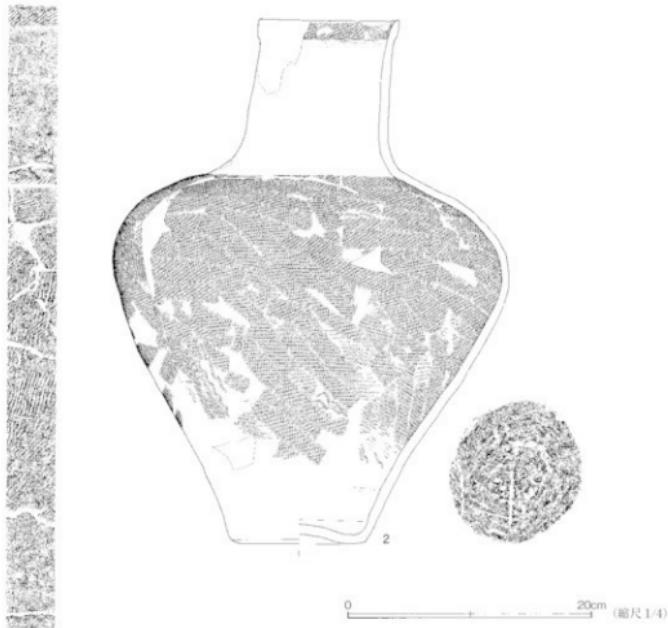


第20図 第2号墓塚(SK2)出土遺物(1)ー土器1ー

mm、胴径329mm(残存率80%)、底径110mm(残存率100%)。成形の歪みにより、全体がやや傾く。僅かに残された部分の観察により、頭部は撫で調整による無文と推定される。胴部には単節LRの繩文が施されている。ほとんどは横位あるいは緩やかな斜位に施文されるが、急角度で右下がりとなる斜位の施文も一部に見られる。底部付近は、繩文の施文後に、横位の削り～撫で調整されている。底部は平底であり、中央が肥厚する。底面は削り調整で、敷物の痕跡は残されていない。胎土に金雲母は認められず、焼成は普通～良い。色調は、器外面上部が茶褐色・赤褐色、中部が暗褐色、下部が褐色・赤褐色、器内面上部が褐～茶褐色、下部が黒褐色を呈する。器内外面の一部に炭化物が付着し、器外面上部には雨垂れ状の付着状態が見られる。

土器2 壺形土器(第21図)。口縁部から底部まで残存する。口縁部の大きな欠損は、第I B層を形成した整地・耕作に伴うものと推定される。出土状態で下位に相当し

た口縁部については、上端に観察される剥離痕が後世のものとは考えられない。計測値は器高433mm、口径117mm(残存率65%)、頭径109mm(残存率100%)、胴径327mm(残存率97%)、底径112mm(残存率95%)。成形の歪みにより、全体がやや傾く。底部縁辺の一部が潰れたような痕跡を残し、著しい上げ底もこれに伴う変形と推定される。平口縁の複合口縁。口縁部には単節LRの繩文が施されている。頭部は撫で調整の無文であり、籠状の工具痕が残る部分もある。胴部にも単節LRの繩文が施されており、結節文も一部に観察される。胴上部は概ね横位、胴下部は縱位から右下がりの斜位に施文される。施文の端部が器表面の盛り上がりとして残された部分もある。また、胴下部には、繩文の施文が及ばず残された成形の積上痕の窪みが見られる。底部付近は撫で調整。底面の周縁は、成形の歪みを修正するための削り調整が施されており、木葉痕は中央にのみ残る。胎土に金雲母は認められず、紅色に近い色調の赤色粒子を含む。焼成は普通



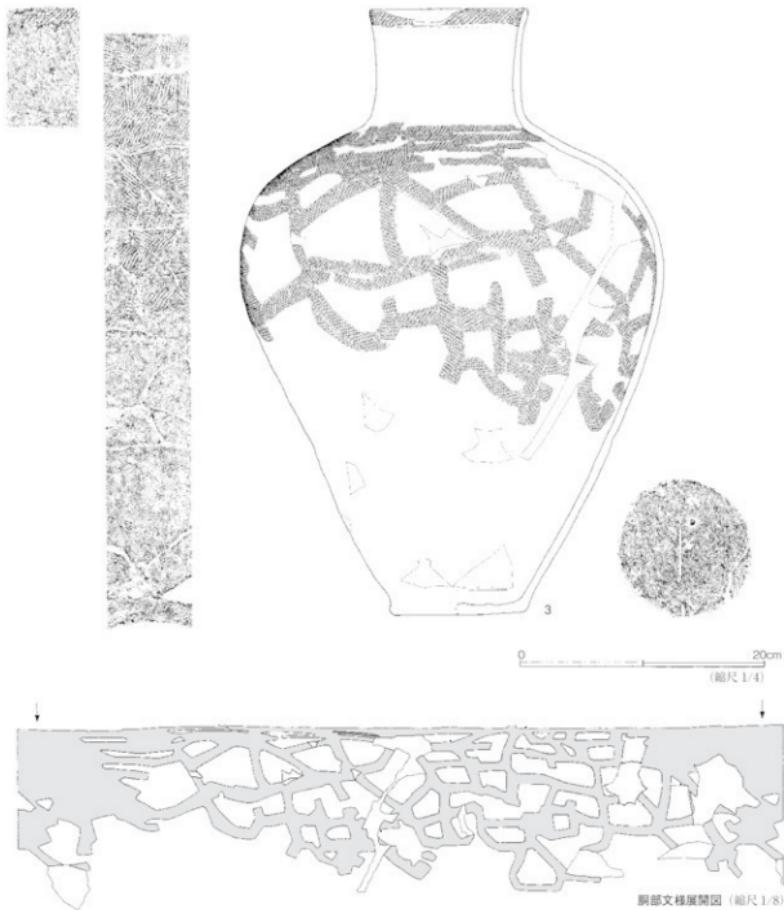
第21図 第2号墓塚(SK2)出土遺物(2)-土器2-

~良い。色調は、茶褐~褐色を呈する。器内外面に炭化物が付着する。器内面の炭化物の一部を採取し、年代測定と同位体分析を実施している(VI章)。

土器3 壺形土器(第22図)。口縁部から底部まで残存する。土圧による歪みのためか、胴部には接合できない隙間が生じている。口縁部の上端に観察される剥離痕については、後世のものではない。計測値は器高496mm、口径129mm(残存率92%)、頸径119mm(残存率100%)、胴径348mm(残存率82%)、底径106mm(残存率100%)。平口縁で、口縁部は肥厚するが明瞭な複合口縁ではない。口縁部には単節LRの繩文が施されている。頸部は撫で調整の無文。胴部には、帯状に施された繩文を連結させて文様が構成されている。繩文はこれも単節LR。文様の形象は、三角形や四角形の無文部を組み込む「枠状文」と、先端が連結せずに突出する「ヒトデ文」の組合せである。帯状の繩文は、沈線で区画されることなく、無文部が撫で~磨き調整されて輪郭が決定されている。方向を変えながら繩文が施されていることから、下書き沈

線に従う充填繩文とも想定されるが、下書き沈線の痕跡は観察できない。文様の構成は胴部を周囲して展開するのではなく、胴上部の5分の1周ほどは繩文のみが施されている。胴下部は、底部付近が継ぎ、それ以外が横位の撫で調整。底部はやや凸面の平底である。底面は撫で調整されているが、中央に木葉痕の痕跡を残す。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通~良い。色調は、器外表面が淡褐~褐色、内面が褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着や変色は見られない。

土器4 壺形土器(第23図)。口縁部から底部まで残存する。頸部と胴部の境界付近で土器が上下に分割した後も、補修孔を穿ち、結縛して使用されたと推定される。補修孔は2孔一対で、ほぼ等間隔に3対が配置されている。口部の補修孔の下位には、破断部に接するように同じ工具で穿孔された略V字状の切れ込みがある。これは、3対の補修孔全てに見られる。口縁部の上端に観察される剥離痕については、後世のものではない。計測値

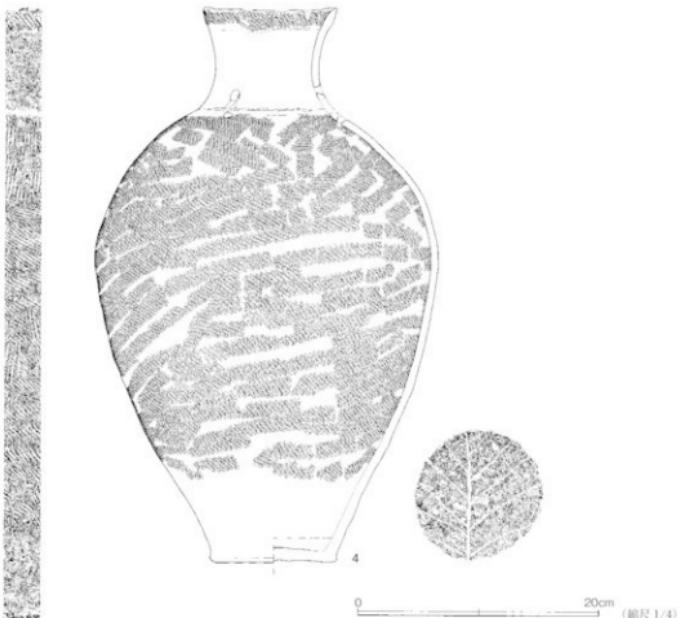


第22図 第2号墓壙(SK2)出土遺物(3)－土器3－

は器高454mm、口径111mm(残存率73%)、頸径84mm(残存率100%)、胴径281mm(残存率99%)、底径105mm(残存率100%)。平口縁で、口縁部は複合口縁を呈する部分と単純口縁に見える部分がある。口縁部には単節L Rの繩文が施されている。頸部は撫で～磨き調整の無文。胴部にも単節L Rの繩文が施されている。概ね横位か緩やかな斜位であるが、胴上部には急角度の斜位に施文された部分もある。帯状の施文の間に無文部を挟むのは、撫で消されたのではなく、器表面の撫で調整後や乾燥が進ん

だ状態で繩文が施文されたことによるものと思われる。底部付近は削り一撫で調整されている。底部はやや上げ底となる。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、器外側が淡褐～暗褐色・黒色、内面が淡暗褐色を呈する。器外側に炭化物が付着する。

土器5 壺形土器(第24図)。口縁部から底部まで残存する。口縁部の上端に観察される剥離痕については、後世のものではない。計測値は器高529mm、口径126mm(残



第23図 第2号墓塚(SK2)出土遺物(4)－土器4－

存率48%)。頭径109mm(残存率100%)、胴径335mm(残存率62%)、底径116mm(残存率80%)。平口縁で、口縁部は複合口縁を呈する部分と単純口縁に見える部分がある。口縁部には単節LRの繩文が施されている。頭部は磨き調整の無文であり、調整は、繩文の施文後に施されている。胴部にも単節LRの繩文が施されており、結節文も一部に観察される。施文は、頭部付近が横位、全体には右下がりの斜位である。底部付近は撫で～磨き調整されている。底部は平底であり、中央が肥厚する。底面は削り調整されているが、木葉痕が僅かに残る。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は普通～良い。色調は、器外表面が茶褐～赤褐色、器内面の上部が茶褐～赤褐色、下部が橙色を呈する。器内外面に炭化物が付着し、器外表面の下部には雨垂れ状の付着状態が見られる。

土器6 壺形土器(第25図)。口縁部から胴下部までが残存する。胴下～底部を欠損し、残存部位もほぼ半周を欠損する。これらの欠損は、搅乱に伴うものと推定される。口縁部の上端に観察される剥離痕については、後世

のものではない。計測値は残存高468mm、口径138mm(残存率55%)、頭部最小径106mm(残存率61%)、頭部最大径122mm、胴径322mm(残存率47%)。所謂「瓢形」であり、頭部の中位が膨らむ。これは器内面側から押圧して成形されている。波状口縁で、6箇所の波頂部が残存する。全体では11箇所もしくは12箇所の波頂部が推定される。複合口縁を呈する部分と単純口縁に見える部分がある。外反した口縁部の器外表面及び器内面には繩文が施されている。頭部最大径部分も帶状の繩文、その上下の無文部には、光沢を有する磨き調整が施されている。胴部にも単節LRの繩文が施されており、結節文も一部に観察される。施文は、頭部付近が横位、全体には緩やかな斜位である。施文の端部が器表面の盛り上がりとして残された部分もある。胴下部の繩文上に、幅広で短い沈線が観察されるが、籠状の工具が器面に当たって生じた傷跡と思われる。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は普通～良い。色調は、器外表面の上部が茶褐～赤褐色、下部が暗褐色、器内面が褐色を呈する。器外表面に炭



第24図 第2号墓壙(SK2)出土遺物(5)ー土器5ー

化物が付着し、器外面の下端には変色が認められる。

土器7 壺形土器(第26図)。胴下～底部を欠損し、口縁部から胴下部までが残存する。欠損は、搅乱に伴うものと推定される。計測値は残存高558mm、口径173mm(残存率68%)、頸径158mm(残存率100%)、胴径402mm(残存率76%)。成形の歪みにより、胴部に対して口頭部が傾く。平口縁で、成形の積上痕を残して明瞭な複合口縁を呈する。口縁部には調整のための指頭圧痕が見られ、その上に単節L Rの繩文が施されている。頭部は縱位の磨き調整による無文。胴部には単節L Rの繩文と結節文が施される。施文は、頭部付近が横位、全体には右下がりの斜位である。繩文の施文が浅くて不明瞭であるのは、器表面の撫で調整後やや乾燥が進んだ状態で繩文が施文されたことによるものと思われる。胴中央部には調整のための指頭圧痕、胴下部には成形の積上痕が窪みとして残さ

れている。胴下部には削り調整に伴う擦痕も見られる。胎土に金雲母は認められず、焼成は良い。色調は褐～黒褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着や変色は見られない。

土器8 壺形土器(第27図)。頸部から底部までが残存する。頭部上端の破断面には磨滅が認められることから、口縁部の欠損は、後世のものではなく、口縁部の欠損後も擬口縁を形成して使用されたと考えられる。計測値は残存高441mm、擬口縁の口径127mm(残存率96%)、頸径123mm(残存率100%)、胴径324mm(残存率60%)、底径110mm(残存率81%)。底部は凸面を形成し、成形の歪みもあって全体がやや傾く。頭部は撫で調整による無文。胴部には単節L Rの繩文と結節文が施される。施文は、胴上部が横位から緩やかな斜位、胴下部が右下がりの斜位から縱位である。胴上部の繩文の上に三叉のS線文が



第25図 第2号墓塚(SK2)出土遺物(6)ー土器6ー

施文されており、これは線描による文様と考えられる。胴下部には継位の削り調整が施されている。底面も削り調整であり、敷物の痕跡は残されていない。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、器外面の頸～胴上部が褐色・茶褐～赤褐色、胴中央部が黒褐～暗褐色、胴下部が赤褐色。器内面が褐～淡褐色を呈する。器内外面に炭化物が付着し、器外面の下部には雨垂れ状の付着状態が見られる。器内面の炭化物付着は半周ほどの範囲である。

土器9 壺形土器(第28図) 口縁部から底部まで残存する。計測値は器高442mm、口径116mm(残存率44%)、頸径106mm(残存率51%)、胴径357mm(残存率71%)、底径100mm(残存率100%)。平口縁で、口縁部はやや肥厚するもののほとんど単純口縁のように見える。口唇部及び口縁部には單節L Rの繩文が施されており、口縁部の下端は結節文で区画される。頸部は磨き調整による無文。胴上部にも單節L Rの繩文と結節文が施されている。頸部

付近には、繩文と結節文が2段の横位。それより下位は右下がりの斜位を基本とする。繩文の施文後、胴下部には継位の条痕文が施される。条痕文は6、7本が同時に施文されている。底部付近は磨き調整され、条痕文の下部が消されている。底部は平底であり、中央が肥厚する。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、泥岩片を多量に含む。焼成は不良。水洗により溶ける脆弱な部分があり、器外面の文様が観察できない状態となる。色調は、器外面が淡褐～黄褐色・暗褐色、器内面が淡灰褐色・灰色を呈する。器内外面に炭化物が付着する。

土器10 壺形土器(第29図) 口縁部から底部まで残存する。胴部の破片が大きく欠落するのは、擾乱に伴う欠損と考えられる。計測値は器高550mm、口径150mm(残存率51%)、頸径136mm(残存率88%)、胴径409mm(残存率79%)、底径102mm(残存率100%)。平口縁の複合口縁。口唇部及び口縁部には単節L Rの繩文が施されている。頸部は磨き調整による無文。この調整は、胴部の条痕文

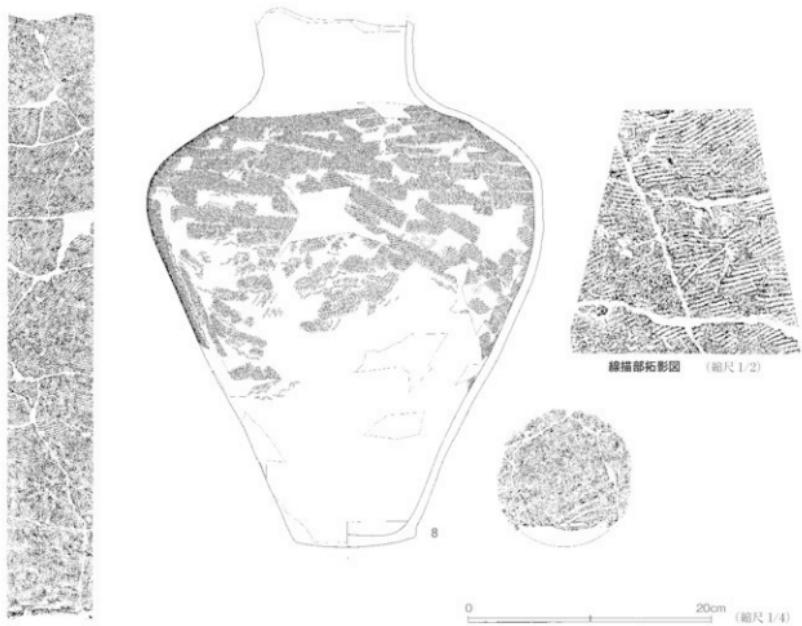


第26図 第2号墓壙(SK2)出土遺物(7)ー土器7ー

の上端を消す。胴部には条痕文が施されている。条痕文は3、4本が同時に施文される。施文は、胴上部が横位、胴下部が右下がりの斜位を基本とするが、胴上部から胴下部まで縦位に施文された部分もある。縦位の条痕文が施された位置は、線描文の反対面に相当している。線描文は、胴上部の条痕文の上に、三角形を組み合わせて構成される。4つの三角形が近接して描かれ、3つの三角形の内部には沈線が付加されている。内部を4つに区画するような沈線が付加された三角形の左上には、繩文が帶状に施されており、胴部では繩文がここにのみ施文される。繩文は単節L R。また、これらとやや離れた左側には、一際大きな三角形が描かれている。線描文は、沈線を平行させた部分も1本ずつ施文されているが、同時

に付いた細線が沿う箇所もある。これには、条痕文の施文具の側端部を利用して施文されたことが推定される。底部は凸面を形成する。底面は撫で調整されているが、本葉痕の痕跡が僅かに観察される。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は普通～良い。色調は、器外面の上部が褐色・茶褐色、下部が暗褐色。器内面が褐色を呈する。器内外面に炭化物が付着する。

土器11 壺形土器(第30図)。口縁～胴上部を欠損し、胴下部から底部までが残存する。欠損は、搅乱に伴うものと推定される。計測値は残存高323mm、胴径368mm(残存率35%)、底径104mm(残存率100%)。胴部には条痕文が施されている。条痕文は、縦位及び斜位に、4、5本が同時に施文される。底部付近は、横位に撫で調整され



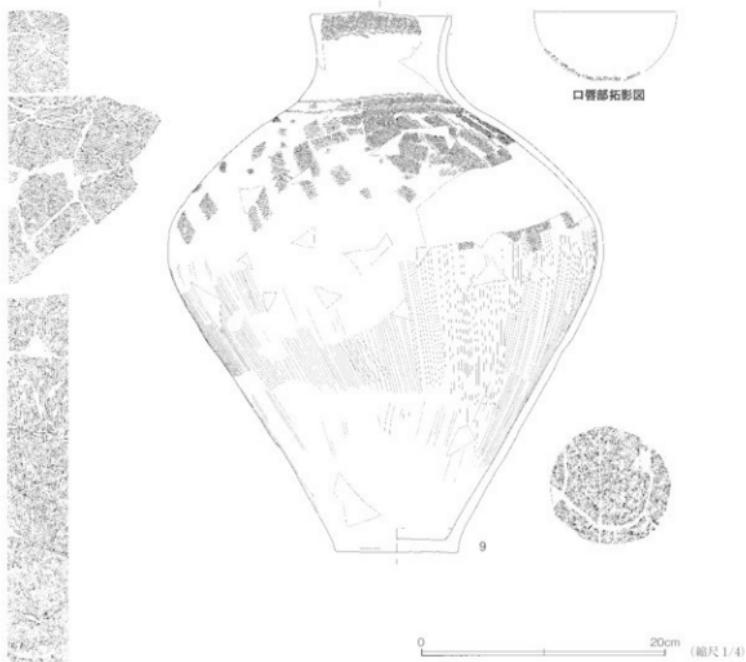
第27図 第2号墓塚(SK2)出土遺物(8)ー土器8ー

て、条痕文が消されている。底部はやや上げ底となる。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、焼成は良い。色調は、器外面が褐～黒褐色、器内面も褐～黒褐色を呈する。器内外面に炭化物が付着する。

土器12 壺形土器(第30図)。口縁部から底部まで残存する。計測値は器高412mm、口径127mm(残存率100%)、頭径98mm(残存率100%)、胴径290mm(残存率100%)、底径99mm(残存率100%)。波状口縁で、9箇所の波頂部がある。波頂部は、波底部を削ることにより成形される。この成形に伴い付いた指紋が残されている。複合口縁には、右下がりに斜位の条痕文が施されている。頭部は撫で調整による無文。この調整は、胴部の条痕文の上端を消す。胴部には、右下がりと左下がりの条痕文が格子状に施されている。施文方向と施文順序に相間は捉えられず、空白を充填するような追加の施文も見られる。条痕文は4本が同時に施文される。底部はやや上げ底となる。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通～良い。色調は、器外面が暗

褐～黒褐色。器内面が暗褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着や変色は認められない。

土器13 壺形土器(第31図)。口縁部から底部まで残存する。口縁部の上端に観察される剥離痕及び複合口縁の欠損は、後世のものではない。計測値は器高529mm、口径172mm(残存率57%)、頭径134mm(残存率100%)、胴径343mm(残存率97%)、底径110mm(残存率91%)。成形の歪みにより、底面の形状が不整となり、全体が傾く。平口縁の複合口縁。口縁部には単節L Rの繩文が施されている。頭部は磨き調整による無文。胴部にも単節L Rの繩文が施されている。施文は、頭部付近が横位、胴中央部が緩やかな斜位、胴下部が縱位から急角度の右下がり斜位である。底部付近は削り～撫で調整されている。実測図には凹線状の削り痕のみを示してある。削りの方向は上から下と観察された。底部は平底であり、中央がやや肥厚する。底面は削り調整されているが、木葉痕が僅かに残る。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は普通～良い。色調は褐色で、一部が暗褐色・黒褐



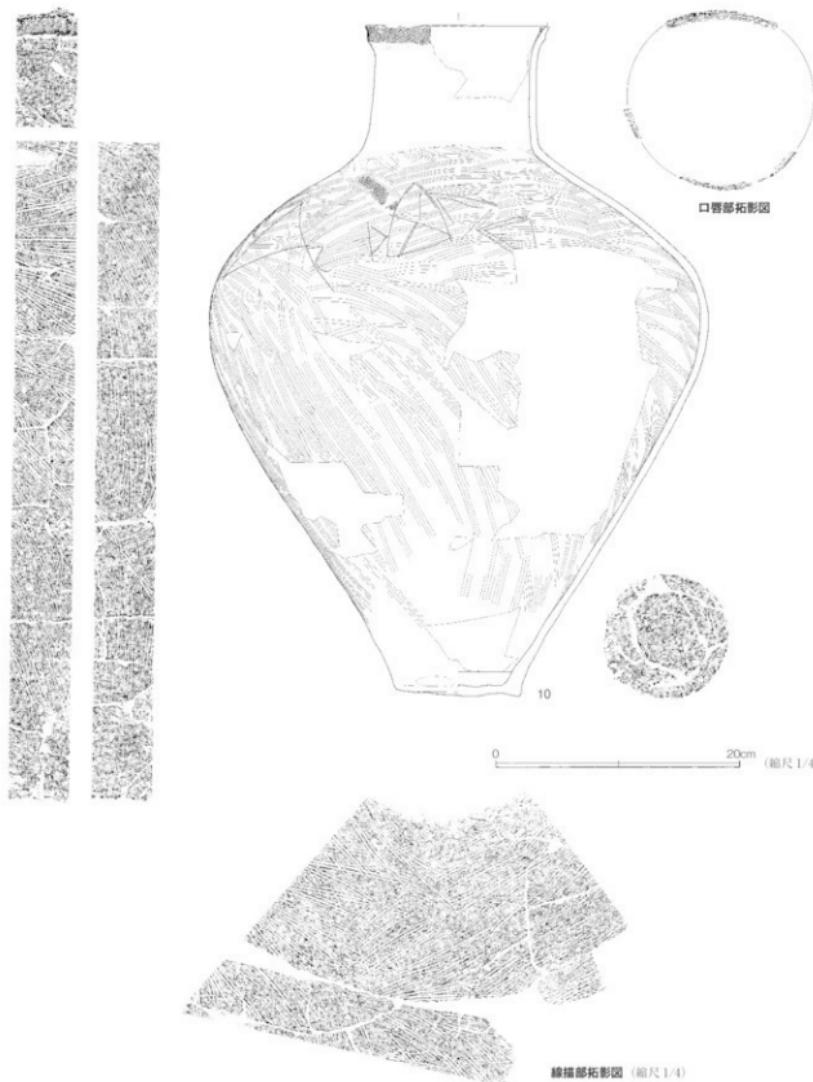
第28図 第2号墓壙(SK2)出土遺物(9)－土器9－

色・淡褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められないが、器外面の下部には兩重れ状に付着していた痕跡が残されている。

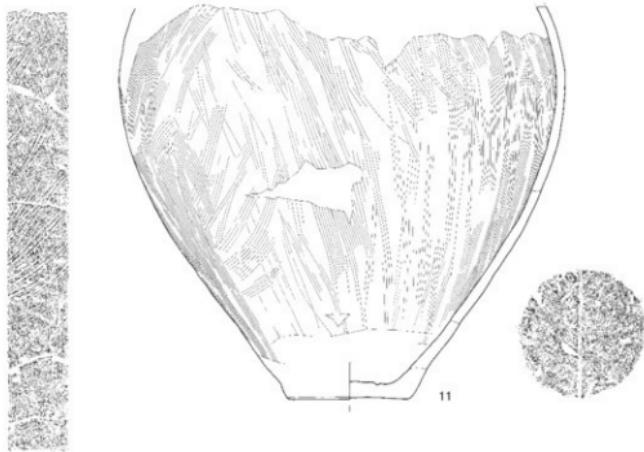
土器14 壺形土器(第33図)。口縁部から底部までの部位は残存するが、欠損部分が全体の3分の2ほどと大きく、連続した接合はない。欠損は、擾乱に伴うものと推定される。復元される法量は器高391mm、口径122mm(残存率19%)、頸径86mm(残存率28%)、胴径326mm(残存率32%)、底径110mm(残存率74%)。平口縁で、口縁部は複合口縁を呈する部分と単純口縁のように見える部分がある。口縁部には單節L Rの繩文が施されている。頸部は磨き調整による無文。胴部は上端が結節文で区画される。結節文は1段であり、施文が重なる部分のみが2段となる。胴部には單節L Rの繩文が施されており、結節文も一部に観察される。施文は、概ね横位であり、一部に斜位が混じる。胴上部の繩文の上に、継位の沈線が1本だけ見られる。工具痕にしては長さがあるので、線描

文と捉えておく。底部付近は撫で調整されている。底部は平底であり、中央がやや肥厚する。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は普通。色調は、器外面が淡褐色、器内面が褐～淡褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着や変色は見られない。

土器15 壺形土器(第34図)。P45は底部付近と推定される胴下部の破片である。同一個体と推定される破片が土器2・3・5・8・12とともに一括で取り上げられており、遺構の北西部を中心に散在する。回収されたのは、ほとんどが口頭部を中心とする破片であり、胴中央部はP12が1点のみ、底部の破片は抽出されなかった。復元される法量は口径172mm(残存率40%)、頸径138mm(残存率28%)。平口縁ではあるが、口唇部に竪状工具による刻みが施されており、これを微波状と表現することもできる。単純口縁が外反する。口頭部から胴部まで無文であり、口頭部から胴部は撫で～磨き調整、胴下部は削り～撫で調整が施されている。器内面の胴上部には成形の

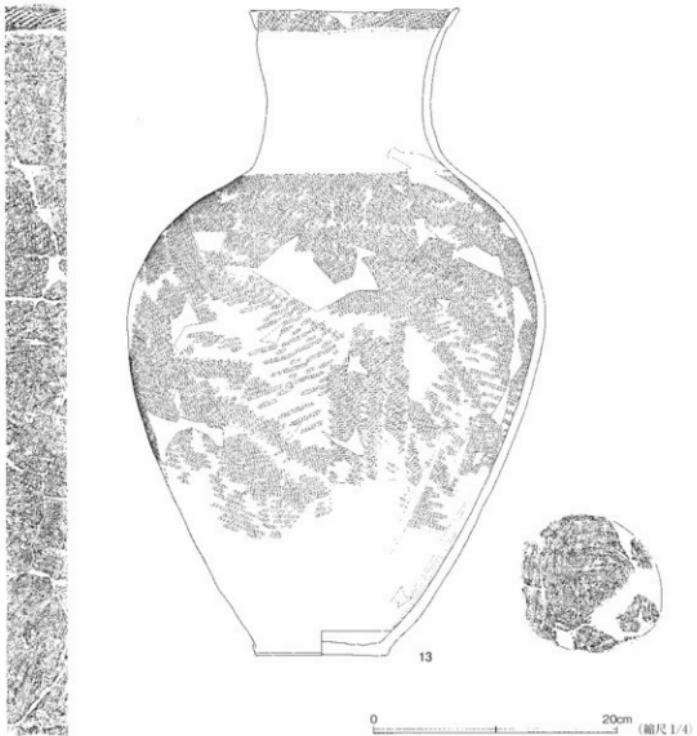


第29図 第2号墓塚(SK2)出土遺物(10)－土器10－



0 1 20cm (縮尺1/4)

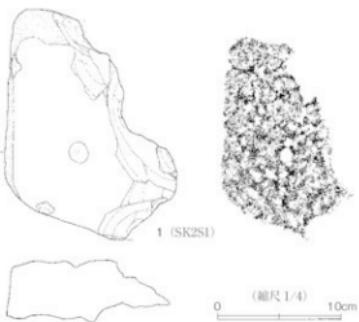
第30図 第2号墓塚(SK2)出土遺物(11)－土器11・12－



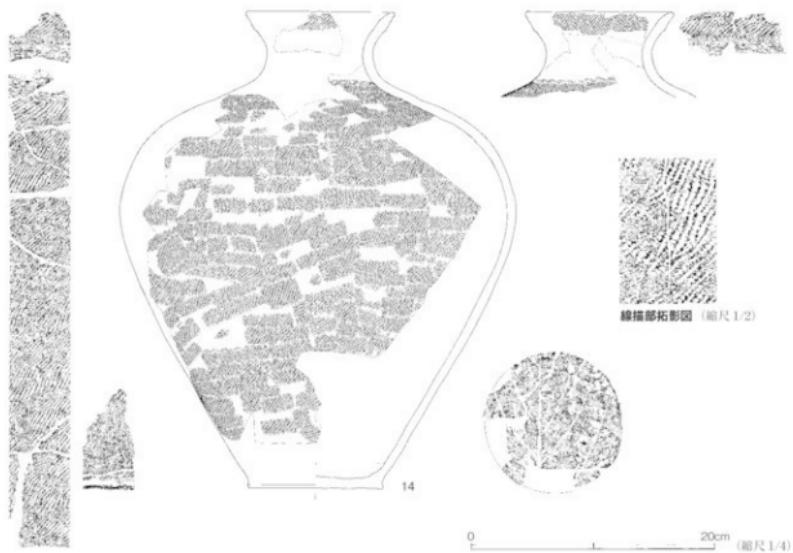
第31図 第2号墓壙(SK2)出土遺物(12)－土器13－

積上痕が残る。この痕跡からは10mm前後の幅で胎土が積み上げられたことが見て取れる。胎土に金雲母は認められず、焼成は普通～良い。色調は、器外面が淡褐色・淡暗褐色、器内面の上部が暗褐色、下部が淡褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着や変色は見られない。

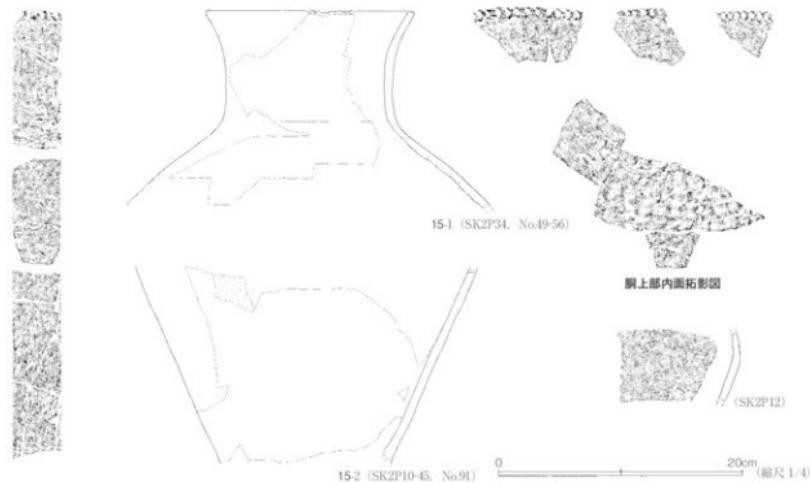
石器1 砥石・凹石の二次加工品(第32図)。図示した面が砥石として使用され、凹穴も1箇所に形成されている。板状に分割された礫の破断面を利用した砥石であり、破断面の凹凸の凸部が磨減している。砥石として使用されていた形狀と大きさは、裏面からの複数回の打撃により変更されている。計測値は長軸186mm・短軸139mm・厚さ54mm、重量16023g。石材は砂岩。被熱の痕跡(赤化)が認められる。



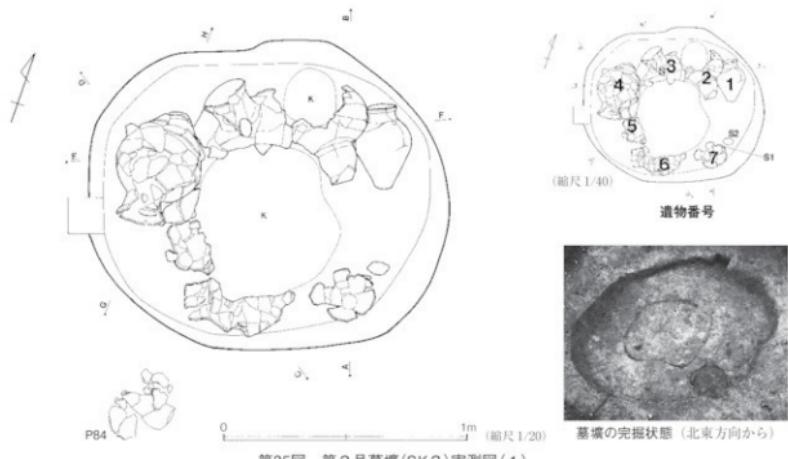
第32図 第2号墓壙(SK2)出土遺物(13)



第33図 第2号墓塚(SK2)出土遺物(14)－土器14－



第34図 第2号墓塚(SK2)出土遺物(15)－土器15－



第35図 第3号墓壙(SK3)実測図(1)

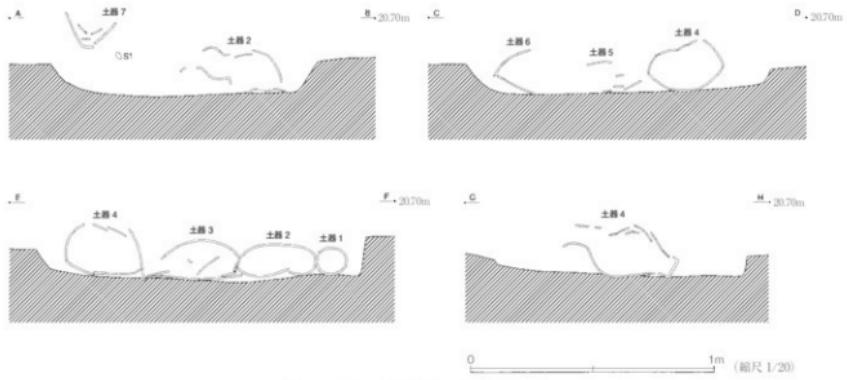
3 第3号墓壙(SK3)

遺構 第3号墓壙は、第1トレンチI区のはば中央で検出され、調査区を東側に拡張することにより、全体を調査することができた。遺構の範囲は、第II層上部で検出するとともに、東西にベルトを設定して土層の断面による観察で決定した。遺構にかかる大きな擾乱が2箇所あり、中央の擾乱は底面にも直径60cmほどの掘り込みが到達している。掘り込みは、墓壙の底面からさらに35cmほどの深さがあり、覆土にはロームブロックが含まれていた。これは、大型の土器であっても完全に掘り上げてしまうような位置と大きさを示している。ここは、地権者の菊池栄一氏が土器K(第4図)を掘り出した地点として指示した箇所に相当する。菊池氏は、土器Kとともに別個体の土器もあったが、それらは完全な形に復元できないものであったと記憶しており、擾乱による破壊が複数個体に及んでいることも、状況は合致する。擾乱を含む第3号墓壙出土の土器に、土器Kと同一個体の破片を見出すことはできなかったが、土器3・5・6の破片も擾乱内にはほとんど含まれておらず、擾乱の範囲内の土器は全て掘り上げられたことが考えられる。土器Kは、第3号墓壙に所属していたことがほぼ確実と推定されるのである。遺構の規模は、長軸1.47m、短軸1.25m。平面形態は、楕円形を呈する。底面は、第II層の下部にあり、ほぼ平坦に形成されている。壁の高さは、最も残り

の良い部分で16cmを測る。壁の立ち上がりは、60~90°の角度である。中央部は擾乱されていることから、観察した覆土は壁際に限定されるが、黒褐色土の單一層であつた。これは特徴が第1号墓壙に共通する。

土器の出土状況 第3号墓壙の底面には6個体の土器が伴い、覆土中には1個体の土器が包含されていた(第35・36図)。中央部の底面に土器Kがあったとすれば、底面の土器は7個体となる。底面の6個体のうち4個体の土器は、底部と胴部最大径位置の一部が接続する横位で出土し、他の2個体も横位を想定できる状況にある。土器Kが中央部を占めていたとすれば、7個体の土器は遺構の北部から西部にかけて近接していた。その範囲は遺構の全体に及ばず、南東部の50cm四方ほどの空間からは土器が検出されない。この空間の上位に相当する覆土中から土器7が出土し、その姿勢は底部を下に向いた正位の状態であった。

横位で検出された土器の主軸を計測すると、土器1はN-20°-W、土器2はN-142°-E(推定)、土器3はN-52°-W(推定)、土器4はN-176°-W(推定)、土器6はN-110°-Wである。土器1・3は北北西から北西方向、大まかには北を向いている。土器2・4は南東から南方向、大まかには南を向いている。土器6は西南西方向、大まかには西を向いている。全てが同じ主軸で置かれたのではなく、むしろ土器1~4の並びからは、



第36図 第3号墓壙(SK3)実測図(2)

北方向と南方向を交互に配置したことが見て取れる。据えられた順序を示すような、土器の重なり合いは認められない。

土器1は、亀裂があっても胴部が潰れずに残存していた。土器2～6は、潰れて胴部がやや扁平になった状態で検出されている。いずれも土器内には土壤が充満しており、胴部が潰れた時点で既に、内部には土壤が入り込んでいたと考えられる。

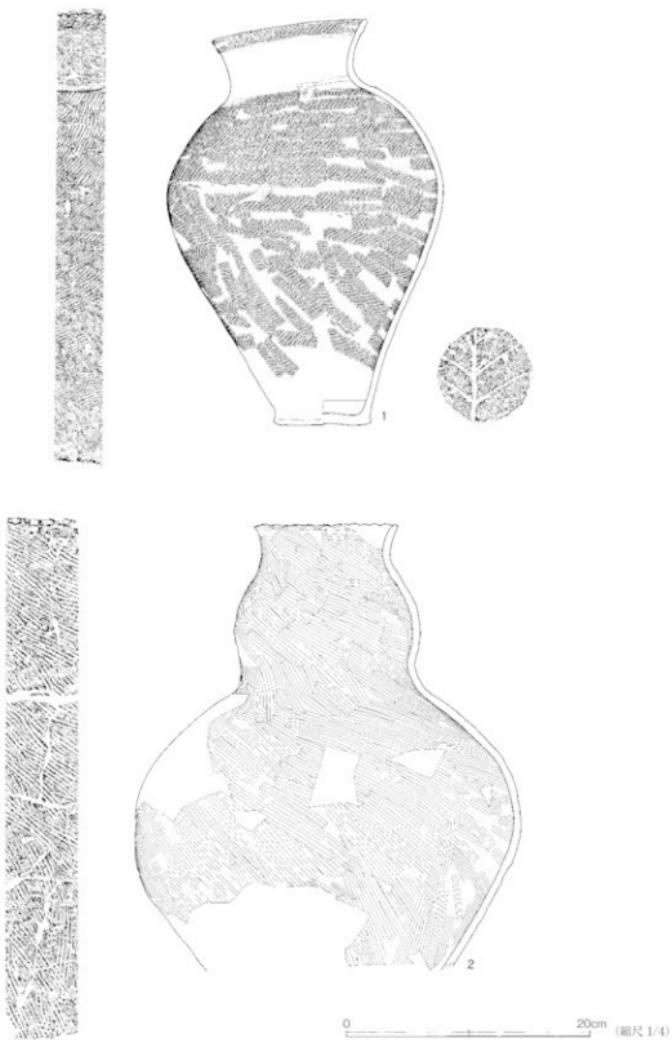
土器7は、遺構の底面から18cmほど浮いた位置の覆土中から出土した。土器1～6とは、少なくとも覆土の堆積にかかる時間差がある。内部の土壤は黒褐色土。土器7が堆積した覆土上にそのまま設置されたのか、覆土を掘り込んで埋設されたのかまでは捉えきれなかった。したがって、第3号墓壙の範囲から出土した土器ではあるが、底面から出土した土器1～6とは明らかに区別される。土器7が第3号墓壙という再葬墓に伴うものであれば土器1～6と性格を異にするであろうし、土器7と土器1～6には別造構の重複という可能性もある。土器7の周辺ではほぼ同じ垂直からは、石刀の破片(S1、第86図5)と礫片(S2)が並ぶように検出されている。また、第3号墓壙の範囲から外れて南方に16cmほどの平面位置から検出されたP84(第73図1)もほぼ同じ垂直位置にある。

土器内土壤は全て採取し、水洗選別を実施したが、人骨と推定される骨片及び副葬品と考えられる遺物は検出されなかつた。

遺物 ここに報告する第3号墓壙の遺物は、7個体の土器である。石刀の破片は、石棒関係資料に一括して掲載した(V章)。

土器1 壺形土器(第37図)。口縁部から底部まで残存する。土圧による歪みのためか、胴部には接合できない隙間が生じている。計測値は器高332mm、口径130mm(残存率100%)、頸径103mm(残存率100%)、胴径227mm(残存率100%)、底径80mm(残存率100%)。成形の歪みにより、全体が傾く。平口縁で複合口縁。口縁部には単節LRの繩文が施されている。中央の窪みが施文されずに残された部分もある。頸部は磨き調整による無文。胴部にも単節LRの繩文が施されており、結節文も一部に観察される。胴上部は概ね横位、胴下部は右下がりの斜位に施文される。底部付近は、縦位から斜位に削りへ撫で調整されている。底部はやや上げ底となる。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、器外面が暗褐色、器内面が暗灰褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着する。

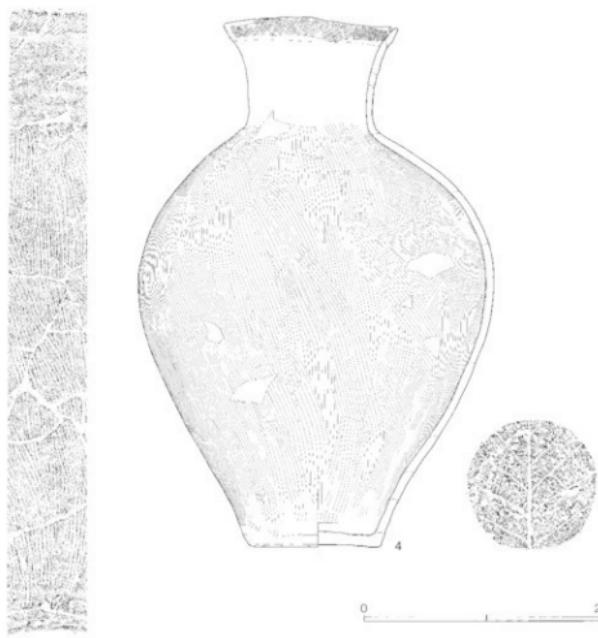
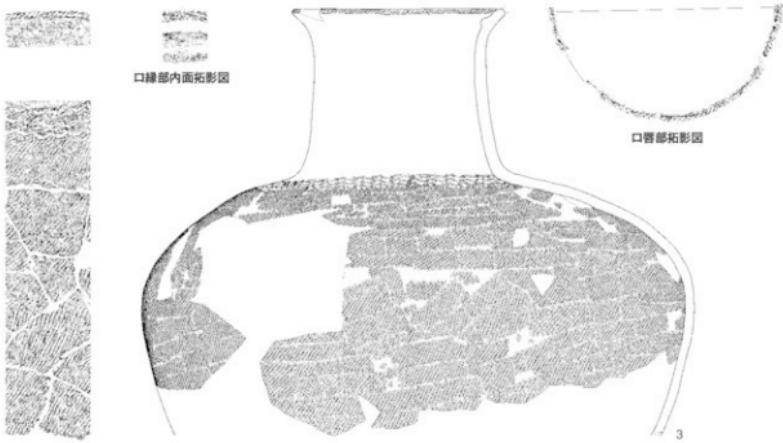
土器2 壺形土器(第37図)。口縁部から胴下部までが残存する。胴下～底部を欠損し、残存部位も半周から3分の1周ほどが欠損する。これらの欠損は、擾乱に伴うものと推定される。計測値は残存高368mm、口径113mm(残存率47%)、頸部最小径106mm(残存率78%)、頸部最大径153mm、胴径317mm(残存率77%)。所謂「瓢形」であり、頸部の中位が膨らむ。これは器内側面から押圧して成形されている。単純口縁の口唇部は、押圧されて小刻みな波



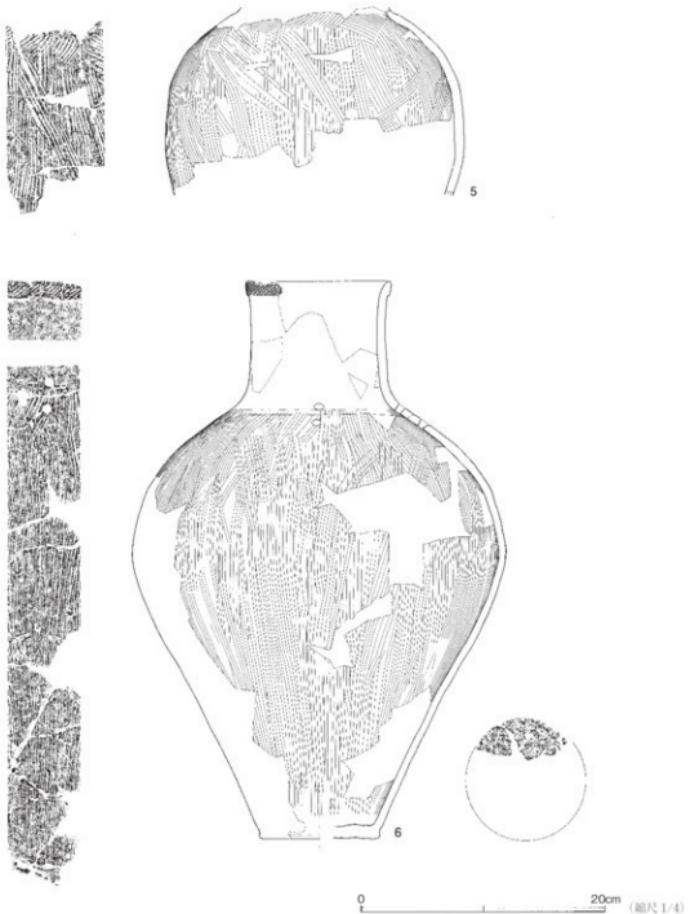
第37図 第3号墓壙(SK3)出土遺物(1)ー土器1・2ー

状口縁を呈する。口唇部直下から胴下部まで条痕文が施される。条痕文は、4本が同時に施文され、概ね右下がりの斜位であるが、胴下部には継位の部分もある。器内面は、口縁部のみ磨き調整。以下は撫で調整で、胴上部

に成形の積上痕を残す。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、器内外面とも茶褐～褐～淡褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着し、器内面の下端には変色が見られる。



第38図 第3号墓壙(SK3)出土遺物(2)－土器3・4－

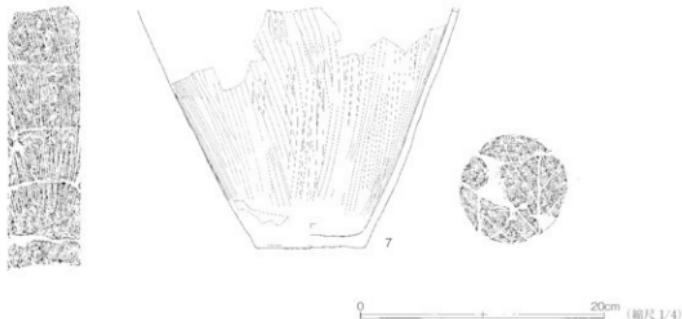


第39図 第3号墓壙(SK3)出土遺物(3)－土器5・6－

土器3 壺形土器(第38図)。口縁部から胴下部までが残存する。胴下～底部を欠損し、胴中央部も3分の2周ほどが欠損する。これらの欠損は、擾乱に伴うものと推定される。計測値は残存高300mm、口径176mm(残存率87%)、頸径141mm(残存率100%)、胴径454mm(残存率38%)。平口縁で、器内面に突出する複合口縁である。口唇部には単節LRの繩文が施されている。口唇部直下から頸部は磨き調整の無文。胴部の上端は3段の結筋文で区画さ

れる。頸部にも単節LRの繩文が施されている。繩文は概ね横位であるが、一部に左下がりの斜位も見られる。器内面は、口颈部が磨き調整、胴部は撫で調整で、胴上部に成形の積上痕を残す。胎土に金雲母は認められず、白色粒子を多量に含む。焼成は普通～良い。色調は、器内外面とも褐～茶褐色を呈する。器外面の胴中央部から下位に炭化物が付着している。

土器4 壺形土器(第38図)。口縁部から底部までが残



第40図 第3号墓壙(SK3)出土遺物(4)ー土器7ー

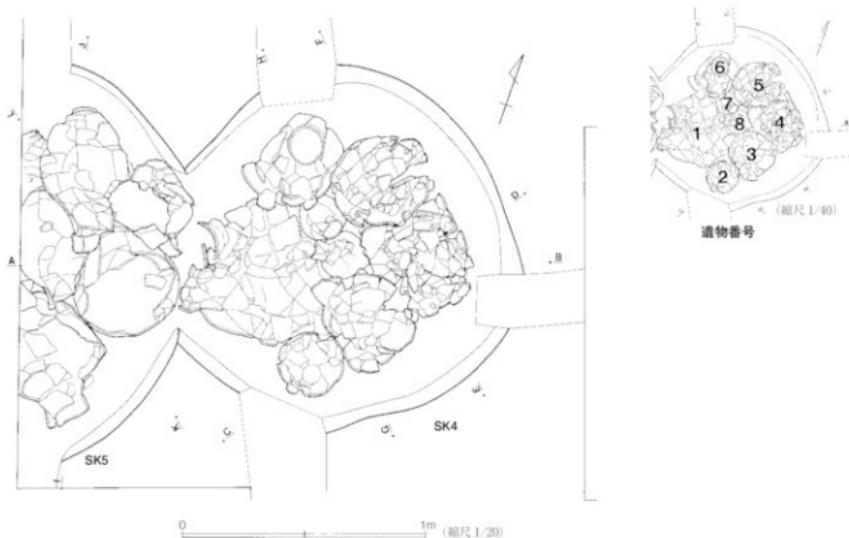
存する。計測値は器高436mm、口径143mm(残存率68%)、頸径101mm(残存率95%)、胴径291mm(残存率88%)、底径109mm(残存率100%)。平口縁で複合口縁。口縁部には單節L Rの繩文が施されている。頭部は撫で調整による無文。胴部には条痕文が施される。条痕文は、4本が同時に施され、縦位から斜位である。底部は平底と推定される。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、焼成は良い。色調は、器内外面とも褐～黒褐色を呈する。器内外面に炭化物が付着している。器内面の炭化物の一部を採取し、年代測定と同位体分析を実施している(VI章)。

土器5 壺形土器(第39図)。胴上部のみが残存する。他の部位を欠損し、残存部も3分の1周ほどが欠損する。これらの欠損は、搅乱に伴うものと推定される。計測値は残存高154mm、胴径245mm(残存率68%)。僅かに残された部分の観察により、頭部は撫で調整による無文と推定される。胴部には条痕文が施される。条痕文は、6本が同時に施され、縦位から斜位である。器面への施文具の当たり方により、条痕の一部が太い凹線状を呈する部分も見られる。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含み、赤色粒子は多量である。焼成は良い。色調は、器外面が褐色・暗褐色、器内面が淡褐色・褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着する。

土器6 壺形土器(第39図)。口縁部から底部までが残存する。但し、各部位は3分の1から3分の2周ほどを欠損する。これらの欠損は、搅乱に伴うものと推定される。口縁部の上端に観察される剥離痕については、後世のものではない。頭部と胴部の境界付近の亀裂を挟んで

補修孔が穿たれており、土器が上下に分割した後も結続して使用されたと考えられる。補修孔は2孔一対で、ほぼ等間隔に3対が残存する。計測値は器高456mm、口径120mm(残存率36%)、頸径110mm(残存率62%)、胴径306mm(残存率34%)、底径96mm(残存率33%)。平口縁で複合口縁。口縁部には單節L Rの繩文が施されている。頭部は撫で～磨き調整による無文。胴部には条痕文が施されている。条痕文は、4～6本が同時に施され、縦位から斜位である。底部付近は、縦位から斜位に削り～撫で調整されている。底部は平底である。底面は撫で調整されており、敷物の痕跡は明らかでない。胎土に金雲母は認められず、焼成は普通～良い。色調は、器外面の上部が暗褐色、胴下部が淡暗褐色、底部付近が暗褐～黒褐色。器内外面が淡褐色・淡暗褐色を呈する。器内外面の一部に炭化物が付着する。

土器7 壺形土器と推定される(第40図)。胴下部から底部までが残存する。上位の欠損は、第ⅠB層を形成した整地・耕作に伴うものと推定される。計測値は残存高198mm、底径90mm(残存率95%)。胴部には条痕文が施されている。条痕文は、4本が同時に施され、縦位から斜位である。底部付近は、横位に撫で調整されている。底部はやや上げ底を呈する。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は良い。色調は、器外面が暗褐色・黒褐色、器内面が淡褐色・黒～灰色を呈する。器内外面の一部に炭化物が付着する。



第41図 第4号墓壙(SK4)実測図(1)

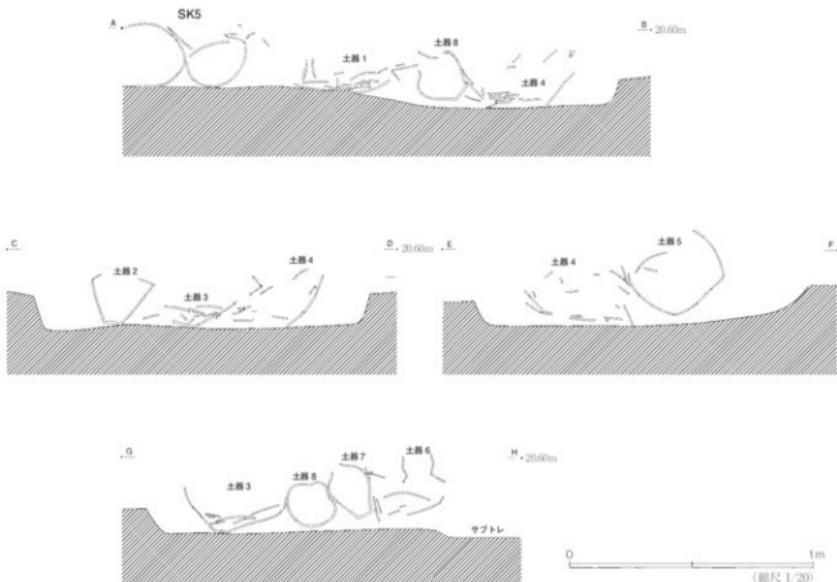
4 第4号墓壙(SK4)

遺構 第4号墓壙は、第1トレンチⅠ区の中央で検出され、調査区を東西両側に拡張することにより、ほぼ全体を調査することができた。西側の拡張区において別の再葬墓との重複が明らかとなった。重複するのは第5号墓壙である。遺構の範囲は、第Ⅱ層上部で検出するとともに、東西南北にサブトレンチを設定して、土層の断面による観察で決定した。遺構にかかる大きな搅乱は見られない。遺構の規模は直径1.50m前後で、平面形態は略円形を呈する。底面は、第Ⅲ層の上面付近にあり、ほぼ平坦に形成されている。壁の高さは、最も残りの良い部分で14cmを測る。壁の立ち上がりは、60~80°の角度である。覆土は、黒褐色土の單一層であった。これは特徴が第1号墓壙に共通する。

第5号墓壙との新旧関係を捉るために、土層の断面で重複部分の覆土を観察したが、2つの遺構の覆土に明確な異なりは見出せなかった。そこで、第Ⅱ層上部で捉えた遺構の輪郭の重なりと、土器の遺存状態から新旧を推定することになった。第4号墓壙が新しいとするならば、その遺構の掘り込みにより第5号墓壙の土器2・3



第4・5号墓壙(SK4・5)の重複部分(北方向から)



第42図 第4号墓壙(SK 4)実測図(2)

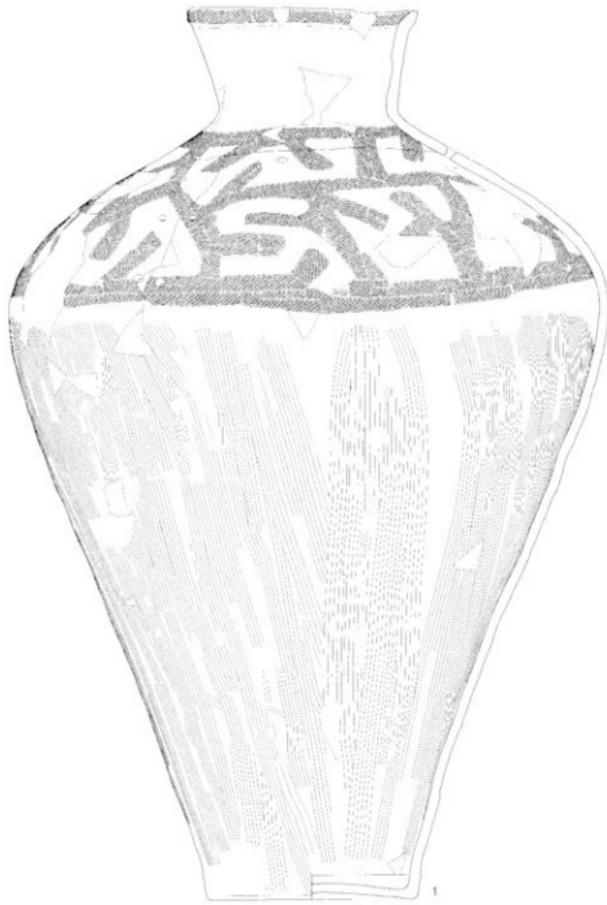
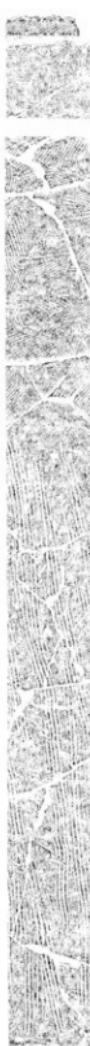
の東側は破壊されていなければならぬのに、これが見られない。逆に、第5号墓壙が新しいとすると、その掘り込みが平面としては第4号墓壙の土器1に及ぶように見えるが、土器1は潰れた状態で底面付近の垂直位置にあることから大きな破壊を免れる。したがって、第4号墓壙が古く、第5号墓壙が新しいと考えることができる。

土器の出土状況 第4号墓壙には8個体の土器が伴う(第41・42図)。遺構の底面から出土した土器は6個体であり、1個体が横位、5個体は正位が推定される状態であった。横位の姿勢が推定されるのは、土器1であり、遺構に伴う土器の中で最も法量が大きい。その主軸は、大まかには西を向いている。一方、遺構の底面からは浮いて出土した土器が2個体ある。これは、第3号墓壙の土器7のように他の土器から離れて覆土中にあるのではなく、他の土器の上に載るような状態で検出された。この2個体の土器7・8は、いずれも小型の土器である。横位ではないが、倒れたように傾いており、その主軸は土器7がN-124°-E、土器8がN-97°-Wと計測される。土器7は南東方向、土器8は西方向と一致せず、むしろ向き合うような関係にある。



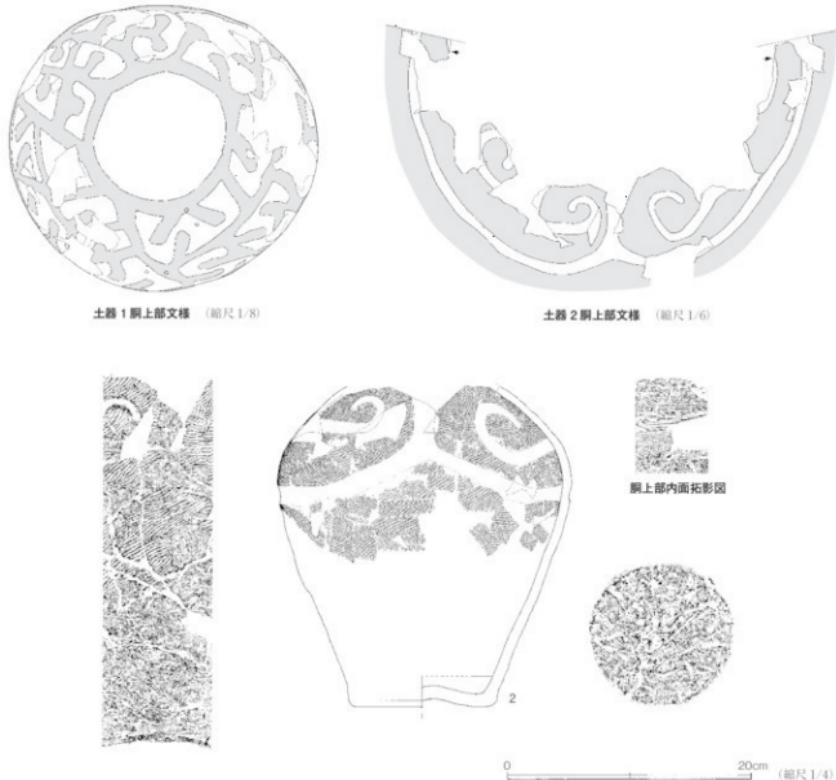
第4号墓壙(SK 4)土器3の出土状況

小型の土器である土器7・8は、亀裂があつても胴部が潰れずに残存していた。土器2・5は、潰れて胴部がやや扁平になった状態で検出されている。いずれも土器内には土壤が充満しており、胴部が潰れた時点では既に、内部には土壤が入り込んでいたと考えられる。これに対して土器3・4・6は、口縁部から胴上部までの破片が胴下部に落ち込むような状態で潰れており、胴部が潰れた時点では未だ内部に土壤が充満していない。さらに、



0 20cm
(縮尺 1/4)

第43図 第4号墓塚(SK 4)出土遺物(1)－土器1－



第44図 第4号墓壙(SK4)出土遺物(2)-土器1・2-

横位の土器1については、上位の破片が下位の破片に密着するように潰れており、土壤をほとんど挟まないことが観察されている。横位で底面に据えられたと推定される他の墓壙の土器のはほとんど全てに土壤の充満が見られるのに対して、土器1は特異な状態として注意される。

土器内土壤は全て採取し、水洗選別を実施したが、人骨と推定される骨片及び副葬品と考えられる遺物は検出されなかった。

遺物 ここに報告する第4号墓壙の遺物は、8個体の土器である。

土器1 壺形土器(第43・44図)。口縁部から底部まで残存する。口縁部の上端に観察される剥離痕については、後世のものではない。頸部近くには横、胴上部には

縦に入った亀裂の両側に補修孔が穿たれており、ここを結縛して使用されたと考えられる。補修孔は2孔一对で、頸部近くに2対、胴上部にも2対が見られる。計測値は器高735mm、口径190mm(残存率77%)、頸径147mm(残存率79%)、胴径493mm(残存率82%)、底径170mm(残存率97%)。平口縁で複合口縁。口縁部には単節L Rの繩文が施されている。口縁部の器内面は、撫で調整により部分的に窪み、受け口状を呈する。頸部は磨き調整による無文、胴上部には帯状の繩文で、上下を区画した「ヒトデ文」が構成されている。帯状の繩文は、沈線で区画されることはなく、無文部が撫で～磨き調整されて輪郭が決定されている。繩文は単節L R。方向を変えながら繩文が施文されていることから、下書き沈線に従う充填繩文とも

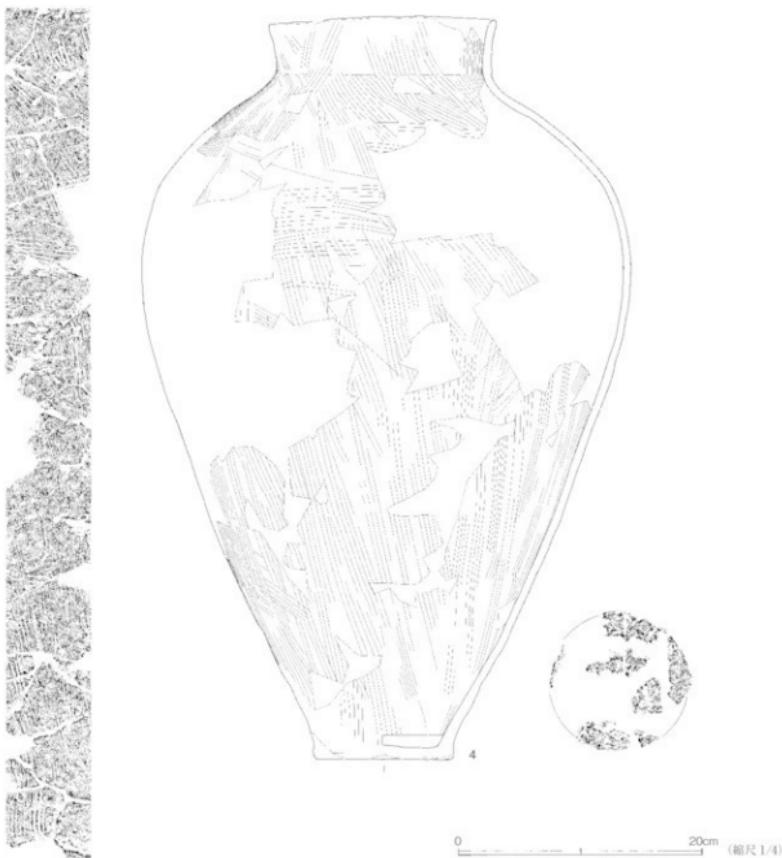


第45図 第4号墓塚(SK 4)出土遺物(3)ー土器3ー

想定されるが、下書き沈線の痕跡は観察できない。胴下部には条痕文が施される。繩文との間は横位に撫で調整され、これにより条痕文の上端が消されている。条痕文は、5、6本が同時に施され、概ね縱位である。施文方向は下から上、施文順序は左から右。底部は上げ底となる。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、泥岩片を含む。焼成は普通～良い。色調は、器外表面が褐～淡褐～淡暗褐色。器内面が淡褐～淡暗褐色を呈する。器内外面の一部に炭化物が付着している。

土器2 壺形土器(第44図)。口頭部を欠損し、胴部から底部までが残存する。胴上部の破断面の一部には磨滅が観察されることから、口頭部の欠損は、後世のものではない可能性もある。計測値は残存高262mm、胴径242mm(残存率86%)、底径120mm(残存率100%)。胴上部には帯状の繩文で、渦状文が構成されている。繩文は単節L.R.。帯状の繩文は、沈線で区画されることなく、無文部が撫で～磨き調整されて輪郭が決定されている。方向を変

えながら繩文が施文されていることから、下書きに従う充填繩文とも想定されるが、下書き沈線の痕跡は観察できない。無文部はやや窪み、特に渦状の先端付近は、幅が狭いことから凹線状を呈する。胴中央部の無文帶は全周し、実測図で示した正面で上方に突き抜ける。ここで、渦状文の横への展開が途切れるのであろう。巻き方向の異なる渦状文が組み合うことは確実であるが、具体的な構成を復元することはできない。胴下部は、横位もしくは右下がりの斜位に繩文が施文される。施文は無文帶の付近に限られ、疎らな部分もあり、以下は磨き調整されている。成形の歪みにより、底部は著しい上げ底となる。底面は木葉痕。器内面の胴上部には調整に伴う横位の条痕もしくは擦痕が残されている。胎土に金雲母は認められず、焼成は普通。色調は、器外表面の上部が黒褐色、下部が暗褐色、器内面が淡褐～灰褐色を呈する。器外面には炭化物が付着し、底部から8cmほどの高さまで小さなクレーター状の剥落が集合している。器内面には、これ

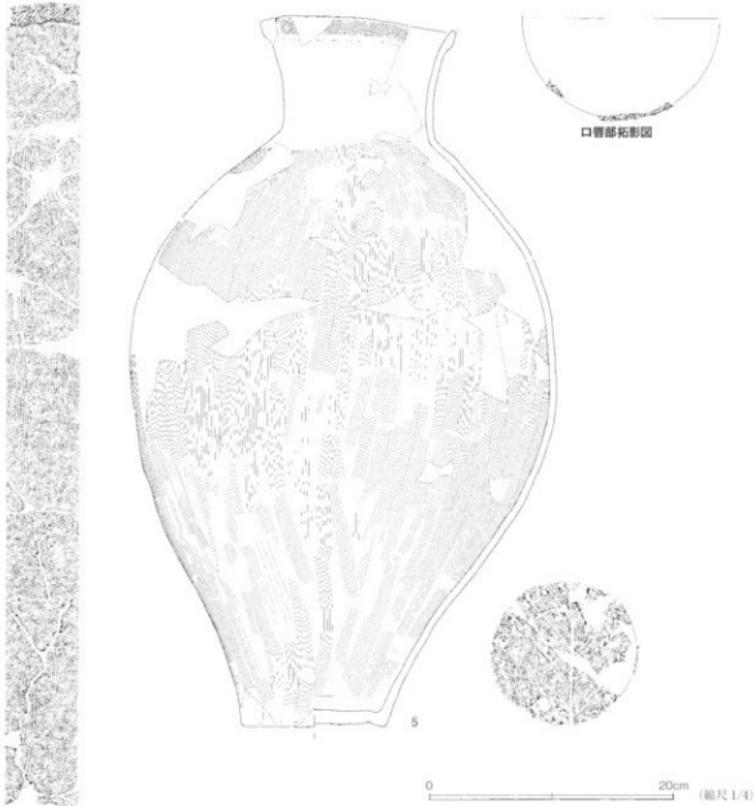


第46図 第4号墓擴(SK 4)出土遺物(4)ー土器4ー

らが見られない。

土器3 壺形土器(第45図)。口縁部から底部まで残存する。計測値は器高446mm、口径の長軸148mm(残存率52%)、頸径99mm(残存率87%)、胴径306mm(残存率69%)、底径88mm(残存率100%)。上から見ると口縁は梢円形を呈する。平口縁ではあるが、口唇部には箒状工具により内側に向けて刻みが施されており、これを微波状と表現することもできる。複合口縁には、付加条第二種L×Iの縄文が施されている。頸部は磨き調整による無文。胴部には条痕文が施される。条痕文は、6本以上が同

時に施され、縱位である。胴下部には部分的に、条痕文以前に施文された単線が観察される。これは主に右下がりの斜位である。底部はやや凸面の平底であり、中央が肥厚する。底面は木葉痕であるが、凸面の部分が潰れて消えている。器内面の胴上部には成形の積上痕が残されている。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、器外内面とも淡褐色・暗褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着しており、赤色系の付着物も部分的に見られる。器内面には、炭化物の付着や変色等は見られない。



第47図 第4号墓塚(SK 4)出土遺物(5)-土器5-

土器4 罐形土器(第46図)。口縁部から底部まで残存する。全体が細かな破片に碎けた状態で検出され、同一個体であっても接合に至らない胴部の破片が多く残された。実測図の空白部には、残された破片が充填される可能性がある。したがって、以下の計測値の残存率は、実測図の精度を示すにすぎない。計測値は器高609mm、口径の長軸187mm(残存率78%)・短軸166mm、頸径177mm(残存率86%)、胴径402mm(残存率38%)、底径115mm(残存率74%)。上から見ると口縁は梢円形を呈する。口頭部が短く、ほぼ直立することに特徴がある。平口縁。單純口縁ではあるが、口頭部が僅かな段差を持ち厚い。口唇部直下から底部付近まで条痕文が施されている。条痕文は、

7本ほどが同時に施され、口頭部から胴上部が斜位、胴中央部が横位、胴下部が縱位を主とする。施文順序は上から下の部位へ向かう。底部は平底であり、中央がやや肥厚する。底面は木葉痕。器内面の胴上部には成形の積上痕が残されている。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子・泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、器外表面が淡褐色・褐色・暗褐色を呈し、底部から25mmの高さまでが暗い。器内面は褐色。器内外面の一部に炭化物が付着する。

土器5 罐形土器(第47図)。口縁部から底部まで残存する。計測値は器高582mm、口径160mm(残存率30%)、頸径123mm(残存率87%)、胴径350mm(残存率73%)、底径



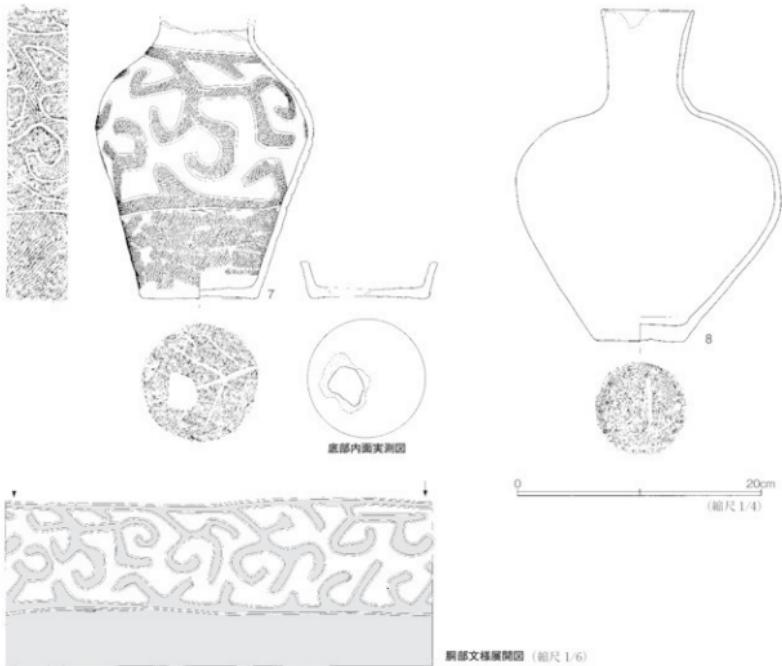
第48図 第4号墓壙(SK 4)出土遺物(6)ー土器6ー

120mm(残存率89%)。成形の歪みにより傾き、上から見ると胴は梢円形を呈する。平口縁で複合口縁。口唇部及び口縁部には、単節L Rの繩文が施されている。頭部は撫で調整による無文。胴部には条痕文が施される。条痕文は、6本ほどが同時に施され、縱位である。施文順序は上から下、左から右と観察された。底部は上げ底となる。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、器外面が淡褐～淡暗褐色、器内面が淡褐色を呈する。器内外面の一部に炭化物が付着する。

土器6 壺形土器(第48図)。口縁部から底部まで残存する。口縁部の上端に観察される剥離痕については、後世のものではない。計測値は器高537mm、口径127mm(残存率23%)、頭部最小径112mm(残存率100%)・最大径130mm(残存率100%)、胴径288mm(残存率82%)、底径104mm

(残存率90%)。所謂「瓢形」であり、頭部の中位が膨らむ。これは器内面側から押圧して成形されている。口縁部は、頭部の膨らみから屈曲して外反する。平口縁で、複合口縁状を呈している。口縁部は無文。頭部から胴部まで条痕文が施される。条痕文は、4本が同時に施され、縱位である。条線の幅も間隔も広く、これが第1・5・6号墓壙の土器に見られる縱位短条痕文に共通する。下から上の施文方向が観察された。底部は平底であり、中央がやや肥厚する。底面は網代痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は普通。色調は、器外面が茶褐色・褐～暗褐色、器内面が茶褐色・褐～淡褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着する。器内面に炭化物の付着や変色は見られない。

土器7 壺形土器(第49図)。口縁部と頭部の上位を欠損し、頭部から底部までが残存する。頭部の破断面には

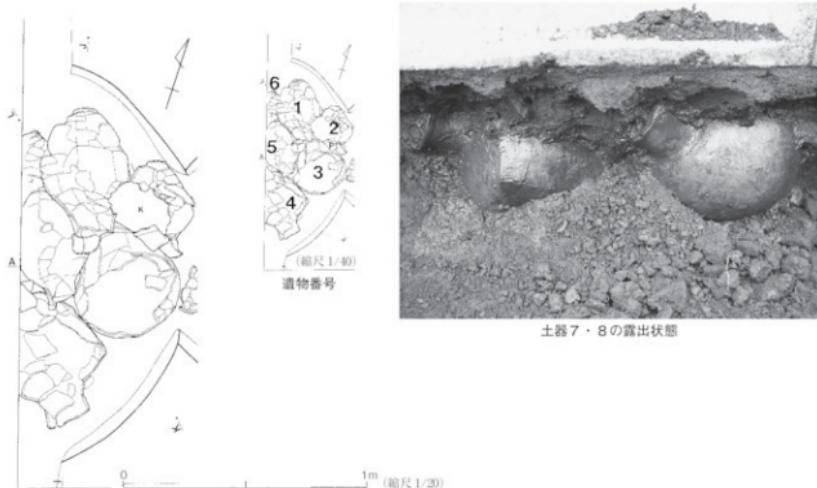


第49図 第4号墓壙(SK4)出土遺物(7)ー土器7・8ー

磨滅が見られることから、口頭部の欠損は、後世のものではない。底部には穿孔がある。孔の計測値は長軸34mm、短軸27mm。孔は外側から、1回の打撃により穿たれたと考えられる。計測値は残存高228mm、擬口縁の口径67mm（残存率95%）、胴径179mm（残存率100%）、底径94mm（残存率100%）。胴中央部を挟み胴部の3分の2に相当する幅で、磨消繩文の文様が構成される。上下を横位の繩文帯が全周し、繩文帯から分岐した繩文帯がさらに分岐して「ヒトテ文」を形成する。繩文帯の端部は鉤状に曲がる。分岐を繰り返すのは主に上位であり、下位から分岐した繩文帯の形態は単純である。繩文は、単節L Rであり、施文後に沈線で区画されている。方向を変えながら繩文が施文されていることから、下書きを従い繩文が充填されたと考えられるが、下書き沈線の痕跡は観察できない。無文部は磨き調整されている。胴下部には、単節L Rの繩文が横位に施文されている。底部はやや上げ底となる。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、泥

岩片を含む。焼成は良い。色調は、器内外面とも褐～暗褐色を呈する。器外面の一部に少量の炭化物が付着する。器内面に炭化物の付着や変色は見られない。

土器8 壺形土器(第49図)。口縁部から底部まで残存する。計測値は器高221mm、口径76mm（残存率15%）、頭径61mm（残存率83%）、胴径218mm（残存率100%）、底径74mm（残存率100%）。平口縁で単純口縁。器外面は磨き調整による無文。口頭部は継位、胴上～中央部は横位、胴下部は継位に調整されている。底部はわずかに上げ底となる。底面は撫で調整されており、中央に木葉痕を残す。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は良い。色調は、器内外面とも淡褐～灰褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着する。器内面に炭化物の付着や変色は見られない。



第50図 第5号墓塚(SK5)実測図(1)

5 第5号墓塚(SK5)

遺構 第5号墓塚は、第4号墓塚の西側拡張区で確認され、地境の畦畔板まで拡張したが、全体は調査できなかった。検出されたのは、遺構の東側半分ほどと推定される。遺構の範囲は、第II層上部で検出するとともに、調査区西壁にサブトレンドを設定して、土層の断面による観察で決定した。東側には第4号墓塚が重複する。遺構の新旧関係は、第4号墓塚で既述したように、第4号墓塚が古く、第5号墓塚が新しい。土器1・2の一部を破壊して掘り込まれた直径20~25cmの擾乱が見られる。遺構の規模は、検出部分で長軸1.62m・短軸0.68mを測り、直径1.65m前後で略円形の平面形態が推定される。底面は、第II層の下部にあり、ほぼ平坦に形成されている。壁の高さは、最も残りの良い部分で8cmを測る。壁の立ち上がりは、70~90°の角度である。覆土は、黒褐色土の單一層であった。これは特徴が第1号墓塚に共通し、第4号墓塚の覆土とも識別できないほどに似る。

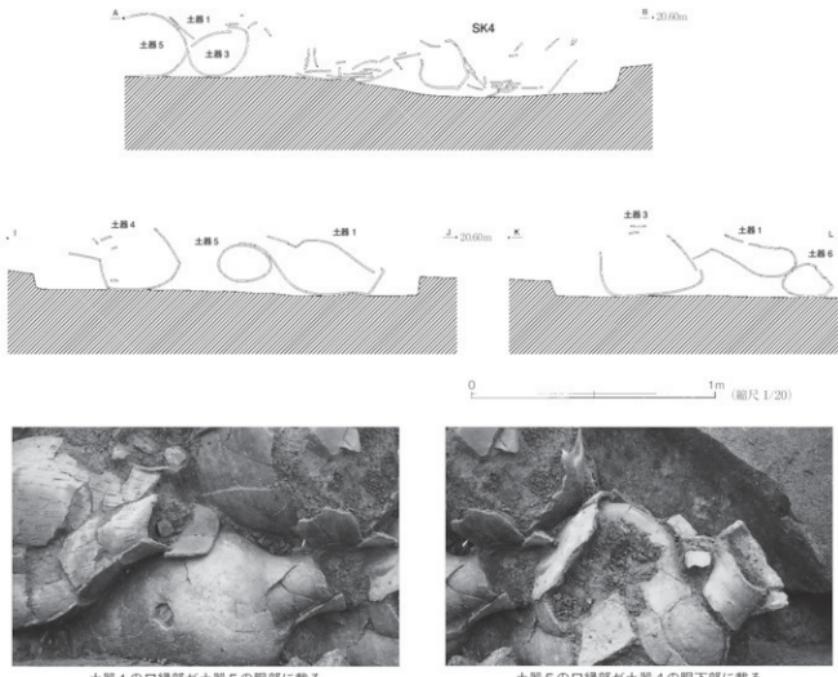
土器の出土状況 第5号墓塚には6個体の土器を検出して、出土状況を図化し取り上げた(第50・51図)。他に畦畔板の下から2個体の土器が露出したが、これらは埋め戻しても破壊される恐れがないことから、その状況を撮影するに留めて取り上げなかった。したがって、第

5号墓塚には、少なくとも8個体の土器が伴うことは確実である。取り上げなかつた土器についても、観察できた所見を記述するために、北側を土器7、南側を土器8としておく。この土器7・8を含めて、8個体の土器は全てが、底部と胴部最大径位置の一部を接地する横位の状態で、近接して出土した。その範囲は、検出された遺構部分の全体に及ぶ。

各土器の主軸を計測すると、土器1はN-158°-E、土器2はN-158°-E、土器3はN-144°-E、土器4はN-141°-E、土器5はN-149°-E、土器6はN-145°-Eである。これらはほぼ南東～南南東方向となり、大まかには南を向く。土器7・8の主軸方向は計測できていないが、大まかに南を向くことは確実である。

土器は、その一部を別の土器に載せて重なり合った状態で検出されたものもある。土器1は土器3・5、土器2は土器3、土器3は土器4、土器5は土器4の上にそれぞれ一部を載せた状態にある。これらは、土器が据えられた順序を示しており、全ての順序は特定できないが、全体の傾向としては、南側から北側に向かう順序が窺える。

土器1~6は全て、潰れて胴部がやや扁平になった状態で検出されている。いずれも土器内には土壤が充満し



第51図 第5号墓塚(SK5)実測図(2)

ており、胴部が潰れた時点で既に、内部には土塊が入り込んでいたと考えられる。土器8も同様な状態、土器7は胴部が潰れずに残存しているように観察された。

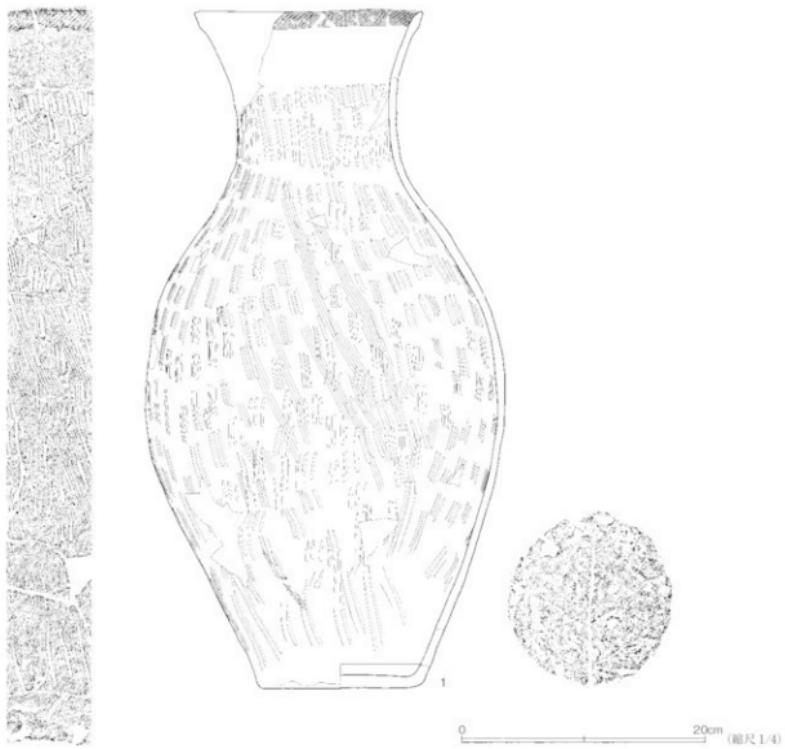
土器内土壤は全て採取し、水洗選別を実施したが、人骨と推定される骨片及び副葬品と考えられる遺物は検出されなかった。なお、第5号墓塚については、比較試料として、覆土の一部を採取し、水洗選別を実施している。

遺物 ここに報告する第5号墓塚の遺物は6個体の土器であるが、露出部分を観察した土器7・8の2個体についても、所見を末尾に記録しておく。

土器1 壺形土器(第52図)。口縁部から底部まで残存する。口縁の一部を欠損するのは第I B層を形成した整地・耕作、胴上部の一部を欠損するのは擾乱に伴うものと推定される。計測値は器高556mm、口径189mm(残存率20%)、頭径131mm(残存率100%)、胴径297mm(残存率100%)。

%、底径138mm(残存率100%)。平口縁で複合口縁。口縁部には単節L Rの縦文が施されている。頭上部は撫で調整による無文。頭中央部から底部付近まで縦位短条痕文が施される。条痕文は3本が同時に施文されており、施文具の一方が先削りしていく細い半截竹管のように見える部分もある。縦位短条痕文は、西瓜の縞のように縦列を施した後、その列間が充填される。一部には、縦位短条痕文の前に施文された条痕文が見られる。これは右下がりの斜位に施文されている。底部は平底である。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は良い。色調は、器外表面が淡褐～黒褐色、器内面が灰褐色を呈する。器外表面の一部に炭化物が付着している。器内面の胴下部には表面の剥落が認められる。

土器2 壺形土器(第53図)。部位としては口縁部から底部まで残存するが、口縁～胴部の3分の2周ほどを欠



第52図 第5号墓塚(SK 5)出土遺物(1)ー土器1ー

損する。この欠損は、擾乱に伴うものと推定される。計測値は器高395mm、口径130mm(残存率19%)、頸径97mm(残存率17%)、胴径268mm(残存率36%)、底径110mm(残存率100%)。平口縁で、受け口状に器内面が突出した複合口縁である。器内面の突出部の直下は四線状を呈する。口唇部には單節L Rの繩文が施されている。口唇部直下から頸部までは磨き調整の無文。胴部上端は結節文で区画される。胴部にも單節L Rの繩文が施されている。この原体は、直前段3条と観察された。施文は、胴上部が横位、胴中央～下部が右下がりの斜位である。結節文も一部に見られる。底面付近は横位に撫で調整され、繩文が消されている。底部は平底であり、中央が肥厚する。底面は布目痕。器内面は、口頭部が磨き調整、胴部は撫で調整である。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥

岩片を含む。焼成は良い。色調は、器内外面とも褐～茶褐色を呈する。器外面には炭化物が付着している。

土器3 壺形土器(第54図)。口縁部から底部まで残存するが、口頸部は大部分が欠損している。欠損は、第I B層を形成した整地・耕作に伴うものと推定され、口縁部の破片(P 1)も50cmほど移動した位置から擾乱の範囲にかかるように検出されている(第50図)。計測値は器高533mm、口径160mm(残存率19%)、頸径134mm(残存率21%)、胴径405mm(残存率87%)、底径106mm(残存率100%)。波状口縁で、3箇所の波頂部が残存する。全体では10箇所ほどの波頂数が推定される。複合口縁であり、器外面には横位あるいは緩やかな斜位の条痕文。器内面には單節L Rの繩文が施されている。器内面の口縁部下には凹線が巡る。頸部は継位の撫で調整による無文。胴部との



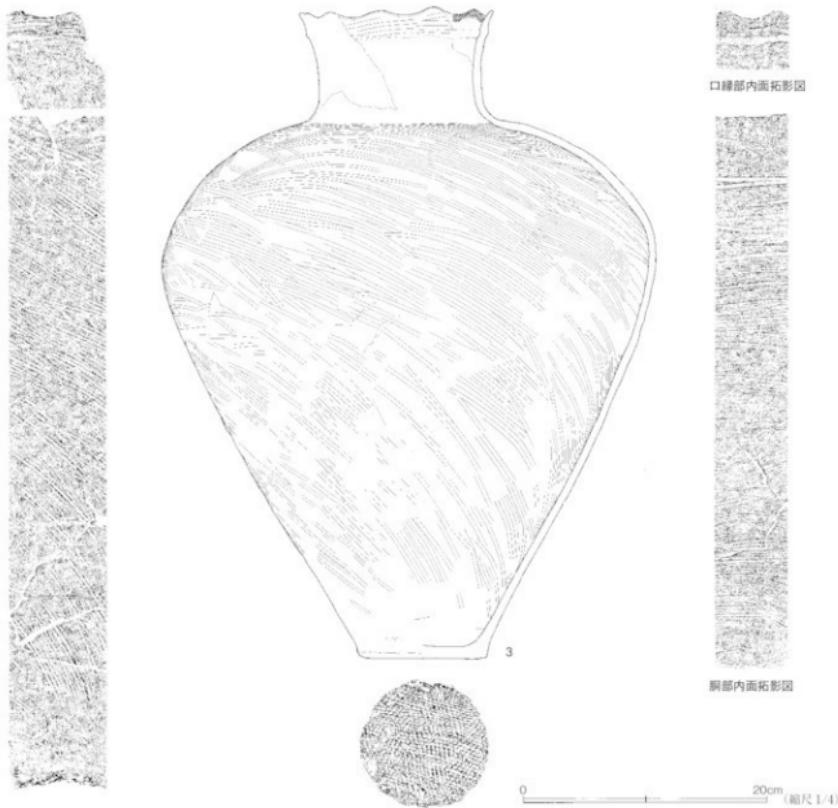
第53図 第5号墓塙(SK5)出土遺物(2)-土器2-

境界付近は横位に撫でられて窪む。胴部には条痕文が施される。条痕文は、3、4本が同時に施され、胴上部は緩やかな斜位で弧状を描くように、胴下部は右下がりの斜位に施されている。施文の順序は、上から下、左から右。胴下部の条痕文の上に、幅広で短い沈線が觀察されるが、調整工具が器面に当たって生じた傷跡と捉えた。底部付近は削り調整。胴部の器内面には、撫で調整に伴う横位の条痕文が残されている。底部は平底である。底面は網代痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通～やや不良。色調は、器外面が暗褐色・黄褐色、器内面が淡暗褐色を呈する。器外面に炭化物が付着している。器外面の炭化物は全周して見られるが、器内面は全周しない。

土器4 瓢形土器(第55図)。口縁部を欠損し、頸部から底部までが残存する。頸部上端の内外面に剥離痕があり、破断面も磨滅することから、口縁部の欠損は後世でなく、欠損後も頸部上端を擬口縁として使用された。また、胴中央部の横から縦に向かう亀裂を抉んで補修孔が穿たれており、ここを結縛して使用されたことが考えられる。補修孔は2孔一対で、6対が残存する。孔は外側

から穿たれている。計測値は残存高529mm、擬口縁の口径145mm(残存率81%)、頸径134mm(残存率86%)、胴径399mm(残存率63%)、底径146mm(残存率100%)。頸部は磨き調整による無文で、光沢を有している。胴部の上～中央部には単節LRの縄文が横位に施文される。この原体は直前段3条と觀察され、原体端部の施文では付加条縄文のように見える。上部の縄文の施文の後に、下部には底部直上まで条痕文が施される。条痕文は、10本前後の細かな線が同時に施文され、概ね縦位である。底部は上げ底となる。底面は木葉痕。胎土には少量の金雲母とともに、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通～良い。色調は、器外面が淡褐色・淡暗褐色、器内面が淡褐色を呈する。炭化物の付着や変色は見られず、器内面は全体にわたって表面が剥落する。

土器5 瓢形土器(第56図)。口縁部から底部まで残存する。口縁の半分ほどを欠損するのは、第IB層を形成した整地・耕作に伴うものと推定される。計測値は器高479mm、口径117mm(残存率53%)、頸径103mm(残存率100%)、胴径281mm(残存率100%)、底径120mm(残存率100%)。平口縁で、複合口縁を呈する部分と肥厚した単純

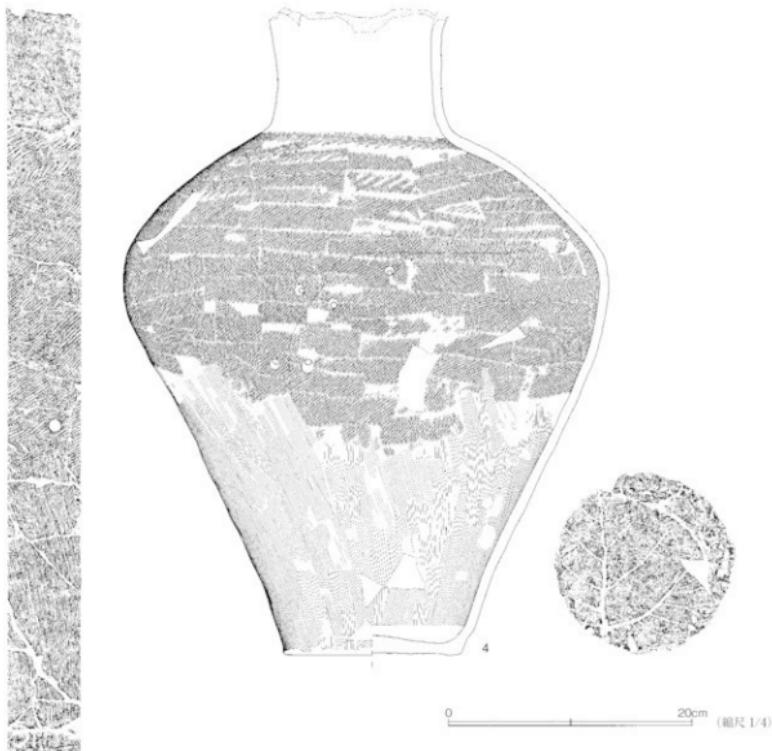


第54図 第5号墓壙(SK 5)出土遺物(3)－土器3－

口縁に見える部分がある。頭部は縦位の磨き調整による無文。胴部との境界付近は横位に撫でられている。胴部には条痕文が施される。条痕文は、7本が同時に施され、縦位から斜位である。底部付近は縦位に撫でて調整されている。底部は上げ底となる。底面は木葉痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は良い。色調は、器内外面とも茶褐～赤褐色を呈する。器内外面に炭化物が付着している。帯状に付着する炭化物は、底面と平行するような水平を示さずに傾いており、器外面の傾きに器内面の傾きが対応する。

土器6 壺形土器(第56図)。口縁部を欠損し、頭部から底部までが残存する。破断面も磨滅することから、口

縁部の欠損は後世でなく、欠損後も頭部上端を擬口縁として使用されたことが考えられる。計測値は残存高239mm、擬口縁の口径103mm(残存率50%)、頭径96mm(残存率76%)、胴径204mm(残存率59%)、底径80mm(残存率85%)。頭部は横位の磨き調整による無文。胴部上端が結節文で区画されている。胴部には単節L Rの繩文が横位に施文され、一部に結節文も見られる。底部付近は横位に削り調整されている。底部は平底であり、中央が僅かに肥厚する。底面には剥落があり、沈線状の痕跡が木葉痕の一部とも思われるが、確実ではない。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。また、骨針を多量に含むことに特徴がある。焼成は普通。色調は、器

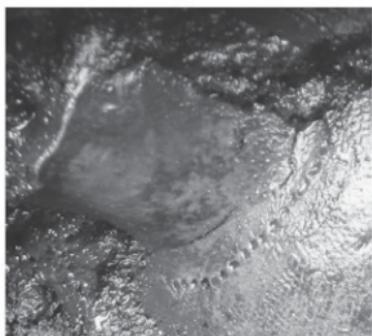


第55図 第5号墓壙(SK5)出土遺物(4)ー土器4ー

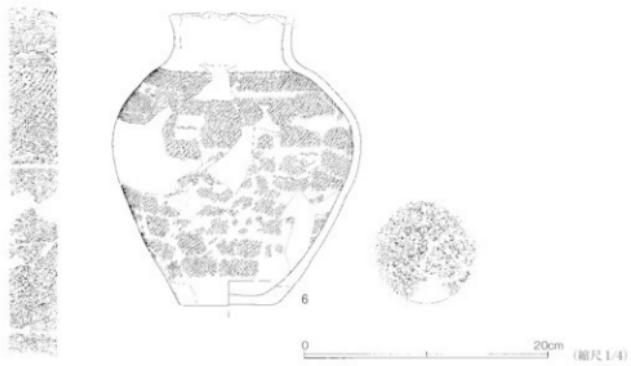
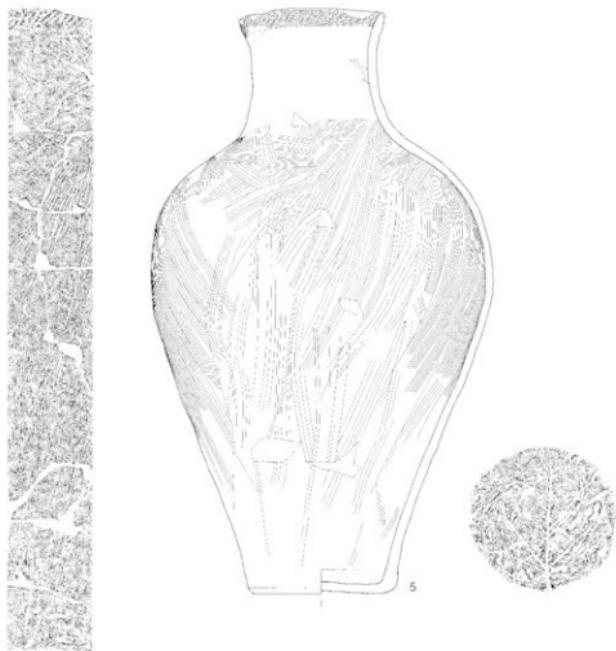
外面が暗褐色、一部淡褐色・黒褐色、器内面が暗褐色を呈する。器外面には炭化物が付着し、器内面には変色が見られる。

土器7 壺形土器。口縁部を欠損し、頸部から底部までが残存する。残存高は30~35cmか。頸部は無文で、胴部には繩文が施されている。繩文は単節LRか。胴部上端が刺文で区画されている。

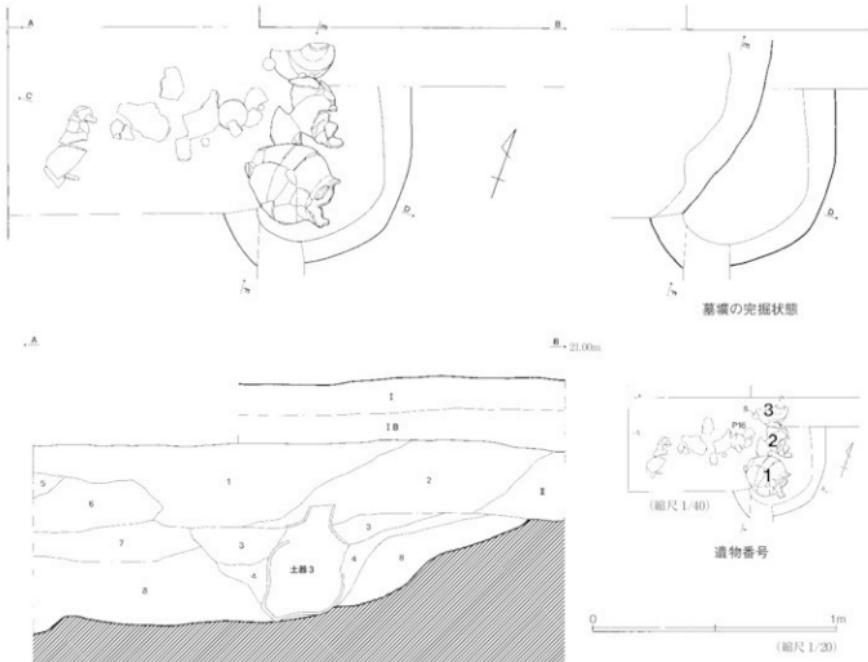
土器8 壺形土器。口縁部から底部までが残存する。器高は30~35cmか。平口縁で複合口縁。口縁部には繩文が施されている。頸部は無文。胴部にも繩文が施されている。繩文は単節LRか。



第5号墓壙(SK5)土器7の一部



第56図 第5号墓塚(SK5)出土遺物(5)-土器5・6-



第6号墓塚・風倒木痕堆積層土

- 第1層：灰黃褐色土層(小礫～砂粒を微量。ローム粒を中量。燒土粒・炭化粒を少量含む 緩まり有り 粘性有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を少量。燒土粒を微量含む 緩まり有り 粘性やや有り)
- 第3層：黒褐色土層(ローム粒・燒土粒を微量含む 緩まり弱い 粘性やや有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒を中量含む 緩まりやや有り 粘性有り)

第5層：暗灰褐色土層(ローム粒を中量含む 緩まりやや有り 粘性かなり有り)

第6層：明黃褐色土層(ローム粒を多量。燒土粒・炭化粒を微量含む 緩まりやや有り 粘性かなり有り)

第7層：褐灰色土層(ローム粒を中量。燒土粒・炭化粒を少量含む 緩まりやや有り 粘性有り)

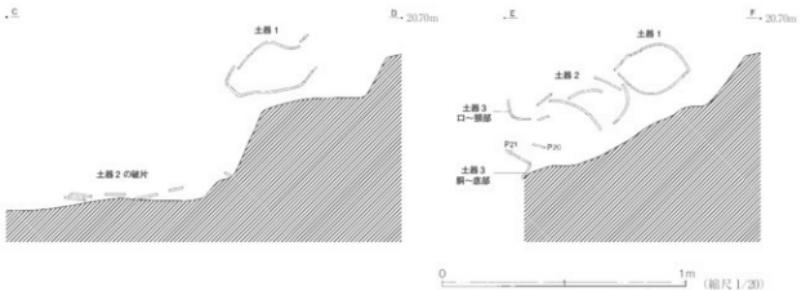
第8層：にふい黃褐色土層(ローム粒を多量。暗褐色土粒を中量含む ローム粒は今市スコリアを主体とする 緩まりやや有り 粘性有り)

第57図 第6号墓塚(SK6)実測図(1)

6 第6号墓塚(SK6)

遺構 第6号墓塚はII区にあり、第2号墓塚の北側に位置する。第2号墓塚の東側拡張区において検出されたことから、この拡張区を北側に延長した。調査区の壁に土器3が掛かる状態で記録を取り、これより北側には土器が埋没しないことをボーリングで確認したが、遺構の全体は調査できなかった。第II層上部で遺構の範囲を捉えようとしたが、西側の輪郭が判然としなかったので、調査区の壁に沿いサブトレーンチを設定して深掘りし

たところ、風倒木痕の重複が確認された。土層断面図の第5・6層が倒木の根により持ち上げられたローム土、第7・8層が流入土と推定される。これにより遺構の西側は破壊を受け、遺構内にあった土器が崩れて穴の中へ落ち込んでいる。風倒木痕の形成は、流入土中に平安時代の土師器の破片が含まれていたことから、平安時代以降と考えられる。残存する遺構の規模は、検出部分で長軸0.74m・短軸0.65mを測り、長軸1.2m・短軸0.8m前後で梢円形の平面形態が推定される。本来の底面は、第II



第58図 第6号墓壙(SK6)実測図(2)

層の下部にあり、ほぼ平坦に形成されている。壁の高さは、最も残りの良い部分で18cmを測る。壁の立ち上がりは、60°前後の角度である。覆土は、黒褐色土の單一層であり、土層断面図では第3層として出現している。これは特徴が第1号墓壙に共通する。なお、風倒木痕についても、全体を調査したわけではなく、流れ込んだ土器の破片の回収を目的として、幅0.8mのトレンチの観察に限定される。

土器の出土状況 第6号墓壙には3個体の土器が伴う(第57・58図)。3個体が近接してあったことは確実であろう。本来の状態に最も近いのは土器1であり、横位に据えられた状態が推定され、土器2・3も同様であったことを考えて不都合な現象は認められない。遺構の北側に空白部が無いことは確認できていないが、土器群の範囲は、検出された遺構部分の全體に及ぶ。

土器1の主軸はN-110°-Eの東方向である。土器2・3についても、大まかに東を向くと推定されることから、3個体の主軸は方向がほぼ一致していたと考えられる。

土器1は、潰れて胴部がやや扁平になった状態で検出されており、土器内には土壤が充満していた。土器2の底～胴下部は破片が散在して検出されたが、胴上～口縁部は土器1とほぼ同様の状態で検出された。このことから、風倒木痕が形成される時点で既に、土器2も土器内に土壤が充満し潰れて胴部がやや扁平の状態にあったことが推定される。風倒木痕に流れ込んでいるのは、ほとんど全てが土器2の破片であり、別個体の破片を再利用した底部(P16)のみ出土位置を示した(第57図)。土器3は、胴上部で上下の2つに分断されてはいても、それ

それが潰れずに残存する。胴上部の破断面には磨滅が認められないことから、風倒木痕の形成に伴い分断されたことが推定される。分断された土器の上下は20cmほど離れ、その隙間に堆積した土層の中から、土器2の胴部破片(P20・21)が検出されている(第58図)。

土器内土壤は全て採取し、水洗選別を実施したところ、土器1内の土壤から、副葬品と考えられる玉類を検出した。その他の土器には、人骨と推定される骨片及び副葬品と考えられる遺物は検出されなかった。

遺物 ここに報告する第6号墓壙の遺物は3個体の土器と、土器1に伴う玉類である。

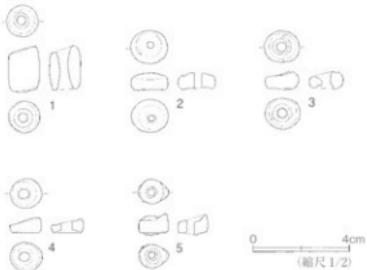
土器1 壺形土器(第59図)。口縁部から底部まで残存する。口頭部の一部を欠損するのは、第1B層を形成した整地・耕作に伴うものと推定され、底部の一部を欠損するのは風倒木痕に流れ込んだ破片が回収できていないことによると考えられる。計測値は器高391mm、口径172mm(残存率38%)、頸径152mm(残存率75%)、胴径270mm(残存率100%)、底径103mm(残存率63%)。平口縁で複合口縁。口縁部は無文であり、指頭で調整された圧痕が残る。頭部から胴部には条痕が施される。条痕は6本が同時に施されしており、間隔をあけて縦位に施されている。底部は平底であり、底面は木葉底。胎土に金雲母は認められず、焼成は良い。色調は、器外表面が褐～黒褐色、器内面が暗褐～黒褐色を呈する。器外表面の一部に炭化物が付着している。

土器2 壺形土器(第61図)。口縁部を欠損し、頭部から底部まで残存する。頭部上端の破断面には磨滅が認められることから、口縁部が欠損した後も、頭部に擬口縁を作出して使用されたと考えられる。また、底部は完全



第59図 第6号墓塚(SK 6)出土遺物(1)-土器1-

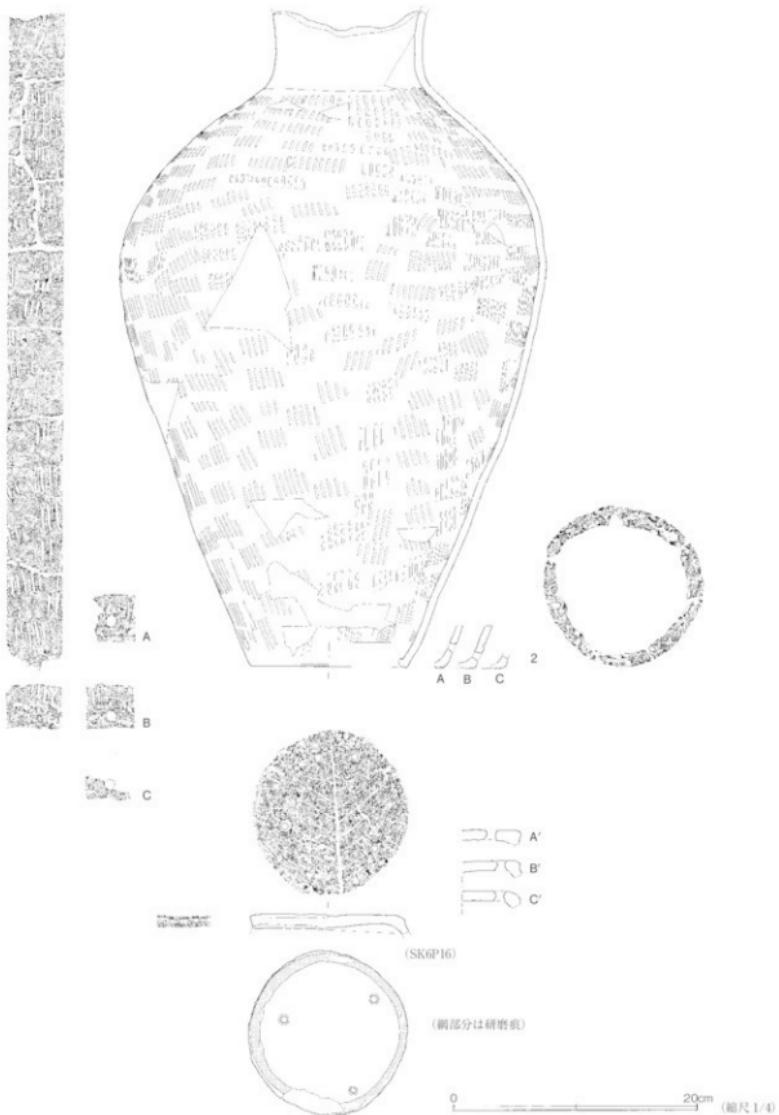
に抜けた状態で欠損し、ここを塞ぐために別個体の底部破片(P16)が利用されている。底部付近の穿孔と底部破片の穿孔は、2孔一対で組み合う補修孔であり、底部破片を結縛して使用されている。補修孔は3対があり、全てが対称に並ぶ位置を求めるとして、底部破片は底面を上にして、つまり底面どうしを合せるようにして結縛されていたと考えられる。土器2の底部付近の穿孔A・B・Cに、底部破片の穿孔A'・B'・C'がそれぞれ対応する。他の2孔より高い位置にある穿孔Aが、他の2孔より中心寄りにある穿孔A'を組み合うことになる。底部破片の破断面は、研磨の痕跡が明瞭であり、これは新たな底部を安定させるための加工と考えられる。孔は、穿孔A・B・Cが外側から、穿孔A'・B'・C'は内側から穿たれている。土器2のみでの計測値は残存高536mm、瓶口縁の口径126mm(残存率51%)、頭径120mm(残存率38%)、胴径350mm(残存率93%)、底径129mm(残存率100%)。頭部は撫で調整による無文。胴部との境界に僅かに稜を形成する部分もある。胴部は継ぎ短条痕文。条痕文は、8本ほどが同時に施文される。胴部の上・中央・下部に分けて施文されており、いずれも縦列を施文した後に列間が充填される。



第60図 第6号墓塚(SK 6)土器1内遺物

施文方向は、上から下が主であるが、下から上の箇所もある。底面の敷物の痕跡は不明。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通～良い。色調は、器外表面が淡褐色・灰褐色、器内表面が白みを帯びた淡褐～淡灰褐色を呈する。器内外面の一部に僅かな炭化物の付着、器内面にはクレーター状の剥落が見られる。

土器2に付属する底部破片(P16)は残存高15mm、底径128mm(残存率100%)。平底であり、底面には木葉痕が残る。胎土に金雲母は認められず、骨針が目立つ。焼成は普通。色調は、器外表面が淡暗褐色、器内面が黒色を呈す



第61図 第6号墓壙(SK 6)出土遺物(2)－土器2－



第62図 第6号墓塚(SK6)出土遺物(3)ー土器3ー

る。

土器3 壺形土器(第62図)。口縁部から底部まで残存するが、口頭部は大部分が欠損している。欠損は、風倒木痕に流れ込んだ破片が回収できていないことによると考えられる。口縁部の上端に観察される剥離痕については、後世のものではない。計測値は器高440mm、口径151mm(残存率9%)、頭径108(残存率100%)、胴径334mm(残存率100%)、底径112mm(残存率100%)。平口縁の複合口縁。口唇部及び口縁部には単節LRの繩文が施されている。

る。頭部は縦位の磨き調整による無文。胴部には、帯状の繩文で渦状文が構成されている。繩文は単節LR。渦状文は、渦巻きの方向が異なる2つが上部で連結する。この連結渦状文が2単位であり、単独の渦状文が加わる。帯状の繩文は、沈線で区画されることなく、無文部が撫で~磨き調整されて輪郭が決定されている。方向を変えながら繩文が施文されていることから、下書きに従う充填繩文とも想定されるが、下書き沈線の痕跡は観察できない。胴下部は、横位もしくは右下がりの斜位に繩文

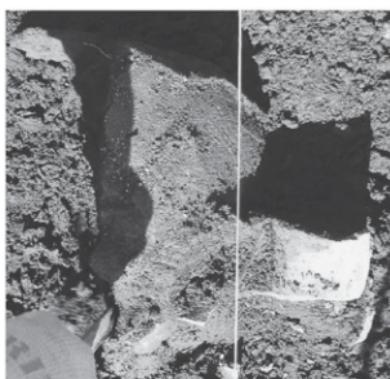
が施文される。施文は渦状文に伴う無文帯の付近に限られ、疎らな部分もあり、以下は磨き調整されている。底部は上げ底となる。底面は木葉痕であり、2葉分の痕跡が残されているのは、土器を据え直したことによる。器内面の胴上部には成形の積上痕が残る。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、器外側が褐～赤褐色、器内側が褐色を呈する。器内外面に炭化物が付着している。

石製品 土器1内部の土壤から水洗選別により検出された玉類(第60図)。1点(1)は管玉、4点(2～5)は白玉に近い形態である。1は直径13mmの円形で長さ19mm、孔径4mm、重量4.7g。2は長軸15mm・短軸13mmの楕円形で長さ7mm、孔径3mm、重量2.1g。3は長軸14mm・短軸13mmの楕円形で長さ7mm、孔が長軸5mm・短軸4mmの楕円形、重量1.7g。4は長軸13mm・短軸12mmの楕円形で長さ6mm、孔が長軸5mm・短軸4mmの楕円形、重量1.2g。5は長軸12mm・短軸10mmの楕円形で長さ9mm、孔径3mm、重量1.4g。石材は緑色を帯びた滑石。表面が研磨されて光沢を有する。2～5には、穿孔具を回転させた痕跡が孔の周間に残されている。焼痕は認められない。

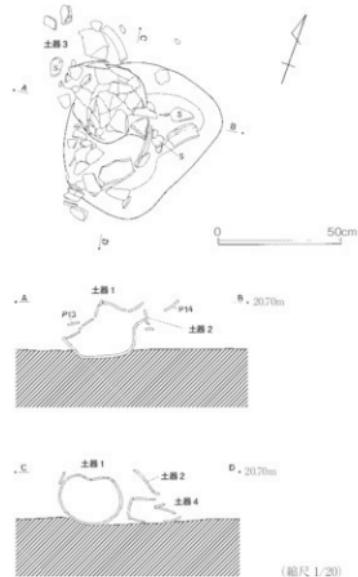
7 第1号遺構(SX1)

遺構 第1号遺構はI区にあり、第4号墓域の東側拡張区で検出された。完形に近い状態の壺形土器が横位の状態で出土し、その周囲に土器の破片が集中していたが、遺構の範囲を明確に捉えることはできなかった。土器の下位がやや埋むように掘り上げられ、第II層上部に遺構の底面が位置する。本来は第II層中に掘り込まれた遺構であったが、第I B層の形成により、壁が削平されたと考えられる。したがって、遺構の規模及び形態は明らかでない。土器を覆っていた土壌は、黒褐色土である。

土器の出土状況 第1号遺構に伴うと判断したのは4個体の土器である(第63図)。土器1は横位の状態で検出された壺形土器であり、主軸はN-100°-Eで東に向く。出土状況の平面図には表現されていないが、土器1の南側に隣接して土器4が検出された。土器4も壺形土器であり、胴上部から口縁部までの一部のみが本来の位置に遺されていた。土器1と同じく横位の状態で、主軸



第1号遺構(SX1)土器4の出土状況



第63図 第1号遺構(SX1)実測図

は東を向いている(出土状況の写真を縦断する水糸は、C-Dエレベーションの基準線であり、上方が略北のC方向に相当する)。土器4を覆うような状態で口縁の大破片を検出した壺形土器が土器2である。口縁部から胴



第64図 第1号遺構(SX1)出土遺物(1)-土器1-

部までの破片が、周間に散在する。また、土器1の北側に隣接して口縁部の大破片が検出された壺形土器を土器3とした。口縁部から底部までの破片が、周間に散在する。土器2・3については、土器が掘えられていた状態を捉えることができなかった。但し、その垂直位置から、正位あるいは逆位といった立位は考え難い。整理作業における同一個体の識別と接合の結果、土器2・4には、広い範囲に破片が分布することが明らかになっていく。土器2は、第4号墓壙として7点、第5号墓壙として2点、第1号墓壙として1点の破片が取り上げられていた。土器3・4はともに、第4号墓壙として4点の破片が取り上げられていた。これらは、別の遺構の平面位置から出土していても、それぞれの墓壙の埋没に関与するものではなく、第1B層の形成に伴い第1号遺構に掘えられていた土器の一部が移動したものと推定される。

土器1内の土壤については、水洗選別を実施したが、人骨と推定される骨片及び副葬品と考えられる遺物は検出されなかった。

土器1 壺形土器(第64図)。口唇部を欠損し、口縁部から底部までが残存する。口唇部の欠損は、破断面に磨滅が見られることから、後世のものでなく、欠損後に擬口縁が形成されたと考えられる。口頭部の大部分と底部

の一部が欠損するのは、第1B層を形成した整地・耕作に伴うものと推定される。計測値は残存高377mm、擬口縁の口径122mm(残存率18%)、頸径99mm(残存率35%)、胴径255mm(残存率100%)、底径120mm(残存率77%)。成形の歪みにより全体が傾く。歪みは底部に起因し、器内面には底部と胴部を繋ぐ調整が欠落して接合痕がそのまま残された部分も見られる。底部の上げ底は、この歪みによるものと考えられる。口縁部は、器内面に突出した複合口縁が推定される。口縁部は撫で調整、頸部は磨き調整によりそれぞれ無文。胴部には繩文が施される。繩文は単節LRで、概ね横位に施文されている。底面は布目痕。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通~良い。色調は、器外表面が淡褐色・褐色、器内面が褐色を呈する。器外表面の一部に僅かな炭化物が付着する。器内面には、炭化物の付着や変色は見られない。

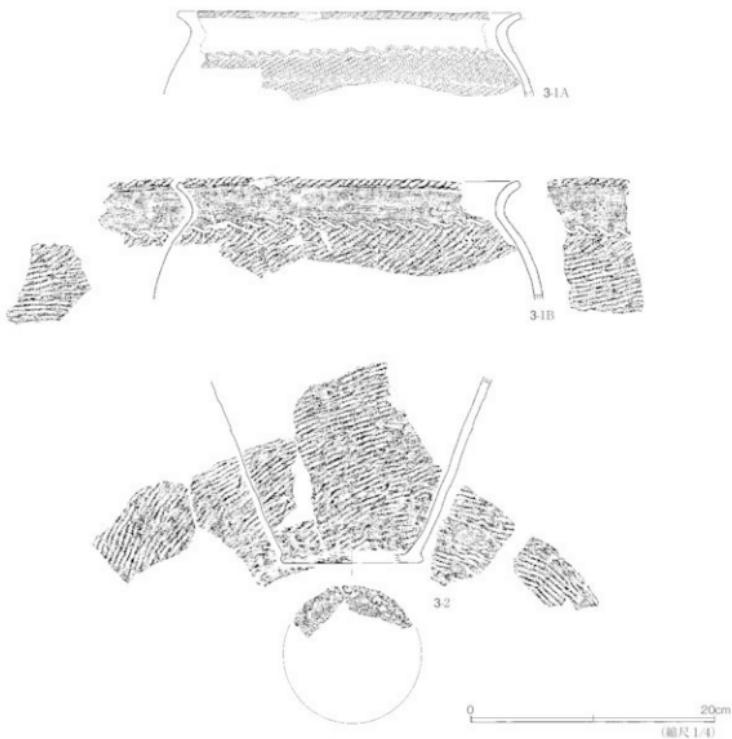
土器2 壺形土器(第65図)。破片が遊離した状態で検出され、同一個体の識別による破片の回収と接合により、口縁部から胴上部まで、胴中央部、胴下部がそれぞれ部分的に復元された。底部は回収されていない。これらの破片と欠損は、第1B層を形成した整地・耕作に伴うものと推定される。各部位の直径は、口径400mm(残存



第65図 第1号遺構(SX 1)出土遺物(2)-土器2-

率46%)、頸径384mm(残存率46%)、胴径398mm(残存率48%)。口縁は屈曲して外反する。口唇部には、胴部と同じ原体で縄文が施されている。口部は横位の撫で調整による無文。口縁部を成形した積上痕が残されていて、複合口縁のように見える。胴部上端は結節文で区画され、胴部には縄文が施されている。縄文は、付加条第一種L R + Rであり、軸縄のL Rは直前段3条と観察された。

胴上部から中央部にかけては横位に、胴下部は斜位に施文されており、一部に結節文も見られる。胴上部の縄文上に沈線文が施文されており、これは線描による文様と考えられる。線描文の全体は欠損により明らかでない。上方に渦状文が位置している。胎土に金雲母と骨針を多量に含むことに特徴があり、赤色粒子と泥岩片も含む。焼成は良い。色調は、器内外面とも淡褐～褐色を呈する。



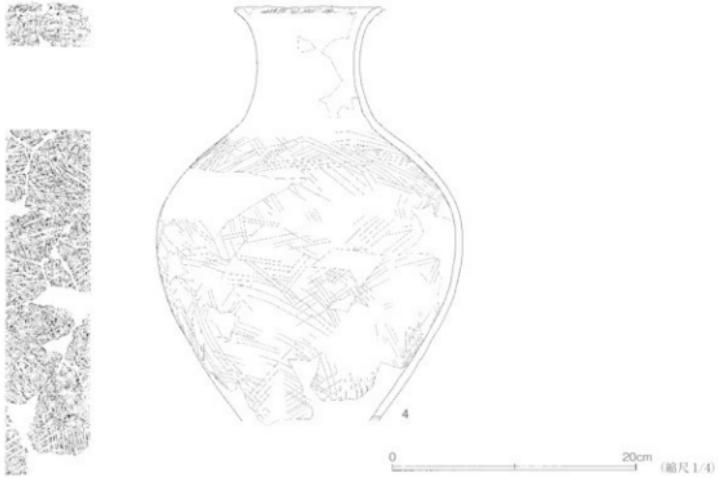
第66図 第1号遺構(SX1)出土遺物(3)－土器3－

胴中央部(第65図2-2)の器外面には炭化物の付着、胴下部(第65図2-3)の器内面には変色が認められる。

土器3 壺形土器(第66図)。破片が遊離した状態で検出され、同一個体の識別による破片の回収と接合により、口縁部から胴上部まで、胴下部から底部までがそれぞれ部分的に復元された。これらの破碎と欠損は、第I B層を形成した整地・耕作に伴うものと推定される。各部位の直径は、口径280mm(残存率39%)、頸260mm(残存率40%)、底径116mm(残存率36%)。口縁は屈曲して外反する。口唇部には、胴部と同じ原体で縄文が施されている。口頭部は横位の撫で調整による無文。胴部上端は結節文で区画され、胴部には単節L Rの縄文が施されている。施文は、胴上部が横位、胴下部が斜位であり、底部直上まで及ぶ。底面は布目痕。器内面は磨き調整されている。胎土に金雲母と骨針を多量に含むことに特徴があり、泥

岩片も含む。焼成はかなり良い。色調は、器外面が淡褐色～淡暗褐色、器内面が淡褐色を呈する。胴中央部の器外面には炭化物の付着、胴下部(第66図3-2)の器内面には炭化物の付着と変色が見られる。

土器4 壺形土器(第67図)。特に胴部の破片が遊離した状態で検出され、同一個体の識別による破片の回収と接合により、口縁部から胴下部までが復元された。底部は回収されていない。最も残存率の高い頸部でも3分の2周ほどであり、口縁部から胴下部も大部分を欠損する。これらの破碎と欠損は、第I B層を形成した整地・耕作に伴うものと推定される。細かく破碎されていて、接合に至らない破片も多く残された。計測値は残存高337mm、口径122mm(残存率36%)、頸径85mm(残存率67%)、胴径251mm(残存率51%)。平口縁で單純口縁。口唇部直下には、口唇部施文に相当する幅で縄文が施され



第67図 第1号遺構(SX 1)出土遺物(4)ー土器4ー

た部分がある。縄文は、単節LRか付加条第一種LR+Rか判然としない。頭部は磨き調整による無文。胴部は、撫で調整の後に、条痕文が施される。条痕文は、4本ほどが同時に施され、右下がりと左下がりの斜位である。格子状を構成する部分もあるが、全体的に雑然としている。器内面は、口頭部が磨き～撫で調整、胴部が撫で調整されている。胎土に金雲母は認められないが、骨針が目立ち、赤色粒子と泥岩片も含む。焼成は良い。色調は、器外面が灰褐色～灰色、暗灰色。器内面が淡暗褐色、灰褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着する。器内面には、炭化物の付着や変色は見られない。

8 第2号遺構(SX 2)

第2号遺構はII区にあり、第2号墓壙の東側拡張区東壁に掛かって、地表下15～30cmの垂直位置に土器が露出した(第8図)。露出した部分の土器片を取り上げたが、同一個体の破片は調査区外へと続いている。露出した部位と状態からは横位で、主軸が東を向くと推測される。回収されたのは壺形土器の胴下部から底部である(第68図1)。部分的な計測値は残存高245mm、底径114mm(残存率38%)。胴下部には条痕文が施される。条痕文は、4本ほどが同時に施され、縦位である。器面は撫で調整されているが、成形の積上痕が残る。底部は成形の歪みに

よりやや上げ底となる。底面は、削り調整されており、これは歪みの補整のためと推定される。僅かに木葉痕らしい一部が見られる。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は良い。色調は、器外面が暗褐色、器内面が灰褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着し、重ね状の痕跡もある。器内面には、ごく僅かに炭化物が付着している。

9 第3号遺構(SX 3)

第3号遺構はI区にあり、第3号墓壙東側拡張区の南東隅付近の壁に掛かって土器が露出した(第8図)。その垂直位置は、第3号墓壙の確認面である。露出した部分の土器片を取り上げたが、同一個体の破片は調査区外へと続いている。回収されたのは壺形土器の頭部から胴下部である(第68図2)。部分的な計測値は残存高236mm、胴径312mm(残存率28%)。頭部は撫で調整による無文。胴部には単節LRの縄文が施されている。施文は、胴上部が横位、胴下部が斜位である。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は普通。色調は、器外面が茶褐色・赤褐色・暗褐色、器内面が褐～赤褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は見られない。



第68図 第2・3号遺構(SX2・3)出土遺物

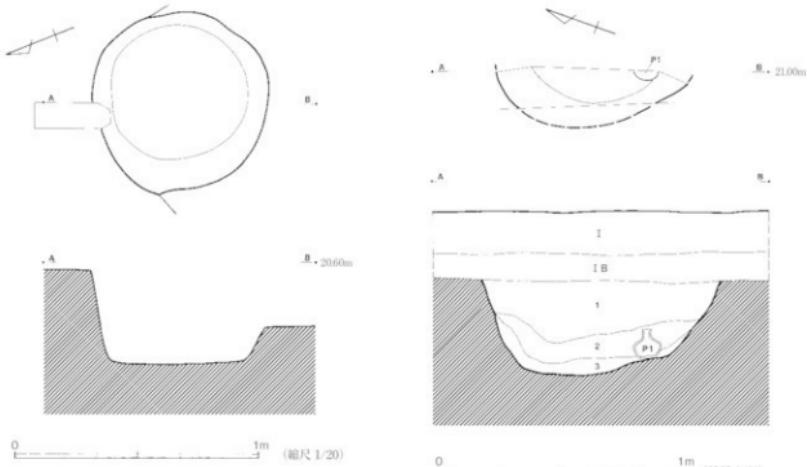
10 第7号土壙(SK7)

第7号土壙はII区にあり、第2号墓壙の北東部に重複する。第2号墓壙の構築により、ほとんどが削平されてしまつた。覆土は底面付近が残る状態であった。遺構の規模は長軸72cmで、これを直径とした円形の平面形態である。底面は直径58~56cmの円形を呈する(第69図)。底面は、第III層中にあり、ほぼ平坦に形成されている。壁の高さは、最も残りの良い部分で38cmを測る。遺構の壁の立ち上がりは、80°ほどの角度である。覆土にはロームブロックが含まれている。遺構に伴うと考えられる遺物

は検出されなかつた。

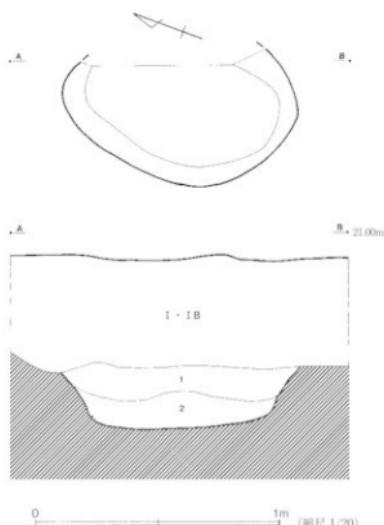
11 第8号土壙(SK8)

第8号土壙はII区の北端付近にあり、一部が第1トレンチの東壁に掛かって検出された。この付近は第I B層が厚く、これを形成した整地・耕作による搅乱が深くに及んでいる。遺構の規模は、検出部分で長軸98cm・短軸66cmを測り、長軸100cm・短軸80cmほどの楕円形の平面形態が推定される(第70図)。底面は長軸80cm・短軸50cmほどの楕円形になるらしい。底面は、第III層中にあり、



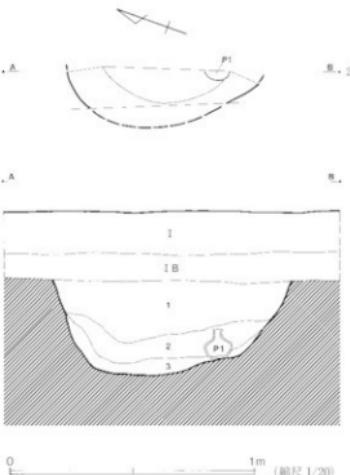
第7号土壤堆積覆土 暗褐色土層(ロームブロック・ローム粒を含む)

第69図 第7号土壤(SK7)実測図



第1層：黒褐色土層(ローム粒・赤色粒・白色粒を微量含む 締まり有り 黏性有り)
第2層：黒褐色土層(ロームブロックを少量、ローム粒を中量、赤色粒・白色粒を微量含む 締まり有り 黏性有り)

第70図 第8号土壤(SK8)実測図



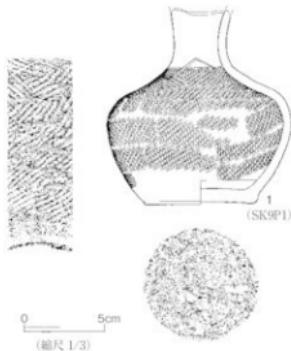
第9号土壤堆積覆土

第1層：黒褐色土層(ローム粒を微量、燒土粒・炭化粒を極微量含む 締まり有り 黏性有り)

第2層：暗褐色土層(ロームブロック・ローム粒を少量、燒土粒・炭化粒を中量含む 締まりやや有り 黏性有り)

第3層：にぶい黃褐色土層(ロームブロック・ローム粒を中量含む 締まりやや有り 黏性や有り)

第71図 第9号土壤(SK9)実測図



第72図 第9号土壤(SK9)出土遺物

ほぼ平坦に形成されている。壁の高さは、最も残りの良い部分で22cmを測る。遺構の壁の立ち上がりは、60°ほどの角度である。覆土の第2層にはロームブロックが含まれている。遺構に伴うと考えられる遺物は検出されなかった。

12 第9号土壙(SK9)

第9号土壙はII区の中央部にあり、第1号住居跡が近接する。第1号住居跡の調査のために設定したサブトレーンチにより、西側の壁が破壊されている。第1トレーンチの東壁で堆積土層を観察しており、遺構の半分以上は調査区外のため未調査である。遺構の規模は、検出部分で長軸79cm、短軸は18cmとなる(第71図)。土層断面の第II層上面では長軸が97cmを測り、第8号土壙に近い規模と形態が想定される。底面は、第III層中にあり、やや斜めに形成されている。壁の高さは、土層断面において38cmを測る。遺構の壁の立ち上がりは、60~70°の角度である。覆土の第2・3層にはロームブロックが含まれている。

遺構の底面からは土器が正位の状態で検出された。小型の壺形土器であり、口縁部を欠損し、頸部から底部までが残存する(第72図)。口縁部の欠損は、頸部上端の破壊面に磨滅が見られることから、後世のものではなく、欠損後に擬口縁が形成されたと考えられる。この残存状態では亀裂もなく完形である。計測値は残存高122mm、擬口縁の口径37mm(残存率100%)、頸径32mm(残存率100%)、頸径15mm(残存率100%)、底径70mm(残存率100%)。頸部は撫で調整による無文。頸部には単節L.Rの縞文が施される。施文は、横位から緩やかな斜位である。頸部と頸部の境界をまたいで、線描による文様が加えられており、線描文の形象は「へ」の字状を呈する。底部付近は撫で調整。底部はやや上げ底となる。底面は削り調整されており、敷物の痕跡は残されていない。胎土に金雲母は認められず、泥岩片を含む。焼成はやや不良。色調は、器外表面が黄白~淡褐色・灰色、器内面が灰色を呈する。器外内面に炭化物の付着や変色は見られない。

第1表 遺構出土土器計測表

| 遺構 | 土器 | 神高 | 口徑 | 残存高 | 頸径 | 底径 | 胸径 | 残存率 | 重量 | 残存量 |
|-------|-----------|-------|------|-----|-----|------|------|------|-----|-----|
| SK1 | 1 第11-15層 | 72.0 | 18.0 | 120 | 100 | 38.0 | 100 | 100% | 125 | 100 |
| | 2 第16-18層 | — | — | 115 | 100 | 96 | 100 | 95% | — | 95 |
| | 3 第17-18層 | 33.0 | 10.2 | 88 | 90 | 100 | 25.0 | 100% | 90 | 100 |
| | 4 第17-18層 | — | — | 107 | 90 | 94 | 100 | 100% | 86 | 100 |
| SK2 | 1 第3-8層 | 47.0 | — | — | — | — | — | — | 329 | 80 |
| | 2 第21-8 | 43.3 | 11.7 | 65 | 109 | 100 | 32.7 | 97 | 112 | 95 |
| | 3 第22-6 | 49.6 | 129 | 92 | 119 | 100 | 34.8 | 82 | 106 | 100 |
| | 4 第23-6 | 45.4 | 111 | 73 | 81 | 100 | 28.1 | 99 | 105 | 100 |
| | 5 第24-6 | 52.9 | 126 | 48 | 109 | 100 | 33.5 | 62 | 116 | 80 |
| | 6 第25-6 | 41.6 | 138 | 55 | 106 | 61 | 32.2 | 47 | — | — |
| | 7 第26-6 | 51.8 | 158 | 73 | 68 | 58 | 100 | 40.2 | 76 | — |
| | 8 第27-6 | 44.0 | 149 | 50 | 104 | 100 | 32.4 | 60 | 110 | 81 |
| | 9 第28-6 | 44.2 | 146 | 41 | 106 | 100 | 32.3 | 59 | 104 | 100 |
| | 10 第29-6 | 55.0 | 150 | 51 | 136 | 88 | 40.9 | 79 | 102 | 100 |
| | 11 第30-6 | 52.5 | 152 | 53 | 138 | 88 | 36.8 | 55 | 101 | 100 |
| | 12 第30-6 | 41.2 | 127 | 100 | 98 | 100 | 29.0 | 100 | 99 | 100 |
| | 13 第31-6 | 52.9 | 172 | 57 | 134 | 100 | 34.3 | 97 | 110 | 91 |
| | 14 第33-6 | 39.1 | 122 | 19 | 86 | 28 | 32.6 | 32 | 110 | 74 |
| | 15 第34-6 | — | 176 | 40 | 138 | 28 | — | — | — | — |
| SK3 | 1 第37-6 | 33.0 | 130 | 100 | 103 | 100 | 22.7 | 100 | 80 | 100 |
| | 2 第37-6 | 56.8 | 115 | 47 | 106 | 78 | 31.7 | 77 | — | — |
| | 3 第38-6 | 70.0 | 176 | 87 | 141 | 100 | 45.4 | 38 | — | — |
| | 4 第38-6 | — | 136 | 143 | 68 | 101 | 95 | 20 | 86 | 100 |
| | 5 第39-6 | 51.6 | 125 | 36 | 110 | 62 | 45.7 | 68 | — | — |
| | 6 第39-6 | 45.6 | 120 | 36 | 110 | 62 | 45.7 | 68 | 96 | 35 |
| | 7 第40-6 | 59.8 | — | — | — | — | — | — | 90 | 95 |
| | 8 第41-6 | 41.7 | 147 | 85 | 94 | 100 | 33.6 | 99 | 98 | 100 |
| SK4 | 1 第43-6 | 7.35 | 190 | 77 | 147 | 79 | 49.3 | 82 | 170 | 97 |
| | 2 第44-6 | — | — | — | — | — | — | — | 242 | 86 |
| | 3 第45-6 | — | — | — | — | — | — | — | 87 | 100 |
| | 4 第46-6 | 60.9 | 187 | 78 | 177 | 86 | 40.2 | 38 | 115 | 74 |
| | 5 第47-6 | 58.2 | 160 | 30 | 123 | 82 | 35.0 | 73 | 120 | 89 |
| | 6 第48-6 | 53.7 | 127 | 22 | 112 | 100 | 28.8 | 82 | 101 | 90 |
| | 7 第49-6 | 52.0 | 97 | 55 | 104 | 100 | 28.8 | 82 | 101 | 100 |
| | 8 第50-6 | 22.1 | 25 | — | 61 | 83 | 18.8 | 100 | 94 | 100 |
| SK5 | 1 第52-6 | 55.6 | 189 | 26 | 131 | 100 | 29.7 | 100 | 128 | 100 |
| | 2 第53-6 | 39.5 | 130 | 19 | 97 | 17 | 26.8 | 36 | 110 | 100 |
| | 3 第54-6 | 53.3 | 160 | 19 | 134 | 21 | 40.5 | 87 | 106 | 100 |
| | 4 第55-6 | 52.9 | 145 | 81 | 134 | 86 | 39.9 | 63 | 146 | 100 |
| | 5 第56-6 | 47.9 | 117 | 53 | 103 | 100 | 28.1 | 100 | 120 | 100 |
| | 6 第56-6 | 52.9 | 103 | 50 | 96 | 79 | 20.4 | 59 | 80 | 85 |
| SK6 | 1 第59-6 | 39.1 | 172 | 38 | 152 | 73 | 27.0 | 100 | 103 | 63 |
| | 2 第60-6 | 53.6 | 126 | 51 | 120 | 38 | 35.0 | 93 | 129 | 100 |
| | 3 第61-6 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| SK7 | 1 第64-6 | 14.0 | 151 | 9 | 106 | 100 | 33.0 | 100 | 112 | 100 |
| | 2 第65-6 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | 3 第66-6 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | 4 第67-6 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| SK7-3 | 1 第68-6 | 29.5 | 122 | 36 | 85 | 67 | 25.1 | 51 | — | — |
| | 2 第69-6 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| SK9 | P1 | 第72-6 | — | — | — | — | — | — | — | — |

*測定値の単位は「mm」

*最高の*1付は残存高

*1付の*1付は残存率

IV 調査区出土の土器

泉坂下遺跡の発掘調査においては、前章に記載した以外にも土器が検出されている。遺構外の土器には、個々に出土位置を記録して取り上げたものがあり、その遺物番号には「P」を付して「P84」までを数えた。また、遺構内から出土した土器の破片にも、遺構ごとに「P」番号を付したものがある。さらに、出土位置を便宜的に区分し層位でも分別して、他の遺物とともに一括で取り上げた土器がある。この遺物番号には「No」を付しており、遺構の覆土も含めて「No138」までを数えた。再葬墓の土器と一緒に、あるいは土器の内部から検出されていても、覆土の堆積に伴い流入したと考えられたものについては、本章に記載している。

調査が目的とした縄文・弥生時代の土器の他にも、古墳時代前期のS字状口縁台付壺の口縁部、高环の破片がそれぞれ1点、第1号住居跡が形成された平安時代の土師器、須恵器の破片が少量、表土及び搅乱中には現代までの陶磁器や瓦の破片も散見されたが、これらは報告の対象から除外した。前章で記載した土器の他に、調査で検出された縄文・弥生時代の土器は、破片の総点数が8,465点である。ちなみに、その総重量は49,340.3gであった。

記載した土器のうち法量を復元した土器の部位直径と残存率については計測表(第3表)を、個々の土器の出土位置、胎土(特に金雲母の含有)、施文原体、赤彩、炭化

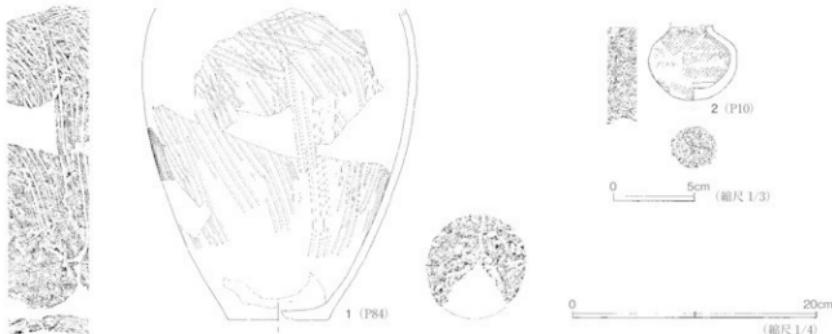
物の付着等については観察表(第4表)を参照されたい。

1 P84・P10について

出土位置や残存状態などから、遺構との関連を考慮すべき弥生時代中期の土器を報告し、前章を補っておきたい。

P84 表土・耕作土層の直下から検出され、第3号墓壇の土器群と近接していたことから、当初は「第3号墓壇土器8」という遺物番号を与えていた。第3号墓壇の輪郭と墓壇内への土器の埋設状態が捉えられると、これが第3号墓壇に埋設された土器群とは区別されるものであることが明らかになった。P84が出土したのは、第3号墓壇から南方向に16cmの位置である(第35図)。一方、第3号墓壇では、底面に埋設された土器1~6と、覆土の上方から検出された土器7という2つの土器群があり、土器7の出土した垂直位置がP84に近いという状況も認められた。この土器7については、墓壇に伴うとしても底面の土器群とは性格を異にし、別遺構の重複という可能性もある。P84には、第3号墓壇の土器7と同じように、独立した遺構の可能性が考えられるとともに、第3号墓壇との関係も否定しきれないのである。

P84は、壺形土器と推定される(第73図1)。口縁~胴上部を欠損し、胴中央部から底部までが残存する。胴部は器内面を上に向けた破片ばかりが検出されており、横倒しの状態にあった土器の上部が、第IB層を形成した



第73図 調査区の土器1(出土位置は第12図及び第35図を参照)

整地・耕作により失われたものと推定される。計測値は残存高254mm、胴径226mm(残存率21%)、底径81mm(残存率78%)。胴部には条痕文が施されている。条痕文は、4本が同時に施され、縦位から斜位である。底部付近は、横位に削り調整されている。底部は平底である。底面は調整されており、木葉痕があつたらしい痕跡も見られるが、確実ではない。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子を含む。焼成は良い。色調は、器外面が暗褐色、器内面が淡褐色を呈する。器外面の一部に炭化物が付着する。器内面には、炭化物の付着や変色は見られない。

P 10 第1号墓塚から南東方向に18cmの位置にあり、表土・耕作土層の直下で検出された(第12図)。第9号土壇に小型の壺形土器が伴う所見からは、現地においてP 10を包含するような小規模な土壇の存否を検討すべきであったが、出土位置の記録だけに止まった。

P 10は、超小型の壺形土器である(第73図2)。口縁部を欠損し、頸部下端から底部までが残存する。計測値は残存高47mm、頸部下端径26mm(残存率100%)、胴径56mm(残存率100%)、底径26mm(残存率100%)。頸部下端は無文である。胴部には無節Lの繩文が施され、頸部付近の一部に結節文が見られる。底部は面取りされているが、凸面を形成して丸底に近い。底面は撫で調整。胎土に金雲母は認められず、赤色粒子と泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、器外面が褐色を呈する。

2 繩文前期の土器

繩文時代前期中葉の植房式が1点のみ検出されている(第76図1)。「櫛文」は、2本同時施文により、コンパス文状の小振りな波状文が施されている。胎土に多量の纖維を含む。類例は、泉原貝塚[鈴木1998]に認める。

3 繩文後期の土器

後期中葉 繩文時代後期中葉の加曾利B式が1点のみ検出されている(第76図2)。5単位の大振りな波状口縁の高台付鉢形土器が推定される。口縁部は内側に大きく肥厚している。類例は、大貫落神貝塚[藤本1980]に認める。

後期後葉 繩文時代後期後葉から、一部は晩期初頭にまで下る可能性のある土器群を一括した(第76図3~14)。但し調査区からは、大洞B式・安行3a式期の三又

文を有する土器は検出されていない。3~7は口縁部上端に繩文帯、8~10は刻目帯が構成された土器である。7の口縁部には、横位の刻みが施された縱長の貼瘤があり、このような貼瘤は、寺脇貝塚[馬田1966]、外塙遺跡[鈴木加山1985]において晩期初頭に位置付けられた土器に見られる。11は台付土器の脚据部、12は、安行系の粗製土器であり、胎土に白雲母を多量に含むことからも茨城県南部の地域から搬入されたことが推定される。口縁部上端には刺突文が施されている。13・14は、茨城県北部から福島県南部の地域に特徴的な粗製土器である。本覚遺跡での分類は、13のように「肥厚した口縁部に、指頭による押圧文が施されたもの」を「B類」、14のように「肥厚した口縁部に、棒状もしくは籠状工具による刺突文が施されたもの」を「C類」として、「B類」は後期後葉、「C類」の一部には晩期のものが含まれる可能性を指摘してある[鈴木2005]。

4 繩文晩期の土器

大洞B C式・安行3 b式期 繩文時代晩期前葉の大洞B C式・安行3 b式期の土器は、少量が抽出された(第76図15・16・19~22)。15・16は、安行3 b式の深鉢形土器。15の波頂部には「鉢巻状貼付文」が付く。16は、縦位の平行沈線間に刺突文が施されており、これは波頂部下に位置する文様と推定される。19~21は、鉢形あるいは浅鉢形土器の口縁部。22は、胴部の屈曲する角度から往口土器と推定される。いずれにも「羊齒状文」と見られる文様の一部が残されている。

大洞C 1式・安行3 c式期 繩文時代晩期中葉の大洞C 1式・安行3 c式期の土器も、少量が抽出された(第76図23~36)。23・24は、壺形土器であり、ともに胴部上端の破片である。25は、器外面に多量の炭化物が付着することからも、煮沸具として使用された鉢形あるいは深鉢形土器の口縁部と推定した。26~28は浅鉢形土器の口縁部。これらには、「二溝間の截痕」が施されている。29も浅鉢形土器の口縁部。口縁部は太い沈線文のみであるが、断面形状が28に共通し、本覚遺跡にも類例を認める。30~32は、口唇部に彫刻的な文様を構成した鉢形あるいは浅鉢形土器の口縁部であり、寺脇貝塚の「P群土器」に類似する。33~35は、鉢形あるいは浅鉢形土器の胴部。小破片ではあるが、浮き彫り状に描出され



第74図 調査区の土器2 繩文式土器(1)



第75図 調査区の土器3 繩文式土器(2)

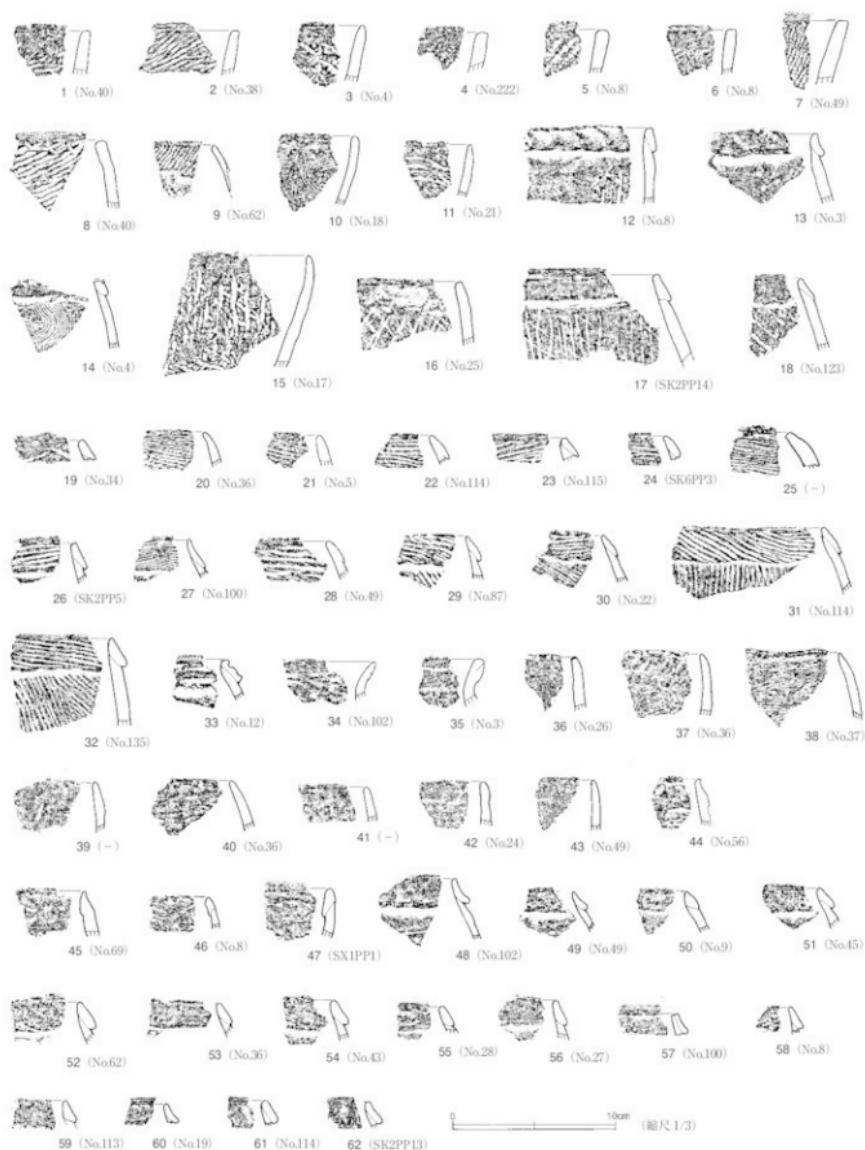


0 10cm (縮尺1/3)

第76図 調査区の土器4 繩文式土器(3)



第77図 調査区の土器5 繩文式土器(4)



第78図 調査区の土器6 繩文式土器(5)

た磨消繩文を抽出した。36は、胴部の屈曲する角度から注口土器と推定される。胴上部に施された彫刻的な文様には、赤彩の痕跡が見られる。

大洞C 2式・前浦式期 繩文時代晚期中葉の大洞C 2式・前浦式期の土器は、比較的多く検出されており、推定により器形の一部が復元できたものもある(第74図1～7・12・13、第75図1、第76図37～47、第77図1～22)。

第74図の1～4は、高台付鉢形土器。1の頸部には「メガネ状の浮帶文」が貼付されている。口縁部及び胴部は横位の繩文帯である。2の胴部には磨消繩文による「雲形文」が構成されている。5は、浅鉢形土器の底部付近、6は壺形土器の胴下部の破片である。7は、「長胴壺形」と呼ばれる壺形土器の胴部。頸部には沈線による彫刻的な入組文が構成されるものであろう。胴部は網目状撚糸文。12は、鉢形土器であろうか。口縁部は無文。13は、「長胴壺形」の胴下部であろう。網目状撚糸文が施されている。第75図1は、超小型の壺形土器。これらのうち第74図1・2・5・7の文様の形象は、大洞C 2式でも後半期に位置付けられるものであろう。

第76図17・18は前浦式であり、17は深鉢形土器、18は「広口壺形土器」とも呼ばれる鉢形土器。これらは、文様の形象から「前浦II式」[鷹野1978]に位置付けられる。

第76図の37～39は、第74図7のような「長胴壺形」の口縁部。頸部には「溝底の刺痕」が施文されている。40は、沈線による彫刻的な入組文の一部。41・42は、胴部が膨らむ壺形土器の胴上部。「溝底の刺痕」により頸部と区画され、沈線による彫刻的な入組文が施されている。43～47も壺形土器の胴部。胴上部には、磨消繩文による「雲形文」が構成され、胴下部は無文である。45の破断面には、補修孔の一部が残る。

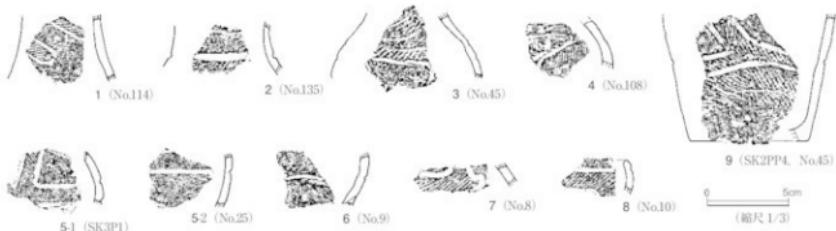
第77図1～3・20は、鉢形あるいは第74図1～4のような高台付鉢形土器。「メガネ状の浮帶文」は、1・2が口縁部、3が頸部に位置する。3は第74図1とほぼ同じ構成であり、「浮帶文」の上にも繩文が施されている。4～19は、鉢形あるいは浅鉢形土器。4～7の口唇部には突起や沈線による加飾が見られる。15の口縁部には、2孔一対の小孔が焼成前に穿たれている。16・17について、寺脇貝塚において「口唇に連続したキザミ目」が施文されて、それが全体との調和の上で、1つの小波状を呈

している様な感じを受ける」と報告された土器に類似を認める。21・22は無文で粗製の鉢形土器。21は口唇部に突起と刺突文が、22は口唇部と肩部に刺突文が施されている。23・24は鉢形土器であろうか。23の口頸部には、横位の沈線文と刺突状に引搔くような短沈線文が交互に施されており、このような構成の類例は寺脇貝塚に見ることができる。24は頸部に横位の2列で刺突文が施されており、刺突文が1列の構成を薄磯貝塚[大竹1988]に見出す。ともに大洞C 2式に位置付けられている。25・26は、壺形あるいは鉢形土器の胴部破片であり、撚糸文が施されている。

大洞A式期 繩文時代晚期後葉の大洞A式期の土器は、少量が検出された(第74図8～11、第77図27～40)。

第74図の8は、鉢形土器の口縁部。頸部には「重層的工字文」が施されている。一人子遺跡[馬日1970]、羽白C遺跡[山内1988]に類例があり、大洞A式に位置付けられている。口唇部突起の器外面下位にも突起が貼付されていたらしいが、剥落している。この裏面に相当する位置では、全周する沈線文が山形を描き、その内部が彫刻されている。9は、壺形土器の口縁部。器外面には隆帯が枠状に貼付され、継位の隆帯が口唇部と連続して双頭の波頂部を形成している。隆帯上には部分的に刺突文が施される。波頂部の器内面は、これも沈線文が山形に彫刻されている。10は、細口壺形土器の口縁部。肥厚した口縁部に太い沈線文が2条で巡る。口唇部には突起の剥落した痕跡がある。類例は、千網谷戸遺跡[蘭田1954]に認める。11も、細口壺形土器と推定される。口唇部には浅い沈線文が施されている。類例は、小場遺跡[沼田1986、斎藤2006]に認める。

第77図の27～33は、鉢形あるいは深鉢形土器。27・28は隆帯の貼付で肥厚した口縁部に、横位の沈線文が施されている。27は下位の沈線文が山形に彫刻され、これが肥厚部を押し上げ突出させて工字文を構成する。類似する特徴の土器は、一人子遺跡及び羽白C遺跡に認める。29は、太い沈線文が波頂部で山形に彫刻されている。類例は、一人子遺跡及びヤツノ上遺跡[小高1993、斎藤2006]に認める。30は、肥厚した口縁部に横位の沈線文が2条で施されている。沈線文は波頂部の下位で途切れ、口縁部が突出する。31・32は、肥厚した口縁部に撚糸文が施されている。器内面の沈線文は、波頂部で三又



第79図 調査区の土器7 弥生式土器(1)

文を構成するが、山形には彫刻されていない。33は、縄文の上に太い沈線文が施されている。口縁部は横位、胴部には「ジグザグの文様」が構成されているものと推定される。その類例は、一人子遺跡に認める。34は、壺形土器の胴部。柄状文は、沈線間を彫刻して文様の形象を浮き立たせ、無文部が磨きにより調整される。志摩城跡[荒井田2006]に類例を認める。35~39は、浅鉢形あるいは鉢形土器。38・39には工字文が施されている。類例は、柳沢遺跡[井上・佐藤1972]等に認められる。40は、大型の蓋形土器。口縁部を形成した積上痕が残り、器内面には段を有する。器内面の調整も粗雑である。大洞A式として報告するが、位置付けは確実でない。一人子遺跡では器外面に縄文が施された大洞A式の蓋形土器が報告されている。

以上の他に、第75図の2は、超小型の浅鉢形土器であり、大洞C1式もしくはC2式に位置付けられるものであろう。3・4は超小型の壺形土器。粗製であることから、時期を特定することは難しい。4の器内面には、0.5mm以上の厚さで暗褐色の物質が付着している。肉眼では漆のようにも見えるが、分析は実施しておらず、確実ではない。

5 縄文後・晩期の粗製土器

縄文土器 縄文が施された深鉢形土器を一括する(第78図1~9)。口縁が直立からやや外反するものが多く、口縁が内湾すると推定されたのは2点(第78図8・9)のみである。全てが単純口縁。縄文原体には、単節L Rと無節Lがあり、第78図3・8には結節文が施されている。

条線文土器 条線文が施された深鉢形土器を一括する(第78図10~14)。抽出されたのは、図示した5点のみ

である。単純口縁が2点、複合口縁が3点であり、全て口縁が内湾する。14の複合口縁には刺突文が施されている。条線文には、縦位の波状文(10・14)、縦位の直状文(12)、横位の直状文(13)がある。また、施文具の歯数、条線の太さや間隔なども個体により異なっている。

条線文土器は、後期後葉から晩期前葉に伴う粗製土器と考えられることから、出土量は、精製土器の少なさに対応したものであろう。

撚糸文土器 撥糸文には、単軸絡条体第5類A種の網目状撚糸文(第78図15~19、第83図3)と、単軸絡条体第1類の撚糸文(第78図20~32、第83図4~9)があり、これらが施された深鉢形土器を一括している。個体数は、口縁部でも底部でも単軸絡条体第1類の撚糸文の方が多い。

単軸絡条体第5類A種の網目状撚糸文が施された深鉢形土器は全て、口縁が内湾する。単純口縁と複合口縁があり、複合口縁には、無文のもの(17・18)と、網目状撚糸文の施されたもの(19)がある。第83図3の底部付近には、網目状撚糸文の一部が残る。胴部に対して底部がかなり厚いことに特徴を認める。

単軸絡条体第1類の撚糸文が施された深鉢形土器も全て、口縁が内湾する。単純口縁と複合口縁があり、複合口縁には全て、撚糸文が施されている。29~32には、胴部の撚糸文が施された後に、複合口縁が形成されていることが観察された。したがって、胴部と口縁部とでは、撚糸文の施文方向が異なり、胴部には縦方向に、口縁部では横方向に施文されている。4~9の底部付近には、撚糸文の一部が残る。そのうち5・6は、胴部に対して底部がかなり厚いことに特徴を認める。

単軸絡条体第5類A種と単軸絡条体第1類の比率は、本覚遺跡では単軸絡条体第5類A種の方が多く、泉坂下遺跡では単軸絡条体第1類の方が多く検出されている。



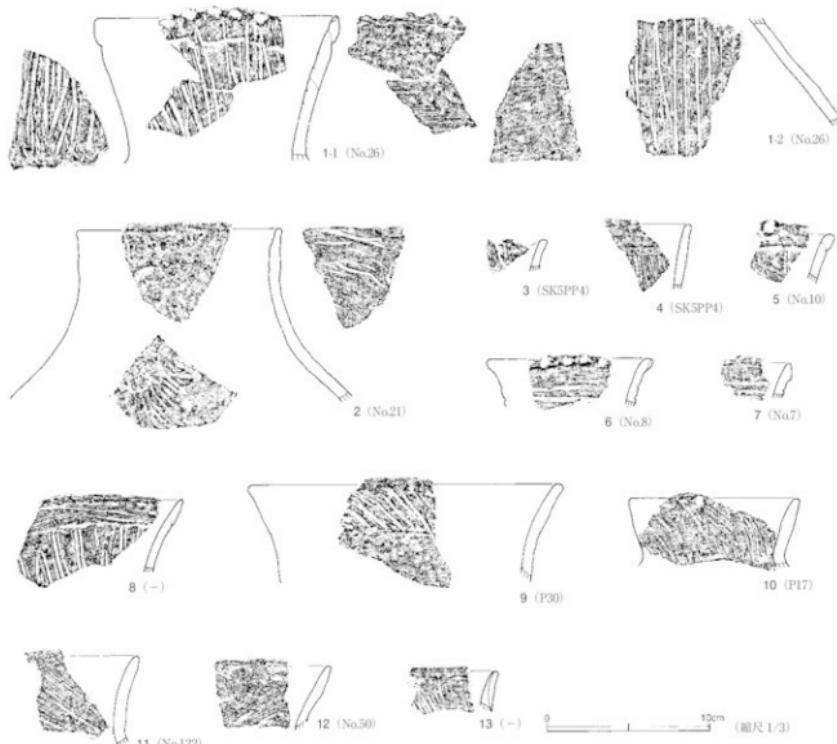
第80図 調査区の土器8 弥生式土器(2)

これは、大洞C1式を主体とする本覚遺跡に対して、大洞C2式を主体とする泉坂下遺跡という。時期的な異なりによると考えることができる。

無文土器 脇部に繩文、条線文、撚糸文が施されない、無文の深鉢形土器を一括する(第78図33~51)。拓影図で沈線あるいは条線の一部のように見えるのは、器表面の調整により移動した砂粒が残した擦痕と観察している。口縁部には、単純口縁と複合口縁がある。頸部で屈曲して口縁が外反するものもあるが、ほとんどは口縁が内済する。あるいは、頸部で屈曲する34・35については、

第77図21・22のように鉢形土器の可能性を考えるべきかもしれない。33の複合口縁には、横位の短沈線文が施されている。

第78図52~62については、複合口縁の部分的な破片であり、条線文土器、撚糸文土器、無文土器が含まれていると考えられるものである。無文で底面に敷物の痕跡が残らない底部のうち、第84図6~12などは、その底部の厚さから、繩文時代後・晩期の粗製土器と推定される。底部付近には削りのような調整が施されており、脇部の文様が残されていくとも、やはり条線文土器、撚糸文



第81図 調査区の土器9 弥生式土器(3)

土器、無文土器が含まれていると考えなければならない。

6 弥生中期の土器

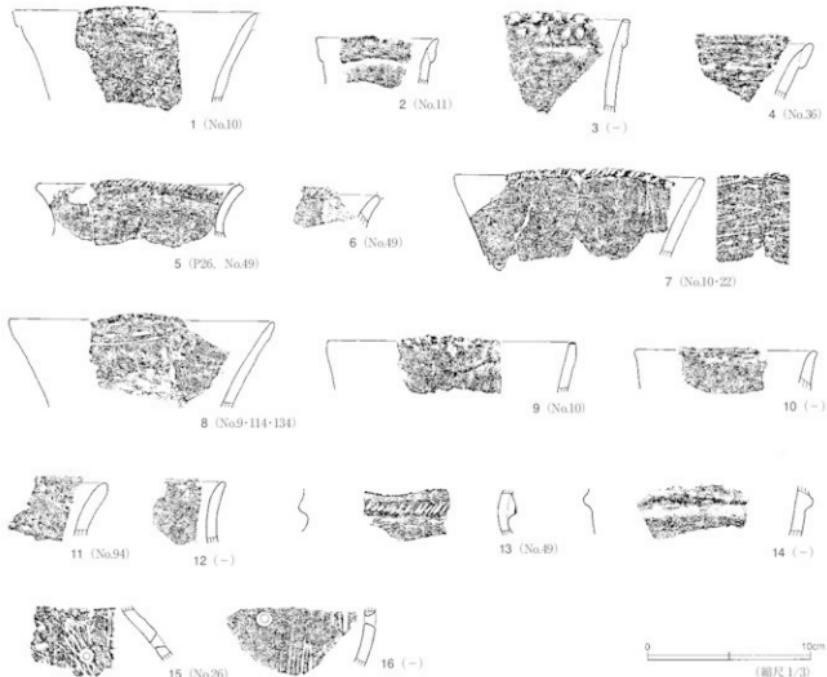
精製壺形・鉢形土器 前部に沈線区画の磨消繩文が施された土器を一括する(第79図1~9)。抽出されたのは全て小型の土器であった。これらの破片は、墓塚の覆土中から検出されており、覆土にあったものが後世の擾乱により破碎された可能性も考えられる。1~7は壺形土器である。1・2は頸部、3~7は胴上部の破片。繩文は全て單節L Rの充填により施文されている。1の器内面は、頸部までが平滑に磨かれ、胴部は撫で調整されている。8は鉢形土器の口縁部。9は壺形あるいは鉢形土器の胴部。器内面の撫で調整が難であることからは、壺形土器と考えておきたい。繩文は付加条第1種のR L

+2 Lと観察された。

粗製壺形土器 前部に繩文、条痕文が施されるか、無文の壺形土器を一括し、口縁部を中心と報告する(第80~82図)。大型の壺形土器がほとんどである。

第80図1は、波状口縁が内湾する。口頭部に繩文が施されており、口縁部には1条ずつ施文された2条の平行沈線文が巡る。墓塚の土器には類例が見出せず、これについてでは壺形土器であるのかも判然としない。器内面は撫で調整されている。

第80図の2~21は、口縁部に繩文が施された壺形土器。2・3は波状口縁、4~21は平口縁である。2は、複合口縁であり、器外表面に段を形成して外反する。口唇部上には繩文が施されている。3は単純口縁。器内面にも繩文が施されている。これは、第2号墓塚土器6に似る。

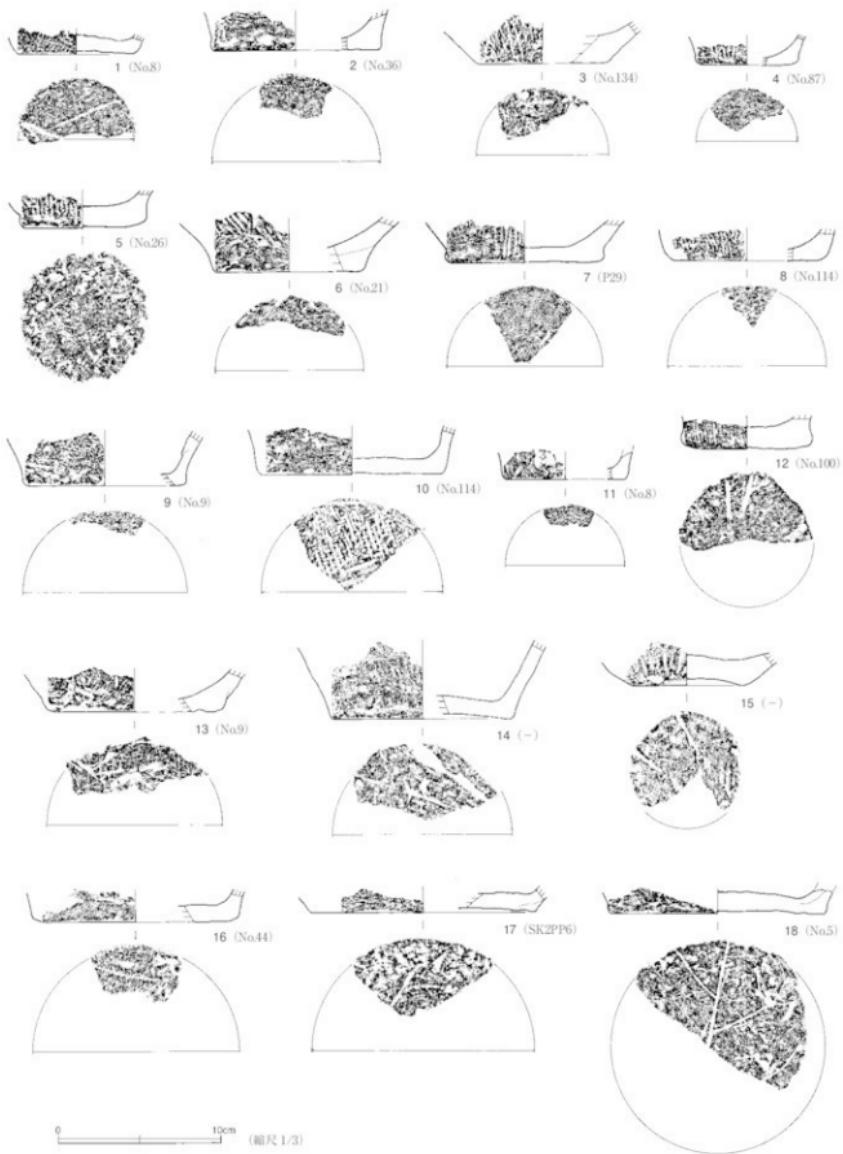


第82図 調査区の土器10 弥生式土器(4)・胴部

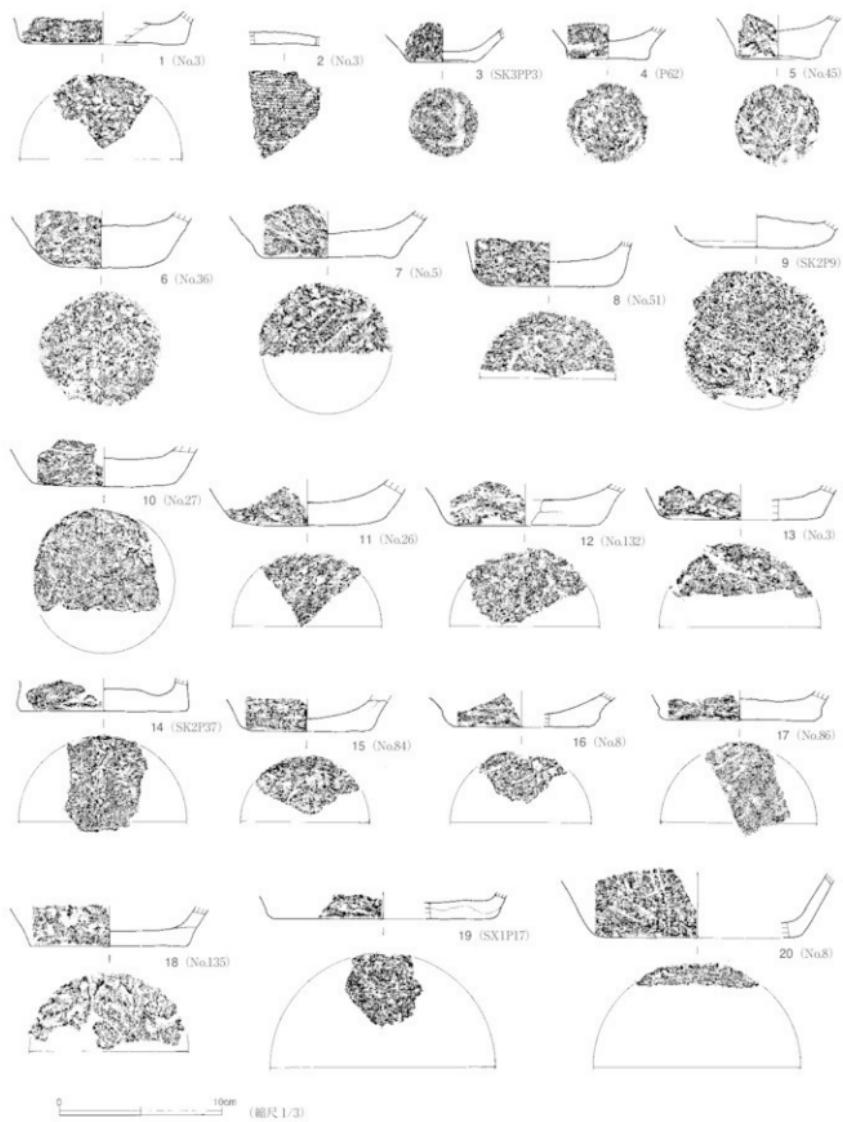
4には、複合口縁の積上痕が明瞭に残る。口唇部は範状工具による刻み。頸部は無文、胴部には継位の条痕文が施されている。この口縁—頸—胴部の文様構成は第3号墓埴土器4・6、第4号墓埴土器3・5に共通し、第4号墓埴土器3の口唇部にも刻みが見られる。5は、頸部に継位の条痕文が施されている。これが継位短条痕文であるなら、第1号墓埴土器2と同じ文様構成となる。6～21は頸部が無文。6は2と同じく、複合口縁であり、器内外面に段を形成して口縁が外反する。7・10は、器内面と口唇部にも繩文が施されている。15の口唇部上には、範状工具による刻みが施されている。16は、頸部に赤彩のような痕跡が見られる。

第81図の1～13は、口縁部に繩文帯を持たず、口頭部に条痕文が施された壺形土器。1は、口縁部に積上痕を残して複合口縁を呈するが、この部分から頸部に連続して条痕文が施される。口唇部上には、指頭による刻みが

施され、爪痕が残る。胴部も継位の条痕文であり、頸—胴部の文様構成及び条痕文の施文具が第4号墓埴土器6に似る。口頭部の器内面には、積上痕が残されている。2は単純口縁。口頭部には継位、胴部には縦～斜位の条痕文が施されている。器内面の調整の痕跡が条痕のように見えている。3は波状口縁。口唇部直下から継位の条痕文が施されている。4は、口縁部が横位の撫で調整による無文。頸部が継位の条痕文。5は、複合口縁が無文。頸部が継位の条痕文である。口唇部には刻みが見られるが、密な施文ではない。6の口唇部上には、指頭により刻みが施されている。頸部は横位の沈線もしくは条痕文。7は、複合口縁が無文。頸部が横位の条痕文である。8は、口縁部に積上痕を残して複合口縁を呈し、この部分が横位の撫で調整により無文となる。頸部は継位の条痕文。9は、口縁部に斜位の条痕文が施されている。頸部は無文。器内面の調整の痕跡が条痕のように見えている。



第83図 調査区の土器11 底部(1)



第84図 調査区の土器12 底部(2)

10~13は、口縁部に細かな条痕文が施されており、第4号墓埴器4に共通する文様構成が推定される。

第82図の1は、複合口縁が剥落している。頭部は無文。2~14は、口縁部が無文の壺形土器である。3は、指頭による刻みが口縁部に施され、この施文に伴う指頭の圧痕が口縁部に付いている。口縁部を親指で押さえながら、口縁部を人差し指で削りだしが可能である。5・6は、外反する単純口縁の口縁部に、繩文が施されている。6の繩文は付加条第1種のL R + 2 Rであり、5も付加条第1種の可能性がある。7は、口縁部に刻みが施されており、3つの刻みが同時に施文されていることから、条痕文の施文具によるものと推定される。口縁部には、雜描きであるのか、細い沈線が観察される。弧状を呈する部分もあるが、全体の形象は捉えられない。8の口縁部にも、弧状の沈線が見られた。

第82図13・14は、壺形土器の頭部であり、隆帯が巡る。隆帯は、断面が三角形に近く、13の隆帯上には鋸状工具による刻みが施されている。

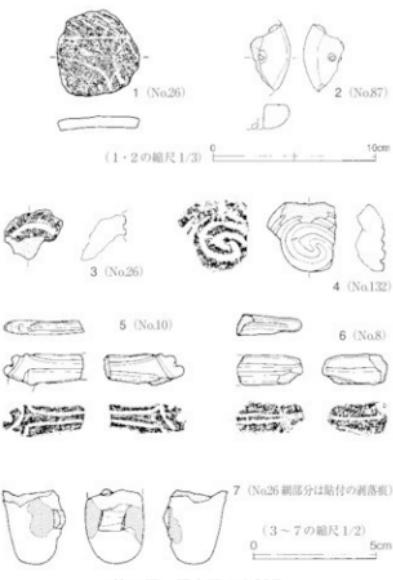
第82図15・16は、胴部の破片の中から、補修孔を有するものを抽出した。2点のみである。15には撚糸文が施されている。繩文時代晩期の土器であろうか。16には条痕文が施されており、これは弥生時代中期の壺形土器である。

第83・84図は底部を一括した。第83図の12~15は底部付近に条痕文が施されている。これらには木葉痕が残されており、弥生時代中期の壺形土器と考えられる。繩文時代晩期には木葉痕が稀であることから、16~18についても、弥生時代中期の壺形土器と捉えられるものであろう。第84図2の布目痕も、弥生時代中期のものと考えられる。

7 土製品

第85図1は、後期後葉の土器破片を素材とした土製円盤である。周囲の断面には磨滅が見られる。

第85図2は、有孔円盤状土製品の破片である。推定される大きさは、直徑が68mmほどであり、外輪の5分の1周ほどが残存する。直徑3mmの孔は焼成前に穿たれています。



第85図 調査区の土製品

| 種類 | 番号 | 地・縫 | 層位 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 備考 |
|------|--------|-----|----|----|----|------|--------------|----|
| 第85図 | No.26 | Ⅲ区 | | 51 | 51 | 6 | 19.1 | |
| 2 | No.87 | SK6 | 覆土 | 25 | 15 | 12.8 | 直徑68mm、孔径3mm | |
| | No.026 | Ⅲ区 | | 30 | 24 | 6 | 23.9 | |
| | No.026 | Ⅲ区 | | 28 | 26 | 12 | 20.0 | |
| 3 | No.10 | Ⅲ区 | | 33 | 13 | 6 | 24.1 | 赤彩 |
| 6 | No.008 | Ⅲ区 | | 27 | 12 | 9 | 20 | |
| 7 | No.026 | Ⅲ区 | | 31 | 21 | 26 | 17.3 | |

*「長さ」、「幅」、「厚さ」の単位は「mm」、重量の単位は「g」である。

第2表 土製品一覧表

第85図3・4には、渦巻き状の沈線が施文されている。土器にしては厚みがあることから、土製品として掲載したが、鳥内遺跡[日黒1998]に検出された「透かしのある台付き鉢もしくは香炉形の土器」のような特殊な土器の一部であった可能性もある。

第85図5~7も破片であり、全体を推定できない。5・6は、扁平で細長い形状の破片の表面に沈線文が施されている。7は、断面が略円形の破片に部分的な隆帯が貼付されている。これらは、土偶の一部であろうか。

参考文献

- 荒井世志紀他 2006 「志摩城跡・二ノ台遺跡Ⅱ－経営体育
成基盤整備事業地に伴う発掘調査報告書－」(財)香取
都市文化財センター調査報告書第99集 財団法人香取都市
文化財センター
- 石川 功也 2006 「国指定史跡 上高津貝塚C地点－史跡
整備事業に伴う発掘調査報告書－」土浦市教育委員会
- 井上義安・佐藤次男 1972 「柳沢遺跡調査報告」那珂湊市文化
財調査報告1 那珂湊市教育委員会
- 大竹憲治他 1988 「薄磯貝塚－縄文時代晚期貝塚の調査－」
いわき市埋蔵文化財調査報告第19号 いわき市教育委員会
- 小高五十二 1993 「牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋藏
文化財発掘調査報告書(1) カツノ上遺跡」茨城県教育財團
文化財調査報告第81集 財団法人茨城県教育財團
- 斎藤弘道 2006 「茨城の縄文土器」茨城県立歴史館史料叢書9
茨城県立歴史館
- 鈴木加津子他 1985 「外塚遺跡」下館市教育委員会
- 鈴木素行 1998 「泉原貝塚における土器群の編年と系統－
土器に関する問題・Ⅱ－」『泉原貝塚発掘調査報告書』日立
市文化財調査報告第45集 日立市教育委員会 24-55頁
- 鈴木素行 2005 「本覚遺跡の研究－関東地方東部における
縄文時代晚期の石棒製作について－」(私家版)
- 前田芳雄 1954 「千綱谷(引内毛考古学会
- 馬野光行 1978 「前浦式土器の研究」『考古学雑誌』第64巻第
3号 1-22頁
- 沼田文夫 1986 「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告
書9 小場遺跡」茨城県教育財團文化財調査報告第35集
財団法人茨城県教育財團
- 藤本弥城 1977 「那珂川下流の石器時代研究」I (私家版)
- 藤本弥城 1980 「那珂川下流の石器時代研究」II (私家版)
- 馬目順一郎 1966 「寺脇貝塚」磐城市教育委員会
- 馬目順一郎 1970 「一人子遺跡の研究－所謂亀ヶ岡式土器
終期の吟味－」南奥考古学研究叢書 I 南奥考古学研究叢
書刊行会
- 日高吉明他 1998 「島内遺跡発掘調査報告書」石川町文化財調
査報告書第16集 石川町教育委員会
- 山内幹夫他 1988 「真野ダム関連遺跡発掘調査報告書X II 羽
白C遺跡(第1次)」福島県文化財調査報告書第194集 福島
県教育委員会・財団法人福島県文化センター

Ⅱ章 参考文献

- 高野節夫他 2001 「中原遺跡3 中根・金田地区特定土地地区
画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IV」茨城県教育財團
文化財調査報告第170集 財団法人茨城県教育財團
- 齊藤貴史他 2008 「鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特
定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書X V」茨城
県教育財團文化財調査報告第291集 財団法人茨城県教育
財團
- 齊藤 洋他 2009 「茨城県結城郡八千代町大字平塚 萩毛道
西遺跡－株式会社エフピコ工場建設に伴う遺跡の発掘調
査－」八千代町教育委員会・株式会社地域文化財コンサル
タント

V 調査区出土の石器

泉坂下遺跡の発掘調査においては、個々に出土位置を記録して取り上げた石器及び礫がある。これらの遺物番号には「S」を付しており、「S38」までを数えた。その他に、出土位置を適宜に区別し層位でも分別して、他の遺物とともに一括で取り上げた石器及び礫がある。これらの遺物番号には「No.」を付しており、遺構の覆土も含めて「No.138」までを数えた。

石器は、現地で器種を判別できたものもあったが、特に礫を素材とする石器については、水洗後に使用的痕跡を観察する必要があるため、ほぼ全てを遺物として取り上げることにした。その結果、水洗選別で抽出されたものを含め、総数量1,634点、総重量52,370.6 g の石器と礫が検討の対象となった。

水洗後の整理においては、まず、明瞭な加工痕あるいは使用痕が観察されたもの全てを石器として抽出した。石器の数量は194点、重量は12,188.5 gである。次に、剥片石器の製作に伴う剥片と石核、礫核石器の製作に伴う剥片についても、微細なものまで全て抽出した。これら剥片類の数量は823点、重量は5,531.6 gである。石器であったとしても使用痕が明瞭でないもの、使用の痕跡が残らない部分の破片を含みはするが、これらの作業の後に残されたものを礫として一括した。礫の数量は626点、重量は34,650.5 gである。礫については、数量が膨大であることから、残存する大きさのうち長軸が50mm以下のものを分析の対象から除外した。長軸が51mm以上の礫の数量は246点、重量は29,888.6 gである。

以下には、泉坂下遺跡から出土した石器について報告する。但し、砥石・支脚(第11図15)は第1号住居跡に明らかに伴い、砥石・凹石の二次加工品(第32図)は第2号墓壙に伴うことが推定され、第6号墓壙土器1内から検出された玉類(第60図)は副葬品と捉えられることから、これらについては、一覧表(第5表)には含めていても、遺構の出土遺物として別途に報告してある(Ⅱ・Ⅲ章)。その他の石器については、遺構あるいは土器内から検出されていても、覆土の堆積に伴い混入したものと考えている。抽出された石器の器種と、点数及び重量は、第5表の通りである。また、個々の石器の出土位置、石

第5表 発掘調査で出土した石器と礫

| | 点 数 | 重 量 | 複合点数 | 複合重量 | 水洗点数 | 水洗重量 |
|-------|--------|---------|-------------------|--------|------|------|
| 石棒 | 31 | 59.8 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 石棒未成品 | 119 | 197.5 | 0 | 0 | 100 | 87 |
| 石削 | 11 | 9.6 | 0 | 0 | 4 | 1.0 |
| 石削未成品 | 7 | 10.7 | 0 | 0 | 1 | 1.4 |
| 磨削 | 11 | 3.8 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 磨削未成品 | 6 | 34.3 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 石刀 | 31 | 29.0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 石刀未成品 | 2 | 1.4 | 0 | 0 | 1 | 0.7 |
| 打制石斧 | 11 | 876.0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 磨擦 | 51 | 112.5 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 砾石 | 9 | 258.2 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 砾石 | 31 | 282.5 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 凹石 | 31 | 172.6 | 風石 1 | 1602.3 | 0 | 0 |
| 石墨 | 1 | 14.0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 砾石 | 11 | 6030.4 | 风石 1 | 1602.3 | 0 | 0 |
| 支脚 | | | | 3439.5 | | |
| 加工熱脱岩 | 31 | 31.9 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 加工 | 1 | 1.2 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 突起 | 11 | 3439.5 | 砾石 1 | 3439.5 | 0 | 0 |
| 透片面 | 823 | 5531.6 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 透 | 1 | 4761.9 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 5mm以上 | 246 | 29888.6 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 5mm以上 | | | | 0 | 0 | 0 |
| 合計 | 1643 | 52370.6 | 合計は部類が複数でも1点として計算 | | | |

*重量の単位は「g」である。

*「複合点数」「複合重量」とは、複用等により同一の石器に複数の器種を認めた場合、それぞれの器種に点数と重量を加算していることを意味する。

*「石棒未成品」のうち個別の重量が61 g未満のものは総重量の合計に含めていない。

*「礫」「洞片面」の点数と重量は、水洗選別で検出されたものは含めていない。

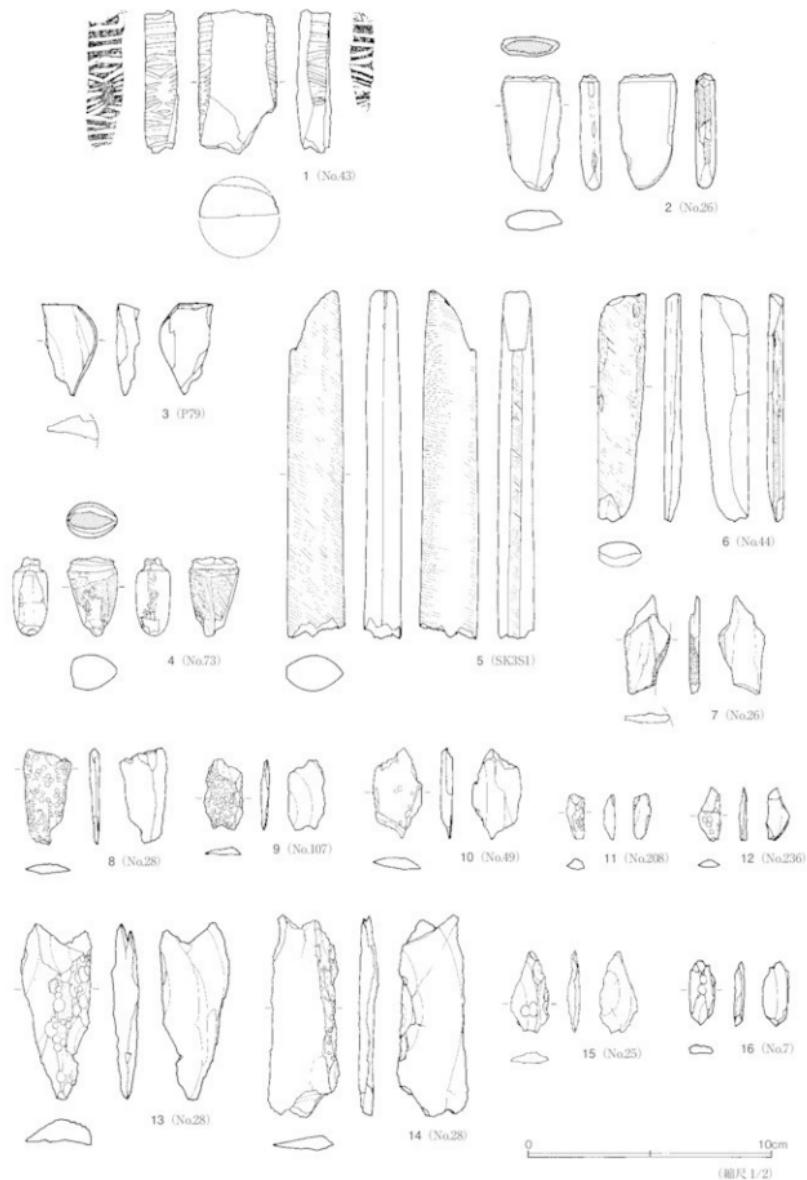
材、計測値、観察の所見については、器種ごとにまとめながら一覧表(第6・7表)に記載した。

1 石棒

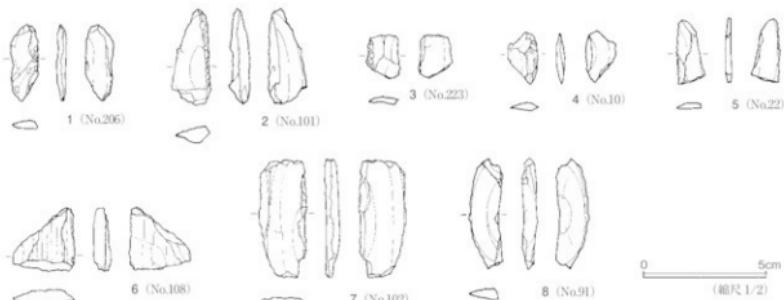
石棒及び石棒未成品は、微細な破片を含めて122点が検出された(第86・87図、第6表)。そのうち100点は、水洗選別によるものであり、ほとんどが再葬墓の土器内の土壤から検出されている。微細な碎片が多く、総重量は257.3 g 余にすぎない。

石材はほとんどが粘板岩であり、本覚遺跡の分析[柴田2005]で「鮎川層の粘板岩」と推定された石材に、肉眼による観察では特徴が一致する。泉坂下遺跡においては、粘板岩で製作された石器は他に石錐のみであった。粘板岩には剥離、敲打、研磨という工程を有する他の石器製作が認められないことから、微細な剥片・碎片についても、石棒製作に関わるものと捉えられることになる。

広義の石棒は、胴部の断面形状を指標として、石棒、石剣、石刀の3つに分類されている。成品及びそれに近い段階の未成品には、粗製であることから明確ではないものの石剣と推定されるものが1点(第86図2)、石刀と判断されるものが2点(第86図5・6)ある。また、第86図1は、後藤信祐による分類の「櫛原型石刀(a類)」[後藤1987]に相当し、文様が彫刻された鰯部付近の断面形



第86図 調査区の石器1 石棒(1)



第87図 調査区の石器2 石棒(2)

状は直径30mmほどの円形を呈していても、石刀として捉えられるものであろう。

ほとんどは未成品であるが、成品と考えられるものが3点ある。その1つは、文様が彫刻された「櫛原型石刀(a類)」の破片(第86図1)。器表面の研磨に伴う擦痕は浅く僅かであり、被熱による赤化も認められる。これのみが粘板岩でなく、デイサイトを石材としている。もう1つは、石剣の基部破片(第86図2)。これも、研磨に伴う擦痕は浅く僅かであり、被熱による赤化が認められる。破断面の周囲には、掠切りによる切断痕があり、これより上位の破片が石器の素材として転用されたことが推定される。石剣の破片の転用には、切目石錐の製作が知られている。残る1つは、第86図3の頭部破片。被熱による赤化と脆弱化が認められる。

他の119点については未成品と捉えている。これらは、表面に残された製作の痕跡から大きく3つの製作段階に分類できる。

研磨段階-研磨痕があるもの

敲打段階-研磨痕がなく、敲打痕があるもの

剥離段階-研磨痕、敲打痕がなく、剥離痕があるもの
研磨段階の破片は3点(第86図4~6)である。第86図4は、石剣もしくは石刀の頭部破片であり、その大きさから基頭部と推定される。敲打痕と剥離痕が一部に残り、研磨に伴う擦痕は明瞭である。側面の大きな剥離痕は、製作に伴う欠損と推定される。破断面の周囲には、掠切りによる切断痕があり、基頭部側面の欠損により両頭形から単頭形へと、基頭部を切断することで形態が切り替えたことが考えられる。第86図5・6は、石刀の胴

部破片であり、研磨痕が明瞭であることから、未成品として捉えた。

敲打段階の破片は27点であり、14点(第86図7~16、第87図1~4)を掲載している。第86図7は、頭部破片であり、表面が細かな敲打痕で覆われている。敲打段階でもほぼ整形が完了した状態で欠損したことが推定される。第86図8・9も、細かな敲打痕が密に施されており、整形がかなり進行した状態にある。この他は、剥離痕の一部に敲打痕が見られる破片であり、なかでも第86図10・13・15・16は、敲打痕のクレーターが大きく疎らであることから、敲打段階でも初期と考えられる。微細な破片については欠損に伴うものと、調整に伴うものが含まれると考えられるが、その分別は難しい。

剥離段階の破片は92点であり、4点(第87図5~8)を掲載している。剥離段階で欠損した本体と推定される破片は1点(第87図6)のみ。他は剥片・碎片である。剥片は、最も大きいもので長さが48mmであり、微細なものが多い。これらは、剥離成形段階ではなく、剥離調整段階を示すと考えられる。

泉坂下遺跡における石棒製作の痕跡は、剥離調整段階から研磨段階に至るもので、本覚遺跡に共通している。

2 石 錐

石錐は、部分的な破片を含めて12点が検出された。そのうち10点(第88図1~10)を掲載している。また、石錐の未成品と考えられる二次加工が施された剥片は、7点(第88図11~17)が抽出された。11点の石錐のうち3点は、水洗選別で検出されたものであり、再葬墓の土器内土壤

第6表 石棒一覧表

| 種別 | 番号 | 地区 | 層位 | 石 | 材 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 製作痕跡 | 備考 |
|--------|---------------|----|------|----|----|----|------|----|-----|------|----|
| 386[1] | 1160[3] SK3 | 丸土 | マツリト | 60 | 32 | 13 | 8.8 | 磯打 | <10 | 網掛 | 水没 |
| 2 | 1160[6] SK2 | 丸土 | マツリト | 47 | 24 | 8 | 12.9 | 磯打 | 5 | 網掛 | 水没 |
| 3 | 1160[7] SK4 | 丸土 | マツリト | 37 | 22 | 10 | 7.0 | 磯打 | 4 | 網掛 | 水没 |
| 4 | 1160[13] SK4 | 1B | マツリト | 33 | 20 | 4 | 11.7 | 崩壊 | 7 | 網掛 | 水没 |
| 5 | 1160[14] SK3 | 丸土 | マツリト | 62 | 35 | 5 | 9.2 | 崩壊 | 11 | 網掛 | 水没 |
| 6 | 1160[15] SK3 | 丸土 | マツリト | 74 | 39 | 4 | 10.3 | 崩壊 | 17 | 網掛 | 水没 |
| 7 | 1160[26] SK2 | 丸土 | マツリト | 40 | 18 | 4 | 9.4 | 網打 | 7 | 網掛 | 水没 |
| 8 | 1160[28] SK2 | 丸土 | マツリト | 39 | 19 | 4 | 9.2 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 9 | 1160[37] SK6 | 地盤 | マツリト | 29 | 15 | 3 | 1.5 | 網打 | 5 | 網掛 | 水没 |
| 10 | 1160[49] SK2 | 丸土 | マツリト | 37 | 20 | 5 | 5.7 | 網打 | 8 | 網掛 | 水没 |
| 11 | 1160[56] SK2 | 丸土 | マツリト | 40 | 18 | 4 | 9.6 | 網打 | 11 | 網掛 | 水没 |
| 12 | 1160[57] SK2 | 丸土 | マツリト | 22 | 9 | 3 | 0.6 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 13 | 1160[67] SK2 | 丸土 | マツリト | 28 | 14 | 4 | 10.9 | 網打 | 9 | 網掛 | 水没 |
| 14 | 1160[68] SK2 | 丸土 | マツリト | 28 | 29 | 8 | 19.4 | 網打 | 11 | 網掛 | 水没 |
| 15 | 1160[75] SK3 | 丸土 | マツリト | 34 | 16 | 5 | 4.8 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 16 | 1160[76] SK2 | 丸土 | マツリト | 27 | 10 | 4 | 4.1 | 網打 | 5 | 網掛 | 水没 |
| 387[1] | 1160[96] SK2 | 丸土 | 内山 | 31 | 11 | 4 | 1.6 | 網打 | 8 | 網掛 | 水没 |
| 2 | 1160[101] SK2 | 丸土 | 内山 | 16 | 9 | 3 | 1.4 | 網打 | 5 | 網掛 | 水没 |
| 3 | 1160[111] SK2 | 丸土 | 内山 | 18 | 9 | 3 | 1.1 | 網打 | 4 | 網掛 | 水没 |
| 4 | 1160[141] SK3 | 丸土 | 内山 | 21 | 12 | 3 | 0.8 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 5 | 1160[22] SK2 | 丸土 | 内山 | 26 | 12 | 2 | 0.9 | 網打 | 5 | 網掛 | 水没 |
| 6 | 1160[38] SK2 | 丸土 | 内山 | 25 | 25 | 2 | 4.0 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 7 | 1160[72] SK2 | 丸土 | 内山 | 48 | 20 | 5 | 7.4 | 網打 | 11 | 網掛 | 水没 |
| 8 | 1160[91] SK2 | 丸土 | 内山 | 47 | 14 | 6 | 1.2 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 9 | 1160[93] SK2 | 丸土 | 内山 | 9 | 3 | 1 | 0.0 | 網打 | 3 | 網掛 | 水没 |
| 10 | 1160[94] SK1 | 丸土 | 内山 | 5 | 3 | 1 | 0.0 | 網打 | 2 | 網掛 | 水没 |
| 11 | 1160[95] SK1 | 丸土 | 内山 | 6 | 3 | 1 | 0.0 | 網打 | 2 | 網掛 | 水没 |
| 12 | 1160[96] SK1 | 丸土 | 内山 | 6 | 3 | 1 | 0.0 | 網打 | 2 | 網掛 | 水没 |
| 13 | 1160[97] SK1 | 丸土 | 内山 | 5 | 4 | 1 | 0.0 | 網打 | 2 | 網掛 | 水没 |
| 14 | 1160[98] SK1 | 丸土 | 内山 | 5 | 4 | 1 | 0.0 | 網打 | 2 | 網掛 | 水没 |
| 15 | 1160[99] SK1 | 丸土 | 内山 | 13 | 9 | 1 | 0.0 | 網打 | 3 | 網掛 | 水没 |
| 16 | 1160[100] SK1 | 丸土 | 内山 | 11 | 9 | 1 | 0.0 | 網打 | 3 | 網掛 | 水没 |
| 17 | 1160[101] SK1 | 丸土 | 内山 | 8 | 3 | 1 | 0.0 | 網打 | 2 | 網掛 | 水没 |
| 18 | 1160[102] SK1 | 丸土 | 内山 | 8 | 3 | 1 | 0.0 | 網打 | 2 | 網掛 | 水没 |
| 19 | 1160[103] SK1 | 丸土 | 内山 | 8 | 3 | 1 | 0.0 | 網打 | 2 | 網掛 | 水没 |
| 20 | 1160[104] SK2 | 丸土 | 内山 | 44 | 19 | 7 | 6.3 | 網打 | 11 | 網掛 | 水没 |
| 21 | 1160[105] SK2 | 丸土 | 内山 | 8 | 4 | 2 | 0.3 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 22 | 1160[106] SK2 | 丸土 | 内山 | 8 | 5 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 23 | 1160[107] SK2 | 丸土 | 内山 | 19 | 10 | 5 | 0.5 | 網打 | 11 | 網掛 | 水没 |
| 24 | 1160[108] SK2 | 丸土 | 内山 | 4 | 5 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 25 | 1160[109] SK2 | 丸土 | 内山 | 9 | 5 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 26 | 1160[110] SK2 | 丸土 | 内山 | 8 | 3 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 27 | 1160[111] SK2 | 丸土 | 内山 | 17 | 9 | 2 | 0.3 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 28 | 1160[112] SK2 | 丸土 | 内山 | 6 | 4 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 29 | 1160[113] SK2 | 丸土 | 内山 | 6 | 4 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 30 | 1160[114] SK2 | 丸土 | 内山 | 8 | 4 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 31 | 1160[115] SK2 | 丸土 | 内山 | 7 | 5 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 32 | 1160[116] SK2 | 丸土 | 内山 | 14 | 6 | 2 | 0.2 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 33 | 1160[117] SK2 | 丸土 | 内山 | 14 | 6 | 2 | 0.2 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 34 | 1160[118] SK2 | 丸土 | 内山 | 11 | 5 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 35 | 1160[119] SK2 | 丸土 | 内山 | 9 | 5 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 36 | 1160[120] SK2 | 丸土 | 内山 | 9 | 5 | 2 | 0.2 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 37 | 1160[121] SK2 | 丸土 | 内山 | 9 | 5 | 1 | 0.0 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 38 | 1160[122] SK2 | 丸土 | 内山 | 5 | 4 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 39 | 1160[123] SK2 | 丸土 | 内山 | 6 | 2 | 2 | 0.3 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 40 | 1160[124] SK2 | 丸土 | 内山 | 6 | 2 | 2 | 0.3 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 41 | 1160[125] SK2 | 丸土 | 内山 | 6 | 2 | 2 | 0.3 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 42 | 1160[126] SK2 | 丸土 | 内山 | 6 | 2 | 2 | 0.3 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 43 | 1160[127] SK2 | 丸土 | 内山 | 6 | 2 | 2 | 0.3 | 網打 | 10 | 網掛 | 水没 |
| 44 | 1160[128] SK2 | 丸土 | 内山 | 7 | 3 | 1 | 0.0 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 45 | 1160[129] SK2 | 丸土 | 内山 | 7 | 4 | 1 | <0.1 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 46 | 1160[130] SK2 | 丸土 | 内山 | 11 | 3 | 2 | <0.1 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 47 | 1160[131] SK2 | 丸土 | 内山 | 9 | 3 | 2 | <0.1 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 48 | 1160[132] SK2 | 丸土 | 内山 | 9 | 3 | 2 | <0.1 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 49 | 1160[133] SK2 | 丸土 | 内山 | 9 | 3 | 2 | <0.1 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 50 | 1160[134] SK2 | 丸土 | 内山 | 9 | 3 | 2 | <0.1 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 51 | 1160[135] SK2 | 丸土 | 内山 | 9 | 3 | 2 | <0.1 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 52 | 1160[136] SK2 | 丸土 | 内山 | 7 | 5 | 1 | <0.1 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |
| 53 | 1160[137] SK2 | 丸土 | 内山 | 11 | 5 | 3 | 0.2 | 網打 | 6 | 網掛 | 水没 |

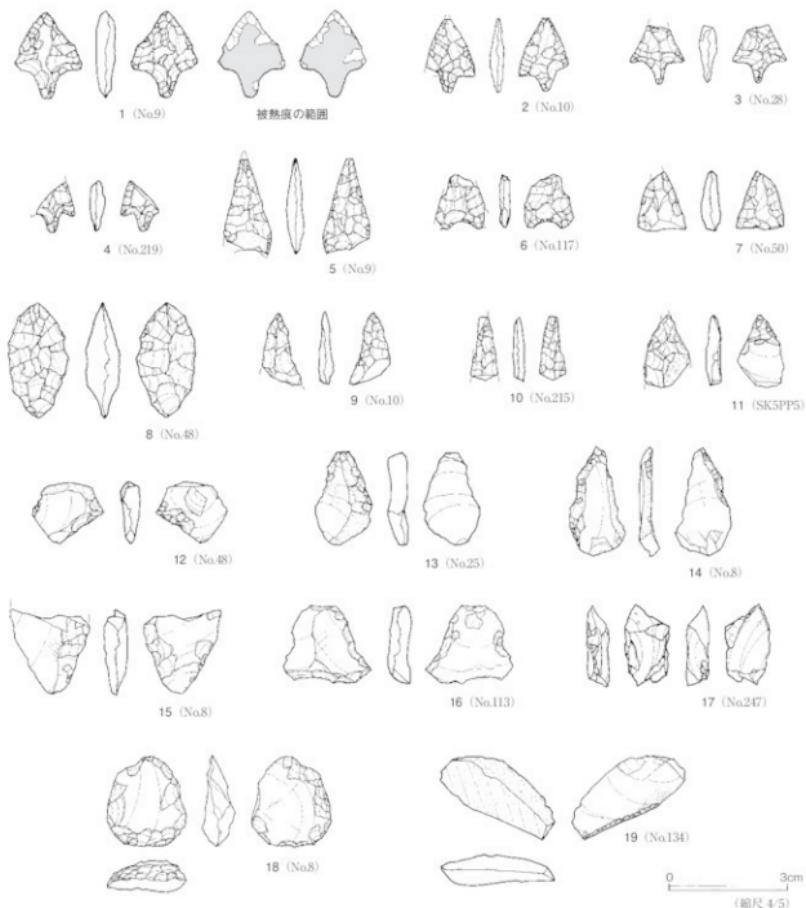
*「長さ」「幅」「厚さ」の単位は「mm」、重量の単位は「g」である。

3 握器・削器

握器は1点(第88図18)が検出された。メノウの剥片を指立指の形態に整形し、長軸の端部に急角度の刃部を作出している。

削器については、剥片の辺縁を加工して刃部を作出したもの、または剥片の辺縁に明瞭な使用痕が観察されたものに限定して抽出した。点数は6点(第88図19、第89図1～5)である。この他にも、加工された可能性のある細かな剥離が僅かに連続する剥片、使用された可能性のある微細な欠損が残された剥片も見られたが、これらには、偶発的な衝突の痕跡、後世の傷跡の可能性もあり、検討の対象から除外した。

本覚遺跡において採用した削器の分類によれば、欠損状態から推定される法量も含めて、大型が2点(第89図1・5)、中型が2点(第89図2・3)、小型が2点(第88



第88図 調査区の石器3 石錐・搔器・削器(1)

図19、第89図4)である。石材は大・中型がホルンフェルスと砂岩、小型がメノウに対応している。

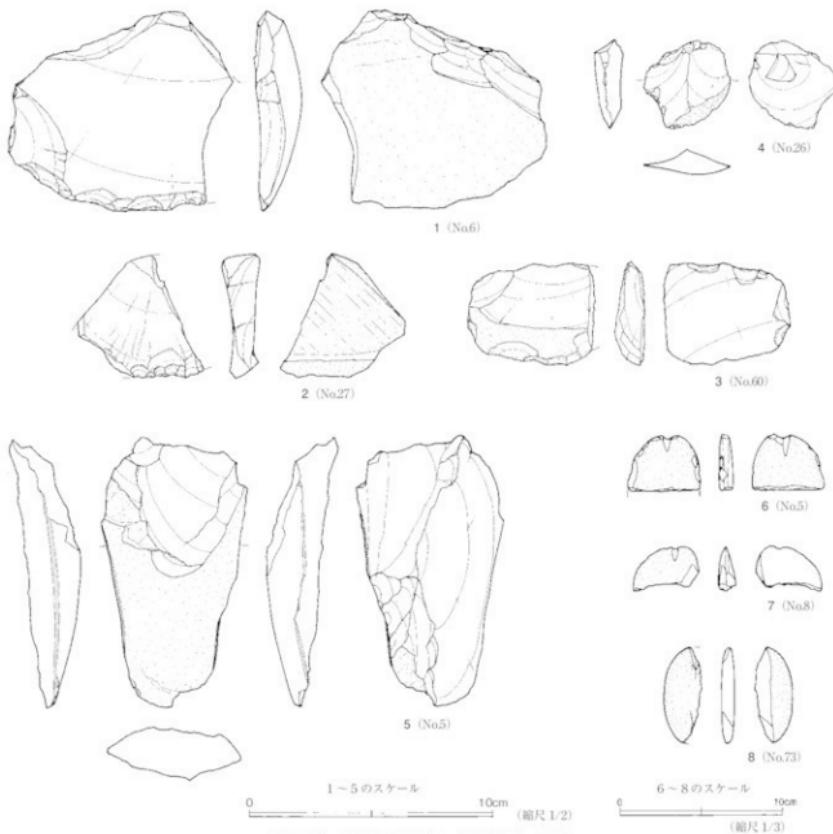
第89図5は砂岩の剥片を素材とした大型の削器であり、2辺の刃部に著しい磨滅が認められる。一部には加工も施されているが、これが施されていない鋭利なままの縁刃が使用され、磨滅により丸みを帯びている。これは、本覚遺跡において石棒製作のための「擦切具」[鈴木2005]と推定した削器に相当する。

4 石錐

石錐は3点(第89図6～8)が検出された。素材は扁平な円錐、石材は砂岩(6)、頁岩(7)、粘板岩(8)がそれぞれ1点である。「切目石錐」であり、長軸の端部が加工されている。この加工にも「擦切具」が使用されたことが考えられる。

5 磨製石斧

磨製石斧と推定される小破片が2点検出された。1点



第89図 調査区の石器4 削器(2)・石錐

は、長さ14mm、幅13mm、厚さ2mm、重量0.7g。石材は変質閃緑班岩。もう1点は、長さ27mm、幅17mm、厚さ6mm、重量2.7g。石材はホルンフェルスである。

6 打製石斧・礫器

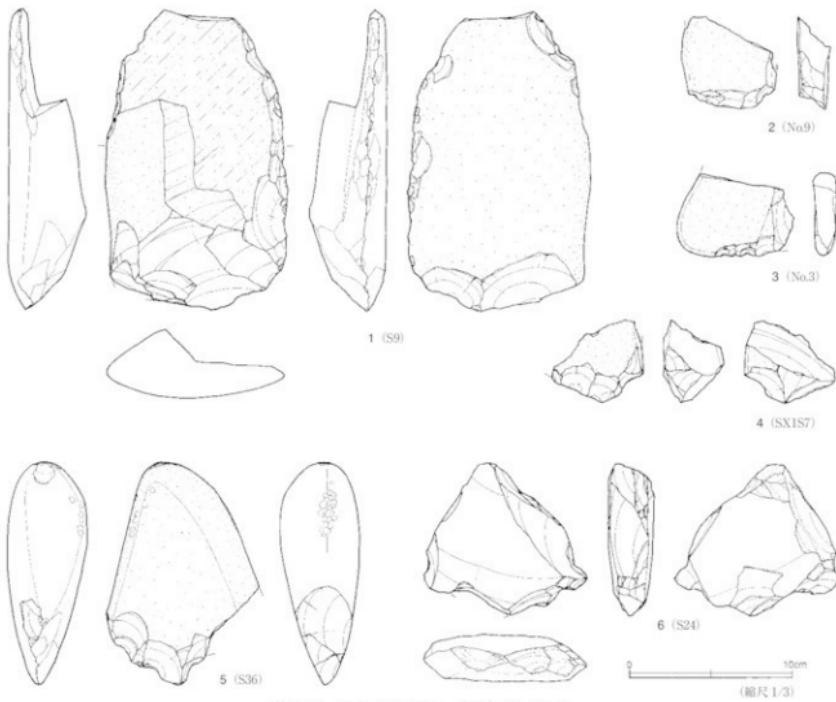
打製石斧は1点(第90図1)が検出された。ホルンフェルスの礫を素材として、長軸の一端に刃部を作出している。周縁を剥離により調整しているが、一部は自然面のままの状態にある。周縁を調整する打撃に伴い、節理の部分から表面が大きく剥離し、作業を中断したものと推定される。刃部にも、使用に伴う剥離や磨滅は認められない。節理で剥離しても15~30mmほどの厚さが確保でき

るのにも関わらず廃棄されていることから、石鎌ではなく、打製石斧として捉えた。

礫器は5点(第90図2~6)が検出された。4点(2~5)は扁平な円錐をそのまま素材としており、1点(6)は分割された礫片を素材としている。石材は砂岩が3点、ホルンフェルスが1点、頁岩が1点である。いずれの刃部にも、使用に伴う剥離や磨滅はほとんど認められず、製作に伴う欠損、あるいは使用の初期の欠損により廃棄されたものと考えられる。

7 敲石

敲打による表面の剥離、剥落が認められる礫を9点(第



第90図 調査区の石器 5 打製石斧・櫛器

92図1～9)抽出した。これらは法量から、台石ではなく、敲石と考えられる。円礫を素材としたものがほとんどであるが、1は亜角礫を加工して平坦面を作出している。石材は、砂岩が7点、頁岩が1点(7)、石英斑岩が1点(9)である。

本覚遺跡において採用した分類によれば、礫をそのまま使用した敲石II類に相当するものがほとんどであり、打削により形状と法量が調整された1も、敲石I類ではなく、敲石II類に準じるものである。重量では、1～4・9が重量級、その他は中量級に相当するものであろう。敲打痕の位置は、基本的な5つの使用痕に分類してある(第91図)。

使用痕a - 中央付近の平面を使用した痕跡

使用痕b - 長軸端部付近の平面を使用した痕跡

使用痕c - 長軸端部の側面を使用した痕跡

使用痕d - 長軸端部付近の側面を使用した痕跡

使用痕e - 短軸端部の側面を使用した痕跡

使用痕aは1・2・4、使用痕bは4・5・6、使用痕cは5～9、使用痕dは5・6・9、使用痕eは2・3にあり、使用痕が複合するものが少なくない。3・7・8には敲打に伴う衝撃で礫面の一部が剥離している。

8 磨石

磨石は3点(第92図10～12)が検出された。素材は円礫であり、石材は多孔質安山岩(10・11)が2点、砂岩が1点(12)である。12の表面は、磨痕により光沢を有する。



第91図 敲石II類の使用痕位置の分類



第92図 調査区の石器6 敲石・磨石・石皿

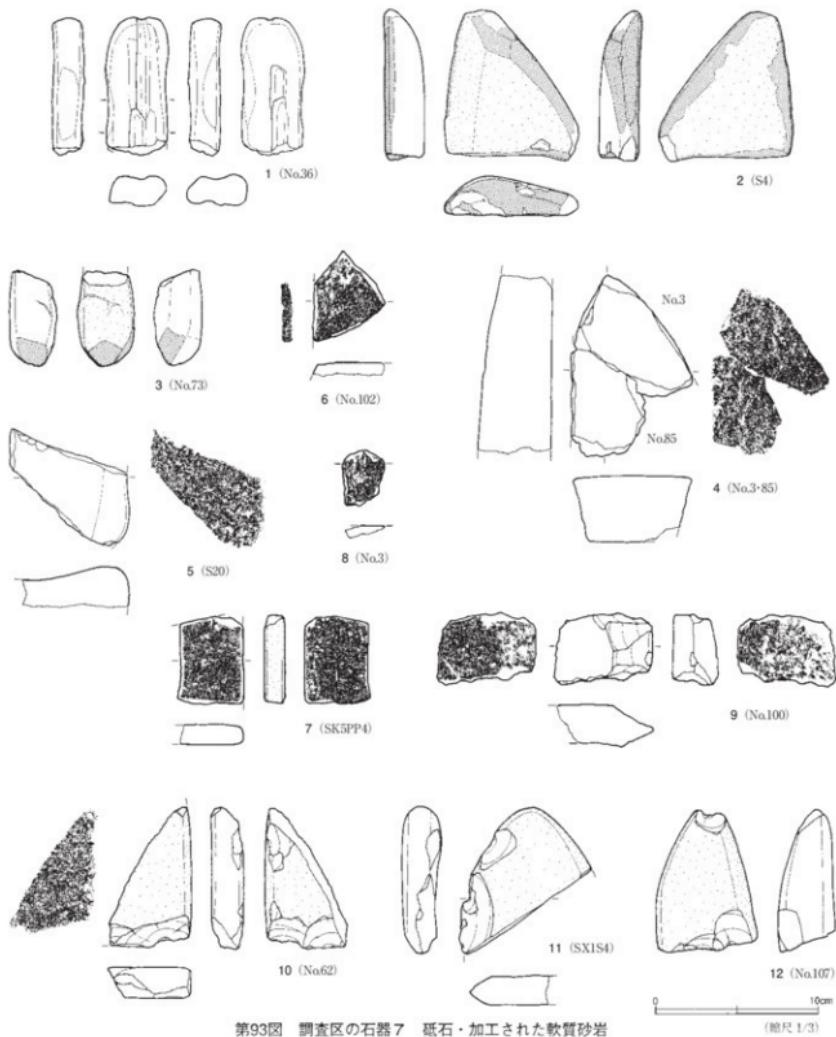
9 凹 石 ・ 石 皿

断面漏斗状を呈する窪みが形成された凹石は、3点(第92図13・14)が検出された。第2号墓壙の覆土中から出土した1点については、別途に報告してある(第32図1)。他の2点は小破片であり、石材は多孔質安山岩(13)と砂岩(14)。多孔質安山岩は、石皿によく利用される石材で

あることから、石皿の裏面に形成されたものであったかもしれない。

湾曲した内部の平坦面に磨痕が観察された破片(第92図15)を石皿と捉えた。石材は砂岩。

10 砕 石 ・ 加工された軟質砂岩

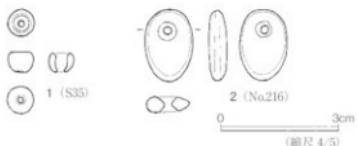


第93図 調査区の石器7 砥石・加工された軟質砂岩

砥石は11点(第93図1～9)が抽出された。第2号墓壇の覆土中から出土し四石が複合する1点(第32図1), 第1号住居跡の支脚に転用された1点(第11図15)についても、別途に報告してある。9点の石材は、砂岩が4点、軟質砂岩が5点であり、軟質砂岩は、本覚遺跡の分類によれば「1/2mm程度の粒子を少量含有する」「軟質砂岩2」

に相当する。

1は、2つの平坦面に幅10mmほどの溝が形成されており、玉類の研磨に使用されたことが考えられる。側面の窪みも研磨による。2は、下面として図示した破断面が砥ぎ面として使用されるとともに、素材の縦の稜線部分が使用されている(実測図の網部分が砥ぎ面)。3は、棒



第94図 調査区の石器8 玉類

状様の先端部付近に著しく磨滅した3つの面を形成している(実測図の網部分が研ぎ面)。4は、やや厚手の板状礫片を素材としている。最も磨滅した部分が、破片No.8の下側端部付近に偏ることから、ここを中心部として使用した。本来はもっと大きな砾石であったとも考えられる。破片No.8の右側、破断面との稜線部分にも磨滅が認められており、分割された後も、砾石としての使用は継続された。破片No.85の左側も、稜線部分は磨滅している。

軟質砂岩の砾石は、全て小破片であるが、板状の礫を素材としたものと推定される。7は、2つの平坦面が研ぎ面として使用されている。8の研ぎ面は、著しい磨滅により光沢を有する。9は、側縁から加工が施され、剥離痕が並ぶ。この剥離面も研ぎ面として使用されており、稜線は磨滅している。

「加工された軟質砂岩」は3点(第93図10~12)が検出されている。9の砾石を参考とするならば、本覚遺跡において「加工された軟質砂岩」という名称で抽出したものは、「可動式砾石」あるいは「手持ち砾石」として使用される砾石について、研ぎ面が準備された状態、あるいはその未完成の可能性がある。浅川層に由来する軟質の石材であり、本覚遺跡の周辺で採集され、あるいは加工された状態で、石棒とともに流通したものと考えられてくる。軟質砂岩の「手持ち砾石」は、使用が進行した状態のものが千葉県内野第1遺跡[田中2005]において、石剣とともに出土している。

11 玉類

第94図1はヒスイ製の小玉である。孔は一方向から穿たれており、貫通部分の孔の直径は1.8mm。

第94図2は泥岩製の玉である。楕円形の長軸の一方には偏った位置に孔があり、垂飾りと推定される。孔は、両方向から穿たれており、貫通部分の孔の直径は2.0mm。

第7表 石器計測表

| 番号 | 器物名 | 形態 | 石材 | 法量 | 厚さ | 重量 | 備考 |
|---------|--------|-----|----------------|-----|-----|------|-----------|
| 第110125 | SHS1 | SH1 | 軟質岩 | 216 | 127 | 95.4 | 39.5 機械 |
| 第32001 | SKS1 | SK1 | 軟質岩 | 186 | 139 | 54.1 | 160.2 機械 |
| 第60011 | SRS6 | S6 | 上部1/4内 礁石 | 19 | 13 | 1.1 | 0.1 水洗 |
| 2 | No.236 | S6 | 上部1/4内 礁石 | 7 | 15 | 1.3 | 0.1 水洗 |
| 3 | No.230 | S6 | 上部1/4内 礁石 | 7 | 14 | 1.3 | 0.1 水洗 |
| 4 | No.230 | S6 | 上部1/4内 礁石 | 6 | 14 | 1.3 | 0.1 水洗 |
| 5 | No.361 | S6 | 上部1/4内 礁石 | 9 | 12 | 1.0 | 0.1 水洗 |
| 6 | No.099 | SK1 | 軟質岩 | 188 | 114 | 51.5 | 1.5 機械 |
| 7 | No.099 | SK1 | 軟質岩 | 17 | 51 | 5.1 | 0.1 水洗 |
| 8 | No.028 | SK1 | 軟質岩 | 19 | 41 | 4.0 | 0.1 水洗 |
| 9 | No.028 | SK1 | 軟質岩 | 14 | 14 | 4.1 | 0.1 水洗 |
| 11 | No.219 | SK2 | 上部1/4内 石英 | 13 | 10 | 4.1 | 0.3 水洗 |
| 5 | No.009 | SK1 | 軟質岩 | 24 | 12 | 4.1 | 0.9 |
| 6 | No.117 | SK2 | 軟質岩 | 14 | 12 | 3.1 | 0.4 |
| 7 | No.050 | SK1 | チャート | 15 | 13 | 5.0 | 0.8 |
| 8 | No.100 | SK1 | 軟質岩 | 18 | 11 | 4.1 | 0.4 |
| 10 | No.151 | SK2 | 上部1/4内 軟質岩 | 16 | 7 | 3.1 | 0.3 水洗 |
| 11 | No.052 | SK5 | 上部5内 メノワ | 18 | 12 | 4.1 | 0.8 |
| 12 | No.048 | SK1 | 軟質 メノワ | 18 | 15 | 5.1 | 1.2 |
| 13 | No.048 | SK2 | 軟質 メノワ | 24 | 15 | 5.2 | 1.4 |
| 14 | No.009 | SK1 | 軟質 メノワ | 24 | 15 | 5.2 | 1.4 |
| 15 | No.008 | SK2 | 1 メノワ | 22 | 20 | 6.1 | 2.1 機械 |
| 6 | No.113 | SK1 | 1 メノワ | 19 | 25 | 6.2 | 2.2 |
| 17 | No.247 | SK3 | 軟質5内 黒曜岩 | 21 | 12 | 6.1 | 1.4 水洗 |
| 18 | No.088 | SK1 | 1 メノワ | 24 | 21 | 8.8 | 3.8 |
| 9 | No.041 | SK1 | 軟質 メノワ | 19 | 20 | 8.1 | 3.9 |
| 10 | No.041 | SK1 | 軟質 メノワ | 18 | 13 | 8.2 | 9.3 |
| 11 | No.077 | SK2 | 1 メノワ | 50 | 52 | 16 | 29.3 |
| 2 | No.060 | SK4 | 軟質 メノワ | 42 | 37 | 13 | 33.5 |
| 3 | No.026 | SK2 | 1 メノワ | 37 | 35 | 12 | 1.2 |
| 5 | No.005 | SK1 | 軟質 礁石 | 110 | 60 | 29 | 12.1 |
| 6 | No.008 | SK1 | 1 礁石 | 35 | 44 | 8.1 | 16.5 |
| 7 | No.005 | SK1 | 1 礁石 | 27 | 39 | 10 | 3.9 機械 |
| 8 | No.005 | SK1 | 1 礁石 | 18 | 20 | 10 | 3.9 機械 |
| 9 | No.009 | SK1 | 1 礁石 | 181 | 132 | 47 | 87.6 |
| 2 | No.009 | SK1 | 1 礁石 | 56 | 50 | 20 | 7.6 |
| 3 | No.003 | SK1 | 1 礁石 | 50 | 22 | 14 | 7.8 |
| 4 | JSX157 | SX1 | 1 礁石 | 51 | 57 | 37 | 6.80 |
| 5 | S036 | SK1 | 1 礁石 | 137 | 94 | 49 | 62.9 |
| 6 | No.008 | SK1 | 1 礁石 | 100 | 99 | 29 | 29.0 |
| 7 | No.005 | SK1 | 1 礁石 | 125 | 96 | 36 | 36.3 |
| 8 | No.005 | SK1 | 1 礁石 | 133 | 92 | 32 | 37.2 |
| 9 | No.001 | SK1 | 1 礁石 | 85 | 63 | 45 | 74.1 |
| 11 | No.031 | SK1 | 1 礁石 | 86 | 60 | 52 | 25.4 |
| 5 | S018 | SK1 | 1 礁石 | 55 | 47 | 38 | 9.95 |
| 6 | No.018 | SK1 | 1 礁石 | 74 | 52 | 31 | 21.3 |
| 7 | No.010 | SK1 | 1 礁石 | 74 | 52 | 31 | 21.3 |
| 8 | No.003 | SK1 | 1 礁石 | 74 | 48 | 35 | 18.07 |
| 9 | No.025 | SK1 | 1 石英礁石 | 69 | 92 | 53 | 31.86 |
| 10 | SX151 | SX1 | 1 軟質礁石 | 72 | 66 | 31 | 10.37 |
| 11 | No.072 | SK3 | 軟質 礁石 | 49 | 57 | 35 | 12.80 |
| 12 | No.003 | SK1 | 1 礁石 | 50 | 20 | 38 | 50.8 機械 |
| 13 | No.003 | SK1 | 1 礁石 | 100 | 93 | 29 | 29.0 |
| 14 | No.109 | SX1 | 1 礁石 | 53 | 43 | 25 | 54.4 機械 |
| 15 | No.068 | SX1 | 1 礁石 | 46 | 36 | 32 | 14.30 |
| 16 | No.006 | SK1 | 1 礁石 | 84 | 39 | 20 | 8.47 |
| 2 | S0041 | SK1 | 1 礁石 | 91 | 82 | 25 | 19.67 |
| 3 | No.073 | SK1 | 1 礁石 | 58 | 35 | 29 | 8.72 |
| 4 | No.003 | SK1 | 1 礁石 | 111 | 74 | 45 | 39.8 機械 |
| 5 | S020 | SK1 | 1 礁石 | 74 | 21 | 25 | 10.20 |
| 6 | No.012 | SK1 | 1 礁石 | 55 | 44 | 9 | 16.6 機械 |
| 7 | S019 | SK1 | 1 礁石 | 53 | 41 | 12 | 10.8 機械 |
| 8 | S0003 | SK1 | 1 礁石 | 34 | 26 | 7 | 4.9 機械 |
| 9 | No.100 | SK1 | 1 礁石 | 53 | 61 | 26 | 6.30 機械 |
| 10 | No.009 | SK1 | 1 礁石 | 53 | 61 | 26 | 6.30 機械 |
| 11 | SX154 | SX1 | 1 軟質礁石 | 89 | 80 | 24 | 10.82 |
| 12 | No.07 | SK6 | 軟質 礁石 | 87 | 55 | 35 | 14.83 |
| 13 | S035 | SK1 | 1 ヒスイ | 60 | 6.5 | 6.5 | 0.3 |
| 2 | No.216 | SK2 | 上部1/4内 礁石 | 180 | 125 | 4.5 | 0.9 水洗 |
| — | No.209 | SK2 | 上部1/4内 チャート | 16 | 31 | 2 | 0.41 石油 |
| — | No.010 | SK1 | 1 礁石 | 17 | 17 | 6 | 0.21 軟質砂岩 |
| — | No.080 | SK2 | 上部1/4内 礁石 | 14 | 13 | 6 | 0.17 軟質砂岩 |

*長さ(幅)(厚さ)の単位は「mm」重量の単位は「g」である。

泉坂下遺跡の調査区から検出された蝶及び洞片類については、点数と重量による石材の組成、法量の分布を、本覚遺跡で採用した方法により第8~11表に示した。

参考文献

- 後藤信祐 1987 「縄文後晩期の刀剣形石器の研究(上・下)」『考古学研究』第33巻第3、4号 31~60、28~48頁
 桑田 徹 2005 「本覚遺跡出土石器の石材について」『本覚遺跡の研究』73~78頁
 田中美世 2005 「千葉県内野第1遺跡出土の石棒・石剣」「塚博物館紀要」第32号 40~61頁

VI 動植物遺存体の同定と試料の分析

動物遺存体の同定 泉坂下遺跡の発掘調査においては、土器内に堆積した土壤の水洗選別を実施した。その主たる目的は、再葬された骨が遺存するのか否かを確認し、副葬品を遺漏なく回収することにあった。篩は3mmの方眼を使用した。

水洗選別の結果、ほぼ全ての土器内部から骨片が検出された。しかしながら、発掘調査により第Ⅰ・Ⅱ層からも骨片は出土しており、時代の異なる第1号住居跡の土器内にも骨片は含有されていた。骨片の量は、発掘調査で検出されたものが97点の21.1g、水洗選別で検出されたものが728点の46.3g、合計で825点の67.4gである(第12表)。ほとんどが細片であり、いずれにも被熱の痕跡が見られる。特に人骨の有無について検討するため、小宮孟氏に動物遺存体の全てを観察していただいた。

植物遺存体の同定 また、水洗選別により、多くの土器内部から、炭化した植物の破片も検出されることになった。中には種子と見えるものもある。3mmの方眼上の残留物に限られることから、主に食用植物の種類について検討するため、植物遺存体の全てを細谷葵氏に観察していただいた。

赤色物質の分析 さらに、水洗選別の篩上には、赤色顔料のような物質も見出されることになった。これが検出されたのは、第2号墓塚の土器4と土器12、第5号墓塚の土器1と土器5の4点である。第5号墓塚の土器1から検出された赤色物質は5mmほどの大きさがあったが、他は3mmを下回るものばかりであり、水洗の過程で別の物に貼り付くようにして残留したらしい。したがって、これを包含するのが特定の土器のみであるのか、あるいはほとんどの土器に包含されるのかは明らかではない。第5号墓塚の土器1から検出された赤色物質の成分について、渡辺美登里氏(九州大学分析センター)に分析していただいた。

炭化物の年代測定 再葬墓の年代を検討するためには、再葬墓から出土した土器の器内面に付着した炭化物を試料として放射性炭素年代を、吉田邦夫氏(東京大学年代測定室)に測定していただいた。分析の対象としたのは、第2号墓塚の土器2、第3号墓塚の土器4の2点である。

第12表 骨片一覧表

| 出土位置 | 点数 | 重量 | 備考 |
|------------|----|------|----|
| I 区(第1層) | 10 | 4.0 | |
| II 区(第1層) | 10 | 2.2 | |
| III 区(第1層) | 7 | 0.9 | |
| S.K.1 地上 | 20 | 4.0 | |
| S.K.1 土器1 | 8 | 3.1 | |
| S.K.1 土器2 | 25 | 6.9 | 水洗 |
| S.K.1 土器3 | 7 | 0.7 | 水洗 |
| S.K.1 土器4 | 5 | 0.1 | 水洗 |
| S.K.1 土器5 | 13 | 0.1 | 水洗 |
| S.K.2 地上 | 3 | 0.6 | 水洗 |
| S.K.2 土器1 | 25 | 1.2 | 水洗 |
| S.K.2 土器2 | 11 | 0.7 | 水洗 |
| S.K.2 土器3 | 25 | 1.4 | 水洗 |
| S.K.2 土器4 | 41 | 2.3 | 水洗 |
| S.K.2 土器5 | 17 | 1.3 | 水洗 |
| S.K.2 土器6 | 11 | 0.9 | 水洗 |
| S.K.2 土器7 | 21 | 1.5 | 水洗 |
| S.K.2 土器8 | 31 | 1.4 | 水洗 |
| S.K.2 土器9 | 2 | 0.1 | 水洗 |
| S.K.2 土器10 | 18 | 2.0 | 水洗 |
| S.K.2 土器11 | 16 | 1.2 | 水洗 |
| S.K.2 土器12 | 17 | 1.0 | 水洗 |
| S.K.2 土器13 | 33 | 2.4 | 水洗 |
| S.K.2 土器14 | 40 | 3.2 | 水洗 |
| S.K.3 地上 | 6 | 1.5 | |
| S.K.3 土器1 | 4 | 0.3 | 水洗 |
| S.K.3 土器2 | 3 | 0.5 | 水洗 |
| S.K.3 土器3 | 3 | 0.4 | 水洗 |
| S.K.3 土器4 | 3 | 0.3 | 水洗 |
| S.K.3 土器5 | 1 | <0.1 | 水洗 |
| S.K.3 土器6 | 1 | 0.1 | 水洗 |
| S.K.4 地上 | 8 | 0.6 | |
| S.K.4 土器1 | 5 | 0.4 | 水洗 |
| S.K.4 土器2 | 11 | 0.1 | 水洗 |
| S.K.4 土器3 | 11 | 0.5 | 水洗 |
| S.K.4 土器5 | 25 | 1.0 | 水洗 |
| S.K.4 土器6 | 8 | 0.5 | 水洗 |
| S.K.4 土器7 | 9 | 0.1 | 水洗 |
| S.K.4 土器8 | 12 | 1.3 | 水洗 |
| S.K.5 地上 | 6 | 1.0 | |
| S.K.5 土器1 | 31 | 1.6 | 水洗 |
| S.K.5 土器2 | 9 | 0.5 | 水洗 |
| S.K.5 土器3 | 45 | 2.8 | 水洗 |
| S.K.5 土器5 | 66 | 5.0 | 水洗 |
| S.K.5 土器6 | 4 | 0.8 | 水洗 |
| S.K.6 地上 | 7 | 1.6 | |
| S.K.6 土器 | 9 | 3.0 | |
| S.K.6 土器1 | 26 | 1.1 | 水洗 |
| S.K.6 土器2 | 24 | 1.1 | 水洗 |
| S.K.6 土器3 | 35 | 1.3 | 水洗 |
| S.K.9 土器1 | 11 | 0.2 | 水洗 |
| S.X.1 土器1 | 9 | 2.3 | 水洗 |
| S.X.1 土器2 | 11 | 0.1 | 水洗 |
| S.X.1 土器3 | 3 | 0.1 | 水洗 |
| S.X.1 土器4 | 31 | 0.1 | 水洗 |
| S.X.1 土器5 | 3 | 0.1 | 水洗 |
| S.P.14 土器1 | 21 | 0.8 | 水洗 |
| 表 3 | 1 | 0.6 | |

「重量の単位は『g』である。」

炭化物の同位体分析 吉田邦夫氏には、年代測定とともに、2点の土器の内部に付着した炭化物を対象として同位体分析も実施していただいた。再葬墓の壺形土器に残された煮沸痕については、「埋葬と直接関連するものを煮た」として「煮たのは人肉であった可能性」[春成1993]が提起されており、この想定を検討することを主目的とする。あるいは、「人肉」とは異なるにしても、特定の食糧を示すような値が得られるのか、興味が持たれた。

参考文献

- 春成秀解 1993 「弥生時代の再葬制」[国立歴史民俗博物館研究報告 第49集 47-90頁]

1 泉坂下遺跡から検出された動物遺存体の同定

小宮 孟(慶應義塾大学)

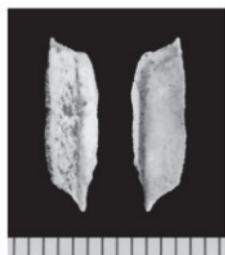
泉坂下遺跡から検出された動物遺存体は、いずれも灰色～灰白色に変色した小破片で、骨表面に破裂痕や亀裂が観察されることから、長時間にわたり高温の火を受けたものと推定される。原形が残されていないので、詳細は不明であるが、中型哺乳類の肢骨や頭骨が長時間の被熱により細片となり、無機化したものだけが保存されたと考えられる。同定できた資料は、第13表の5点である。

第13表 同定できた動物遺存体

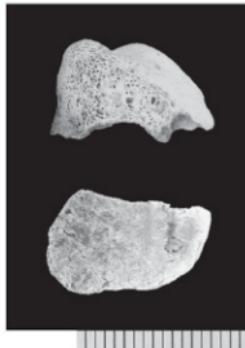
| 番号 | 遺物番号 | 出土位置 | 種名および部位 |
|----|--------|--------------|----------------------|
| 1 | Ni 209 | S.K 2 土器 4 内 | 若齢中型哺乳類の歯牙破片 |
| 2 | Ni 209 | S.K 2 土器 4 内 | 若齢中型哺乳類の歯牙破片 |
| 3 | Ni 009 | S.K 3 横土 | イノシシ? 頭骨底部破片? |
| 4 | Ni 114 | S.K 6 横乱 | 若齢中型哺乳類の肢骨骨端部(骨端膜重複) |
| 5 | Ni 009 | II区B層 | シカ肢骨滑車部 |



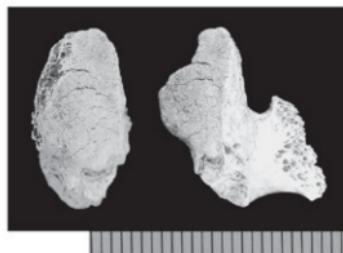
1 若齢中型哺乳類の歯牙破片



2 若齢中型哺乳類の歯牙破片



3 イノシシ? 頭骨底部破片?



4 若齢中型哺乳類の肢骨骨端部



5 シカ肢骨滑車部

泉坂下遺跡出土の動物遺存体 (縮尺 1・2:約3倍, 3~5:約2倍)

2 泉坂下遺跡出土土器内より抽出した炭化物に関する分析結果

細谷 奎(総合地球環境学研究所)

本遺跡では、弥生時代の再葬墓の墓壙(S K 1～6)を中心に、「性格不明遺構」(S X 1)および平安時代の住居跡(S I 1)も含めて、多くの壺形土器が出土している。これらの土器内の土は、再葬された人骨の検出および副葬品の検出のために、すべて水洗されたが、そこから多くの炭化物も検出できた。これら炭化物が、再葬行為にかかわる何らかの活動の痕跡を示している可能性もあるため、分析を行うことになった。炭化物は、3mm以上の大きさのものすべてが収集された。

炭化物の分析結果は、第14表に示した。出土炭化物全体の傾向として、縦管束の跡が見られる木片と、それとは明らかに異なる形状の何らかの植物片とが、半々くらいの量で大半を占めている。後者の植物片は、球形の一部をなすような形状のものが多く、堅果類の果皮の可能性もあるが、穀斗や花柱のような、種の特徴を示す部分は見られなかった。ただし、表面の凸凹のパターンなどの構造について、同一のものが複数のサンプルにわたって見られる例が何種類かあったので、それらは(A)～(C)として分類し[写真6～8]。出土状況を第14表内に示した。これら(A)～(C)の出土は再葬墓であるS K 1～6にのみ共通しており、時代または遺構の性格の違うS K 9、S X 1、S I 1には見られない。この事実は、再葬墓の土器には共通した由来をもつ土壙が入っていることを示すと考えることができる。人工遺物の出土状況から、再葬墓土器内の土壙は主に、再葬墓の覆土であった縄文時代の土壙が流れ込んだものと解釈されている。炭化有機物の出土状況も、この見解と矛盾しない。

炭化種子については少量の出土が見られた。全体で6点の種子と、種子の可能性がある遺存体1点が確認されている[第14表、写真1～5]。出土種子のうち、農耕活動に関係する物は、コメ、コムギ、オオムギである。オオムギについては、平安時代の住居跡S I 1からのみ出土しており、遺存状態も傑出して良い[写真3]。住居内に貯蔵された穀物の残存かもしれない。再葬墓の土器からは、遺存状態のあまり良くないコメ、コムギ各1点[写真1(下)、2(下)]、および、コメ、コムギの可能性がある種子片各1点[写真1(上)、2(上)]の計4点が、別々

の土器から抽出された。このうち、コムギの可能性がある種子片が出土したS K 1土器1以外の土器は、胴-頭部を欠損しており、炭化種子は後世に混入した可能性が高い。

S K 1土器1(人面付土器)は、泉坂下遺跡の再葬墓を2時期に分けたうちの、新しい時期に属する。サイズが大きいせいもあるが炭化物の全体量もきわだって多く、遺存状態も比較的良好である。したがって、後世の縄文時代由來の覆土の流入は鑑みながらも、出土したコムギ(?)種子片が、再葬墓の中に意図的に入れられた穀粒の残存である可能性を、考える余地はある。ただし、この土器内から出土した人工遺物については、再葬墓そのものの時代である弥生中期のものと判断される例はないので、確言はできない。

日本の先史時代のコムギは、遺存体の出土数はオオムギより少ないものの、群馬県、長野県、東京都、石川県などで縄文時代遺跡から出土の報告がある(小畠編2007)。弥生時代になるとその存在は確実になり(加藤2010)、青森県、山梨県、山口県、福岡県などから出土している(小畠編2007)。愛媛県鶴ヶ岬遺跡出土の70粒のコムギは、年代測定で紀元前200年のものとされた(加藤2010参照)。再葬墓が作られた弥生時代中期の泉坂下遺跡周辺でも、日常的なコムギ栽培が行われていた可能性は十分にある。S K 1土器1から出土したコムギ(?)種子が、意図的に入れた穀粒か、そうでなくとも何らかの理由で再葬墓の埋葬時にに入ったものであるなら、当時の周辺地域での細作穀物の重要性あるいは普遍性を示す一環と考えられるだろう。

参考文献

- 小畠弘己編(2007年)『日本考古学会2007年度熊本大会 II 分科会 列島初期農耕史の新視点 種子出土遺跡地名表データ集』熊本大会実行委員会
加藤謙司(2010年)「コムギが日本に来た道」佐藤洋一郎・加藤謙司編『友の自然史：人と自然が育んだムギ農耕』北海道大学出版会 113～136頁

第14表 泉坂下遺跡出土の主な炭化物

| No | 遺構 | 出土場所 | 炭化物重量(g) | 種子 | 不明植物片 (複数サンプルに共通する物) | No | 遺構 | 出土場所 | 炭化物重量(g) | 種子 | 不明植物片 (複数サンプルに共通する物) |
|-----|------|-------|----------|--------|-------------------------|-----|--------|------|----------|--------|-------------------------|
| 201 | SK 1 | 土器 1 | 4 | コムギ? 1 | (A) 1, (B) 2 | 239 | SK 3 | 土器 7 | < 1 | — | — |
| 202 | SK 1 | 土器 2 | 1 | — | — | 241 | SK 4 | 土器 1 | < 1 | — | — |
| 203 | SK 1 | 土器 3 | 1 | — | — | 225 | SK 4 | 土器 2 | < 1 | — | — |
| 204 | SK 1 | 土器 4 | 2 | — | (B) 3 | 226 | SK 4 | 土器 3 | < 1 | — | (A) 1 |
| 205 | SK 1 | — | < 1 | — | — | 227 | SK 4 | 土器 4 | 1 | — | (A) 1 |
| 206 | SK 2 | 土器 1 | 2 | — | (A) 5 | 228 | SK 4 | 土器 5 | 2 | 不明種子 1 | (A) 2 |
| 207 | SK 2 | 土器 2 | 2 | — | — | 229 | SK 4 | 土器 6 | 1 | — | — |
| 208 | SK 2 | 土器 3 | 2 | — | — | 249 | SK 4 | 土器 7 | < 1 | — | — |
| 209 | SK 2 | 土器 4 | 3 | — | (C) 1 | 230 | SK 4 | 土器 8 | < 1 | — | — |
| 210 | SK 2 | 土器 5 | 4 | — | (A) 3 | 231 | SK 5 | 土器 1 | 2 | — | — |
| 211 | SK 2 | 土器 6 | 1 | — | — | 232 | SK 5 | 土器 2 | < 1 | 種子? 1 | (A) 1 |
| 212 | SK 2 | 土器 7 | 3 | — | (A) 1 | 233 | SK 5 | 土器 4 | 1 | — | (A) 1 |
| 213 | SK 2 | 土器 8 | 2 | コメ? 1 | (A) 3 | 234 | SK 5 | 土器 5 | 3 | — | (A) 1, (C) 1 |
| 214 | SK 2 | 土器 9 | 2 | — | (A) 2 | 235 | SK 5 | 土器 6 | < 1 | — | — |
| 215 | SK 2 | 土器 10 | 3 | — | — | 245 | SK 5付近 | B層 | < 1 | — | — |
| 216 | SK 2 | 土器 11 | 2 | コムギ 1 | — | 246 | SK 5 | 覆土 | < 1 | — | — |
| 217 | SK 2 | 土器 12 | 1 | — | — | 236 | SK 6 | 土器 1 | 2 | — | (A) 1, (B) 1 |
| 218 | SK 2 | 土器 13 | 3 | — | — | 237 | SK 6 | 土器 2 | 1 | — | — |
| 219 | SK 2 | 土器 14 | 3 | — | — | 238 | SK 6 | 土器 3 | 4 | コメ 1 | (A) 1 |
| 220 | SK 3 | 土器 1 | < 1 | — | (A) 1 | 250 | SK 9 | 土器 1 | < 1 | — | — |
| 221 | SK 3 | 土器 2 | < 1 | — | — | 242 | SI 1 | P14 | < 1 | — | — |
| 222 | SK 3 | 土器 3 | 1 | — | — | 243 | SI 1 | P15 | < 1 | — | — |
| 223 | SK 3 | 土器 4 | < 1 | — | — | 244 | SI 1 | P16 | 1 | — | — |
| 247 | SK 3 | 土器 5 | < 1 | — | — | 240 | SX 1 | 土器 4 | < 1 | オオムギ 1 | — |
| 248 | SK 3 | 土器 6 | < 1 | — | (B) 1 | 241 | ? | 土器 1 | < 1 | — | — |



写真1 (上)コムギ? [SK 1土器1] (下)コムギ [SK 2土器11]



(上)コメ? [SK 2土器8] (下)コメ [SK 6土器3]



写真3 オオムギ [SX 1土器4]

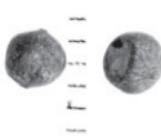


写真4 不明種子 [SK 4土器5]



写真5 種子? [SK 5土器2]

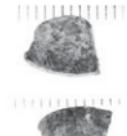


写真6 植物片(A) [SK 1土器1]



写真7 植物片(B) (上)SK 1土器4 (下)SK 3土器6



写真8 植物片(C) (上)SK 2土器4 (下)SK 5土器5

※ 写真のひと目盛りは1 mm

植物片(A)【表面がざらざらしている】 植物片(B)【表面に網の目状の凹みがある】 植物片(C)【表面に深い縦状の凹みがある】

3 泉坂下遺跡第5号墓壙土器1に伴う赤色物質の分析

渡辺美登里(九州大学中央分析センター)・谷口陽子(筑波大学大学院人文社会科学研究科)

泉坂下遺跡第5号墓壙土器1内から得られた赤色物質試料の分析結果を以下に示す。分析は、九州大学中央分析センターにて実施した。

まずエネルギー分散型蛍光X線装置(島津製作所製EDX-800)を用いて、定性定量分析を行った。X線管球はRh、分析時間は100秒、He雰囲気、測定領域は10mm²である。定量にはFP法を用い、酸化物として算出した値は下記のとおりである。

| | | | |
|--------------------------------|--------|-------------------------------|--------|
| Fe ₂ O ₃ | 76.54% | P ₂ O ₅ | 0.491% |
| SiO ₂ | 14.11% | MnO | 0.460% |
| Al ₂ O ₃ | 7.97% | CaO | 0.420% |

試料の主成分は酸化鉄であり、他にケイ素、アルミニウム、微量なマンガン、カルシウム等が検出された。

次に、粉末X線回折装置(リガク製MultiFlex)を用いて、試料の結晶情報を得るために測定を行った。X線管球はCu、分析は2θ=3.90°、0.01°/0.6secで行った。分析結果は第95図に示す。Iron Oxide [ICDD: 89-7047: Fe₂O₃]、Stishovite [ICDD: 82-1646: SiO₂]、また微量成分としてIron Oxide Hydroxide [ICDD: 26-0792: FeOOH]、Akaganeite [Fe³⁺O(OH)]等が存在する可能性が考えられた。

以上の分析結果から、赤色物質の主成分は酸化第二鉄(Fe₂O₃)であり、他にも鉱物等に由来する微量成分が含有されていることが確認された。一般的に赤色顔料を利用される土性顔料であるオーカーの場合、粘土分が多く含まれていることが特徴である。しかし、今回分析を行った赤色物質については、粘土分が少なく、鉄成分が多く検出されたことから、オーカーではない物質の可能性が示唆された。そこで、赤色物質の形態観察を走査電子顕微鏡(日立ハイテクノロジーズ製SU8000)を用いて行った。無蒸着、加速電圧1kVで観察した結果は写真1～4の通りである。

その結果、赤色物質は、径は1μm程度で、長いものは20μm程度の中空円筒状の物質が多数集合したものであり、いわゆる「パイプ状ベンガラ」と呼ばれる赤色物質に類似した形状であることが確認された。「パイプ状ベンガラ」は、湖沼に生息する鉄バクテリアを集めて人工

的に焼成して作る赤色の酸化鉄として知られており、鉄バクテリアは、水溶性の二価の鉄イオンや二価のマンガニイオンを酸化して鞘状殻に固定する。写真4に見られるように、珪藻類似の構造を示す断片も観察された。縄文時代や弥生時代のパイプ状ベンガラのなかに珪藻断片が観察される事例については報告例もあり、鉄バクテリアが水の停滞しやすい湖沼や湿地等の環境で綿層状に浮遊生息していること珪藻の存在が関連付けられている(岡田1997)。本赤色物質についても、原料が水生環境由来の物質から得られたものである可能性が高い。

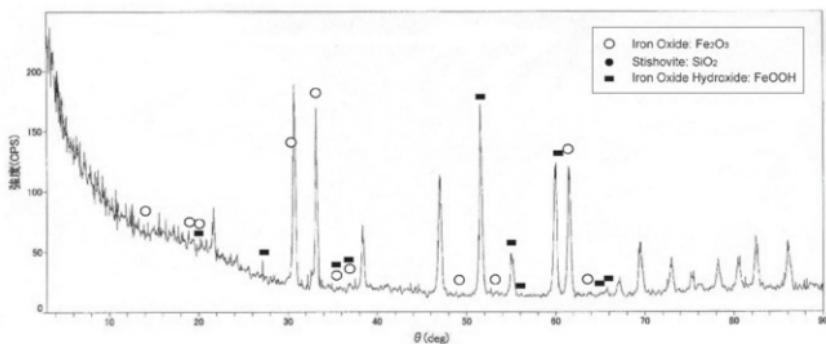
このような鉄バクテリアを起源とする人工的な赤色物質は、少なくとも縄文時代早期から古墳時代にかけて、日本列島において広くその利用が認められている。

一般的にベンガラとして総称される鉱物系のヘマタイトを多く含んだ土性のオーカーは、赤色といつても、レンガのような赤茶褐色に近いものであり、水銀朱のような鮮やかな赤色とは大きく異なる。一方で、パイプ状ベンガラのように、水酸化鉄の状態で多く鉄分を含んだ物質を800°C以上の温度で焼成したものは、鮮やかな赤を呈することが知られている(降幡・沢田1997)。天然の鮮やかな土性赤色オーカーや水銀朱の産出量が比較的少ない日本列島にあって、発色の良い赤色入手するために、人工的な手法を採用したのかもしれない。

いずれにしても、先史時代から古墳時代にかけて、日本列島で使用されてきた赤色には、土性赤色オーカー(いわゆるベンガラ)、水銀朱、パイプ状ベンガラの三種があったと考えられる。その中でも今回分析した赤色物質のようなパイプ状ベンガラは、人工的に焼成という工程を経て得られる鮮やかな赤色であり、まさに第三の赤色として位置づけることができるだろう。

岡田文夫(1997)「パイプ状ベンガラの復元」『日本文化財科学会 第14回大会 研究発表要旨集』38-39、日本文化財科学会

降幡順子、沢田正昭(1997)「酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究」『日本文化財科学会 第14回大会 研究発表要旨集』76-77、日本文化財科学会



第95図 赤色物質のX線回折パターン



写真1 赤色物質の電子顕微鏡像(二次電子像)：パイプ状物質

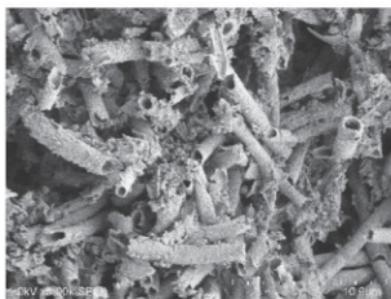


写真2 赤色物質の電子顕微鏡像(二次電子像)：パイプ状物質

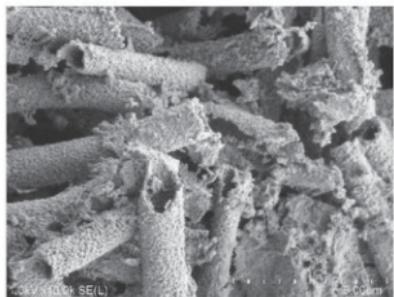


写真3 赤色物質の電子顕微鏡像(二次電子像)：パイプ状物質

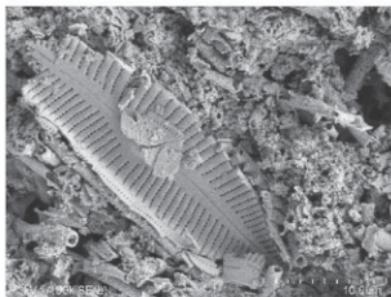


写真4 赤色物質の電子顕微鏡像(二次電子像)：珪藻類似の断片が含まれている

4 土器付着炭化物の放射性炭素年代

吉田邦夫(東京大学)

1 はじめに

2006年に実施された常陸大宮市泉坂下遺跡の発掘調査において、弥生時代中期の再葬墓が検出された。再葬墓の7基の墓壙からは46個体の土器が出土している。再葬墓から検出された壺形土器には、内外面に黒色物質が付着しているものが多い。土器外側の胴部中央付近にはススが付着し、それより下方が加熱により赤みを帯びる。土器内側の胴部下方にも煮焦げたような炭化物が付着している、とされる。このうちの2個体から測定資料を採取して、年代測定を行った。

2 測定資料

2009年11月13日に、土器付着炭化物2点の提供を受けた。

【資料1】(写真 卷頭XI)

弥生時代中期の再葬墓とされる第3号墓壙には、7個体の壺形土器が埋納されていた。その一つの土器4には、内面と外面に炭化物が付着していた。内面の炭化物が採取された。

【資料2】(写真 卷頭IX・X)

第2号墓壙に埋納されていた14個体の壺形土器のうち、土器2の内面から採取された土器付着炭化物。

3 汚染の除去

基本はAAA(酸-アルカリ-酸)処理によって、埋藏中および出土後に外から加わった炭素を除去することである。まれに、AAA処理だけでは除去できない有機物が残り、古い年代を示すことがある。有機溶剤を使うと除去できることが多い。有機溶剤としてアセトンを約3ml加え、1分間超音波洗浄、10分放置し、1分間超音

波洗浄し、遠心分離してアセトンを除く。この処理を2回繰り返し、ミリQ水で3回洗浄した後、AAA処理を行った。接合資料の場合は、セメダインなどの接着剤が残っていることがあり、また、拓本に使われた材料が吸着している場合があると考えられるので、これらを除去する操作である。

AAA処理におけるアルカリ濃度は、資料が全て溶解してしまわないようにすることが肝要である。水酸化ナトリウム水溶液の濃度と温度を慎重に変えながら処理を進める。(1) 0.001mol/l、室温5分間。(1') 80°Cで10分間加熱。(2) 0.005mol/l、80°Cで30分間加熱。(3) 0.01mol/lと徐々に濃度を高める。溶液が真っ黒になり全部溶けそうになったらそこで処理を止める。今回の資料は、(3)まで終了した。酸処理は通常通り行った。

採取した資料の質量、化学処理の収率は、それぞれの資料ごとに、第15表に示した。AAA処理の回収率は60%前後、また処理後の炭素含有量も65%前後で、適切な汚染除去、測定試料の抽出が行われたと思われる。

4 測定用試料の調製

資料は石英ガラス管に入れ、酸化銅(II) 1gを加え、真空にしてバーナーで封じた。またこの時、酸化により同時に発生する硫酸化物を除去するための銀箔を入れておく。このガラス管を、電気炉に入れ、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱し、資料中に含まれる炭素をすべて酸化し二酸化炭素にした。このようにして得られた二酸化炭素を精製し、鉄触媒の存在下で水素によって還元してグラファイト-鉄混合試料を生成し、AMS測定を行う。資料の酸化、二酸化炭素の精製、還元、測定試料の充填などの操作は、年代測定室の定法に従って行

第15表 資料の質量、化学処理

| 資料番号 | 質量 | | | 回収率 (%) | 酸化 使用量 (mg) | CO ₂ 生成量 (C mg) | CO ₂ 収率 炭素含有量 (%) | CO ₂ 使用量 (mg) |
|------|--------------|----------------|----------------|------------|-------------------|----------------------------------|------------------------------------|--------------------------------|
| | 持ち込み (mg) | ピックアップ (mg) | AAA処理後 (mg) | | | | | |
| 1 | 338.0 | 436 | 276 | 633 | 24 | 1.6 | 68.5 | 12 |
| 2 | 198.6 | 439 | 249 | 567 | 22 | 1.4 | 64.8 | 10 |

第16表 年代測定結果、暦年較正範囲

| 資料番号 | 資料 | ^{14}C 年代 | $\delta^{14}\text{C}$ | 較正暦年 cal BC | 較正暦年 cal BC | 測定番号 | $\delta^{13}\text{C}$ EA-MS |
|------|-------|--------------------|-----------------------|--------------------|--------------------|-------|--------------------------------|
| | | BP ± 1 σ | % | ± 1 σ 複数(信頼率) | ± 2 σ 複数(信頼率) | | |
| 1 | 第3号墓壙 | 2180 ± 40 | -382 | 360 ~ -285 (40.7%) | 380 ~ -155 (92.6%) | 15001 | -23.4 |
| | 土器4 | | | 235 ~ -175 (27.5%) | 140 ~ -110 (-28%) | | |
| 2 | 第2号墓壙 | 2085 ± 35 | -31.8 | 165 ~ -130 (21.6%) | 200 ~ -35 (93.1%) | 15002 | -22.0 |
| | 土器2 | | | 120 ~ -50 (46.6%) | 30 ~ -20 (-10%) | | |
| | | | | | 15 ~ -1 (-13%) | | |

った(吉田 2004)。

5 測定

測定は、東京大学工学系研究科原子力国際専攻のタンデム加速器研究設備MALTに設置されているAMS装置を用いて行った。加速電圧4500 MVで、高速逐次入射法(ジャンピング法)により、荷電変換後のC⁴⁺を用いて¹⁴C/¹²C比および¹³C/¹²C比を測定した(¹⁴Cの測定時間の合計は300秒)。この測定を5回行う。5回の測定値のばらつきが統計誤差内にあるとき(χ²検定)は、¹⁴Cの総計数値に基づく測定値の統計誤差から求めた値を誤差としている。標準試料は、米国NISTシュウ酸(SRM4990C: Oxalic Acid II, HOxII)とANUスクロースを併用した。試料調製を含めたAMSシステムのバックグラウンドは、国際原子力機関(IAEA)発行の標準試料C1 (marble: 大理石)から作成した測定試料を用いて推定した。通常、¹⁴C/¹²C = 1.0 × 10⁻¹⁵、¹³C/¹²C = 9 × 10⁻¹⁴で、約55万年BPに相当する。すべての測定試料の測定値から、このバックグラウンド値を差し引いて、年代値を算出した。

6 測定結果

測定結果を、第16表に示す。半減期はLibbyの値5568年により年代を決定した。全ての年代値は、 $\delta^{13}\text{C}$ による同位体分別補正を行った放射性炭素年代値(Conventional Radiocarbon Age)である。補正是加速器で測定した $\delta^{13}\text{C}$ 値を用いている。

第3号墓壙の土器4から採取した資料1は、2180 ± 40 BP、第2号墓壙の土器2から採取した資料2は、2085 ± 35 BPとなり、資料1の方が、見かけ上約100年古いという値が得られた。実は、放射性炭素年代の算出には実際とは異なる半減期を用いており、さらに過去の¹³C濃度は一定ではなかったので、算出された放射性炭素年代の測定値は、実際の年代とは異なることになる。考

古学研究者の中には、測定値(BP値)をそのまま用いて、2180BPという年代値を、AD1950 - 2080 = 130BCと考える傾向があるが、大きな誤りである。次節で述べるように、陸上資料の場合は、過去の大気中¹⁴C濃度に基づいた暦年較正曲線によって暦年較正しないと、実際の年代を求めることが出来ないのである。

7 暦年較正

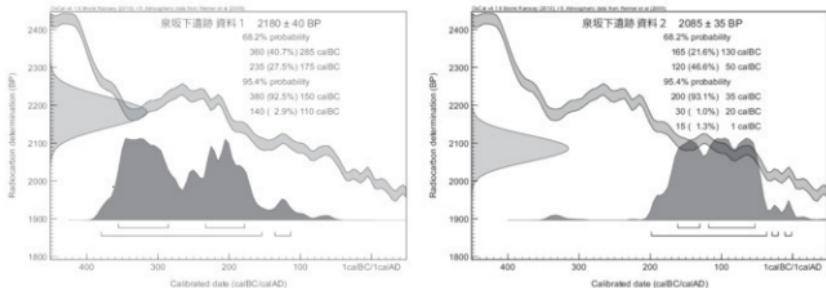
暦年代較正曲線IntCal09に基づき、較正プログラムOxCal 4.1.6 (Ramsey 2010)を用いて暦年較正を行った。IntCal09は、12549cal BPまでは、樹木の年輪を使って較正曲線を作成している。つまり、年輪年代で12549年前(AD1950年を基準として)を意味している。この年輪資料を測定した放射性炭素年代値は、10564BPであった。それより古い年代は、サンゴや有孔虫などの海洋資料を用いている。cal BP (または、cal BC)は、calibrated BP (BC)の略で、暦年較正BP (BC)を表している。陸上資料の暦年較正にはこのIntCal09を使用する。

各資料についての暦年代較正結果を第96図に示す。また、両資料の関係を第97図に、さらに、暦年代較正曲線IntCal09上で、どのような関係になるかを第98図に示した。このようにして得られた較正暦年代の範囲を、第16表に書き加えた。

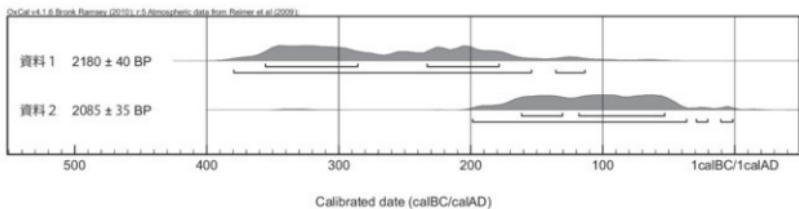
8 年代値が意味するもの

資料1と資料2では、測定値で約100年の差を示している。暦年較正年代は、信頼率95%の領域で考えると、資料1は380 ~ 110calBP、資料2は200 ~ 1 calBPとなり、200 ~ 110calBPの領域が重なるものの、中心部分には100年以上の隔たりがあるよう見える。

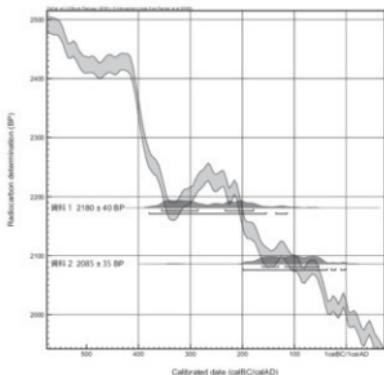
まず、放射性炭素年代値が古くなる可能性について検討する必要がある。海産物を煮炊きすると、海洋リザーバー効果により、実際の年代より古い年代値を示すこと



第96図 各資料の暦年較正結果



第97図 暦年較正結果の比較



第98図 暦年代較正曲線上での年代測定値と
暦年較正結果

が知られている。海洋生物の年代値は、同じ時代に生きていた陸上の生物にくらべて、一般に約400年古い値が得られる。これは、海水中の ^{14}C 濃度は、海の深いところの古い海水と混じり合うために、大気中の ^{14}C 濃度に

比べて低くなることがもたらす結果である。海産物の炭素安定同位体比 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、大きいことが知られている(別章を参照)。第16表にあるように、質量分析計(EA - MS)で測定した値はやや大きいが、資料1が $-23.4\text{\textperthousand}$ 、資料2が $-22.0\text{\textperthousand}$ と、むしろ新しい年代を示す資料2の方が大きい値を示している。詳細は次章で検討するが、海産物の影響はないと考えてよい。

さて、両者は、異なる墓壙から出土している。資料1と資料2の間に、実際に100~200年の年代差があると考えることも出来る。その場合、いくつかの可能性が考えられる。第3号墓壙では、7点の土器のうち6点が土壙の底面から、1点が覆土中から出土している。資料1の土器は底面から出土しており、埋納には時間差があるので、第3号墓壙と第2号墓壙の埋納年代に差があったと考えることも出来る。さらに、後述するように、出土した壺形土器は、煮炊きに使用されたものを再利用していたと考えられるので、古い時代に煮炊きした土器を第3号墓壙に埋納し、比較的新しい時代に使われていたものを、第2号墓壙に埋納したのである。埋納年代に差は

ないとすることも出来る。

一方、もう一つの考え方は、曆年較正年代には大きな差はない、つまり同時代に煮炊きした土器が埋納されたとするものである。第98図に、この年代領域の曆年較正曲線IntCal09によって、どのように曆年較正が行われたのかを示す。資料1の較正年代領域に、4世紀BCが含まれるのは、330BC頃を谷底にするように較正曲線がたわんでいることによっている。両資料が、同時代性を持つものとすると、資料1については、曆年較正領域は、右側の部分を取りべきで、年代差があったとしても、数十年に収まる可能性がある。

弥生時代中期について、関東北部の年代測定値は持ち合わせていないが、関東南部の宮ノ台式(IV期)についての年代値が報告されている。

千葉県佐倉市太田長作遺跡から出土した宮ノ台式土器のススを測定した値は、 2065 ± 35 BP (MTC-0551), 2190 ± 35 BP (MTC-05554), 2080 ± 35 BP (MTC-0555)である(西本 2009)。今回の年代値と同様な傾向を示している。ススを測定しているので、燃料として用いた薪の古木効果が現れている可能性もあるが、今後の検討が必要である。

第3号墓壙や他の墓坑から出土した土器の付着物を、もう2,3点測定すると、全体像が見えてくる可能性がある。

これらのことを考慮すると、再葬された時期は、さかのぼったとしても、紀元前2世紀以降ということになるだろう。

参考文献

- 吉田邦夫(2004)「火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代」『火炎土器の研究』新潟県立歴史博物館編 同成社
p.17-36
- Ramsey B. (2010) OxCal 4.1.6
- 西本豊弘編(2009)『弥生農耕の起源と東アジア-炭素年代測定による高精度編年体系の構築- 平成16~20年 文部科学省・科学研究費補助金 学術創成研究費 研究成果報告書』
p.232-233

5 土器付着炭化物の同位体分析

吉田邦夫(東京大学)

1 はじめに

泉坂下遺跡で検出された弥生時代中期の再葬墓から出土した壺形土器の多くには、内外面に黒色炭化物が付着している。土器外側の胴部中央付近にはススが付着し、それより下方が加熱により赤みを帯びる。土器内側の胴部下方にも煮焦げたような炭化物が付着している、とされる。前節では、その年代測定について報告した。他の遺跡でも、再葬墓から検出された土器は、内外面に炭化物が付着している例が多く見られる。何らかのものを煮炊きした痕跡であることは明らかである。日常生活で使用されたものを、転用した可能性があるが、春成秀爾は、「再葬墓出土の壺や甕が受けた火炎は、基本的に再葬と関連づけて説明すべきだろう」としている。さらに、千葉県佐倉市岩名天神前遺跡1号墓1号壺の中から出土した脛骨片について、「土器に納める時は骨だけになっていたのであろう」として、「付着物などの脂肪酸分析による証明はまだ出来ていないが、私は、甕や壺で煮たのは、人骨であった可能性も推定する」と述べている(春成1993)。ここでは、土器付着炭化物の正体に迫るために、年代測定を行った資料について、炭素・窒素安定同位体比の測定を行い、煮炊きしたものと推定した。その結果を報告する。

2 炭素・窒素同位体比は何を示すか

2.1 炭素同位体比

天然に存在する炭素の安定同位体存在度は、 ^{13}C が98.90%、 ^{12}C が1.10%である。ところが、詳細に見ると、光合成回路の違いや食物連鎖の段階などによって、植物や動物の種類で微妙に変化している。

生物は、大きく分けて植物と動物によって構成される。菌類を除く植物は、クロロフィル(葉緑素)をもつていて、空気中の二酸化炭素を取り込んで光合成(炭酸同化)を行う。植物の種類によって、この光合成の過程が異なるために、炭素の同位体比が違うグループが存在する。化学反応の過程で、同位体効果が生じているのである。これは、同位体の質量の違いによって生じるもので、一般に軽い同位体ほど反応速度が大きくなる場合が多い。これ

が同位体分別効果である。この結果、反応生成物の同位体の比率が変化する。

大部分の植物(草本、樹木)はC₃植物と呼ばれるグループに属するが、ヒエ、アワなどの植物は、C₄植物と呼ばれる炭素同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)が大きい(^{13}C の割合が大きい)一群を形成している。

C₃植物は、カルビン・ベンソン回路によって、炭素数3のホスホグリセリン酸を入り口として炭素数6の糖を合成する。これに対して、熱帯原産のイネ科を中心として、サトウキビやトウモロコシを含むC₄植物は、炭素数4(C₄)のジカルボン酸であるリンゴ酸やアスパラギン酸を初期産物とするハッチ=スラック回路を利用している。さらに、ベンケイソウ、サボテンなどの多肉植物は、夜間にC₄ジカルボン酸による炭酸固定が行われ、昼間カルビン回路で再固定されるベンケイソウ型有機酸代謝(CAM)と呼ばれる代謝を行っている。

様々な資料の炭素同位体比を表すために $\delta^{13}\text{C}$ という値を用いている。 $\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて資料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定するのだが、その値の変化が小さいので、PDBを基準($\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}=0$)として、それからのずれを計算し、千分率(‰)で表したものである。

PDB (Peedee formation Belemnite)：米国サウスカロライナ州Peedee層から産出した白亜紀に生きていたイカの仲間ペレムナイト(矢石)類の化石中の炭酸塩

$$\delta^{13}\text{C} = \frac{^{13}\text{R}_{\text{sample}}}{^{13}\text{R}_{\text{PDB}}} \times 1000 ; \quad ^{13}\text{R} = \frac{^{13}\text{C}}{^{12}\text{C}}$$

大気中の二酸化炭素の $\delta^{13}\text{C}$ は、およそ-8‰とされる。二酸化炭素中の重い同位体 ^{13}C が、標準物質より $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の比で8/1000だけ少ないことを示している。化石燃料から発生する二酸化炭素は重い同位体が少なく、また、各種呼吸によって排出される二酸化炭素も重い同位体が少ないので、都市や地表付近では $\delta^{13}\text{C}$ が小さな値を示す。

樹木などのC₃植物は、 $\delta^{13}\text{C}$ がほぼ-23~-33‰に分布している。例えば、イネ、コムギ、オオムギなどの穀物、クリやトチなどの木本とその種実、ヤマイモ、クロ

レラ、ホウレンソウ、ダイズ、などを含むほとんどすべての植物が該当する。

一方C₄植物は、約-10~-15‰の値を示す。熱帯原産のイネ科を中心としたカヤツリグサ科その他の單子葉植物および双子葉植物を含む20科、1200種以上の植物が知られている。キビ、アワ、ヒエ、エノコロ、トウモロコシ、サトウキビ、ウシクサ、カヤ、スキ、オギ、ジユズダマなどのイネ科、ハマスゲ、カヤツリグサなどのカヤツリグサ科等の單子葉植物、ヒユ科、ハマビシ科、トウダイグサ科、ツルナ科、アカザ科、オシロイバナ科、キク科などが、その代表である。

一方、ベンケイソウ科、サボテン科、アナス科、ラン科、パイナップル科、スペリヒユ科などの被子植物、シダや裸子植物を含む112属300種がCAM植物に分類されている。このグループのδ¹³C値は、C₃、C₄植物の値に重なる。しかし、食糧資源としての重要性は、C₃、C₄植物にくらべるときわめて低いので、考古学分野において分析対象にされることはほとんどないと考えてよいだろう。

2.2 窒素同位体比

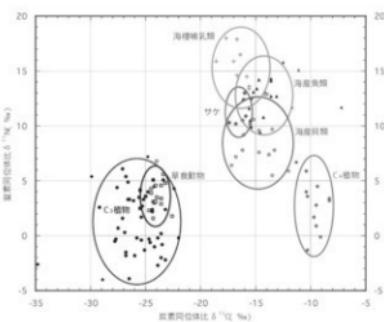
また、窒素も二つの同位体、¹⁴N (99.63%)、¹⁵N (0.37%)が存在する。δ¹⁵Nは、大気中の窒素ガスを標準物質 (δ¹⁵N_{N2}=0)として、炭素同位体比と同様に、それからのずれを千分率(‰)で表したものである。

$$\delta^{15}\text{N} = \frac{^{15}\text{R}_{\text{sample}} - ^{15}\text{R}_{\text{Air}}}{^{15}\text{R}_{\text{Air}}} \times 1000 ; ^{15}\text{R} = \frac{^{15}\text{N}}{^{14}\text{N}}$$

窒素固定植物であるマメ科植物は、共生細菌(根粒菌)により大気中の窒素を直接取りこんでいるが、大部分の植物は、大気中の窒素ガスを直接利用できないので、土壤中の硝酸塩、アンモニウム塩を吸収し同化する。窒素においても、炭素と同様にほとんどの反応で重い同位体が少なくなるが、窒素固定反応では逆の場合も起きる。また、炭素にくらべると分別は小さい。土壤表面では、δ¹⁵Nの平均は9.2‰とされている(半場 2009)。

2.3 動物の炭素・窒素同位体比

植物の体内に取りこまれ生成した有機化合物の炭素・窒素は、植物から1次消費者、2次消費者へと伝達される食物連鎖の過程を経て、同位体比も伝達されていく。動物体内では、さらに同位体分別が起こり、動物組織の炭素・窒素同位体比は、食物にくらべて炭素で約



第99図 食糧資源の炭素・窒素同位体比

0.8~13‰、窒素で3~5‰高くなることが明らかになっている(Bocherens, et al. 2003)。窒素のδ¹⁵N値が大きくなるのは、尿素に含まれる窒素には軽い同位体が多く、排泄により肉体の¹⁵N濃度が高くなると説明されてきたが、最近、これと異なる実験結果も報告されている(Sponheimer, et al. 2003)。

食物連鎖で上位に位置する動物の同位体比は、分別の蓄積によって炭素、窒素ともに高い値を取ることが知られている。その結果、海洋生態系では、陸上生態系にくらべて食物連鎖が長いので、魚貝類や海獣では、特に重い同位体が濃縮し高いδ¹⁵N値を示すことになる。

このように、ヒトが摂取する食料は、炭素・窒素同位体比の違いによっていくつかのグループに分類される。遺跡から出土した食糧資源について、炭素・窒素同位体比を測定した結果が、第99図である。貝類は、食べる部分が残っていないので、現生の資料から推定した。また、草食獣や海獣、魚類は、骨を用いて分析し、補正して食べる部分の値に変換している。古代人の食卓を飾る食材を構成するグループである。

C₃植物と草食獣、C₄植物、海産の貝、海水魚、海棲哺乳類のグループに分かれることがわかる。

図では、それぞれの食材グループの平均値と標準偏差を求め、平均値を中心として標準偏差の2倍の点を通るように裕円を描いているが、統計的な意味をもつものではなく、グループ領域のおおよその目安である。

2.4 炭化によって、同位体比情報は保存されるか?

土器付着炭化物は言ってみれば炭。果たして食材の情

報はどれだけ保存されているのであろうか。デンプンやタンパク質の同位体情報は失われてはいないのだろうか。この疑問に答えるために、土器を使った煮炊き実験を行った。火炎土器と同じように口縁が折がったキャリバー型の素焼き土器を制作し、一定重量の食材と水を入れ、穂やかなたき火(またはおき火)にかけ煮沸し、水がなくなるまで炊きあげた。土器は文様をつけず、器面調整だけとし、標準的なサイズである25cmほどの高さの深鉢を使った。アズキ、アワなどの種子・穀類、ドングリやトチの実などの堅果類、ユリネ、クワイ、ヤマイモなどの球根・イモ類、イノシシ、シカ、クマ、サケなどの動物・魚類など、これまでに40種類以上の食材について実験を行ってきた(西田 2006)。

その結果、炭化後にもほぼ同位体情報を保持していることがわかった(吉田ら 2007)。炭素同位体比の変動は、比較的小さい。変動の要因としては、たとえば脂質は炭水化物にくらべて約4%小さいので、加熱によって脂質が失われると残存固体は重くなることになる。

一方、窒素では、一部の資料を除いて、窒素同位体比は増加して、重い同位体¹⁵Nの割合が増している。アズキ、エゴマでは4%以上大きくなっている。タンパク質が炭化する過程での化学変化を検討する必要がある。

全体として、出土した土器片に残されたおこげは、埋蔵中に大きな統成作用(堆積物が物理的・化学的・生物学的諸作用を受けて変化する過程)を受けていなければ、炭化物の同位体組成から食材を推定することが可能であることが判明した。つまり、炭化による変化で、前述のそれぞれの食材グループを大きく飛び出すことはない、ということである。

2.5 炭素・窒素原子数比

もう一つの情報は、炭化物の炭素・窒素原子数比(C/N比)である。窒素は、たんぱく質に固有の元素であるので、純粋なデンプンなどには含まれない。デンプンを主成分とするドングリ、トチ、ジャガイモなどは、C/N=30~50の値である。その他のC₃植物は、5~20の範囲に入り、草食動物もこの領域に属するが、タンパク質の含有量が多いので、通常10以下の値を示す。また、C₄植物であるアワは、δ¹³Cの値は前述したように大きな値を示すが、C/N比はC₃植物と同様な値を示す。

つまり、土器付着炭化物について、炭素・窒素同位体

比と炭素・窒素原子数比をもとにして、煮炊きした原材料のグループを推定することが出来るのである。

3 測定資料

放射性炭素年代測定のためにAAA処理を行った資料を使用した。

【資料1】

第3号墓壙に埋納されていた、壺形土器4の内面付着炭化物

【資料2】

第2号墓壙に埋納されていた、壺形土器2の内面付着炭化物

4 実験方法

安定同位体比の測定は、IsoPrime EA安定同位体質量分析装置(Micromass, UK)を用いた。本装置は、元素分析計EuroEA 3028- HT (EuroVector S.p.A.)を前処理装置としている。

固体資料をスズ製カプセル(3.5mm φ × 5 mm)に入れ、空気が入らないように、折りたたみ封入し、オートサンプラーにセットする。1030°Cに加熱された石英ガラス製の燃焼管に投入し、同時に瞬間に酸素ガスを導入することによって、スズの燃焼熱を利用して一気に資料を完全燃焼させる。試料に含まれている炭素はすべて二酸化炭素になり、窒素は窒素酸化物になる。ヘリウムガスの流れに乗って、燃焼気体は還元管を通して、窒素酸化物だけが還元され窒素ガスとなる。二酸化炭素と窒素ガスは、小型のガスクロマトグラフを通り、通りやすい窒素ガスが先に流れる。両者は分離され、TCD(熱伝導度)検出器でクロマトグラムとして検出される。TCD検出器の信号をクロマトパック C-R8A(島津製作所)に入力して、クロマトグラムの面積計算、元素含有率の計算を行った。元素分析計の部分で、炭素・窒素含有量、C/N比を測定できる。分離された窒素ガスと二酸化炭素は、まず窒素ガスが、先に質量分析計に導入される。イオン源でプラスの電気をもつイオンに換え、数kVの電圧でイオンを加速した後に、磁石の強さを変えながら、軽くて曲がりやすい窒素N₂ガス(¹⁴N₂)と重く曲がりにくいN₂ガス(¹⁵N¹⁴N)の電流を測定して¹⁴N/¹⁵N比を求める。¹⁵N/¹⁴N比がわかっている標準窒素ガスを測定して、そ

第17表 炭素／窒素原子数比、同位体比

| 資料番号 | 炭素含有率 % | 窒素含有率 % | C/N比 | $\delta^{13}\text{C}$ ‰ | $\delta^{15}\text{N}$ ‰ |
|------|------------|------------|------|----------------------------|----------------------------|
| 資料1. | 65.9 | 4.0 | 19.1 | -23.4 | 2.7 |
| 資料2. | 63.4 | 3.3 | 22.1 | -22.0 | 2.2 |

れと比較することによって、規格化された $\delta^{15}\text{N}$ の値が決定される。遅れてやってくる二酸化炭素も同様にして分析され、炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) が自動的に測定される。1 試料の投入で、窒素と炭素の同位体比を連続して測定できるが、土器付着炭化物は C/N 比が大きい(窒素含有量が少ない)ので、別々に測定した。NC を順次連続して測定する場合は、7 ~ 8 分かかる。炭素同位体比の測定には試料 0.1 ~ 0.2 mg を、窒素同位体比の測定には、窒素含有量に応じて 0.5 ~ 6 mg を用いる。同位体比は、通常 1 回測定し、誤差は 2 回標準試料(炭素は ANU スクロース、窒素は値決めをしたグリシン)を多数回測定し、測定値のばらつきから推定している。誤差は、試料の均一性や量に依存するが、 $\delta^{13}\text{C}$ で最大 $\pm 0.4\text{‰}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ で最大 $\pm 0.7\text{‰}$ 程度である。

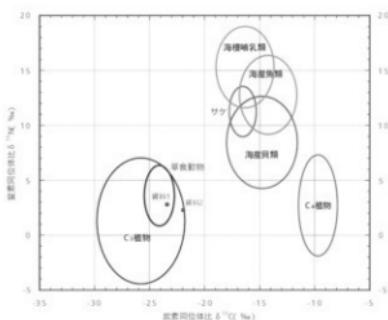
4 測定結果

土器付着炭化物資料の炭素・窒素同位体比、炭素／窒素原子数比を、第17表に示す。

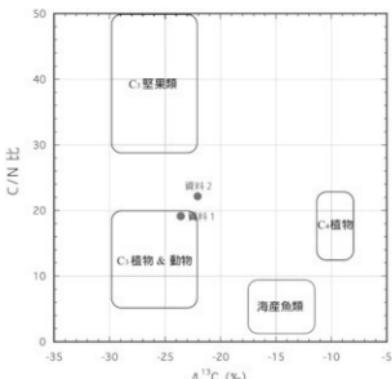
$\delta^{13}\text{C}$ は、-23.4、-22.0‰、 $\delta^{15}\text{N}$ は、2.7、2.2‰、C/N 比は、19.1、22.1という結果で、資料1と2は、同じような値を示している。

食糧資源図に測定値をプロットすると、同位体比は、C₃植物・草食動物グループに属する(第100図)。C/N 比は、20 を超えて、やや大きな値を示すが、タンパク質をほとんど含まない堅果類ほど大きな値ではない(第101図)。

ヒトを煮たのかという点について、検討してみよう。残念ながら、人肉のデータはないが、現代日本人の毛髪と食物の同位体組成の違いを調べた研究がある(Minagawa 1992)。男女差は少しあるが、毛髪の同位体比は、平均すると、 $\delta^{13}\text{C} = -18.2 \pm 0.4\text{‰}$ 、 $\delta^{15}\text{N} = 10.3 \pm 0.5\text{‰}$ であった。現代人は古代人に比べて、高タンパク食料を摂取していると考えられるが、この研究では、タンパク質の供給源を、C₃植物 35%、マメ科植物 9%、C₄植物 16%、陸上動物製品 14%、魚類製品 27% と算出している。炭素同位体比が大きな値を示しているのは、C₄



第100図 土器付着炭化物の炭素・窒素同位体比



第101図 炭化物の炭素同位体比とC/N比

植物と魚類製品の寄与が大きいためである。また、窒素同位体比が大きいのは、魚類製品によるものと考えられる。

問題は、弥生人がどのような摂食特性、食性を示すのかという点である。弥生人骨の同位体分析結果は、最近増えつつある。その中で、窒素同位体比が小さい値を示している。群馬県岩津保洞窟遺跡の数値と比較してみる。5 資料について、広がりはあるが、岩津保弥生人の骨コラーゲンの測定値は、 $\delta^{13}\text{C} = -16 \sim -18\text{‰}$ 、 $\delta^{15}\text{N} = 6 \sim 9\text{‰}$ の範囲に分布している(米田 2002)。骨コラーゲンの同位体比は、毛髪より炭素で 0.3‰、窒素で 12‰ 大きいという分析がある(南川 2001)。したがって、毛髪は、ヒトの体のタンパク質と同質だと考えると、岩津保洞窟

遺跡のヒトタンパク質は、 $\delta^{13}\text{C} = -16\sim -18\text{‰}$ 、 $\delta^{15}\text{N} = 5\sim 8\text{‰}$ の範囲に入ることになる。

この集團は、C₃植物を摂食していた可能性が指摘されているので、その点も考慮しなくてはならないが、いずれにしても、これまでに弥生人骨の骨コラーゲンについて報告されている事例で、炭素同位体比 $\delta^{13}\text{C}$ が -20‰ より小さいものはない。また、窒素同位体比については、岩津保留窟人が最も低い値を示す集團であるが、それでも $\delta^{15}\text{N}$ は 6‰ 以上の値を示している。前述したように、土器付着炭化物の炭素・窒素同位体比は、この範囲から外れている。

第100図に基づいて、煮炊きした材料を推定すると、C₃植物および陸上動物と考えられ、これにC₃植物の寄与が少しある可能性も存在する。さらに、第101図のC/N比を参照すると、陸上動物、あるいは堅果類を単独で煮炊きしたものではなく、堅果類を除くC₃植物を単独で、あるいは、堅果類を含むC₃植物と陸上動物を混合して煮炊きした結果、生成した炭化物であると推定される。

肉片を含む人骨を煮た可能性を否定出来ないが、少なくとも、その目的だけに使われたものではない。日常的に、煮炊きの道具として使用され、上述の食材に関わる炭化物が付着した甌を転用して、人骨を煮た可能性はあるかもしれない。しかし、煮炊き実験で、土器を洗浄せず、くりかえし煮炊きに使用した場合は、前回に生成したおこげは流れ落ちてしまい、かゆ状の調理物でない限り、おこげは成長しないという結果を得ているので、この可能性もきわめて低いと断ぜざるを得ない。

したがって、肉片を含む人骨を煮炊きして出来た炭化物である可能性は、低いものと考えられる。

参考文献

- Bocherens H. and Drucker D. 2003 Tropic level isotopic enrichment of carbon and nitrogen in bone collagen: Case studies from recent and ancient terrestrial ecosystems. *Int. J. Osteoarchaeology*, 13, p.46–53
- 春成秀爾 1993 「弥生時代の再葬制」[国立歴史民俗博物館研究報告] 第49号 p.47–91
- 南川雅男 1990 「人骨・動植物の安定同位体(^{13}C , ^{15}N)分布及び集團の食生態分析」[先史モンゴロイド集團の拡散と適応] 文部省科学研究補助金重点領域研究 研究成果報告書, p.1–15
- Minagawa M. 1992 Reconstruction of human diet $\delta^{13}\text{C}$

and $\delta^{15}\text{N}$ in contemporary Japanese hair: a stochastic method for estimating multi-source contribution by double isotopic tracers. *Appl. Geochem.*, 7, p.145–148.

南川雅男 2001 「炭素・窒素同位体分析により復元した先史日本人の食生態」[国立歴史民俗博物館研究報告 第86集], p.333–357

西田泰民 2006 「炭化物の生成実験」[新潟県立歴史博物館研究紀要] 7, p.25–50

下条晴義 1988 「炭素・窒素安定同位体比に基づく陳平貝塚人の食性復元のための基礎的研究」[東京大学大学院理学系研究科修士論文]

Spnheimer M., Robinson T., Ayliffe L., Roeder B., Hammer J., Paay B., West A., Cerling T., Dearing D., and Ehleringer J. 2003 Nitrogen isotopes in mammalian herbivores: Hair data N-15 values from a controlled feeding study. *Int. J. Osteoarchaeology*, 13, p.80–87

米田慎 2002 「古人骨の化学分析から見た先史人類集團の食性復元」[国立民族博物館調査報告33, p.249–255]

米田慎 2006 「古人骨の化学分析による先史人類コラゲンの同位体分析を中心にして」[Anthropological Science, 114, p.5–15]

吉田邦夫, 宮崎ゆみ子 2007 「煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究」[日本における稻作以前の主食植物の研究] 平成16–18年度科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果報告書, p.85–96

VII 泉坂下遺跡における再葬墓群の形成

1 はじめに

泉坂下遺跡の発掘調査は、縄文時代晩期の石棒製作と弥生時代中期の再葬墓の確認を目的としていたが、調査を開始した直後に再葬墓の存在が明らかとなり、分布が調査坑のほぼ全体に及んでいることからも、目的の焦点は再葬墓に絞られることになった。石棒製作については、断片的な痕跡を認めたが、再葬墓の遺構の輪郭を保存するためには、包含層の完掘を断念し、再葬墓の調査を最小限に止めるために調査坑を増設することもできなかった。

その泉坂下遺跡の発掘調査の総括として、観察された事象をまとめ、所見から組み立てられる再葬墓群の形成について考察を加えておきたい。泉坂下遺跡においては、人骨が検出されておらず、千葉県天神前遺跡[杉原・大塚1974]など人骨が遺存した事例を基準として、壺形土器が土坑に一括で埋設されるという、特徴的な遺構の属性により、これを再葬墓と捉えている。常陸大宮市城では、1976年の小野天神前遺跡[阿久津1977・1978・1979・1980・1982・1991]において人面付土器を作り再葬墓群が調査されており、泉坂下遺跡とは直線距離で6kmほどの位置にある。他遺跡との比較は、小野天神前遺跡が第1の対象となる。また、考察を進める中で反省することになった観察の不足も、今後の課題として提示しておかなければならぬ。

2 土器の法量

泉坂下遺跡の第1～6号墓壙については、土坑の輪郭が明確に捉えられ、3個体以上の壺形土器が埋設された状態で検出されたことにより、再葬墓と認めた。一方、第1号遺構は、遺構の輪郭が残存せず、土器群も後後に搅乱されており、再葬墓の可能性を示すに止まった。第1～6号墓壙が大型を含む壺形土器のみで構成されるのに対して、第1号遺構は、壺形土器を組成し、しかも、これがどのように配置されていたのか明らかでない。本稿では、再葬墓群の検討を、第1～6号墓壙に限定して進める。したがって、土器についての以下の分析も、第3号墓壙に伴っていたと推定される土器K(調査前に掘り出されていた土器)を含めて、44点の壺形土器が対象

である。

壺形土器の法量を、器高を指標として比較する。器高がそのまま容量の大小を表現するわけではないが、器高の大きな土器は概ね容量も大きい。対象となるのは器高が計測できた29点の土器である。その計測値を2cm単位の分布で見た集中と分散から、法量を4つに分類する(第102図1)。分類の呼称と器高の数値は次の通り。

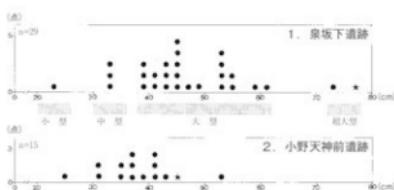
超大型 器高72～78cmの範囲

大型 器高38～62cmの範囲

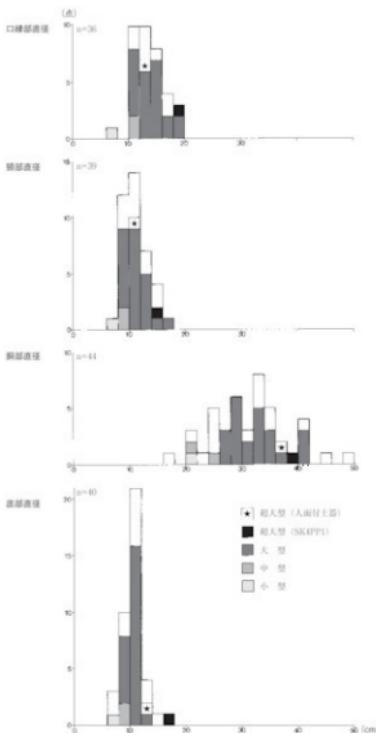
中型 器高32～34cmの範囲

小型 器高22～24cmの範囲

29点の内訳は、超大型が2点(7%)、大型が23点(79%)、中型が3点(10%)、小型が1点(3%)である。人面付土器は、器高が77.7cmと最大で、超大型に相当する。小野天神前遺跡における器高的分布は、泉坂下遺跡とはやや異なり、全体的に小振りである(第102図2)。そのなかで人面付土器は、これも大型の上位に相当している。16号土壙の人面付土器(第107図3)は、器高が44.5cm。2号土壙の人面付土器(第107図1)は、胴部の残存高が46cmほどであるから、器高は55cm前後に推定できる。14号土壙の人面付土器(第107図2)は、さらに大きな土器であったと想定される。那珂市海後遺跡[川崎・川上・識田1970]の人面付土器(第108図1)の器高は42cmであり、これも大型である。久慈川・那珂川流域の人面付土器は、大型の壺形土器であることが共通している。このような特徴は、筑西市女方遺跡[田中1944]、栃木県野沢遺跡[小林・沼田1900]が位置する鬼怒川流域にも認められるが、人面付土器に普遍のものではない。福島県浪ノ



第102図 壺形土器の器高の分布



第103図 壺形土器の部位直径の分布

森遺跡〔江藤・日黒・穂積1967〕の人面付土器は器高が25cm、栃木県出流原遺跡〔杉原1981〕の人面付土器は器高が21.6cmと小型である。大型と小型というかけ離れた法量には、同じく人面が付属した壺形土器ではあっても、その用途が異なるものであったことを考えなければならぬのであろう。

次に、口縁部最大径、頸部最小径、胴部最大径、底部最大径について、部位ごとに計測値の分布を求める(第103図)。集計された土器の点数は、その部位の遺存状態により異なる。口縁部、頸部、底部は、それぞれ12cmほどの幅で正規分布に近い状況を示す。小型から大型までは法量の順序に合致して各部位の計測値も分布するが、超大型については、すべての部位で最大値を示すわけ

はない。また、胴部は、全体的には正規分布に近い状況を示しながらも、30cmほどの数値幅で広い範囲への分散といいくつかの集中が認められる。最大値は、超大型でなく、大型が占めている。壺形土器として括られる器種には胴部形態に変異があり、いくつかの類型が設定できそうなことが、この分布にも窺える。

再葬墓に埋設された壺形土器の法量は、大型が典型である。35cmを超える器高の土器には、成人の四肢骨が完全な状態で収容することができる。一方、頸部最小径の分布の頂点は10~12cmの範囲にあり、完全な状態の頭蓋骨をそのまま収容することはできない。

3 土器の形態

壺形土器の胴部長に対する胴部最大径の比率(「胴部比率A」)、胴部長に対する胴部最大径までの高さの比率(「胴部比率B」)、この2つを指標として胴部形態を検討する。胴部比率Aは、「球胴」であれば1.0前後の数値となり、「長胴」であれば低い数値を示すことになる。胴部比率Bは、肩が張るような形態であれば数値が高く、下彫れのような形態であれば数値が低くなる。比率で0.01の距離を接近とみなして、接近した複数個体の胴部形態を類型として抽出する(第104図1)。抽出された胴部形態と、その点数は次の通り。

胴部形態A　胴部比率Aが0.67、胴部比率Bが0.60~0.61の範囲。2点。

胴部形態B　胴部比率Aが0.73~0.77、胴部比率Bが0.66~0.70の範囲。7点。

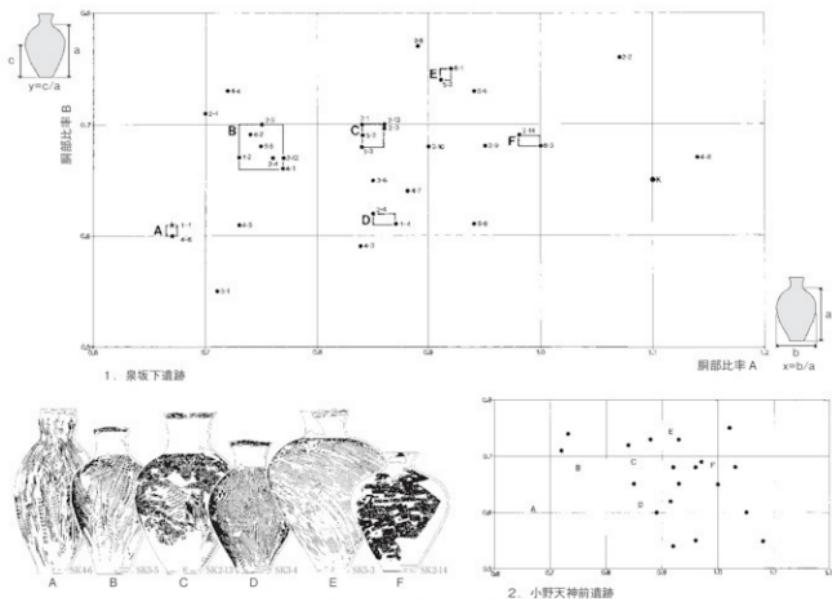
胴部形態C　胴部比率Aが0.84~0.86、胴部比率Bが0.68~0.70の範囲。5点。

胴部形態D　胴部比率Aが0.85~0.87、胴部比率Bが0.61~0.62の範囲。2点。

胴部形態E　胴部比率Aが0.91~0.92、胴部比率Bが0.74~0.75の範囲。2点。

胴部形態F　胴部比率Aが0.98~1.00、胴部比率Bが0.68~0.69の範囲。2点。

胴部形態B・Cに分布が集中しており、この2つが泉板下遺跡における壺形土器の典型的な胴部形態として捉えられる。小野天神前遺跡には、胴部形態B・Cの範囲に入る土器は見られない(第104図2)。また、胴部形態Aに近い土器も出現していない。欠損により比率を算出



第104図 壺型土器の頸部形態

できない土器の中には、2号土壇土器2のように、頸部形態Aに近い比率の土器もあるが、頸部形態の全体的な分布には明瞭な異なりが認められる。小野天神前遺跡は、2号土壇の人面付土器が形態Eに、16号土壇の人面付土器が形態Fに近く、泉坂下遺跡とは頸部形態の異なる壺形土器に人面が付属している。泉坂下遺跡に近い頸部形態は、女方遺跡の人面付土器に見ることができる。

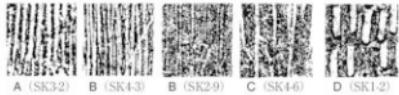
「細頸」と呼ばれる頸部は第4号墓壇土器8の小型のみで、大型の土器の頸部は全て、内部に手を入れができる法量で製作されている。また、頸部に膨らみを有する壺形土器は、その形象の特徴から「瓢形土器」と呼ばれている。泉坂下遺跡では、第2・3・4号墓壇にそれぞれ大型の1点が含まれており、第1号墓壇の人面付土器も、人面部の基本的な成形は瓢形土器のものである。頸部が残存する土器は39点であり、瓢形土器が出現する比率は10%ほど。これに対して、小野天神前遺跡には瓢形土器が報告されていない。人面付土器も、瓢形土器ではなく、3点ともやや括れて外反する頸部に作出されている。女方遺跡の人面付土器も、瓢形土器ではない。一

方、滝ノ森遺跡の人面付土器は、小型ながら瓢形土器の成形を基本とする。人面の頬から顎にかかる立体的な造形は、土器の法量や頸部形態に対応するのではなく、また、立体から平面へと単純に変遷するのでもない。瓢形土器に付属する場合に、立体的な造形が採用されたことが考えられるのである。但し、女方遺跡の人面部の顎部分の突出が著しいこと、海後遺跡では、頭部が緩やかに膨らむ瓢形土器であるにもかかわらず、これが人面部の造形にほとんど利用されていないなど、頸部形態に窺う系統性も全く無視することはできない。

4 泉坂下類型と再葬墓群の細別

壺形土器の頸部文様は、大きく縦文、条痕文、無文に分けることができる。頸部形態の類型と文様の対応は、頸部形態A・D・Eが条痕文のみ、頸部形態Fが縦文のみであり、頸部形態Bは条痕文の方が、頸部形態Cは縦文の方が卓越する。

縦文は、単節LRを典型として、これが直前段3条の原体と推定できるものもある。また、結節文にも特徴を



1. 条痕文の分類



2. 泉坂下類型

第105図 条痕文の分類と泉坂下類型

認める。第2号墓壙土器9・14、第3号墓壙土器3、第5号墓壙土器2・6のように、胴部上端が横位で施文される他に、胴部の一部に結節文が施された土器が少なくない。

条痕文については、施文具の原体と施文の効果から条痕文A～C、これに特徴的な施文方法の条痕文Dを加えて4つに分類する(第105図1)。

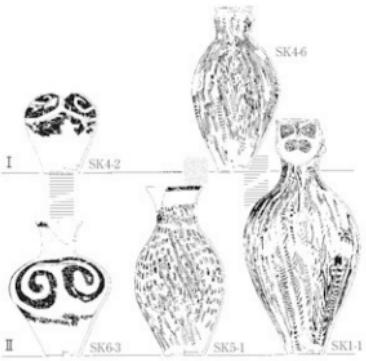
条痕文A 条痕文の沈線が線幅よりも狭い間隔で並ぶ(印象として貝殻条痕文に近い。)

条痕文B 条痕文の沈線が細く、線幅よりも広い間隔で並び、条痕文の沈線間隔には変異がある。(印象として埴輪の刷毛目に近い。)

条痕文C 条痕文の沈線が太く、線幅よりも広い間隔で並ぶ。(印象として「植房式」の「櫛齒文」に近い。)

条痕文D 条痕文Cが断続的に施文される。(「縦位短条痕文」と呼ぶ。)

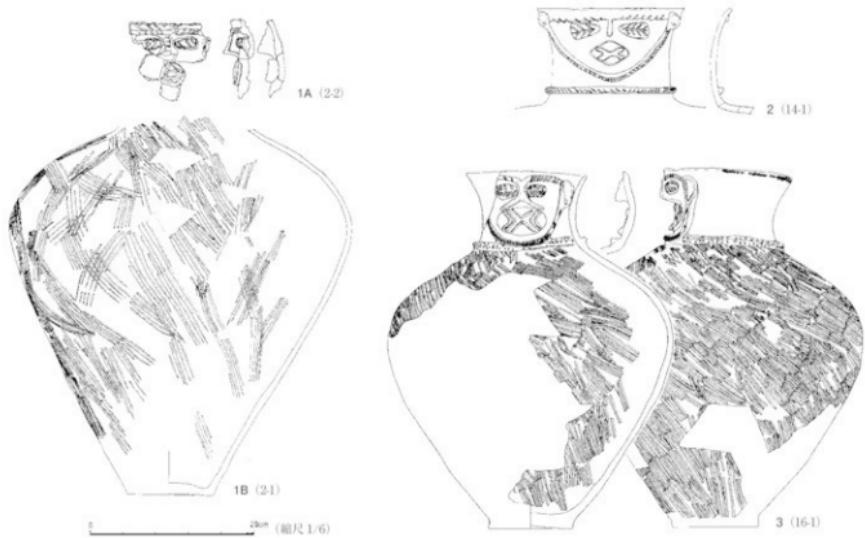
このうち条痕文Dは、小野天神前遺跡を含めた周囲の遺跡には見られない独特の施文であることから、胴部に条痕文Dが施された壺形土器を「泉坂下類型」と呼ぶことにする。泉坂下類型は、第1・5・6号墓壙から出土している(第105図2)。第1号墓壙は4点、第6号墓壙は3点という土器の数の中に泉坂下類型が組成するのに対して、第2号墓壙には14点、第4号墓壙には8点という土器の数があっても泉坂下類型は含まれない。第4号墓壙と第5号墓壙は重複関係にあり、第4号墓壙が古く第5号墓壙が新しいと捉えられている。泉坂下類型の有無を



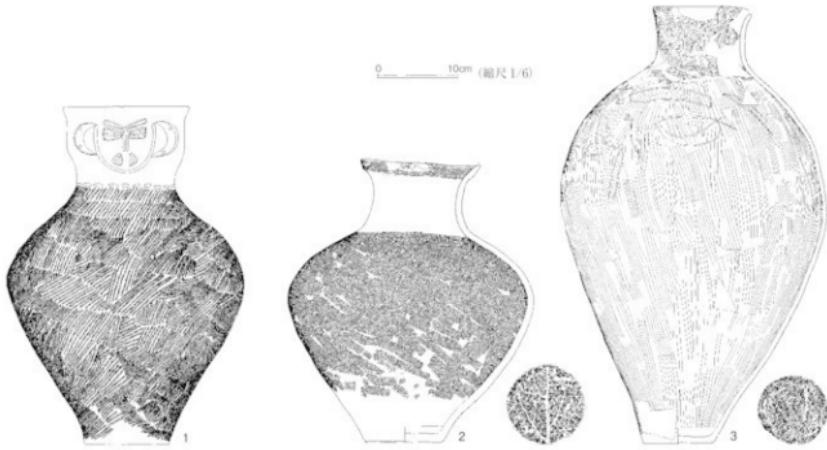
第106図 泉坂下I期と泉坂下II期

時期差として捉える視点からは、第2・3・4号墓壙が古く、第1・5・6号墓壙が新しいことが考えられてくる。第2・3・4号墓壙の土器群を「泉坂下I期」、泉坂下類型を伴う第1・5・6号墓壙の土器群を「泉坂下II期」と呼びながら、他の属性についても比較してみよう。

大型の壺形土器のほとんどは、胴部に条痕文もしくは繩文のみが施文された粗製土器であるが、磨削繩文により渦状文の構成された土器が、泉坂下I期では第4号墓壙に、泉坂下II期では第6号墓壙に検出されている。渦状文は、形象の細部は異なるにしても、方向が異なる渦の連結の仕方が一致し、系統的に連絡する(第106図)。第4号墓壙土器2は、無文で描出される渦の中心付近が四線で描出されるのに対して、第6号墓壙土器3は、渦の中心も幅広の帯状に描出されており、ここに型式変化を認める。この系統のより古い段階の渦状文は、女方遺跡のうち第28号竪穴の土器にあり、これは、全てが四線により描出されている¹³。より新しい段階の渦状文は、猪¹³a(差浜)遺跡[藤本1983]を例示するように、幅広の無文帯が沈線で区画されるようになる(第109図10・11)。また、泉坂下I期の底面痕跡は、木葉痕を典型として、これに網代痕が加わる。泉坂下II期も木葉痕を典型として網代痕も加わるが、第5号墓壙土器2には布目痕が出現している。猪¹³a遺跡では、底面痕跡の典型が布目痕に変化しており(第109図1～3)、布目痕の出現は時期的に新しい属性として捉えられるものと考える。さらに、泉坂下類型の表徴とした条痕文Dは、泉坂下I期の条痕文Cから派生したものと考えることができる。条痕文A



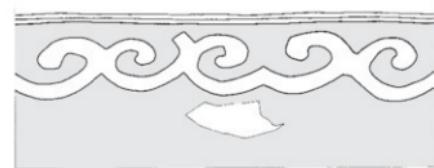
第107図 小野天神前遺跡の人面付土器 ([阿久津1977]より引用)



第108図 海後遺跡の人面付土器 (1は[川崎・川上・瀧田1970], 2・3は[鈴木2009]より引用)



1 (Fig.45-1)



3の颈部文様展開図



2 (Fig.45-2)



3 (Fig.44-3)



4 (Fig.6-75)



5 (Fig.3-10)



6 (Fig.3-12)



7 (Fig.7-109, 11.229)



10 (Fig.6-84, 12.258)



8 (Fig.11-231)



9 (Fig.11-228)



11 (Fig.6-80-83, 11-243)

0 10cm (縮尺1/4)

第109図 猪Ⅲa遺跡の土器群 (括弧内は原報告〔藤本1983〕の挿図番号)

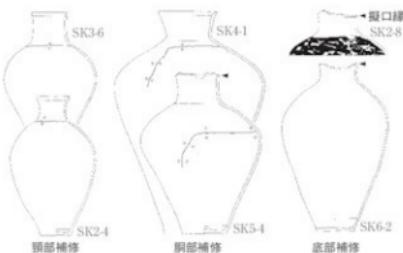
は、第3号墓壙に限定され、泉坂下II期には見られない。設楽博己による時期設定では、ともに弥生時代中期の「2a期」[設楽2008]に位置付けられる特徴を有しており、泉坂下I・II期は「2a期」内の細別に相当する。人面付土器は、泉坂下類型を伴うことから、泉坂下II期に位置付けられる。壺形土器としての系統は、ともに胴部形態Aの瓢形土器である泉坂下I期の第4号墓壙土器6に認めることになる。

5 土器の使用痕

再葬墓に埋設された土器は、壺形土器という器種に統一性はあっても、その法量及び形態、さらに文様も画一的ではない。製作されて直ぐに埋設されたことを示すような器表面の現象も見られず、埋設される前に生じていた使用に伴う痕跡が観察される土器が多い。

まずは、破損や亀裂を補修した痕跡が観察される土器がある(第110図)。口縁部を欠損する土器の中には、後世の耕作等によるものもあるが、欠損の破断面に磨滅が認められるものがある。第2号墓壙土器8、第4号墓壙土器2・7、第5号墓壙土器4・6、第6号墓壙土器2が、それであり、口縁部まで残存する土器にも、口端の一部が剥離して欠落するものは少なくない。第1号墓壙土器1つまり人面付土器の複合口縁の剥落も埋設の前に生じていたものである。これらの痕跡からは、使用に伴い受けた衝撃により口縁端部が剥離すること、剥離が累積するか大きな剥離のために、頭部に擬口縁を作出したことが考えられる。擬口縁として使用した破断面の磨滅は、研磨によるものもあるが、摺れにより形成されたと見られるものが多い。

亀裂や破損を補修した痕跡には、紐で結縛して亀裂を接合させたと推定される穿孔もある。第2号墓壙土器4と第3号墓壙土器6は分離した頭部と胴部を接合した事例、第4号墓壙土器1と第5号墓壙土器4は胴部の亀裂を接合した事例、第6号墓壙土器2は欠損した底部の代用として別個体の土器の底部を接合した事例である。弥生時代後期の「十王台式」では、大型の壺形土器についても欠損した部位を輪切りにするように除去して、土器が再利用されている[鈴木2005]。これを「除去再利用」と呼ぶならば、再葬墓に埋設された大型の壺形土器には「結縛再利用」と呼べる方法が採用された。特に、底部が欠

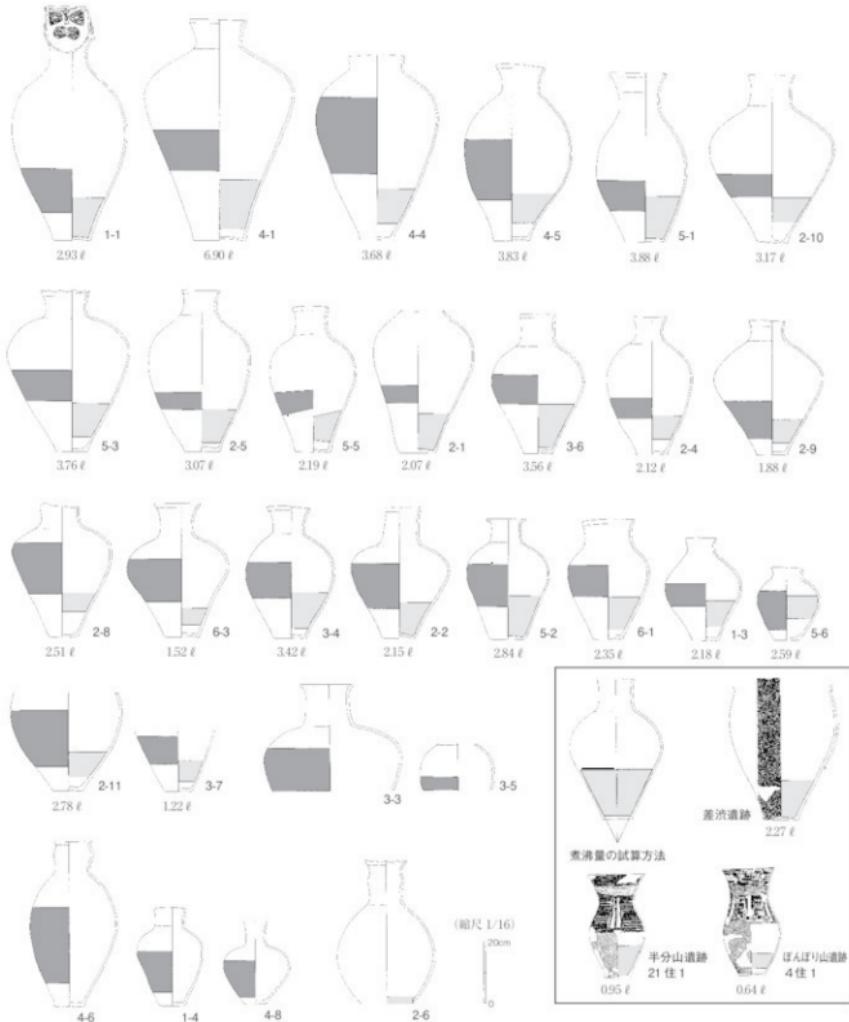


第110図 土器の補修と擬口縁の形成

損しても補修して再利用された事例は珍しい。

次に、器表面に炭化物の付着や変色が観察される土器がある(第111図)。器内面と器外表面の両方に炭化物の付着が明瞭な土器は、第1号墓壙土器1の人面付土器をはじめとして23点に及ぶ。他に、第1号墓壙土器2、第3号墓壙土器2、第6号墓壙土器2、土器Kの4点も、範囲は明確に表示し得ないものの、器外表面に炭化物及び変色が見られる。器外表面には胴部の最大径位置か、それより下位に炭化物が付着し、底部付近には、これが見られない。器内面には、器外表面の付着より低い位置に炭化物の付着と、器面の黒化変色があり、底部付近にまで変色が及ぶものもある。器外表面にのみ炭化物の付着が明瞭で、器内面に炭化物及び変色が見られないのは、第1号墓壙土器4、第4号墓壙土器6・8の3点である。他に、第3号墓壙土器1、第4号墓壙土器2・3・7の4点も、範囲を表示できるほど明瞭ではないが、器外表面には炭化物が付着する。第3号墓壙の土器3・5の2点については、胴下部を欠損するため、器外への炭化物の付着に観察が限られている。一方、器内面に変色が明瞭で、器外表面に炭化物の付着が見られないのは、第2号墓壙土器6の1点のみである。第2号墓壙の土器3・7・12・13・14・15、第5号墓壙土器4の7点には、器外表面とともに炭化物や変色は見られなかった。

器内面の炭化物と変色は、煮沸された中身の焦げ付きにより形成されたものと推定され、器外表面の炭化物は、煮沸のための燃焼による煤の付着と考えられる。雨垂れ状を呈して付着する炭化物は、口縁部からの吹きこぼれとは考え難く、器壁を浸透した水分が作用したものではないかと想定している。少なくとも28点の土器に煮沸の痕跡があり、44点のうち64%を占めている。壺形土器と



第111図 土器の煮沸痕（土器外面は炭化物付着範囲、土器内面は炭化物及び変色の範囲を表示）

いう器種でありながら、煮沸具として使用されていたことを認めるのである。

補修痕と煮沸痕の関係では、胴部補修のうち亀裂が最大径より下位まで達する第5号墓壙土器4には、煮沸痕が認められない。頭部補修の2点と、胴部補修でも亀裂

が最大径より上位にある第4号墓壙土器1には、煮沸痕が明瞭に残されている。注目したいのは、底部補修の第6号墓壙土器2の器内外面に、僅かながら炭化物の付着が認められることである。これは、煮沸具として使用された後に底部が欠損し、それを補修して容器としては使

用されていたことを示している。

再葬墓に埋設された壺形土器に煮沸痕が認められるこ^トについては、煮沸という行為を再葬の一部に位置付け^て「埋葬と直接関連するものを煮た」、「煮たのは人肉であ^{った可能性}」[春成1993]が、春成秀爾により提起され^{ている}。泉坂下遺跡の調査では、この仮説を検討するため、器内面に付着した炭化物の同位体分析を実施したが、その結果は「煮たのは人肉であった可能性」に否定的である。

煮沸量を、器内面に炭化物が付着した範囲の上端を基準として、それぞれの土器で試算してみると、最大量は第4号墓壺土器1の6.90ℓ、最小量は1.22ℓ、平均値は2.84ℓであった。同じ試算が可能であった中期後半の「足洗式」の大型壺形土器は2.27ℓ、後期後半の「十王台式」の中型壺形土器は2点の平均が0.80ℓである。絶対量としては目安にすぎなくとも、中期前半の大型壺形土器の煮沸量は、中期後半の大型壺形土器にはほぼ等しく、それらは後期後半の中型壺形土器の煮沸量の3~4倍に相当するものであることがわかる。大型の壺形土器は、大型の壺形土器に相当する量の煮沸具として、また基本的な属性である大型の容器としても、日常の生活に使用されていた。再葬墓の形成にあたり、これが遺骨を収容する容器に転用されることになる。人面付土器についても例外ではなかったと考えるのである。

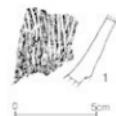
6 土器の内部から検出された遺物

再葬墓から出土した土器の内部の土壤は、3mm方眼の篩を使用して水洗し、残留物の選別を実施した。この作業は、人骨と副葬品の検出を主な目的としたものである。

その結果、698点(447.7g)の骨片が検出されたが、「ヒト」と同定できる破片は含まれておらず、「中型哺乳類の歯牙破片」と同定されたものがある。このような現象は、小野天神前遺跡においても確認されており、報告の当初は阿久津久により、「骨片が出土していることから、土壤の性格は墓址」[阿久津1979]と記述されていたが、「群馬県立博物館に依頼した骨片の調査によれば、骨片の多くは焼けており、いずれも獸骨であるとの結論がでており、加えて破碎されたクルミ片が多量にみられ、一概に再葬墓とはいえなくなっている」[阿久津1991]と変更され、「墓址」とする根拠の無効を認めるだけでなく、再葬

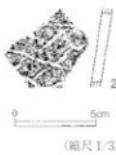
第1号墓壺土器1

| 最大長(mm) | 土器片 | 剥片類 | 石棒 | 礫 | 骨片 | 計 |
|---------|-----|-----|----|----|----|----|
| 6~10 | 106 | 81 | 5 | 55 | 10 | |
| 11~15 | 57 | 2 | | 9 | 1 | |
| 16~20 | 17 | 2 | | 3 | | |
| 21~25 | 12 | | | 2 | | |
| 26~30 | 9 | | | 3 | | |
| 31~35 | 6 | | | | | |
| 36~40 | 2 | | | | | |
| 41~45 | 2 | | | | | |
| 46~50 | | | | | | |
| 51~55 | | | | | | |
| 56~60 | | 1 | | | | |
| 61~65 | | | | | | |
| 66~70 | | | | | | |
| 71~75 | | 1 | | | | |
| 76~80 | | | | | | |
| 合計 | 387 | 211 | 12 | 51 | 72 | 13 |



第1号墓壺土器2

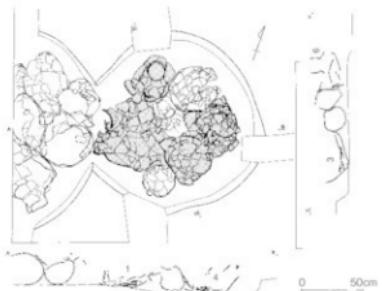
| 最大長(mm) | 土器片 | 剥片類 | 石棒 | 礫 | 骨片 | 計 |
|---------|-----|-----|----|---|----|---|
| 6~10 | 24 | 1 | | 8 | 1 | |
| 11~15 | 5 | | | | | |
| 16~20 | | | | | | |
| 21~25 | | 2 | | | | |
| 26~30 | | 2 | | | | |
| 31~35 | | 3 | | | | |
| 36~40 | | 2 | | | | |
| 41~45 | | | | | | |
| 46~50 | | | | | | |
| 51~55 | | | | | | |
| 56~60 | | 1 | | | | |
| 61~65 | | | | | | |
| 66~70 | | | | | | |
| 71~75 | | | | | | |
| 76~80 | | | | | | |
| 合計 | 37 | 20 | 1 | 0 | 81 | |



第112図 再葬墓の土器内から検出された遺物

墓への疑義が表明されている。しかしながら、小野天神前遺跡では、調査区の西側に「安行Ⅲ a ~ c、大洞B、B'をを中心とした土器がみられる」[阿久津1979]と記述されたように、縄文時代晩期の遺跡が重複しており、春成秀爾が指摘するように「古い時期のものが混入した」[春成1993]と考えるべきである。縄文時代晩期の常陸太田市本覚遺跡[鈴木2005]においては45mの調査区内から、発掘調査で284点(46.8g)、土壤の水洗選別で163点(15.4g)の骨片が検出されており、泉坂下遺跡においても発掘調査で、土器の外部から97点(21.1g)の骨片が検出されている(第12表)。また、「弥生時代の再葬人骨も火葬されていたとすれば、焼骨がのこっていてよいから、ここでは生骨が再葬されたと考えたほうがよさそうである」[春成1993]という指摘も、そのまま泉坂下遺跡に適用することができる。

土器の内部に「古い時期のものが混入した」という現象を、もう少し詳しく検討するために、第1号墓壺の土器1と土器2の内部から検出された遺物を例示する(第112図)。土器の内部には骨片の他にも、土器片、剥片類、石棒未成品破片、礫などが含有されている。これらのうち6mm以上(小数点第1位四捨五入)のものについて、最大長の分布を求めた。土器1の内部からは、211点の土器片、12点の剥片類、5点の石棒未成品破片、72点の礫、14点の骨片が抽出され、土器片には最大長が70mmを越え



第113図 第4号墓壙の潰れた土器の位置

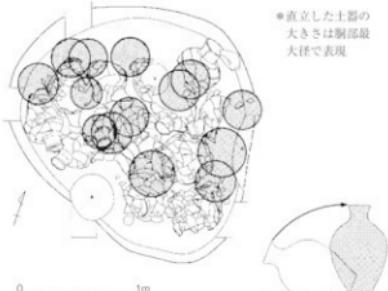
るものまである。いずれの遺物も分布は、最大長が小さなものほど数量が多いという傾向で一致している。また、他の遺物の分布範囲は、土器片の分布範囲内に収まる。他の遺物では困難でも、土器片には時期を特定できるものがあり、それが可能な土器片は全て縄文時代のものであった。土器2の内部の遺物も、土器1と同じような分布を示し、全ての墓壙の土器に著しい異なりは見られない。したがって、他の遺物もほとんどは、土器の内部へ土壌が流入することにより、土壌中に含まれていた土器片とともにたらされることになったと考えられるのである。

土器の内部から検出された剥片類に、縁辺が刃部として利用されたような形状のものが、特に集中するというような現象は認められない。第2号墓壙土器11の内部から検出された重飾り(第94図2)も、他の遺跡の再葬墓に類例が認められず、縄文時代の遺物の流入として捉えた。第6号墓壙土器1の玉類(第60図)については、他の遺跡の再葬墓に類例を認めるとともに、5点が同一の土器のみに流入するとは考え難いことから、土器の内部へ意識的に納められた副葬品として捉えている。副葬品が検出されたのは、第6号墓壙土器1のみであった。

7 土器への土壌の堆積

ほとんどの土器の内部には、土壌が堆積する。土器の胴部に生じた亀裂から徐々に入り込むことも想像はできるが、内部に検出された土器片の最大長は、土壌が主に土器の口縁から流入したことを示している。

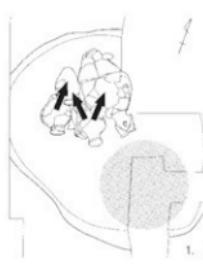
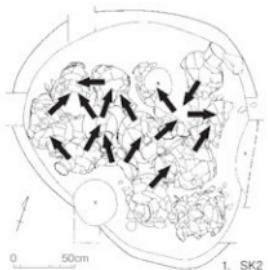
第4号墓壙には、内部に土壌が充満した土器と、これ



第114図 第2号墓壙に土器が直立していた場合の位置

の見られない土器とが共伴する(第113図)。内部に土壌が充満しない土器は、第4号墓壙にのみ認められた現象である。土器1は、他の多くの土器と同じく横位で埋設されていたが、法量が一際大きく、補修孔の存在から推定される亀裂のためであろうか、土壌がほとんど流入せずに潰れていた。土器3・4・6は、正位で埋設されており、口縁部から脣上部までの破片が脣下部に落ち込んだような状態にある。特に土器3は破片が底部付近に達しており、その下位には土壌がほとんど堆積していない。土器に加えられた上からの圧力として、一部重複して隣接する第5号墓壙の形成に伴い踏み潰されたことを想像したくなるが、これは検証できない。内部に土壌がほとんど堆積していない土器があることは、埋設時に土器の口縁が塞がっていたことを考えて良いのであろう。泉坂下遺跡には、土器を合口にして、上位の土器が蓋の機能を果たしたような事例は見られず、口縁部を塞いでいたのは、例えば布のような有機物であったことが想定される。¹⁶これが腐食することにより、土壌の流入が生じることになった。墓壙の覆土中からも、縄文時代の土器片、剥片類、石棒未成品破片、礫、そして骨片などが検出されており、土器の内部の土壌と墓壙の覆土の含有物は共通している。土器の内部へは、墓壙の覆土が土壌を供給した。

泉坂下遺跡では、第II層とした黒褐色土層中に墓壙が形成されたことから明確に捉えることはできなかったが、ローム層まで掘り込んで墓壙が形成された小野天神前遺跡においては、覆土にロームブロックが混じることが観察されており、墓壙は埋め戻されている。土器の内



第115図 第2・5号墓壙における土器の埋設順序

部に流入したのは、埋め戻されて土器を覆っていた土壤ということになる。土器に収容されていた遺骸は腐食しており、内部には、土器の容量にはほぼ相当する量の土壤が流れ入んだ。体積を概数で比較するまでもなく、かなりの土量が土器の内部に流入することになり、墓壙の上部は、これに伴い厚みを減らして陥没することが想定されなければならない。このように考えると、底面から浮く第4号墓壙土器7・8については、埋設された土器に接近した状態で検出されても、本来は土器を埋め戻した覆土の上に供獻されていたものと見えてくる。また、第2号墓壙の覆土中から検出された、砥石・凹石を二次加工した扁平な石(第32図)も、本来は覆土の上にあったと捉えるべきものかもしれない。

一方で、土器の内部の土壤中には、墓壙の覆土と異なる特徴も観察されており、これについては一次葬との関連で検討することになる。

8 墓壙への土器の埋設

横位の姿勢で並ぶように検出された土器群についてでは、「直立て土器を埋置した後、その中に土を一方向から入れてゆく」と、このような状態になる可能性がある〔阿久津1979〕という指摘がある。このような想定は、「一方向から土を入れてゆく」という合理的とは言えない埋め戻しの方法を採用しながら、土器が倒れるのには配慮しないということに違和を感じる。第2号墓壙を例示して、土器の埋設された姿勢について検討してみよう。

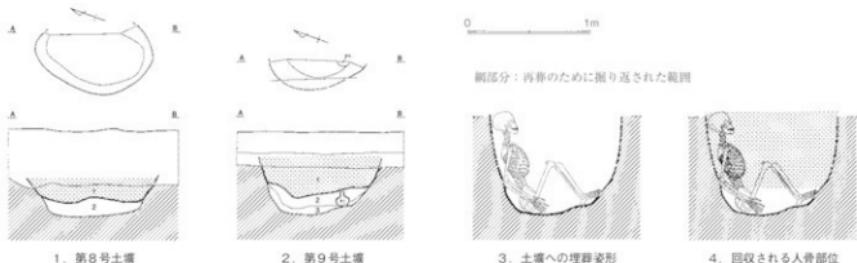
仮に、本来は土器が直立していたとするならば、倒れて検出された状況から、その位置をほぼ特定することができる。土器は、加えられた力に従い倒れる。横飛びに

第116図 第1・3号墓壙における土器が埋設されない空間

移動することはなく、底部の縁辺の一部は、底部が接地していた位置の近くにある。このような条件で、第2号墓壙の土器を直立させてみると、中には他の土器に干渉されないで直立の状態が復元されるものがあっても、いくつかの土器が重なり合って、全ての土器を直立させることはできないことがわかる(第114図)。むしろ、横位で並べた状態が墓壙の規模と形状に一致することも見て取れるのである。最も顕著に土器が重なり合うことになる第2号墓壙の結果をもとに、横位で検出された土器群は、これが本来の埋設の姿勢であったと考える。

泉坂下遺跡においては、直立即ち正位の状態での埋設が見られるのは第4号墓壙のみであり、第4号墓壙には、1点のみ横位が共伴する。その他の墓壙は、全て横位に埋設されていた。第4号墓壙は泉坂下Ⅰ期であり、泉坂下Ⅱ期には、正位の状態の埋設が見られない。土器を埋設する向きにより横位でも、相対する方向で交互に埋設された第3号墓壙、1点のみ相対する方向に埋設された第2号墓壙、全て同一の方向に埋設された第1・5・6号墓壙とに分別される。第1・5・6号墓壙は、泉坂下Ⅱ期に位置付けられる再葬墓群であり、土器を埋設する姿勢や方向に、泉坂下Ⅰ期の再葬墓群よりも統一性が認められる。

第1・2・5・6号墓壙においては、先に埋設された土器の胴下部に、後から埋設する土器の口頭部を載せるようにして重ね、墓壙の空間内に詰めて土器を密着させる方法が採用されていた。この土器の重なりからは、全てではないにしても埋設の順序が推定できることになる。第2号墓壙では、14点のうち13点に重なり合いが見られ、南側から北側に向かう埋設の順序が捉えられた(第



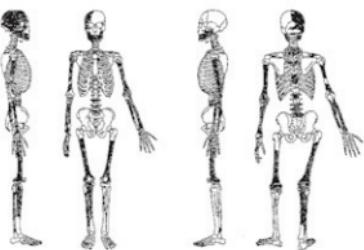
第117図 一次葬の土壌墓と再葬のための遺骨の抜去

115図1). 第5号墓壙では、墓壙の東側半分の調査に止まるが、南端から北端に向かう埋設の順序が捉えられている(第115図2)。最初の土器を墓壙の中央に据えて周間に土器を配置するのではなく、墓壙の端部を起点として土器の一部が重なるように並べて行く手順が復元されるのである。

9 土器が埋設されない空間

第2・5号墓壙から復元された埋設の手順を前提とすれば、土器が検出されない第1号墓壙の南側の空間は、結果として土器が埋設されなかつた余裕とは考え難い(第116図1)。4点の土器は、墓壙の南端を起点として埋設されたはずであり。余裕の空間は北側に生まれることになる。南側の空間には、土器の埋設よりも先に設置された何かがあり、その北側から土器が埋設されることになったことを推定すべきなのであろう。墓壙が形成された主体はむしろ南側の空間に設置されたものにあったとも想定される状況である。同じような空間は第3号墓壙にも見られる。墓壙の南東部には土器が検出されず、空間的には余裕があるように見えても、土器を相対する方向で交互に埋設して隙間を詰めている(第116図2)。腐食して消失した有機物という条件からは、土器とは異なる容器への再葬、あるいは一次葬の可能性までを想像するが、解明には今後の調査を待たなければならない。土器が検出されない墓壙内の空間について、少なくとも土壙の水洗選別を実施する必要を、反省とともに喚起しておきたい。

10 一次葬の土壌墓

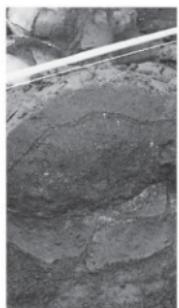


第118図 牡丹平遺跡で検出された人骨の部位
([小片他2000]より引用)

再葬墓とは異なる、直径0.7～1.0mで略円形の掘り込みが3基検出されており、これを一次葬の土壌墓と推定する。これらは、第Ⅲ層のローム層に到達する深さで掘り込まれていた。覆土を観察できた第8・9号土壙では、底面近くの土層中にローム土がブロック状に含まれており、これを、ローム土を含んで掘り上げられた土が時間を置かずに埋め戻されたことによる特徴を示すと捉えると、第8号墓壙では第2層、第9号土壙では第2・3層が、埋葬された遺体を埋めた墓壙の覆土ということになる(第117図1・2)。また、第9号墓壙においては、底面に接して小型の壺形土器が正位の状態で検出されており、これは、副葬品と見ることができる。一方、第8・9号土壙とも第1層には、ローム土のブロックが含まれておらず、下位の覆土とは特徴を異にする。これを、再葬のために墓壙を掘り返した痕跡であり、その掘り込みに二次堆積した土壙と捉えることにより、一次葬の土壙墓という推定に至ることになるのである。第9号土壙の小型壺形土器は第2・3層中にある、第1層の下端が示



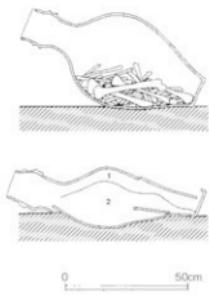
1. 第1号墓壙覆土



2. 土器内堆積土



3. 第9号土壙覆土



4. ローム土の由来

第119図 第1号墓壙土器1内のローム土

す掘り込みが到達せずに保存されたものと考えられる。

第9号土壙に壺形土器が保存され、土壙の底面付近に一次葬の覆土が残存するということは、再葬のための掘り返しは土壙の底面まで及んでいない。成人が埋葬されたとすれば、土壙の規模から、埋葬の姿形は座葬であったと考えて良いのである(第117図3)。座葬の姿形で埋葬された土壙から遺骨を回収する場合には、底面まで掘り込まないと取り出せない部位がある。それは、腰骨であり、手足の指骨も相当する(第117図4)。福島県牡丹平遺跡[水山1977、小片他2000]において土器の中から検出された人骨には、欠落する部位が認められている(第118図)。脊椎と大腿骨が検出されているのに腰骨が欠落することは、このような過程を経た人骨の回収により、説明できるのではないかとも考えるのである。

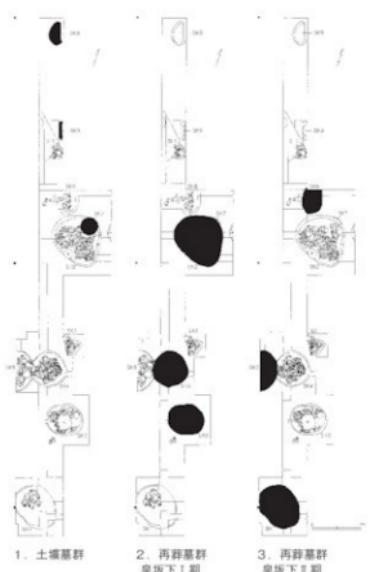
11 土器内から検出されたローム土

土器の内部の土壙は、墓壙の覆土の流入により堆積したと考えられ、土壙の特徴も概ね墓壙の覆土と共通する特徴を示す。但し、看過し得ない現象も認められる。それは、第1号墓壙土器1の内部の土壙を半裁して断面を観察した際に気付くことになった。土器の内部の土壙は黒褐色を呈しており、この色調は、墓壙の覆土に共通している(第119図1)。単一層ではなく、これを2つの土層に区別したのは、下位の土壙中に混じる大粒のローム土が指標となった(第119図2)。土器の内部の土壙が墓壙の覆土の流入のみで堆積したとすると、墓壙の覆土には、大粒のローム土は含まれておらず、由来が説明でき

ない。周囲に土器という障壁があり、後世の動植物による混入は考え難い条件下にある。したがって、大粒のローム土は、土器が埋設される以前から内部にあったと考えなければならないことになる。

一次葬の土壙幕の第7～9号土壙は、ローム層までを掘り込んで構築されており、埋葬に伴い埋め戻された土層と捉えられる部分には、ローム土のブロックが含有されている(第119図3)。再葬される遺骨は、土壙幕の覆土を掘り返して回収された。掘り出された遺骨には覆土であった土壙が付着し、骨の凹部分にも、それは入り込んでいたはずである。土器に収納する以前に、「洗骨」と呼ばれるような行為があったならば、骨に付着した土壙は洗い流されることになったであろう。したがって、土器の内部へ大粒のローム土が堆積することになった由来を、骨に付着した土壙に求めるならば、再葬において「洗骨」のような行為は組み込まれていなかったと考えられるのである。

大粒のローム土が含まれる範囲の土量の全てが骨とともに収容されたとは考え難い。第4号墓壙において潰れた状態で検出された土器の内部には、土壙の堆積がほとんど見られない。土器の内部に収納された骨の隙間を埋めるように堆積した土壙が、骨に付着したローム土の位置を保存することになったと推定しておきたい。骨が腐食してしまっていたら、ローム土は土器に接するような下位に集中することになったであろう。骨が腐食しないうちに土器の内部へと土壙が流入したことになる(第119図4)。



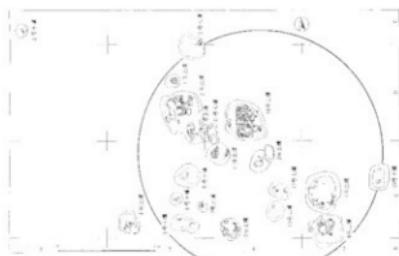
第120図 泉坂下遺跡における土壙墓群、再葬墓群の分布

なお、土器の内部からは、赤色顔料であるベンガラの粒子も検出されている。水洗選別に使用した篩は3mm方眼であり、他の残留物に付着していたことによるのか、大粒であってもこれを通過してしまう大きさのものも見出された。土壤に赤味をもたらすほどに多量のベンガラが含まれていたわけがないことは確実であっても、全ての土器に含まれていたのか、墓壙の覆土にも含まれているのか等、由来を検討するための観察は欠けている。大粒のローム土と同じく骨に付着して持ち込まれた可能性もあるが、これも、一次葬の土壙墓にベンガラの有無を検討するための観察が必要とされていたのである。

12 土壙墓群と再葬墓群の形成

泉坂下遺跡の調査は部分的なものではあるが、調査区内の状況から、遺構の分布を概観しておく。

土壙墓の第7・8・9号土壙は、調査区の北側に位置している(第120図1)。ローム層の上面まで掘り下げなければ確認が難しいことから、南側については有無を断定できない。但し、少なくとも第1・3~5号土壙の範



第121図 小野天神前遺跡における再葬墓群の分布
(記入した円の直径は10m)

間に重複がなかったことは確実である。3基の土壙墓のうち7号土壙は、第2号墓壙と重複しており、第7号土壙を破壊して第2号墓壙が構築されていることから、第7号土壙は、泉坂下I期を通過する。つまり、泉坂下I期に再葬されたことが考えられる土壙墓ということになる。泉坂下I期の再葬墓の土器に各1体が再葬されたとすれば、少なくとも27体分の土壙墓の存在が想定されることになる。その全てが泉坂下遺跡に形成されたのか、泉坂下II期の土壙墓は形成されたのか、これらは今後の調査を待たなければならない。

泉坂下I期の再葬墓群である第2・3・4号墓壙は、北に位置する第2号墓壙から南に位置する第4号墓壙までが9mほどの距離の中にある(第120図2)。埋設された土器の数は第2号墓壙が14点。第3号墓壙は土器Kを含めて7点、第4号墓壙は6点であり、第2号墓壙の半数ほどである。第2号墓壙には、人面の表現と考えられる線描画の土器10(第29図)が検出されている。

泉坂下II期の再葬墓群である第1・5・6号墓壙は、北に位置する第6号墓壙から南に位置する第1号墓壙までが14mほどの距離の中にある(第120図3)。泉坂下I期より範囲が一回り大きい。埋設された土器の数は第5号墓壙が8点以上。第1号墓壙は4点、第6号墓壙は3点であり、第5号墓壙の半数を下回る。人面付土器は第1号墓壙から検出されており、最多の土器が埋設された墓壙でないことが、泉坂下I期とは異なる。但し、墓壙の規模としては、第1号墓壙と第5号墓壙に大きな差はない。また、副葬品の玉類が検出されたのも第5号墓壙ではなく、第6号墓壙であった。

小野天神前遺跡において、3点以上の土器が墓壙の底



第122図 茨城県北部における弥生時代中期前半の遺跡



1. 遺跡の分布



2. 差汎遺跡の土壙墓群([鈴木2010]より引用)

第123図 那珂川下流域における弥生時代中期後半の遺跡

面もしくはその付近に埋設されていたことをほぼ確実に推定できるのは、2(北)・11・14・15・16・18号土壙の6基である。これらは、西に位置する2号土壙から東に位置する18号土壙までが、10mに満たない距離の中にある(第121図)。泉坂下遺跡に窓う再葬墓群の広がりと、ほぼ同じ規模を示している。埋設された土器の数は16号土壙が11点と最多である。16号土壙からは人面付土器が出土し、別の土器の内部から「2個の滑石製白玉」が検出されたという。同じく人面付土器が検出された2(北)号土壙は6点、14号土壙は7点の土器が埋設されていた。多くの土器が埋設された墓域に人面付土器が伴うことは、特に泉坂下1期に共通した特徴が窺える。一方、6・9(東)・12号土壙のように1点の土器が立位で埋設された事例、2(南)10号土壙のように2点の土器が口合の横位で埋設された事例、1号土壙のように覆土中から倒位で土器が検出される事例が、泉坂下遺跡には見られない。1点の土器が立位で埋設された事例には、埼玉県横瀬町果園遺跡[設案2008]のように人骨が遺存して、再葬墓で

あることが確認できるものもある。しかし、茨城県域においては、弥生時代の中期後半から後期に至るまで、土器棺埋設土壙墓が新生児から幼児までの、土器供獻土壙墓が幼児から小児までの埋葬施設として知られている[鈴木2010]。再葬墓に複合して、これらの埋葬施設が構築されていたのではないかという可能性を否定することはできない。つまり、泉坂下遺跡と小野天神前遺跡に見られる埋葬施設の異なりは、再葬墓の形成にあるのではなく、幼児等を対象とした埋葬施設の有無に起因するとも考えられるのである。

13 おわりに

久慈川・那珂川流域では、泉坂下遺跡が小野天神前遺跡から30年振りの再葬墓の調査となった。この地域では、弥生時代中期前半の遺跡についての情報が少なく、限られた情報も再葬墓を推定するものばかりである(第122図)。生活の拠点である集落跡について未明という状況は変わらない。その集落について、中期後半の分析から

予察をしてみよう。

中期後半には「足洗式」の時期を中心に、那珂川下流域に遺跡群が形成されている(第123図1)。その中の差洗遺跡には、土塙墓と土器棺埋設土塙墓が検出されて、埋葬施設が集中して構築された遺跡であることが確認されている(樋村1995)。土塙墓は、短軸方向に近接して並ぶことを指標として12列の土塙墓群に分けられる(第123図2)。各群を構成する土塙墓の数は1群が9基、2群が5基、3群が4基、4群が3基、5~8群が2基、9~12群が1基である。これらの土塙墓に掘り返された痕跡は認められないが、仮に再葬があったなら、例えば1群は墓壇に9点の土器が埋設されることになるのではないかと想像されて、再葬墓の形成に示唆を与える。管玉、勾玉などの副葬品は、土塙墓の数が多い1・2群から出土している。この差洗遺跡には、同時期の集落跡は検出されておらず、また、那珂川下流域には、差洗遺跡の規模に対応するような単独の集落跡を想定することは難しい。遺跡群が形成された地域内に、複数の、極言すれば12の集落に分散していたのではないかと想定される。2群のみに土器棺埋設土塙墓が伴うのは、極く近い距離に位置する猪III b遺跡との対応によるものであり、他の土塙墓群に土器棺埋設土塙墓が伴わないのは、集落にそれが形成されたことによる。笠谷、薬師台遺跡などからは、土器棺の出土が報告されており、柳沢遺跡では、近接して4基の土器棺埋設土塙墓が調査されている。集落が分散することには、狩猟や採集、漁労など縄文時代からの生業に適した居住の形態を、また、分散が一定の地域に集中することには、水稻耕作のための開発と経営のために制約された居住の形態を認める[鈴木2010]。

中期後半には那珂川下流域の遺跡群に見るように、海岸線に近い河口付近に遺跡が集中する。これに対して、中期前半の遺跡は、山地に近い中流域に位置している。狩猟や採集などの占める割合が、中期後半と比較してより高いことを考えさせる立地である。居住の形態は分散したものであったろう。ここに再葬墓を形成した集落跡の搜索には、土器棺埋設土塙墓の検出を指標とすることができるのではないかと考えている。

本稿では、大型の壺形土器である人面付土器についても、他の壺形土器と同じく転用されたという視点を示した。猪III a遺跡の中葉の壺形土器の口縁部(第109図

4~6)に貼付された突起は、人面の耳部の表現が痕跡として遺されたものと捉えられる。既に口縁部の装飾に取り込まれており、突起は次第に小型化に向かう。これらは、再葬墓の土器ではない。前段階の人面付土器も、本来は再葬のために製作されたものではなかったと考えるのである。それでも数量の少なさから、生活具としても特別な土器であったことは確かであろう。

註1 2号土塙の土器1(人面部)と土器2は、「同一個体の可能ある」[阿久津1977]、「接合」[阿久津1979]とも報告されている。

註2 女方遺跡の人面付土器の胸部は、輪切りにした断面形状が橢円形を呈しており、人面部を正面にした胸部は短軸となる。比率を長軸で計測すれば、胸部形態Aにより近くなる。

註3 女方遺跡第28号竪穴の土器群は、設楽博己が「弥生時代中期」の「2a期」[設楽2008]、鈴木正博が「弥生式前期後葉」の「女性2式」[鈴木(正)2006]に位置付けている。

註4 土器の煮沸痕は、ほぼ胸下部に限定されるところ、胸下部内面の傾斜から作図される円錐形の体積を求める方法を採用して計算した。

註5 福島県島内遺跡[日黒山1998]において、芳賀英一も「壺・深鉢・鉢」という器種を問わずに口縁欠損部の崩滅、炭化物の付着、強い火熱を受けたための器表面の赤色変化や器面の剥落が観察され、墓坑に埋納された土器が日常生活で使用していたものを転用したと考えている。

註6 横間糞遺跡では、土器の内部から「木の皮?」が検出されており[設楽2008]、樹皮製の蓋の一部が遺存した可能性が考えられる。

註7 2号土塙は南北2つの土塙の重複と捉える。小破片の土器も含めて「壺形土器11点」と報告されているが、復元実測された土器のみが埋設されていた土器と考えるならば、2(北)土塙の土器6点、2(南)土塙の土器は2点となる。

註8 9号土塙は東西2つの土塙の重複と捉える。9(東)土塙のみ土器が埋設されている。また、17号土塙にも東西2つの土塙の可能性がある。特に、6・9(東・西)・12号土塙という、土器が埋設された直径50cmほどの土塙が、近接して形成されていることに注意が必要である。

註9 但し、泉坂下遺跡の第3号墓壇土器7及びP84には土器棺墓の可能性もある。

参考文献

- 阿久津久 1977 「茨城県大宮町小野天神前遺跡(資料編)」 学術調査報告書1 茨城県歴史館
阿久津久 1977 「小野天神前遺跡」「大宮町史」 大宮町役場 141~147頁
阿久津久 1978 「小野天神前遺跡」「日本考古学年報」29(1976年44版) 日本考古学協会 119~120頁

- 阿久津久 1979 「大宮町小野天神前遺跡の分析」『茨城県歴史館報』6 茨城県歴史館 26-54頁
- 阿久津久 1980 「大宮町小野天神前遺跡の分析(2)」『茨城県歴史館報』7 茨城県歴史館 1-20頁
- 阿久津久 1982 「那珂郡大宮町小野天神前遺跡」『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書』(昭和51~55年度)茨城県教育委員会 7-8頁
- 阿久津久 1991 「小野天神前遺跡」『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 茨城県 131-135頁
- 石川日出志 2004 「茨城県北原遺跡再葬墓の研究」『明治大学人文科学研究所紀要』第54冊 4-45頁
- 石川日出志 2008 「再葬の儀礼」『弥生時代の考古学』第7巻 (株)同成社 85-97頁
- 江藤吉雄・日黒吉明・榎積勇藏 1967 「福島県表郷村瀧ノ森遺跡調査報告」『福島考古』第8号 14-36頁
- 小野天神前遺跡調査者 1976 「調査だより」No.1-6 (稿写版)
- 川崎純徳・川上博義・瀧田 宏 1970 「茨城県海後遺跡出土の人面土器」「常磐台地」5号 20-22頁
- 小片 保・加藤克知・皆川幸夫・松村博雄・瀧川 淑・百々幸雄・皆川隆男 2000 「福島県須賀川市牡丹平遺跡出土の弥生時代人骨」『人類学雑誌』 第108卷第1号 17-43頁
- 小林與三郎・沼田頼輔 1900 「下野国河内郡野沢村発見の土器に就て」『東京人類学会雑誌』第15卷第166号 129-132頁
- 設楽博己 2008 「弥生再葬墓と社会」 株式会社塙書房
- 杉原莊介 1981 「橋本県出流原における弥生時代の再葬墓群」 明治大学文学部研究報告第8冊 明治大学
- 鈴木正博 2006 「「女方文化」研究(3) -「一遺体一小堅穴の原則」から「一遺体一土器の原則」へ-」『利根川』28 53-62頁
- 鈴木素行 2005 「本覚遺跡の研究 -関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について-」(私家版)
- 鈴木素行 2005 「船塚遺跡群における集落の軌跡 -「生者の家」と「死者の家の集落論-」」『船塚遺跡』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 文化財調査報告第32集 財團法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 95-112頁
- 鈴木素行 2009 「第6回企画展 久慈川・那珂川流域の弥生時代墓」「ひたちなか埋文だより」第32号 2-4頁
- 鈴木素行 2010 「続・都田野のオオツタノハ -茨城県域における弥生時代「再葬墓後」の墓制について-」『古代』第123号 1-51頁
- 鈴木素行 2010 「茨城県域における弥生時代の墓制と社会 -差浜遺跡の分析を中心として-」『弥生時代の墓制と社会』公開講座「ひたちなか市の考古学」第3回 財團法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 46-56頁
- 田中國男 1944 「弥生式縄文式接触文化の研究」(1972年大塚巧藝社の復刻による)
- 永山尚造 1977 「弥生中期のカメ棺から人骨を発見」『考古学ジャーナル』No.140 35頁
- 藤本弥城 1983 「常陸那珂川下流の弥生土器」(私家版)
- 春成秀爾 1993 「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集 47-90頁
- 日黒吉明他 1998 「島内遺跡発掘調査報告書」石川町文化財調査報告書第16集 石川町教育委員会

報告書抄録

| | |
|---------|--|
| フリガナ | イズミサカシタイセキノケンキュウ |
| 書名 | 泉坂下遺跡の研究 |
| 副書名 | 人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について |
| 巻名 | |
| シリーズ名 | |
| 編集者名 | 鈴木素行 |
| 著者名 | 鈴木素行・横倉要次・色川順子・小宮 孟・細谷 葵・渡辺美登里・谷口陽子・吉田邦夫 |
| 編集機関 | |
| 発行機関 | |
| 発行機関所在地 | |
| 発行年 | 西暦 2011 年 8 月 25 日 |

| 所取遺跡名 | 所在地 | コード | 北緯 | 東経 | 標高 | 調査期間 | 面積 | 備考 |
|-------|--------------|-----|-------------------|-------------|-----------|---------------------|-------------------|----|
| | | 市町村 | | | | | | |
| 泉坂下 | 常陸大宮市泉坂下 918 | 344 | 大 120° 36° 32' 1" | 140° 26' 5" | 20 ~ 21 m | 20060115 ~ 20060219 | 36 m ² | |

| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
|-------|-----------|------|--|-------------------|---|---|------------------|
| | | | 北緯 | 東経 | 縄文式土器（前・後・晚期） 土製品 石器・石製品 弥生式土器（中期） 石製品 土師器（前期） 土師器・須恵器 土製品 | 縄文式土器（前・後・晚期） 土製品 石器・石製品 弥生式土器（中期） 石製品 土師器（前期） 土師器・須恵器 土製品 | |
| 泉坂下 | 墓跡 集落跡 | 縄文時代 | 再葬墓 7 基 土壤墓 3 基 古墳時代 平安時代 | 7 基 3 基 1 基 | 縄文式土器（前・後・晚期） 土製品 石器・石製品 弥生式土器（中期） 石製品 土師器（前期） 土師器・須恵器 土製品 | 縄文式土器（前・後・晚期） 土製品 石器・石製品 弥生式土器（中期） 石製品 土師器（前期） 土師器・須恵器 土製品 | 弥生時代中期の再葬墓群を確認した |
| | 弥生時代 | | | | | | |
| | 古墳時代 | | | | | | |
| | 平安時代 | | | | | | |

あとがき

2009年12月15日から2010年2月7日までの期間に開催される常陸大宮市歴史民俗資料館の企画展「再葬墓と人面付土器のふしぎ」のために、人面付土器の写真を撮ることになった。構図には「ハンニバル」のポスターをイメージしていたのだが、映画の中には頭蓋が切り取られ、ちょうど人面付土器の造形を連想させるようなシーンがあったことも思い出す。ハンニバル・レクター博士のような記憶の宮殿は持ち合せていないので、消失する前に記録しておこうと整理作業を続けていた。2010年の前半は「大形石棒」。『新・恐竜少年』の旅で折り返して、後半には報告書のまとめに入る。考察は、泉坂下遺跡の調査にほぼ限定した問題の提起に止まった。ともかく報告書を完成させて、多くの研究者に検討していただければ良いと思う。それは、新顔の人面付土器の登場をより多くの方々に伝えることにもなるだろう。調査が終了した直後に、地権者の菊池栄一さんからいただいた手紙の一部を抜粋して、今回も本書を結びたい。お札を申し上げるのは、こちらの方なのだが。

(笑う埴輪)

「私も長く耕作して来た水田耕地から、この様な貴重な物がある様にたくさん出土した事は、我先祖の掘り起こされた大昔の遺物の様な気がして感慨深いものがあります。それにしても、この度の鈴木さんのお骨折りに深く感謝と敬意を捧げ、関係しました石井さんを始めスタッフの皆さんに厚くお礼を申し上げないと存じます。」

(菊池栄一)



泉坂下遺跡の研究

人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について

2011 年 8 月 25 日発行

編集・発行 鈴木 素行

(〒319-2107) 茨城県那珂市下大賀 1-022

印刷 株式会社 あけぼの印刷社

(〒310-0804) 茨城県水戸市白梅 1-2-11

